

奇譚クラブ

新しい電報文藝誌



7



奇譚クラブ

1970.7

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akasuki Syuppan

Osaka Japan



7月号 ¥350

好評の傑作集大成第四弾刊行!! . . .

花と蛇
特集号

定價 五〇〇円 略号「花」

団 団員六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 二口絵

美女羞恥責△花と蛇▽画集

- 第一、恐ろしい流膿の末持泄を強要される美女
第二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
第三、清純な美女に初めて縄掛けしていたぶる
第四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
第五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
第六、猿のように縛られて宙吊りにされた美女
第七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
第八、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女
- 日本文内容見出し
- 発端 美女を狙う狼たち
- 第一章 清純な令嬢の屈服
(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき肉酔)
- 第二章 人身御供の令夫人
(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)
- 第三章 深窓の美少女とズベ公
(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)
- 第六章 生れかわるスター京子
(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)
- 第七章 激しいスターへの訓練
(奈落への道・美女と白痴)
- 第八章 低脳男と令夫人の結婚
(奴隷の花嫁・二対一)
- 第九章 愛弟子を調教する静子夫人
(蛇の果・悲しき決意)
- 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
(美花の踊り・箭毒と百合)
- 第十一章 悪魔たちの哄笑
(白い関係・調教日記・手錠)
- 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄
(甘い調教・挫折)
- 第二十一章 勝ち誇る悪党一味
(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)
- 第二十二章 中国伝来の秘法
(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)
- 第二十三章 緊縛された美女の涕泣
(三悪女の狂態)
- 第二十四章 新しい餌食への触手
(義兄弟)
- 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)
- 第二十六章 恐怖の責め続く
(地獄の接吻・巨大な責具)
- 第二十七章 結末なき責めの結末
(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

☆北欧系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上にて、若き白人の女性を「純日本式縛り」にて縛り上げたルポ「金髪碧眼の美女を縛る」を発売しました。鮮明な写真、紙に焼付けた極めの要望に、これを得るため、特にシアの嬢の許可を得て分譲することにしました。文獻的に見ても非常に珍しい資料だと思ひます。お早い目でお申し込み下さい。お申込は大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にて願ひます。

首縄高手小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいさ
生れて初めて縛られる首縄高手。小手縛りの全裸の肢体を言われるままに動かし、床の間の飾り物のように白い肌を晒すのだった。

縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいめ
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は柔肌に驚くほど喰ひ込で、その苦痛に耐えようとすると彼女の表情に一段と迫力を増す。

股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいあ
きびしい高小手縛りに加えて首縄、更に埋れるような股間縛りで肌を割り不自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいて
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいた
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって締めきった被虐美を最高に発揮している。

投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいま
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえていくかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいゆ
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいせ
つぶらな青いひとみを見開いて何をするといいかたげに責手を見る目には可憐な拒否がある。

私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいし
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくす。さえずる喘ぎ悶えるだけである。

日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいそ
すらりと伸びた長い脚、しきしき今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいや
責めのイケニエとなった哀れな彼女は悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られの肢体をさんざんに、いたぶられるのであった。

金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいも
房々とした金髪、格好のよい高い鼻、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいむ
高小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめて其の表情をアップで狙いをつけた。

美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいけ
彼女の顔の美しき肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいひ
長い足を逆に折り曲げてエビ縛りにすれば流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいえ
あるだけの縄を使ってシーラの白い肌を狂ったように掛けた結末が、このようになつてしまった。

落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー 略号Aいう
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を長々とびたように横たえた。



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文庫を研究する平和で
 健康な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

二、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

三、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企むた
 めの努力はいたしません。

奇クサロン

(232)

異常と正常の間
 「緊縛モデルの素顔」について 東田 堯児
 イメージ画 「柱に咲く可憐花」 塚本 鉄三
 サロン楽我記 第七十三回 辻村 利也
 イメージ画 「カカシ」 伊藤 祥子
 読後感 彩ある縛り 長田 二郎
 Sコレクション 「遺 伝？」 森 二
 M女性を求むの弁 牧田 静夫
 下半身ファッション・ショー 中田 繁雄
 豚妻のポリューム 赤畑 修造
 感想 五月号「カメラ・ハント」 T・O・生
 妻をM性にしたい 阪東 太郎
 イメージ画 「屈折運動」 宮城 昌子
 自由詩 私の可愛いベッ ト 長井 真畢
 いれずみ奴隷妻 和泉 五郎
 編集部だより 編集 部
 フォト通信 「菱紋様」 大橋美代子
 暗室の猛獣 D・P・E 喜久 扇
 映画通信 最近の縛りシーンから 嶋崎美也子
 責めとしてのA感覚 浅田 守
 「奇ク」三つの特徴 川西 英雄
 我が主観 縛りの美学 一 川西 英雄
 イメージ画 「期待の羞恥」 ロマン 派生
 「縛り」の好きな私 出門 順
 私の緊縛画 須坂 旭
 実写写真 「生体線断」 日夏 高視

奇譚クラブ

△第二四巻 第七号・通刊第二六七号▽

(昭和四十五年) 七月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言 「SMF作戦の提唱」……………根本 弘志……………(9)
- 選かなる馬鹿の慷慨 〃無題を二題〃……………セトヨシヤ……………(10)
- 随想 テレビ「マソ」あれこれ……………庭 房之……………(17)
- SMカメラ・ハント △続・佐々木真弓の巻▽……………辻村 隆……………(20)
- 「ひたむきの夜」……………早木 夢二……………(43)
- 愛蘭マニアの独り言 〃見果てぬ夢〃……………辻村 隆……………(44)
- Mの傾斜 「壺中の園」(3)……………真砂十四郎……………(44)
- フォト通信 「責め」と「日本美」……………山本 五郎……………(52)
- 懸賞入選 〃愛の貞操帯〃……………工月 玲子……………(54)
- 史実研究 切腹百年史 △女性篇六▽……………中康 弘通……………(65)
- 要望 あるマジメなたわごと……………須渾 朔……………(69)
- 連載小説 「大噴火」 △第二十二回▽……………千葉 青鬼……………(70)
- 娘相撲物語 花の女斗美たち(終)……………奮斗士好太……………(78)
- 女責め図録の系譜 川田定子の受難……………南 彦造……………(94)
- 懸賞告白 エロスの使者 「孤独」……………谷 信三……………(96)
- 告白小説 「被虐の旅」(3)……………由利美千子……………(106)

- 流腸マニアの手記 〃羨 望〃……………広田 玲子……………(116)
- 江戸奇譚 六尺呻吟帖……………有川 章……………(111)
- 耽奇録 A感覚の世界……………西条 夏……………(115)
- 告白 いけにえになつた富佐子……………関谷富佐子……………(131)
- 連載・アブ紳士行状記 「M派交友録」(中)……………鬼山 絢策……………(131)
- 週刊誌にみる 「まぼろしの 沼正三」……………新宿 町人……………(147)
- 創作 地球を鞭打つ(1)……………宇光 仙……………(154)
- 無声映画に思う 〃砂絵呪縛〃……………柴 利好……………(159)
- マンガ 「マソミちゃん」……………九美 淳……………(161)
- 連載小説 「花と蛇」 △終篇第六十四回▽……………団 鬼六……………(162)
- 再刊を望む 〃M小説と作家たち〃……………麻曾比須人……………(170)
- 女王さまとニひきの犬 「餌の味」……………浅羽やすし……………(172)
- プレイ・レボ SMフォト思いつくまま……………三条 剛……………(186)
- 偏好告白 ふんどしに魅せられて……………富士 道子……………(192)
- 読切創作 「盲(めくら)」……………千草 忠夫……………(191)
- 雑感三題 白い蝶のサンバ……………山口 広……………(215)
- 懸賞入選 我が夫婦プレイの告白……………神戸・MY……………(219)
- ある手記 〃独 白〃 △アンジェリストに 〃開示されたもの〃▽……………武内 隆……………(224)
- 読者 通信……………編集部選……………(232)
- 目次カット 「邪鬼降伏」……………室井亜砂路……………(232)
- 扉カット 「女王蜂」……………辻 梶太郎……………(232)

△強烈な被虐女性▽

川路むら子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によって彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手に元を提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むつ
一糸もまとわぬ裸身に只悪魔のような執拗な縄目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むな
如何に被虐を求めているとはいへ余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むま
縄をからし脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けは忽ち妖気が充満してくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むや
縄尻をとられて追いついてはうば、もう責め手の意のままに、ど

臀部舐し浣腸責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むわ
後手に縛られたまま、臀部を高く持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むゆ
諦めきつた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むえ
自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿態をかくすべもなく身悶えして耐える。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むお
ありきたりのM女性であつたらこのような責めは許容しないものであるが彼女はやはり違った。

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むも
身体が二つ折りになった苦痛もさることながら羞恥の個所があからさまになる無防備感はいどい。

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むみ
不安定な片足吊りで全身を歪めるように見られる羞しい苦痛。

再びむら子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペンで八片えくぼのマリアで再登場した川路濃子は耐え難い被虐の妄想に耽られて三度、四度、鮮鋭なレズの前で、その緊縛の裸身を晒したものであつた。お申込みは代箱第14号、天屋社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かる
両膝を体にて開股縛りにしたり横臥にて開股させたり椅子を用いたり裸縛りなどむら子好みの責め。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かう
身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライバ、手指などに徹底的にいじめぬく。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かり
全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追い込んで無理矢理排泄させるところをスナップする。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かぬ
縄を用い棒を用いて逆エビ縛りで責め抜けば流石のむら子も一痛痛い一と悲鳴を挙げて泣く。

棒責めの全裸女体

椅子責でいためる

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かよ
椅子を使ったグルグル巻きで乱れた髪を縛られ転落の恐怖に激しく悲鳴を放つむら子の妖しい顔。

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かれ
部屋中央にある柱に全裸のまま前面立縛りにされたむら子は周りの視線を全身に浴びるのだ。

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かほ
厳しい縛りに恍惚として悦楽の境をさまよって続けるむら子の髪を握んでいたふり続ける悪魔の触手。

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かや
両手を揃えて頭の上へ挙げさせぐるぐる縛りにすればむら子は振り解こうとして、もがき狂う。

悦楽責めアップ集

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八かわ
柱と棒利用の開股責めを初めとなど柱縛り棒責め、両手挙げ責め



辻 梟太郎・画

S M F 作戦の提唱

現代はセックス過剰の時代と言われているが、長くて厳しい抑圧に苦んだ暗闇の時代を経て、それが敗戦を契機に自由を謳歌することが出来たのであるから、その反動として先ずセックスの方向に吐け口を求めたのは当然である。

戦後二十五年、高度経済成長に伴って日本の風俗思潮は目を見はるばかりの変化を遂げたが、これは年と共に加速度を増してきた感がある。東京でオリンピックが開催された年から大阪で万国博が開催されている今年にかけて、日本の風俗的变化の加速度が頂点に達してきたようである。

人間の内面生活でも当然のように単純から複雑へとの変化を遂げ、益々その妙味を加えてきたようであるが、私はここに敢てセックスの面での S M F 作戦なるものを提唱したい。S と M と F を加味することによって、如何に累層的効果を発揮するか、本誌の読者は先刻ご承知の事と思う。

(根本弘志)



遥かなる馬鹿の慷慨

無 題 を 二 題

セ ト ・ ヨ シ ヤ (カットも)

「天涯孤独」と云う成語を陰陽で表わせれば明らかに「陰」なる語であり、少なからずメラニコリックな感を受けるものだが、彼女に関する限り、此の解釈は当たらなかった。

幼くして父母を亡い、中学卒業と同時に、独立独歩の途に着くと云う境遇にあり乍らもその為人(ひととなり)は真率直諒、少しもいじけた処はなく、肉親の愛に恵まれ暖衣飽食の生活を送り乍ら放縦な青春を謳歌している若者達と、秋毫の差異も見られぬ清朗快濶な娘であった。

それは彼女の生まれ持った素直な資質と明

敏な聡明さが、自己の置かれた立場境遇をしつかりと認識し、逆境をして、自家薬箆中の物たらしめたからであろう。

でなければ一人の卑屈醜陋な人間が生まれていたに相違ない。

こんな呑気な憶測が許されるほど、彼女は透明な心と、清澄な美德と、楚々とした女らしさを持った娘であった。

だが、そんな彼女も思春期の娘達の多くがそうである様に、口外を憚る密事を持っていた。

浣腸による自瀆――。

こう言えば、嘲笑を浴びせる者も居るだろう、ヒンシュクする人も多いだろう。だが彼女にとって、それは生活に密着した聖なる儀式であり、何物にも勝る愉しみであり、生甲斐であり、彼女を支えて来た陰の力と言っても過言ではなかった。

一般にオナニズムと言えば必ず「フラストレーション」「ノイローゼ」「ヒステリー」などの陰湿な語が連想されるが、此の連想は極めて概念的通念的先入観念的であり、一面の真理を穿っているに過ぎない。無論、自慰が性的欲望を充足する行為である以上、欲求

不満充足の適応機制に於ける代償行為や昇華の媒体として診るのが自然であり、且つ、それがオナニーに対する最も健全妥当な考え方である。

併し、自慰そのものは本来が習慣づけられた行為であり、生まれて初めて性的快感（又は、それ迄に感じた事のないロイヤルなオルガ）を得た時の所作が、その凝固着し自瀆癖として残るケースが多い。従って、その行動はフラストレーション等に支配されると言うよりも、上戸が酒を欲したり愛煙家がパイプを啜えたりするのと変わる処のない素朴な動物的動機から発する場合が多く、方法は多岐に渡り、形態も多様である。

彼女のエネマによる自傷行為にしても、子供心を感じたものが具象化し、習慣化されたに他ならず、行為自体は何等の異常も認められない極く常道なものであった。

ただ、此の種の習癖は対象がSEXに関するものだけに、往々にしてエスカレートし、屢々、新たな性向に転移するものである。

果たして、彼女の場合には、それが自らの生活環境及び資性と相俟って着実に履行されたのだった。

当初は単なる自慰行為に過ぎなかったが、

次第に自虐行為へと移行し、何時しか、体内に白濁した血が醸成され流れ出し奔流となり心裡の一隅に被虐への憧憬が芽生え、堆積していったのである。

無論、彼女は否定した。嫌悪した。心の變化を識る度にドス黒い不安に駆られ、穿け口のない嫌悪の念を昂ぶらせるのだった。だが人間の欲求は基本的に一方向に向かうものである。最早、彼女は福音書にある「悪かれた娘」であった。嫌悪すればするほど、否定すればするほど前後は撞着して、被虐願望の情火は炎々として燃え盛り広がり、身中をジリジリと焼き焦がして行くのだった。

そして此れは、彼女の意志とは無関係に、高い蓋然性を持って起こり得る、必然的な推移だったと言えよう……。

——いきなり奇妙なストーリーを開陳しましたが、以上は彼女の告白から得た筆者の所感です。扱て、ここに云う「彼女」とは一体、誰でしょうか？

お解りの方は官製ハガキにお答と住所氏名年齢職業を御明記の上……てなコトは気が違っても申しません。兎に角、お解りの方だけ暫くお目々拝借。

処で、彼女は自分を「生まれついで」のヘン

タイ」とか称して、自らを責めている様だ。可哀想に……。だが、泣くはイモトよイモトよ泣くな、泣けば幼い一人して故郷を捨てた甲斐がない。お前の様な人間は世の中に数多（あまた）存在している。斯く言う私自身ヘンタイもいい処の人間だ。よく言う事だが要はそのヘンタイを識るか否かが問題だ。世間には自分の悪癖を何とか正当づけようと必死になっている小心翼翼な大人達が居る。だが、お前は幼くもまた女の身でありながら、人の眼もものかわ、何のためらいもなく「ヘンタイ」を口にした。因って此処に、その敢為無慚の快挙を賞したい。

冗談は抜いて、僕の記憶によれば、読者で殊に、うら若い女性で開口一番、自らを「変態女」と決めつけた人間は彼女唯一人。そのわるびれない直諒を淳朴さに感激し、同時に余りの純真さに憐情を憶え、敢て駄文を弄す次第。

些か螢光灯的発言になったが、僕は、乱読（と言うより長文を読むのを厭う）主義なので、彼女の告白にお目にかかったのは、つい最近のコト。そんな訳で、記憶に薄い読者と未来にはばたく読者には「今頃何を言ってるだよ」とかの誹謗を浴びるは承知のスケ。

直截に申し上げまして、彼女は彼女が思っている程のヘンタイでも異常者でもございませんと云う事でございます。前記の一寸オーバーなストーリーに示す通り、至ってシンプルなプロセスを経て醸成された性到他なりません。エネマによる自傷行為に致しましても単なる偏執でございまして、謂う程の異常ではございまして、普断のオナニーに比べれば遥かに健康的でございます。それに異常を識る異常者は異常ではございませんことよ。

異常を識らなければならぬ異常者は他に在る。即ち、此の皮肉に憤慨する者。即ち、奇ク誌と云う神殿に巣食う社鼠狐的読者。即ち、本誌を借りて懸命に自己弁護をしている人間。即ち、自己の悪癖を大義名分化している輩！調子に乗って、SMを異次元の性だとのたまう者が出る始末。実際、滑稽とか言い様がない。それが又、Sに限られての事だから、末席を汚すも一人のSとして、はな恥ずかしい限りである。

Sには臆病なエゴ（利己主義者）が多いと識るが本誌を開く度、その感を新たにする。自己の悪癖に不安や劣等感を抱く余り、強いて己の癖を正当化し、自己を防衛しようと

する臆病から発した反動形成！そのクセ、プライベートな好みで『花と蛇』はマンネリだのフォトグラビアを載せるだのとエゴイスティックな批評や提言をする。個人的嗜好で本誌作品に順位をつけていた者もいたが、もっての他だ。本誌並びにSM界のモラルとして「サドは可だがエゴは否」を提案したい。売れないハナシ家がアルバイトで歌うてるやんか「奇ク誌はア、Sの為にだけあるんやおまへんでエ」ちゅうて……。

ひきかえ、Mは男女を問わず非常に明朗で真率（しんそつ）で慎ましかで可愛くて、言うコトおまへん。心情M派として嬉しい限りでおます。先頃はまた、S男に食ってかかったモノゴツツイM女性さんがいらした様だけど、これとて一途なM性が為す業であって考えてみれば何とも可愛いもんです。

僕ア、どう云う訳か、女性にはテッティ的に甘いからねえ。

なかんずく、彼女の天衣無縫な告白はどうだい。真率直諒・簡明直截・淳朴清廉・透明清澄・可憐繊細……泣かせますねえ。鶏群の中の一鶴。スカッと爽やかカコーラ。奇ク誌も、うるう年に一度ぐらいはアタシ好みのいいものを載せて下さる。

併し、健康を損なう程のナントカちゃんはあるまりヨロシクないですね。少しデートの回数減らしなさいよ。むかし昔、ネボケマナコの女のコが「若いと云う字は苦しい字に似てるワ」なんてトボけた唄を流行らせていたけれど、何もヤせる程にクルシむ事はないでしょ。若いって事は自慢にならないが、若さこそは貴重なものです。況んや、花の若さにおいてをや。

——ジジ臭いコト言ったよな。だが、此れはヤボな独り言。同趣味をお待ちの方も、どうかお気を悪くなさらないで下さい。他人の癖を疎んずるつもりは更々ありません。酒飲みの気持は酒飲みにしかならないって事は、よく承知しています。肺ガンを気にしながらも二六時中、啞え煙草のバカもいます。

ただ、ホメっぱなしじゃ物足りないもので、一寸S気を出して、ほのかに揶揄（ヤユ）ってみただけじゃない。世間じゃ、よくある事です。ので余り深く追求しないで下さい。

本誌の読者にはハイブロードなコチコチさんが多いのか、諧謔を諧謔として淘汰せず、つまらぬ枝葉末節に拘泥執着して骨子根幹を駆逐する瑣末主義的傾向が有るようなので、ボーンヘッドで「漫サン」愛読者の僕は、ど

うも……てな訳で、余り逸脱しない内にサヨナラします。

欄筆に際し、彼女が、その昔、自分の置かれた立場境遇をよく識り、逆境をして自家薬籠中の物たらしめた如く、今再び、自己の癖をよく診断処方して、爾後、幸多き人生を歩む事を祈ります。そして我々も又、右へ習うべきである……。サヨウナラ。

○

卒爾乍ら——ペテンにかけた様で悪いが、第一部が我にもなく旨い具合にフィニッシュを告げた処で、再びコンニチワ。

扱て、我が慣例により話は突如として一変するが、先頃「読者通信」での指名の呼びかけを否とする」とかの非常に気になる事を仰言られた方がいらしたが、それについて一言。

いいじゃないですか、ヤボなコト言わなくても——。小生、未だ通信欄を利用したこと無き者にて、その価値は測りかねるが「通信欄」とうたっている以上は、読者間或は本誌と読者間との交信の場である筈。そして本誌は特定購読者によって支えられている誌。従って、その通信欄に「指名」が出るのは必然かつ、当然のなりゆき。

通信欄は通信者のみが満足すればいいので

一般読者に累を及ぼさぬ限りは指名しようがすまいが当事者の勝手。井戸端会議よろしく雑談にふけるのも、お好み次第。

マン・ツー・マンだから本来の真情味が生まれる。相手が不特定多数になればなるほど妥協と迎合と欺瞞が増すのが人の常。フランス・トレーション充足に最も意義あるものとして指名を認める、否、勧める。

人間は全てデバカメ。彼が彼女に宛てたラブレターを私が覗くのもまた愉しからずや。誰それ様で始まる通信文の方が直線的直情的で気持がいいし、読んで愉しい（と、マア、此れはプライベートな嗜好だけれど、同じ様なデバカメさんもいるでしょ？）。

プラスとマイナス、彼と彼女の異極牽引は神の摂理。それを蔑視する者こそ醜い人間。彼と彼女は通信欄を借りて大いに情交し、胸襟を開き合い、肝胆を照らし合えばよい。

第一、指名を否定した当人はんが、否定した傍からお好みの女性の名前を列挙してはんのんは、どう云うことでっしゃろ。他を批判するんやったら先ず己を正してからにおしやすな。はばかり乍らトイレット乍ら、小生、平素より他人の名前を無断使用するのは出来得る限り慎んでいる。せやけど、彼と彼女

が呼び合うのんは彼等の自由意志やよってんアテの知らんことだす。それについて彼等は一般読者には毫の迷惑もかけてないはずだすえ。何もイケズ言わんかてよろしおすやろ。そやおへんか？

僭越乍ら、眼光よく紙背に徹しての結論としては、ヤカナイ、ヤカナイ、ヒガマナイ。

——私事を述べて恐縮ですが、僕は本誌中、呼びかけの通信文に接する時にのみ、真の真実を垣間見る思いがする。Mに迫るSの幻、Sに托すMの夢……。譬えそれが泡沫（うたかた）のものであらうとも、此れほどシリウスでリベラルで赤裸々で美しいものはない。

その悪癖を淘汰した時、彼等の文章には、真・善・美が残る。因みに、前章で彼女を讃えたのも、彼女の告白文に同じものを見たからに他ならない。おまけに彼女は女だったので、本質的な好意が拍車をかけた（此れも全て、有り難きは神の摂理）。

通信欄中でも殊に好ましく思うのは初心なMクンやMさんが奏でるファンタジア。彼等のそれは正に「赤裸」の一語に尽きる。

毎月、新しい人の声を楽しみにしているが四月号でも、初登場の人が数人みとめられ、どれも皆、心のなごむものであった。中に、

「猛烈なア、ブ・ラブ、レターを下さいね」とか云う粹な殺し文句が有ったが、此んな清真清朗なニャロメ的センチメンスは通信欄を措いては容易に見つけられない。此れは僕一人の癖好ではないと信じるが、次号からの返信如何で知れるだろう。

本誌にはSMを始めとする愉しい読み物が満載されているが、巻末を汚す通信欄こそ、全読者のオアシスではなからうか。以前にも一寸言った事が有るが、僕は読者通信に本誌プライスの多くを払っている。願わくば、まことしやかなクレームをつけて真実を歪めたり、バラエティーに富む自由放恣な内容を、格式化単一化せしめないで戴きたい。

単一化で思い出したけど、SM関係以外の人や同好者の少ない人達は臆さずに、通信欄等を利用して同好の志を自模（ツモ）って下さい。本誌に於いては我々S党が鳥なき里のコウモリさながらに政治的権柄をふるっていますが何も遠慮する必要は有りません。本誌はSM誌ではなく風俗文献誌なのだから我々の特権意識をぶち破る意気に感じて下さい。此の処、S派は少し意気に感じ過ぎている様です。だから通信欄にまで案を強いる。幾ら提言ばやりの世情だと言っても、ちょっと見

当違いの、いさみ足じゃないかしら——

いさみ足で思い出したけど、近頃では芸術家を気取って「女の真の美は羞恥の中にあるんだ」とか定義づけるSが目立つが、笑っちゃうよな。単なる個人的嗜好じゃなか。或る者は単に「被縛女体に美を感じる」と言い、或る者は「疼痛の中に美を見る」と言い、或る者は「斗う女にエロスをを感じる」と言い、或る者は「ゴム衣を纏った女が美しい」と言い、そして或る者は「小便少女が美しい」と言うではないか。その上、此れらはSについてだけ言える事であってMとかFは全く別な見解を持っている。

確かに、女の羞じらう姿態は美しいとされている。だが、それはあくまでも偶発的自然発生的な含羞（はにかみ）でなければならぬ。況してや、裸にムイテ縄をかけたりするに至っては、並の神経を持つ人間なら必ず醜を憶え、品高き人間なら正視に堪えない筈である。

女に限らず、人間の真の美しさは生活上の建設的行動の中にあり、「真の美」とは、見る者をして心をなごませ、安らげるものなのだ。タマには幽玄の美にもじっくりと親しんでごらん下さい。

世の中で何が美しいと言っても、生きていく女体ほど美しく素晴らしいものはないだろう。併し、我々一般男子の彼女等に対する美とはヴィナスではなくエロスそのものであり甚だ人間（動物）臭い生理上の個人的な嗜好であり、我々Sに於ける美とは何処まで行っても異常感覚から来る偏執に過ぎない。

畢竟するに、我々の謂う所の『美』とは、『情欲』の代名詞なのである。従って「キレイだ」「美しい」「ビューティフル」と言うよりも「ステキだ」「素晴らしい」「ワンダフル」と言う方が当たっている。

兎に角、Sにはエゴイストが多くて困る。自分の近視眼鏡で他を見るんだからイヤになるよな。そして、その眼鏡から窺いた批評と提言だ——

批評と提言で思い出したけど、奇ク誌もアレやコレやで、お忙しい事ですね。ストレートにグラビアだのマンネリだの言うのはまだ愛嬌が感じられるが、中にはワン・クッションにおいて「隣の雑誌が、大きく見えまアす」とか何とかの、思わせぶりを言う、三才児的小利口な馬鹿もいるんだからね。よその雑誌が良けりゃ、黙ってそれを買えばいいじゃんかよ。絵や写真が多けりゃいいってもんじゃ

ないんだ。

大体、奇ク誌がお人好しだから、なめられるんだわさ。そんな原稿は四つに裂いてワセダ・クラブ(W・C)の録音室(オトイレ)にでも運ばいいんだ。——え、既に実行してんの？ そう、そりゃいいことだ。ちったあ堅いだろうけど、諸物価上昇・諸経費節減の折から助かるでしょ？

シッカリ、長生きしろよ——

長生きで思い出したけど、死んだオジイちゃん、よく言ってたよなあ……醜を得ても又ぞろ蜀を望むのが人の常だ。人の欲念は、意馬心猿、とどまる処を知らないんだ。それを最も良い時点で辛抱し、断念し、満足するのが人間やんけ……と。

よくよく考え、つらつらおもんみるに、今の奇ク誌は今の世情に照らして最も良い編集が為されていると思われる。流石にオジイちゃんはイイコト言って呉れたよなあ——

イイコトで思い出したけど、オジイちゃんのセガレはもつとイイコト言ったつけ……大望を抱くのは結構。意気軒昂も大いによろしい。だが、お前は女ではない。情欲だけには走ったらアカンでエ……と。

よくよく考え、つらつらおもんみるに、本

誌への批評や提言は本誌を向上伸展させるが為の言にあらず、唯単に個人的な情欲のみに発したものが多様だが悲しむべき事だ。そして、その殆どが男からの、Sからの発言だが淋しい事だ。

昔から色々な国の色々な英傑は色々色を好んだと言うが、よくよく考え、つらつらおもんみれば、つまりは、粋が身を食ひ、女に城を傾けられたと云う寓言なのだ。いやしくも男たる者は、やたらに色を口にするなど云う箴言なのだ。此れはホントではないがウソではない。

率直なのはイイコトである。だが、直情にして径行はイタダケナイ。因みに、直情径行とは、お嬢様方と、奥様方と、ガキ等の為にあるコトバ——。此れはウソではない。

兎に角、オジイちゃんのセガレのムスコが言いたいコトは、自分のコトと、他人のコトと、世間のコトを、よくよく考え、つらつらおもんみんかったら、アカンでエ、ちゅうコトやんか。此れはホントだよ。

アカンでエ、ホンマに……。

よくよく考え、つらつらおもんみるに、人間は人生半ばを過ぎる頃から思惟力(哲学等で謂う処の)が退化し、昔に還ると言うが、

頑鈍椎魯にして直情径行な年寄りが多いのもその所以であろうか？

だとすれば、我々も、そろそろ……。

厭だなア——。

皆さん。時にはユーモア小説でも読んで、オツムのマッサージをしましょうよ。

僕の敬愛する人、それは、巨泉とマ、エタケとウチのオヤジ。それから、遠藤周作大人与柴、練と芥川也寸志。それから、ことのついでに団鬼六と芳野眉美と辻村隆(シッカリ長生きしろよ)。

巨泉は少しパパだけどイイ男だネ。

「学校をば、やっとへべれけ、そのつぎよべらすぎでにしばの、ホッペヨレヨレ。キンキラキンのキン。ハッパフミフミ、すらりべちすぎかますらの、ハッパノニノニ。ウィー、ばばば、ばばしゃばア……」と、来らア。

イトシ食らって、みっともない。

——コマーシャル・メッセージ——

ユーモアとウィットとペーソスとスリルとサスペンスを、ほどよくブレンドした好篇・新刊『遠藤周作・怪奇小説集』を、どうぞ！

(講談社・B六判・三五一頁・四九〇円)

やったぜベイビー、言ったぜセニョール！ イイトシ食らって、みっともない……。

では最後に「箴言」を少し――

我々は時として、友人に対する不平苦情をいい加減にしておく事がある。それは、いい加減な我々を、あらかじめ正当化しようとする為だ。

何人も、意地悪であるだけの力を持たない限り、親切な人として賞められる資格を持たない。そんな意味以外の親切は、どんな親切も殆ど常に怠惰か、さもなくば、意志の衰耗に過ぎない。

我々の悪行は、我々の長所ほどに迫害されたり、憎まれたりはしない。

間違った事をして、それに苦しむ事の出来ない人間くらい、度々、間違った事をする人間はいない。

人の値は分別の如何で決まる。才があっても愚かな人はあるが、判断があつて愚かな人は決していない。

人間の無分別は、驕慢の為す業の中で最も危険なものだ。その為に驕傲が養われ増長する許りでなく、我々の不幸を和らげ、我々の欠点を矯めぬとは限らない薬の知識までも我々から奪い去るのである。

人間の持つ欠点の中で、自らの欠点を蔽いかくす為に探る手段ほど醜く、また赦されない欠点はない。――Sは、何処まで行つてもSでしかない。

年とつた狂人は、若い狂人よりも、もっと狂人である。

陰なる狂気は、陽の狂気を上廻る。

狂気を癒やす方法はある。

だが、つむじまがりを矯めず方法はない。

狂人と愚か者とは、己の気質を通してしか物を見ない。――特にS（エゴ）はそうだ。

なまじの才があれば猶更、内に籠もる。

才に乏しくとも物分かりの良い人は、大いに才があつても物分かりの悪い人に比べると時が経つにつれて、懐かしく、好ましくなるものである。――学者もの識らず。

深くても狭い知識は、赤ン坊も同然だ。

人に賞められてくすぐったい思いをするよりも、人に誹られて、それを薬にしようと思ふほど賢明な人は、世に稀である。

量見の小さい者は、小さい事にひどく気を

損ねるが、量見の大きい人は、小さな事も細大洩らさず見極めて、それに気を悪くなどしはしない……と、信じたいと思っています。ウヒヒヒ。

わずかな言葉で多くの事を理解させるのが大人物の特質なら、小人はそれに反し、多弁を弄しても何一つとして言う処なき天与の才能を持っている。――つまり、僕のような者のコト。

多弁能無しはイイコトだ！ イイトシ食つて、みっともないか？

だけど此れでもまだ原稿用紙二十四枚ですよ。言語に直せば十七八分、黙読すれば十分足らずです。注入してから読んでも、辛抱出来る長さだわ……。

そうだよな？ そうだろう？ キーミちゃん、イイコトだ。

アト白紙部が六行ほど残ってるけど、どうすっかな？ アト四行半だけど、どうすっかな？ とか何とか言ってる内に三行半になっちゃったけど、どうすっかな？ ホラもう二行足らずになっちゃった。何か言う事ないかしら？ 一杯になった処でサヨナラすっか。

(終)



—— 随 —— 想 ——

テレビ「マゾ」

あれこれ

庭 房 之

三月十三日、日本テレビ「ナポレオンソロ」……スラッシュ少年合唱団」

御存知アングル対スラッシュの対決。

世界征服の野望を抱くスラッシュ団は、それを阻止しようとするアングル機関の幹部を皆殺しにしようと、非行少年を訓練して合唱団をつくり、アングル課長会議のアトラクションとして出演させ幹部達を射殺しようとするが、開催場所を知らない。

一方、アングルの一員であるイリヤは、彼等の計画を挫折させるべく潜入。だが奮闘も空しく捕えられ、椅子に坐ったタイツ姿のスラッシュの女幹部の前に引きすえられて尋問される。両手両足を縛られ床にペタンと坐った恰好。だが白状しない。ここで無情なCM私の推測では、この間に彼女から、彼は激しい打撃を受けたものと思われる。残念なことにそれは画面には表われなかったが、その後のシャツの背中も破れ、起居の動作もやっとなこさらしい、彼のみじめな姿にそれは感じ受けることができる。

ところでこの女幹部、仲々いかすドミナ振り若年増といった感じの均勢のとれた美人。彼女に対してはスラッシュの屈強な若者もおそれおののいている有様はみものである。全体がユーモラスな筋書きなのはいささか残念だが、私のいつもの空想癖は、かかる題材からめくるめくようなM的な場面を想定してし

まうのである。

……ここはスラッシュの巢窟の地下の拷問室。壁に牛馬用の鞭等の忌わしいさまざまの道具、血ぬられた三角木馬と滑車、床に固定された太い鎖……哀れな犠牲者をどの様に痛めつけるかは彼女の全くの自由だし、又、如何なる恥かしめを彼に与えることも、誰にも邪魔されない。地下の陰湿な拷問室で次々にくりひろげられる、美しい支配者による残酷な、そして淫靡なさまざまの責苦……。

かかる状況は、ナチの女ゲシュタポ対スパイ容疑者の間で、実際にあり得なかったことではないだろうと思う。三原寛氏あたりに、力作をものしてもらいたいものである。

×

×

三月十九日、日本テレビ「キック・ボクシング」女子ボクサー、スチン・ローフオート嬢とスチラ・ローフオート嬢との対戦。

二人は同姓だが所属ジムの名前である由。二人とも美人で体格も良い。特にスチン嬢の方は、タイ美人の産地として有名な地方の出身だそうであり、もう少し細身な体つきならファッションモデルとしても、立派に通用する程の顔かたちである。

試合は、二回の中程でもつれ合って倒れた二人のうち、下になったスチラ嬢が後頭部を打って、立ち上がれず、スチン嬢の勝利に終わったが、妙齡の女性が本気で打ち合うのには

驚嘆した。かつてフランスからも女性キックボクサーが来日したことがあるが、こちらの方はボクシングというには程遠く、まるでバレエを踊っているようでもあり、又、モデルや新聞記者というふれこみにも拘わらず、さして彼女達を魅力ある女性と感ずることが出来ず、期待外れに思ったものだった。

私は所謂「女闘美」ファンではないが、彼女達のような強い女性には格別に興味を抱かざるを得ない。ことにスチン嬢のような女性には、ある種の、期待を持たずにはいられない。

彼女は試合中倒れた相手の背中を、そのたくましい足でぐいぐい踏みつける程の、強烈な闘志の持主で、テレビカメラを意識した誇らしげなポーズの瞳の中に、征服者のサジスチックな色を見たように感じたのは、果して私だけであつたろうか？ 若し彼女を女性キックボクサーとは知らないチンピラか何かが入通りのない夜道で言いがかりでもつけたらどういふ事になるだろうか？ たちまち彼は猫にいたぶられる鼠の様に翻弄されてしまうに違いあるまい。豊満な肉体からくりだされる左右のパンチ、膝蹴り、まわし蹴、ちよつとやそつとのケンカ自慢のチンピラあたりでは、まるで刃がたたないであろう。地面にぐったりとのびてしまったチンピラに対して彼女はどのような手段で制裁を加えるだろうか。

人通りもない暗い夜道、まして遠い異国の土地だ。旅の恥はかきすて？ とばかりに、彼女は、足の下に仰向けに横たわるこの無礼な男に対し、おそらく自分本位の方法で満足を得るに違いあるまい。

私の想像は、次々に発展する。出来ることなら私がそのチンピラになり代わって、やられたいものである。

×

×

三月二十日、TBSテレビ「ザ・ガードマン……さあ、女の復讐がはじまるわ」

題名からしてそのものずばり。内容も近來稀に見るマゾッ気充分な最高傑作？

渚ひろみ紛する元OLが、立身出世の為自分の肉体を外国人貿易商に売った恋人に、復讐をする物語である。

会社を辞めた彼女はその後、美貌を武器に著名写真家の専属ヌードモデル、歌手にと次第にスターの座を獲得していく。一方、恋人氏（元恋人というべきか）は会社の上役から彼女を素材にした製品の宣伝ポスターをつくれと厳命される。そこで彼はいやいやながらも懸命にその事を懇願する。彼女にすれば思うつぼ、獲物が罠にはまったようなものだ。待ってましたとばかりいいように虐め抜く。

ホテルの一室に呼びつけられた彼は、まず床に土下座させられて、今迄の仕打ちをあやまるように命令される。「そんなことでは駄

目よ。もっと床に頭をこすりつけるのよ」と彼女。次にちんちん、おまわりと犬の芸当までさせられる。そんな彼を侮蔑の言葉を投げつけながら、冷然と見下ろす彼女。ソファから立ち上がった彼女は彼の目の前に足を突き出す。そして自分の足の裏を彼に舐めさせる。顔を押し当てて、かつての恋人の足の裏を情なさそうに舐めまわす彼。そしてそのままの姿勢で激しく蹴り倒される。こんな事までして哀願したのに彼女の返事は、「そうね考えておいてやってもいいわ」という冷いものの。

ここにおいて流石の彼も殺意を抱くに至る彼女のマンションの部屋に忍びこんだ彼、そして一応成功したように見えた彼の企ても、彼女の計略によってどんでん返し。そして駆けつけたガードマンにとっ捕ってしまう。おそらく彼は殺人未遂罪で、数年は刑務所の臭い飯を食わねばならない羽目になるだろう。一方、彼女は復讐を心ゆく迄完遂して、今度はバーまで開くという女王蜂振り。

私がこの作品を最高傑作と絶讃する由縁はこの彼女の取扱いである。かつて同番組においては、部分的には私をして思わずハッとさせるような、M的な場面も数多くあった。

例えば夏圭子が裸馬に乗り、ジェリー・藤尾を縛り上げて、沼の中を引きずりまわすもの、楠侑子が男の胸の上に跨り、刃物で殺

そうとするもの（但し、これはベッドの蔭になつてよく見えなかったが）嘉手納清美等三人の女性が、死刑執行と称して雪山の上にこしらえた死刑台まで、男を脅しながら追い上げるもの等々。しかし、これらの作品の何れにおいても、女が悪役として描かれていて、最後にはガードマンの活躍によって阻止されめでたしめでたしというものであり、私としては何だか物足りないものを感じたものだった。

ところが今回は、成程男の方も決して善良とはいへないが、今迄の常識からすれば、それ程の悪徳漢とは言えない。しかし、彼はその必ずしも大きな悪徳とは言えない（と私は思うが）行為の故に、女性から徹底的にいじめられ、痛めつけられ、刑法上の処罰までくらうことになるのである。そして彼女の方はといえば、何の非難も加えられず、ガードマン達からも当然のことのように受けとめられる。女性上位時代もここまで来たかの感がある。げに女とは恐ろしいものである。たわむれに女は捨てまじ。しかし、美しい女が恐ろしい女でもあることは、私にとってはこの上もなく望ましいことでもある。

尚、この作品の製作者は野添和子女史、彼女は女優の野添ひとみ嬢の実姉でもあるそうだから、その容貌も想像がつくと言うものである。又、一言すれば前にあげた作品も、全

部女史の製作するところのものである。これらの事実は、ある何事かを妖しく私に示唆してくれるものがある。次の作品を期待したいものである。

× ×
ドラマの最高傑作が前記「ガードマン」なら、CMでのそれは、富士重工の商業車スバルサンバー。

半長靴、腰には太いベルト、Gパンスタイルのモデル嬢（彼女については二月初旬及び三月初旬に、新聞のページ全部を使って広告が掲載されたので、御存知の方も多いだろう）が、投縄を手に岩山を駆けめぐって、小鹿を追う。途中、彼女のお尻が画面いっぱいに大寫しになる。これこそ、「潰してやるわよ」と言わねばかりに……。

時間にすれば一秒にも満たない位の短いものだが、多少、Mがかった人なら、この場面は絶対に見逃がせないだろう。

更に彼女は小鹿を首尾よく捕えて、胸にかかえて下りてくる。次はたき火をたいて何やら料理している様子。おそらく哀れな小鹿が今夜の獲物として、彼女の胃の中におさめられるのだろう。縄、太いベルト、半長靴、お尻、弱い小鹿……。マゾの道具立には不足はない。

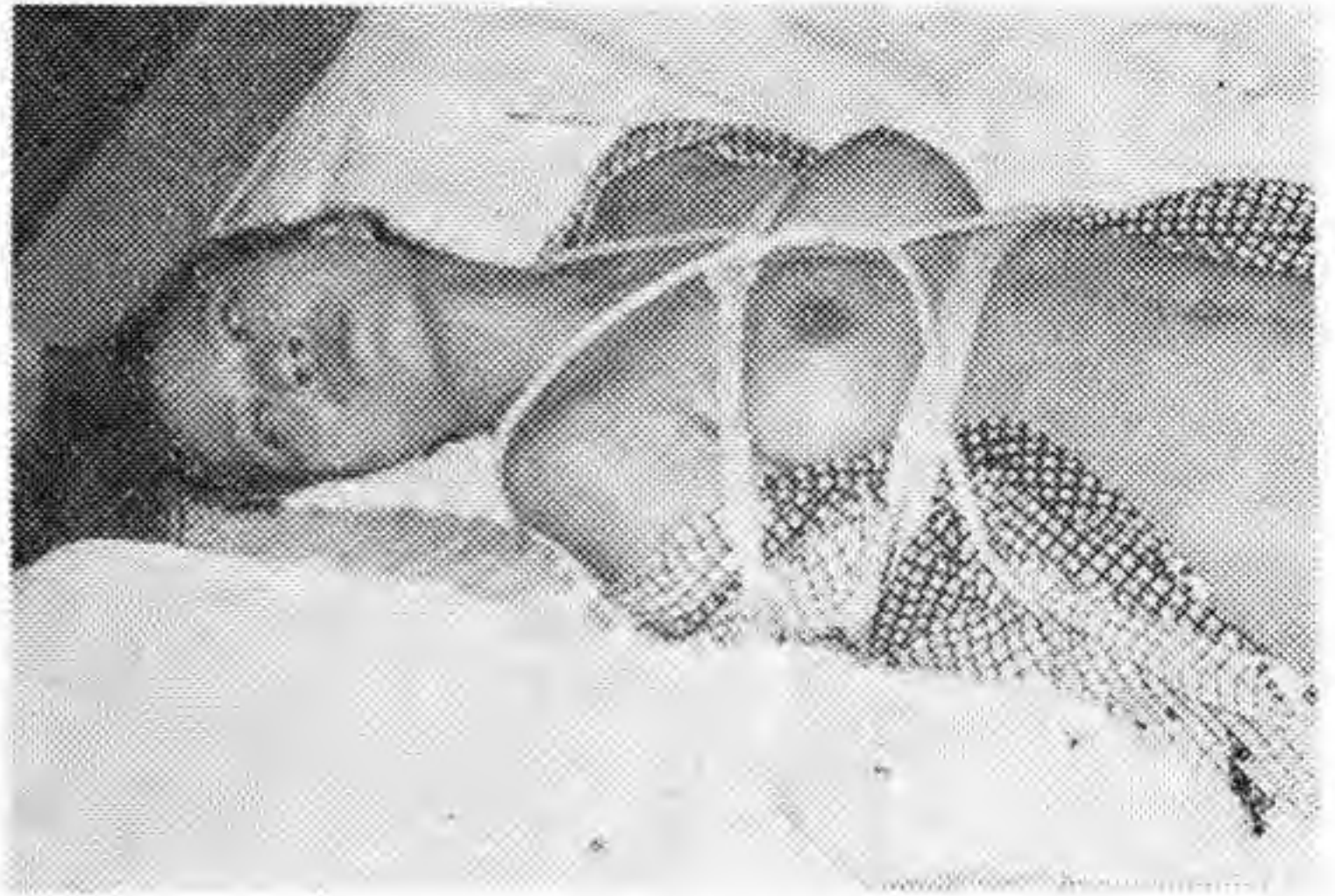
又、ミナカイ靴店のCMで、杉本エマ嬢が鞭を手に、それこそ背筋が寒くなるような魅

惑的な形相で、床を激しく打ち叩く。ただ、それだけのものであるが、このような形で女性に鞭を持たせたCMというのは、これが初めてではないだろうか？ これを見ると、私は一切を投げ捨てて、彼女の前に身を伏せ度いという衝動を押さえることが出来ない。

尚、12チャンネル「プレイガール」「女殺し屋・花笠お竜」NETテレビ「緋剣流れ星お蘭」等も、もう少し工夫をすればもっと面白くなるものを、いつまでたっても変わり映えのしない、ただ、投げた、斬った、蹴っ飛ばした、「下着はチャリと赤だった」というだけで停滞しているのは、いささか残念ではある。

これらにおいてこそ、最もM派の要望に合致した作品が不自然ではなく製作できるのに惜しいものであると思う。野添女史の如き逸材？ を登用して再出発することを、私は本心より望みたく思うのである。尚、総理府統計局？ の調査によれば、女性上位時代を反映して、最近ではほぼ三人に一人は、多かれ少なかれマゾっ気があるという。さすればかつての何とかという、すれ違いラジオメロドラマのように、この時間には男風呂はガラ空き、したがって視聴率も倍増、てな具合になることうけ合い。私が保証します。

カット・東京赤ちゃん



「数カ月前、一念発起して、カメラ・ハント回顧録を書く気になり、何とか最初の一年間分ほどは、四苦八苦してお茶を濁したが、有為転変の激しい今の世で、況してや若い女性達となると、もういけない。所在はおるか、その噂すら掴むことが出来なくて、私の回顧談は心ならずも一頓挫を来たしてしまった。」

S M カメラ・ハント

続・佐々木真弓の巻

ひたむきの夜

辻 村 隆

去る者は日々にうとく、会者常離は世のならいである。労して効なき追跡は半ばあきらめたものの、そこは捨てる神あれば拾う神ありで、私の連絡をきいて、待ってましたとばかりにデートを迫り、果ては回顧談どころかまるでカメラ・ハントの続篇とでもいいたいようなハプニングすらあるのだから、世の中は皮肉なものである。

佐々木真弓も、謂わばその一人であった。長田実氏の紹介で『ケメ子早春譜』として、

初めて登場したのが、昭和四十三年の六月号——。彼女の積極的な協力もあって、そのご編集部で数度に亘って撮り、これが分譲フォトになる。

ぐんとプレイガールに成長した彼女と、私は数度会ったあと、彼女は大阪ミナミのクラブ「U」に移って清子と名乗った。何でも、体でジカに体験してやろうという、積極的な探求心と、猟奇的な好奇心をむき出しにする彼女に興味を抱き、生駒山麓のN氏宅を借り

て、かなり強烈なプレイをした顛末を書いたのが、同年十一月号の『悦痴（エッチ）な季節』の二頁であった。

佐々木真弓に限らず、他のハント女性にも同じことがいえるが、私は次々と新しいハント女性を追うのに汲々として、その後は心ならずも、彼女との連絡は途絶えてしまっていたのである。

回顧談を書くに当たり、既に豊中の××荘から移って、レスの対象の女性と二人で暮らしていた天下茶屋のアパートに電話した処、これも又既に数カ月前に転居していて、ミチルというレスビアンの女性も一緒に移ったという、アパートの管理人の、ややつっけんどんな話であった。

勝手なもので、こうした壁にぶつかった時フト思い出すのが同好者の存在である。佐々木真弓を私に紹介してくれた長田実氏なら、或いは彼女の消息を知っているかも知れないと、長い間の御無沙汰に多少ひけめを感じ乍ら電話した処、やはりプレイボーイの彼、アパートは知らないが、彼女の現在の働き場所は知っていてくれた。一体、今頃になってどうしたんです？ と審る彼に、回顧談の一件を簡単に告げて電話をきる。

何でも又ぞろ勤め先を変えて、大きな大阪ミナミのクラブ「U」から、ちっぽけなスナックバー「R」に移って、一段と夜の蝶に成長して働いているということである。深追いする気にもなれないが、「春宵の一夜」どうせ一献傾けるなら、プレイメイトのいるバーも懐かしいと、奇譚三十九夜物語で、しばしば登場したナイロン氏事、I氏と、夜の十一時過ぎ、バー「R」を訪れたところからこのカメラ・ハントは始まる。

× × ×

万国博のパビリオンの一部門を担当し、日頃は、ゴルフや酒宴にうつつをぬかしているようなI氏も、いざとなると流石に実力があってテキパキと陣頭指揮し、曲りなりにもどうやら開場まで漕ぎつけホッとしたらしい。

三月中旬の、彼岸の入りとはいえ、戸外に粉雪のちらつく朝、一年振りにヒョッコリと電話があった。連日、完成祝で、あちこちと重役や、工事関係の連中と呑み廻ったが、小人閑居すると、フト私の事を思い出したという次第であった。それは金持の我儘かも知れない。しかし、私という存在も、案外、疲れ休めの、肩の凝らぬ交際で、細く長くうまくいっているようである。仕事のかけ引き抜き

の、同好者として、裸の話の出来るところに気楽さがあった。

彼としては、大いに気を使ったつもり、ロイヤルホテルのフルコースも、一匹狼的な私にとっては、反って窮屈であった。気軽に一杯のみ屋で、バカ話をし乍らのんでいる方が、私にとっては愉快だった。しかし好意は好意として喜んで受けて、私達二人は夜のキタをそぞろ歩く。何かといえば自家用車に追いかけられ勝ちの彼にとって、庶民的なお初天神の食道街は物珍しげであった。

談たまたまハントの回顧談に及んだ時、私は何気なく、佐々木真弓が、現在ミナミのバー「R」で働いていると口をすべらした。ハント精神がアルコールによって増強しているI氏のことである。何条もってきき通すべき忽ちこれにくいついてきて、しからばこの足で訪ねてみようといいい出した。いい出したら我々重役、こわいものなしのI氏のことである。早速、そのキタのバーからタクシーを呼ぶ。ハント女性、佐々木真弓のなまの姿を目見たいし、あわよくば、口説いてもみたい様子であった。もうこうなれば有無をいわせぬ強引さで、私も未知のそのスナックバーをタクシーの運ちゃんに散々探させて、閉店ぎ

りぎりの十一時前に、やっと到着したのである。難波新地のバー横丁の一軒で、これは余程バー街に精通していないと探し出しにくいところである。蛇の道はヘビの運ちゃんに、I氏は気前よく伊藤博文一枚をチップにやると飄然と歩き出す。

この辺り一帯のちっぽけなバーは殆どが常連の客で維持している。フリーの客は十人に一人もいないというのが実状であった。

同じようなバーが十数軒、のきを連ねるその一軒の、狭いドアを押しあけた時、仄暗いルックスのバーの中の客やホステスが、一斉に私達二人に視線を投げてよこした。

緑と赤のカクテル光線の仄赤さに、やっと眼馴れて、私達はスタンドの、腰高のバーに腰を据える。

さっと見廻した処ホステスは約六、七人。流行っているのか皆客がついていて、空いているホステスはいない。バーテンに水割りを注文して、私は直ちに行動を開始する。

ゆこうといい出したのはI氏でも、口を切ったのは私である。何とはなしに責任を感じて、さりげなく、ホステスの一人一人に視線を廻してゆく。



いた！ たしかに——。三人めぐらいに目をやった時、若いサラリーマン風の四十年配

の課長タイプにしなだれかかり、しきりに何か口説いている女性は私の記憶からすれば、かつての流行語全盛時のケメ子こと、佐々木真弓であった。この源氏名は、知らない。「あの娘何ていうの」バーテンに、さりげなく訊く。

「ああ、あの二番ボツ

クスの人ですね。カオリちゃんです」

「カオリ？」

「ええ、お客さん、御存知のようですね」

「いつから、ここに居るの？」

「さあ、もう半年ぐらい経つと思いますが、何か？」

「ウン、以前遊びにいらした店の娘が、ここに居るときいたもんでね」

「じゃあ、カオリなら、クラブ「U」でしょう、きっと」

「そう、「U」だよ。じゃあ間違いなさそうだ。よべるかしら」

「ええ、声をかけてきます。しかし、あのお客さん、大分カオリに参っていましたね。いつも御指名ですよ。この店は指名制って程のことでもない自由制なんです、やはり馴染みとなると、どうしても、お目当てでこられます」

私はI氏に向かって、指で丸を作ってみせた。OKというしるしである。

「よかった。やはり、いたのだね」

思わずI氏の声が弾み、しきりに気になるのか、カオリの方を振返ってみる。私とバーテンの会話で、佐々木真弓がこの店ではカオリと称していることをI氏は承知していた。

折をみて、パーテンが、近づいてきたマダムに小声でその旨を告げる。

「おや、そうですか。カオリちゃんの、ごひいきなんですね。これを機会に、どうぞよろしくね」

如才なくマダムは満面に笑みを湛えて会釈する。どことなく岸田今日子に似た容貌が理智的である。性格を分析したら、多分S的であるかも知れない。

マダムは、つかつかとカオリの方へ近づいてゆくと、何か小声で囁いている。えっ！という素振りで、カウンターに止まった私の方に眼をやり、怪訝な表情で、軽く眉を顰めていたが、私が辻村隆であることに気付くと一瞬パツと感激に似た輝きが、彼女の眼に光彩を放った。何か対面の客に話しかけていたが、立上ると、振向いていた私の方へ歩みよってくる。

「まあ、どうしたっていうの？ 或る夜、突然にってわけね。トワエモア以上に感激よ」

何をいつているのか分からないが、兎も角表情に一杯の歓びを表現して、カオリこと佐々木真弓は私を隣の泊り木に移動させて、I氏との間に割って入って来た。

I氏をカオリに紹介する。私の信頼する同

好者なら、カオリも亦、至極明快に割切って信頼する。況して、身長一七センチ、瘦躯ながら取締役タイプの身についたI氏のこといいカモと一眼でにらんで、御愛想しきりである。ハントの女性を眼のあたりに見て、酔いの廻ったI氏の感激も又、一入である。忽ちにして意気投合し、カオリはもう、私の方より、I氏の方に体を向けて、しきりに面白おかしく愉しんでいる。少々面白くないが、I氏を連れてきて、I氏の奢りならば、あながち、ヘチャムクレにむくれるのも大人気ない。ええい、こうなりや、のんでやれと、パーテンにジョニ黒のダブルを注文する。一寸のんで二万や三万、まるでコーヒー代ぐらいにしか考えていないI氏のこと、どうせ接待費で適当に落とすのなら、のんでやれ、と、私はやはり、その点まだまだ未熟の人格であった。

I氏がフラフラとトイレに立った時、カオリは、さっと私を振り返り、

「御免ね、分かってているの。怒らないで。オジさんは余りこんな処へ足を運ぶ人じゃないでしょう。でも、あのIさんは上客みたい。

やはり仕草が可愛い。でもまあ、どうして私がここににいること分かったの？」

「長田実からきいたのですね」

「ああ、あのプレイボーイさんから。この頃何か新しい商売を始めたとかで、チツとも顔をみせないわ。もう過去の人よ、あの人。でも私は、現在に生きて行くのも仕方ないでしょう。本当は、オジさんだって、もう私にとっては過去の人だったんだわ。そうそう面白いこと教えたげましょうか。さっきボックスで相手していた人、〇〇製粉の課長さんなんだけど、すごいMなの。私に虐めてほしいんだって……。そんな人だから、ひよっとしたら知ってるかも知れないと思って、オジさんの書いてある本のカメラ・ハントって読んだことある？ って聞いてやったら、よく買うそうだけど、あんまり興味はないんですって——お気の毒さま。だから私がハントに出ていた、ケメ子なんてこと全然気付かないわ。無理ないと思うけど、あの頃からくらべて、私、相当変わったものね。チョイト整形したのよ。どこか分からないでしょ」

「ウン、全然分からない。しかしまあ随分綺麗になったものだね。正に典型的な夜の蝶だよ」

「褒めてるの、けなしているの——そうそう用件きくの忘れてたわ。又、私を撮るとでも

いうの？」

「そうでもないんだが、実はハントした女性の回顧談でも書いてみる気になって、その後の消息を知りたかったまでさ」

「なーんだ。私、又、苛めてくれるのかと思って胸を弾ませていたのに、ガッカリだわ」
「おや、本気かい。じゃあ、その気になってもいいよ」

「お気に召すままよ。そうそう生駒のNさんネ。クラブ「U」にいたところ四、五回みえたわ。オジさんには内緒にしておいてくれていわれて、三度プレイしちゃった（『悦痴な季節』参照）」

「こいつ……それじゃ内緒にならない。それでよかったかい？」

「すごく強烈。新橋のホテルに、吊るのにとっても都合のいい構造の部屋があるのよ。その部屋で、いつも逆吊りよ。片脚吊りされた時なんか、痛くて一週間ぐらいビッコひいたのよ」

「フーン、ようやる（思わず仁鶴の口真似になる）」

「ミチルも誘ってこいて、やいやいいうものだから、尻込みする彼女を口説き落としてとうとうダブルプレイ。二人並んでの逆吊り

なんて、とんでもない話。ハリが落ちやしないかとビクビクしたわ。先に吊られた私の塗炭のクルシミ……」

「彼、私に全然いってこないな。ウン、けしからん」

「Nさん、いってたわよ。オジさんだって散髪屋の娘二人とよろしくやってるんだって」（どうやらミキとマキのことらしい。あの娘達もどうしているだろう）

「それでN氏、近頃ここへも来るの？」

「それがダメ。知らないのね、オジさん。あの、胃ガンで入院してるのよ」

「へえ、そいつは初耳だ。いいめをした、むくいかな」

「じゃ、オジさんもガンになるといいわ」と、ピシリきめつけられて目を白黒させ、

「ウン、参った。それで相棒のミチルは？」

「別れちゃった。あの人に、いい彼氏が出来て駆落ちしちゃったもの、私、失恋のショックだったわ」

「じゃあ、フラれたんだ」

「そういうこと。ねえ、話のわかる、いい女の人、いないかしら」

「そんなもの、自分で探せよ」

そこへI氏が戻ってくる。いそいそとカオ

リは、オシボリのサービスである。忽ち掌を返すように、私に背を向ける。ああ、夜の蝶のなりわい身についた感じか。カオリはホステスのカンで、スポンサーがI氏であることを逸早く見抜き、金になる上客として懸命にサービスにつとめていた。

私はフト危惧を感じる。好きなI氏が、金にモノをいわせてカオリを口説けば、彼女は恐らく十中八九、I氏のプレイの対象となるのは間違いない事実のように思えた。そうした浮薄さはカオリの以前の生活にも、しばしばみられたところであった。

しかし杞憂は杞憂で終わらないことを私はまざまざと、そこに見た。I氏の片手がカオリの臀部をかかえ、片手が彼女の指を弄んでいたからである。

フト後悔めいた思いが走る。ウツカリ口を滑らせたことを私は悔いた。I氏は物量にもいわせて、カオリを口説き落とすことは、既定の事実に使われた。I氏のことだから、一応メンツをたてて、私に、声をかけるだろう。その時、否と応言う権利は私にはない。すべてはカオリ自身の行動にかかっているとすれば、カオリの気持を束縛する何ものをも私は持ち合わさなかったからである。



「ねえ、辻村君。彼女、気にいったんだよ。いいかい？」

懼れていた発言がI氏からなされた。来るものがきたという感じ。でも忘却の彼方にあった過去のハント女性一人、それにこだわる私の方が訝しい。あっさりI氏にも博愛衆にやさぎよく及ぼすべしだ。咄嗟に諦観の念をもって無言で、うなづく。

「カオリちゃん、辻村氏のお許しが出たよ。善は急げだ。今夜どう？」

「オジさんのゆるしなんか乞うことないわ。私の行動は私の自由よ。少し考えてみます」

「そりゃいけない。彼によって君という人を知ったのなら、一応、彼に諒解を求めるべきだ。それがルールだろう」

「そうね、私のいい方、悪かったわ、訂正します。オジさん、生意気いって御免なさい」

よかれ、悪かれ、現代に生きる夜の蝶は、判っきりと割切っている。私に対して一向に悪びれた風もなくさらりといつてのけて、そのくせ、何を意味するのか、チラリとウィンクを送ってよこした。莫迦莫迦しいと思いつつ、私はカオリのウィンクの意味が気になる。所詮は浮気のプレイガール、その場で割切ればよいものを、一年振りに探し求めて、再会したそのノスタルジャにとらわれて、綿々としている私の方がおかしかった。一年振りということ、は、その間、何の連絡も便りもせず放っておいたということである。そんな自分勝手な私に、カオリの行動を拘束する権利は当然なかった。そうした自分勝手の私の行動を口に出

さないだけ、カオリ自身の方が、むしろ時流に割り切っているようであった。同好者に、みすみす掌中の珠を奪われた想いで、軽いジエラシーを覚えるくせに、何もしてやらなかった私。それは、この世界では通用しないことであった。カオリが新しい客ダネもとめてサービスに努めるのは当然であった。

I氏が真顔になって、何か私にメモを手渡す。場所は今里新地――。

「辻村君、よかったらここへ遊びにいつて下さい、これからでも。お女将は私の息のかかった女です。SMのプレイは無理でしょうが悪い様には取計いません。奥さん孝行もいいですが、偶には、十八、九才のピチピチした若い妓でも抱いてみることですな」

「じゃあ、あなたはこれから……」

「そのつもりですよ。ものごとすべて気の変わらぬうちですよ、仕事も情事も。今夜は私のため、眼をつむって下さい」

私は黙ってうなづくより仕方がない。この時間から再び今里くんだりまで行きたくもなかったが、I氏の好意を蹴ると、拗ねているように思われてもいけないので、一応、喜んでお受けする。ピチピチの十八、九才が、やはり私の心を惹いたのであろうか――。

もう店は、とつくにカンパンにし、表の戸は暗く閉ざして、ネオンも消してあった。いつの間にか一人又一人と、ペアで或いは一人でホステスが消えていった。

別段すぐくボラれたわけでもないが、I氏は応場に、ワニ革の財布から一万円札三枚をとり出すと、マダムに手渡し、つりは要らぬという仕ぐさで手を振った。マダムにとってはホクホクの上客であった。私ののんだジョニ黒がホンモノなら、相当そのウェイトを測っていたかも知れない。

御堂筋に出ると、手配したタクシーが二台私達を待っていた。一台にカオリとI氏がのり込み、一台に私独りのり込んだ。出発と同時に、早くもタクシーは離散し、阪神高速のランプウェイに走るテールライトが、むなしく私の眼に映じて消えていった。カオリがタクシーに乗る際に、チラリと私の方を振り向き、バツの悪げな眼付が妖しくキラキラ光っていたのが、疼くように私の心に灼きついていった。

× × ×
若い芸妓の、度々の挑発に、その都度、空振りに終わり、糖尿の身の果かなさをつくづく感じ乍ら、やっと義理のように果たし終わ

って泥のように眠りほうけたあの夜から、既に一週間が経っていた。

桜だよりもチラホラと、めっきり陽気めいた土曜日の午下り、心待ちにしていたI氏より電話がかかる。

あの夜の報告もあるし、出てこないかという誘いであった。少々は金持の我が儘にムカツ腹でもあったが、今里の芸妓をタダで抱いた手前そうも行かない。それにカメラや縄を準備してきて欲しいという口調に、I氏らしい、いつもの思わせ振りの下心を感じて、又何か私をあっと思わせようという魂胆かと、恐らくはそれが佐々木真弓じゃなかうかという予感を感じつつ、云われる俚に仕事を手早く片付け終え、ノコノコと出掛けていったのが阪急ホテルのロビー。

待つ程もなく、人眼を惹く長身のI氏が現われると、私を誘ってエレベーターに入る。レストランに入るとボーイに手早く料理を申しつけて、彼はニヤニヤ顔を綻ばせ乍ら口を切った。

「感度良好でしたよ、彼女」

「おや、そうでしたか」

「あれッ、御存知ない？」

「ええ、生憎と——」

「意外ですね」

「案外、そんなものです」

「彼女、今日ここへ来ることになっているんです。プレイしませんか。勿論、失礼ない方だが、万端スポンサーは私」

「多分そうだろうと思っていましたよ」

「いいんでしょう」

「そりゃ、しない理由は何も、ありませんもの。ところで何かIさんのこれといった希望があるのですか、いつもの様な」

「辻村君ごのみで結構です。私は、そばで助手をつとめるだけでいい」

I氏ごのみは、一寸変わったプレイであった。彼はいつか三十九夜でも一寸触れたが、A感覚が好きである。いわば女性を対象とした場合でもソドミーであった。ノーマルな女性は大抵それで音を上げる。だから彼の感度良好というのは、勿論、A感覚に対してであった。その好みに偏重しない私として、関心がないのは当然であった。よきカモだと思っ

て喜び勇んで出掛けたカオリが、その場に直面して、どの様な反応を示したかがミモノであった。A感覚によって慾情し、ついで真向から挑む、つまりI氏は前後往来のワクモノであった。緊縛のプレイはその添加物に過ぎ

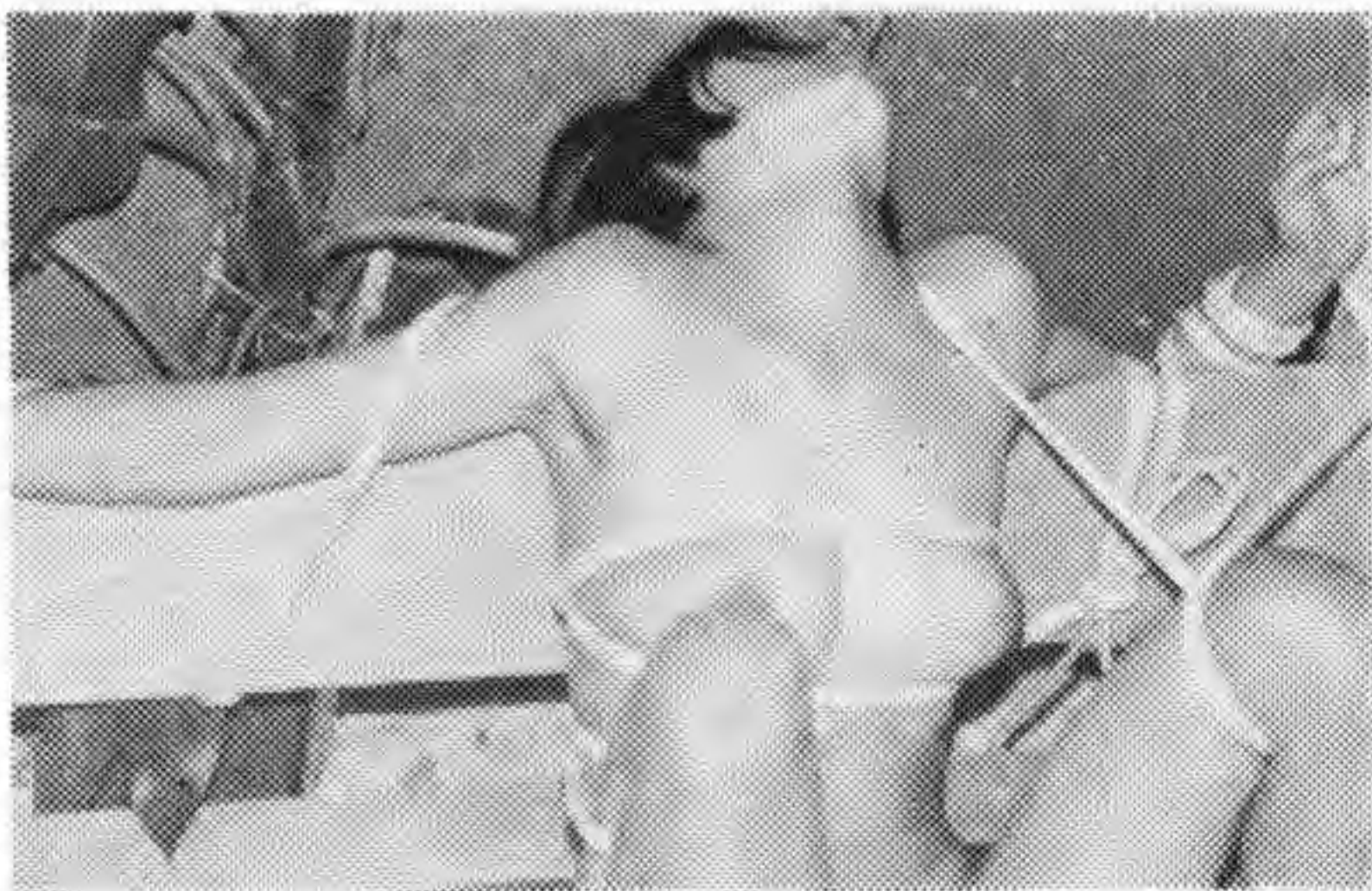
ないのである。

食事をし乍ら、微に入り細を穿つてのアヌス談義、ノーマルな人間なら食事がまずくなる話を私達は平然と交しながら、結構次々運んでくる料理を平らげていった。その心理が敢えていえばアブであるかも知れない。

彼の手段は根気がよかった。ギネの医師がアウスの時、使用するウテルス拡大の、極細から太いのまで十数本ある金属棒をいつも、車のトランクの隅に積み込んでいて、時に応じて、温めて使用するのである。その行為は体に刺激を覚え、それを緊縛を伴って行為に移す時、I氏の胸は灼熱に燃えたぎるのであった。それだけにどんな美人でも、女性が痔疾を患っていたり、時に脱肛であったならば一顧の価値もなく帰してしまふのである。よく締まった健康な目標だけが、I氏にとっての最大の魅力でもあったのである。

私も知っている佐々木真弓のそれは合格。

しかも面喰いならぬ尻喰いのI氏をして、感度良好といわしめたのだから、彼女も亦、多彩な、女性である。SMプレイ——レスボス——セックス——ソドミー——とこうして並べると、ゆくところ可ならざるはなく、彼女は中年好みの男性を欲ばす誠に不思議な千変



万化のテクニックの持主でもあった。A感覚によく附随するクリスタールプレイにも、反応を示したというのだから、いよいよもってカオリは何でもこいの女性であった。

「今里の妓はどうでした？ お女将は、いい妓を紹介しましたか？」

「K香という十九才の若い妓でした。SM気は全然ありません。ハッスルしませんから、シゴキで軽く縛る真似事をしたら、エッチとやられました。ああした花柳界の女は、反って観念が古いのですね」

「セックスのみが、最上の男性を欲ばす美德と考えているんですね。床入りの儀式すら生きていて、男の前で全裸にならないんです。紐か帯一筋、胸において、全裸にならないかったと、それで自分自身にいいかせている世界ですよ」

「今時の、OLや若い娘達より、むしろ謙譲の美德をもっていますよ。あれはあれでいいのかも知れません」

「真弓という女は、典型的なプレイヤーですね。中年の男共を欲ばすコツを知っていますよ。でも少し危ないんじゃないかな、放恣すぎて……」

「段々とそうなっていますね。私の前で、堂々とIさんといちゃついて、正直いってそのアプレ振りに驚いた。いやアプレという言葉すら古くなった昨今、未だに使っている私の方が古いのかも知れませんがね」

「ギブあんどテイクで、判っきりしてしましたよ。反ってあとで文句いったり、やいのや

いのいう女よりスッキリしていて快いかも知れないな」

「そうでしょうかネ、私には釈然としないけど——。ところで彼女とどこで会うのです」

「このホテルのロビーで午後六時に」

「じゃあ、彼女、店を休むのですね」

「でしような、一向に構わない様にいつてましたよ。まだ小一時間ありますね。それまで何か最近のニュースでもきかせて下さいよ」

彼の要請で、ポツリポツリと私は、最近ハントした女性のあの人のことを、ハントの視野から逸脱しない程度で話していた。

I氏は興味深げに、いろいろと質問し、愉しげに、半ば羨まし気にきいていた。金や地位はあっても、私の様に自由に振舞えない不自由さはあった。私は幾分は誇張気味に、佐々木真弓のことなど、殆ど私の視野から霞んでいるような口吻で、彼女に比べて、もっともっと素晴らしい人妻、うぶなOLなど、広範な女性のあれこれを話した。箕田氏から電話があつて、塚本鉄三氏が、一夜、万国博に来日した外人女性をハントした話をきき、矢も楯も耐らず、彼に無理をいって、外人女性が離日する前夜、あわただしく市内の一隅でその女性とSMプレイした話などすると、彼

はよだれを垂らさんばかりにして、自分にも何故声をかけてくれなかったのかと文句をいわれる一幕もあった。この外人女性のことを塚本鉄三氏は「金髪碧眼の美女を縛る」と題して前月号に書いた。数日おくれの私は、先を越され、いつもの式の、馬鹿正直なハントになつてもいけないし、国際問題で云々されてもつまらぬからと、エトランゼの一夜の戯れとして、ハントに書かないことにしたが、思い出は強烈である。

デートの時間、午後六時。私達は揃って階下へ降りる。ロビーに並んで立つと、案外、素人っぽいスタイルで、カオリこと佐々木真弓が私達を発見して大仰に手を振った。

「なんだ、オジさんも一緒だったの」

この第一声が、カチンと私の頭に來た。彼女は、I氏だけと思つていたらしく、私の同伴は意外だったらしい。彼女にとって、ホンの何の意味もない発言であつたかも知れないが、その言い草が、いかにも邪魔もの扱いのように聞こえて、思わず私の顔色は変わつていた。

「一緒に悪かったね」

云わずもがなの買言葉であつたが、先夜の私を無視した行為の先入観があるので、ど

うも私の雲行が怪しい。

「そんなつもりでいったんじゃあ……」

「フン」

と、そっぽを向く。私は完全にオカムリを曲げていた。

困惑したのはI氏であつた。私にもカオリにも告げず、いきなり会わせて吃驚させてやろうという子供っぽい計画が、思わぬ破綻を來たして、長身をかがめて、双方にまああとなだめにかかった。

「私は遠慮しましょう、今日のところは」ズケズケいって、私は数歩、引退る。

「困つたなあ、じゃあ私もよう、今夜は」I氏も、すっかり途方にくれていた。こんな筈では確かになかった。

「私、どうなるの？」

キツとして、それが特長の、やや鋭い切長の眼が、私とI氏をにらみつける。真弓にとつては思いがけぬ侮辱に感じたらしい。

「君の云い方がいけなかったのさ」とI氏。

「どうしてなの？ 私、Iさんからお電話いだいたから來たのよ。そこに辻村さんがいらつしたから意外に感じて、何気なく御一緒だったのときいただけよ。それが、どうしていけないの」



若い娘だけに、きおい立っている。鋭い眼

が口惜しげに光り、ワナワナと体を顫わせていた。私も、いきなりカッときた自分を反省し出した。成程、彼女のいう通りかも知れない。先日の夜の別れ方が、頭の片隅にこびりついてゐるから、彼女の他意ない言葉を悪い方へとったのかも知れなかった。潔く謝るべきだ。年令は親子程違っても、一度は気の許し合ったプレイメートの懐かしい彼女に、今更私のイメージを悪くさせる必要も、あるまい。あっさりと、

「ウン、聞いてみれば私が悪かった。素直に謝るよ」

ペコリと照れ臭く頭を下げる。しかし一旦醸し出された、白けた空気は容易にバラ色に

失礼だけど車代——」

手渡そうとして、小さく折りたたんだ紙幣にチラッと目をやって、

「何よ、それ。ワザワザ呼びよせて車代とは何よ。失礼もいいところだわ。そんなもの欲しくて出てくるものですか。見損なわないでほしいわ」

とニべもない。なかなか、いいところがある。金にあっさりと転ばず、パーンと金持相手に切った啖呵が快くて、私は思わずニヤリとした。夜の蝶の心意気か——。

こうなるとI氏は、いよいよ引込みがつかない。しきりに私の顔色を窺って加勢を求める眼の色である。

「じゃあ、こうしたらどう。真弓ちゃんも今

は染まらない。語気の鋭さにタジタジとなったI氏は矢張り金持のいいところ育ちである。急に真弓の人柄に懼れを感じた様子で、

「とも角、私は今日はよすよ。これ

更、引込みがつかないだろう。今日は私かI氏か、どちらか一人がお相手することにしたら……。選択は真弓ちゃんの自由だ。さあ御気嫌を直してさ」

カオリは私達を等分ににらむ。大分、腹に据えかねたらしい。最初の火付けは私であっても、I氏の云い方が又癪に触って、怒りが思わぬ方に飛火してしまった感じである。

鼎に三人三様に、やや氣拙い思いで立竦んでいる。I氏は既に気分喪失して、すっかり白けた顔付になって苦渋すら現われていた。

私は真弓の真剣な、慎恵のほむらの眼ざしに、思わず眼をそらせて柔らく笑った。考えてみれば何もそう真剣になやむことなどなかったからである。このまま別れるもよし、その気あらばプレイも又よし、ジタバタする必要は毫もなかった。

気合が折れた様に、真弓の眼はフト柔和に還った。彼女も亦、こうしてにらみ合っている愚を悟ったのであろう。

「オジさんさえよかったら……」

その言葉で、I氏はほっとした顔に戻り、私は私で、内心これは荒れるぞと、肩をすくめて頭を掻いてみせた。

「じゃあ、お茶でもものもう」

I氏の声に、きっぱりと、

「いいですわ、ここでお別れしましょう。又

「R」へ来てね、待ってますわ」

さっと私の手をとると、引っ立てるようにして、ロビーを出ようとした。あわてて振り返る彼方に、苦虫を噛みつぶした様なI氏の顔が、ことの意外な成行に、呆然と私達を見送っていた。先夜のお返しが、外ならぬ真弓の意志で行なわれたところに、思いがけぬハプニングがあった。そのハプニングの原因が、雑草のような根強さの庶民の心の真弓を、金で済まそうとしたところに起因したことを、I氏は気付いているだろうか。

スナックバーでは夜の蝶でも、店を離れた真弓は一人の唯の女に還元していた。そこに金持には判断出来ぬ読みの甘さがあったのである。

× × ×

「あれだけ啖呵をきったのだから、あの人、もうこないわよ」

「いや、来るよ、きっと。あの啖呵に改めて見直した気でね」

「賭けましょうか」

「ウン、賭けていい。何を賭ける？」

「私、あの人が又来てくれて、私の負けにな

ったら、オジさんのいう通り、どんなことでもします」

「どんなことでもね。大抵やっちゃったな」

「今迄やらなかったことでも……」

「いいや、その代わり私が負けたらどうしよう？」

「一晩中、私の奴隷——」

「フーン、奴隷になってどうするの？」

「おシッコの便器がわり。全身のマッサージ無茶苦茶に縛って苛めてやる……」

「ヘー、そんな趣味あったのマユミに？」

「段々ある様になったの。ホラ、この間いったでしょう、例の製粉会社の粉課長ね、あの人、奴隷にしたのよ。すごく面白かった」

「まゆみは研究心、旺盛だね。会うとこうして、いつも愉しいよ」

「私も、あんなインケツ専務のIさんより、

気心の知れたオジさんの方が好きよ」

私達は長い間、チュウを繰り返していた。

キタのデラックスホテルのバスの中の会話と抱擁の合間の痴話がこれ——。

インケツ専務とは手厳しい表現。なるほどいい得て妙。INKETUとなると、お尻の中か——私は思わず吹き出したくなって、チュウの唇から唾液がこぼれた。インケツは花札

言葉の数字の一に概当するが、プレイ用語としても仲々秀逸であった。

唇を離して、両手で私の顔を挟み乍ら、

「何であんなことで腹立てたの、オジさんらしくもない」

「心のどこかで、マユミが好きだったのだろう。一年振りに逢う匂々、連れの仲間とイチヤイチャされりや、心の練れた筈のこのダンナも、ちよっとは頭にくるというものさ。男のジェラシーという奴よ」

「フーン、よくいえるわね。用事のない時はおっぱり出しておいて、気が向けば、私の感情なんか無視して、仲間を連れてきたりしてさ。わざとジェラシー起こるように仕向けてやったのよ」

「それでインケツ旦那と尻くり合ったんだろう」

「イヤなことじゃないで、調子合わせてたけど、もう二度と御免だよ」

「そのくせ、専務一人のつもりで、やって来たくせに——」

「いちいち絡むのね。いいお客を紹介するからといわれりや、そこは商売の悲しさ。喜んで行くわよ。いいお客がオジさんではガッカリだったわ」

一年の間に、真弓の言葉は随分、乱暴になっていた。そのくせ愛情の濃厚さは一人、深まっていた、私の体に絡みつく柔らかい触手が、私の慾情を振るい立たせるかの様に、湯の中で妖しくうごめいていた。

お初天神横丁で、彼女の好物のカニコロッケを喰べさせて、その足で飛び込んだこのデラックスホテル。つくなり匂々に私達は、かなり大きい岩風呂づくりの浴場にひたり切っていたのである。

あったかい湯気と共に、一時間前の奇妙なこじれは、とっくに湯に溶けて、プレイで結ばれた者のみを感じる親近感が、久々の逢瀬と共に湧然と盛り上ってくるのであった。

Mである筈の真弓が、今やSにも関心をもって、男を奴隷呼ばわりして喜んでいる。プレイに対して、貪欲なまでに真弓はすべてを吸収しようとしていた。

纏れ合ってバスから上ると、真弓は甲斐甲斐しく、私の体を拭ってくれた。奉仕精神も又、旺盛である。浴衣の前をはだけた真弓と小さい座敷机に向かう。冷蔵庫を開いてビールをとり出すと、勢いよく、さも旨そうにコップに並々とついだビールを一気にのみ乾してしまった。つづいてもう一杯——。佐々木



手早くカメラを装備して縄をとり出す。いよいよ緊縛プレイの開始である。

× ×

うっすらと頬を染めて、まゆみはまるで私に挑みかかるかのように、二つ枕の真白なシーツの上にドサリと仰向けに倒れた。腰紐のない浴衣は思いの俣乱れて彼女の白い肌をこれみよがしに曝している。

蠱惑的な黒耀の眸が、挑発するように私をじっとみつめて、セクシュアルな態位が、フォートを撮るつもり私の心を妖しく猥らにした。

この俣のしかかって行けば、恐らく彼女は欣然と私を迎え、快いうたかたのひとときと共に、一巻の終りを告げるであろう。それでは、かりそめのセックス・タイムに過ぎなくなるうというものである。

男心を蕩かさずにはいない誘惑の眼を退けて、私の心はプレイへ走ろうと努める。丸打縄を手に、露わな女体へ近づくと、片手を彼女の背へ入れて抱き起こす。両手を高手小手

真弓はアルコールにも強くなっていることを私はこの眼でたしかめた。この女性が今は確か二十一才の筈だがと思うと、夜の荒浪に揉まれた女の芯の強さを、まざまざとみせつけられた思いであった。私の嫁いだ娘と、ほぼ同年令であり乍ら、人生経験の深さはくらぶべくもなかった。

黒革バッグには、ほんの一通りの準備しかない。最近、買った丸い綿ロープが数条と、短いだんだら縄二本、ストロボとカメラ一挺そして愛用の小型パイプライターが今夜のすべてであった。

に縛って豊かな双丘の盛り上りを挟んで、遮二無二、縛り上げ、手を離すと体が支えを失って横倒しになる。高手小手の痛みに、微かに眉をしかめて体をずらせ、仰向いた真弓の表情は、凄いまでになまめいていた。

やや開き気味に投げ出した両脚は、これみよがしに猥らめいて、私の、視野に眩しかった。一年前にくらべ、何という変貌であろうか——。まゆみのこの姿態には羞恥のかげらもなく、女体の盛りを私の眼前で誇示するかのようすに受けとれたのである。

それは身についた夜の蝶の擬態か——S Mのプレイに狙れた女の淫らさか——。

お腕を伏せたような双つの乳房は、桃色にほんのりと染まり、身じろぎもせず、きらきら光る眼で、私の行動を凝視していたのである。

刹那の閃光を走らせ、私の手はいっしかバンプレーターを握りしめていた。この無防備の、快楽の手を待ち受けているような肢態に早いと知りつつも、私は生唾をのみこんで、かたえににじりよっていった。

「どうだい、これは——」

「男の人ってみんな、矢鱈にそれを使いたがるのねえ」

「フーン、誰でもねえ」

「オジさんもその例外じゃなかったわ。大人の玩具で大流行らしいのね」

「こいつめ……。何人にかけてもらった。いえッ」

「フフ、何人たったか忘れちゃった。私とミチルとのプレイでも使ってるのよ。驚いた？」

妖精は、真白な歯を笑みこぼして平然としていた。

「オジさん、もっときつく、縛

ってもいいのよ。近頃、段々に縛られるのに馴れちゃって、何だかあっけないの、この程度じゃ」

内心、私は思わずウーンと唸る。彼女のS Mの度合は、Mにもより強烈に、更にその逆のSに対しても、より昇進しつつある様であった。

「よしッ、パイプはお預けだ。こっちへこいッ」

わざと荒々しく、ひたぶる私の心を押えて胸ぐらの縄を掴むと、起き上らせる。

飾りのれんを外して柱に、もう一本の丸縄でしっかり縛りつけ、余った縄を、深々と喰



い込ませて、臀部から分けて柱にきつく結びつける。

パラリと半面に垂れた前髪が、真弓を一層妖艶にみせた。

何かガムシヤラに苛めてやりたい。そのくせ、真弓の挑発的な眼に圧せられて手が出なかった。

パイプをひねって、水蜜桃の、熟れて喰べ頃のようなふくらした乳房を狙う。

微かに呻いたが、意外にも真弓の反応は思った程でもなかった。ミチルとのプレイの数々で、既に彼女のパイプに対する反応は、かなり麻痺しているかの様であった。この程度

で驚くような反応を示さないところに、彼女のプレイ遍歴のしたたかさが感じられたのである。

柱ごと抱きかがえて唇を吸うと、それを待ち構えていたように、彼女は舌をぬめり込ませてきた。甘い唾液がひたひたと溢れる。思わず知らず私の方が熱い吐息を洩らした。

「どうだ、ぶってやろうか？」

「ウン、ぶって……快くね。無茶苦茶にぶたないでよ」

「よしッ」

さらさらっと縄をとくと、浴衣を剥きとり鴨居に低く両手を吊るし、まゆみを中腰にさせると、手早く首縄から胸にかけて股縄にし

め、心持ち両脚を開かせ気味にした。長尺レリーズも三脚もないので、私自身のプレイはとりようもなく、そのポーズを数枚カメラに納めて、私はまだら縄をムチ代わりに束にして近づく。

颯々と刷くように、肩から乳房にかけて、一閃ビシリと当てると、あうッと呻いて、真弓はピクンと飛び上り、

「痛いわオジさん、もっとゆるくしてえ」

と甘える様に訴えるのであった。

縄束が重なり過ぎて、ムチというより、鈍器でうちのめされたような感じがしたのである。

縄束を捨てて、ホテルに備付の、幅広な浴



衣の腰じめを二つ折りにして、再び叩く。パシリといい音を立てたが、さして痛くなかったのか、真弓は一寸顔を顰めただけで無言でこらえた。背後に回って背から腰へ、

そして尻へかけて、私は十数回それを打ちふるった。微かな呻き声に、愉悦に似た喘ぎが籠っていた。

「どうだ、どうだ」

掛声のようにいって打ち振ると、

「いいの、もっと叩いてえ——」

と、真弓は顔をのけぞらせ、ああという呻吟に、たまゆらの愉悦をこめて、ビリビリ体を震わせていた。

フトみつけた中指のホータイに目をとめ、

私は打つ手をやめて、

「どうしたの？」と、きく。何とはなく目触りに感じたからである。

「ウン、何でもなしの。アイスを割る時、一寸突いたのよ。とっちゃっていいわ、大したことないから」

云われる俚に指先のホータイに力をこめて引抜くと、指先にポツリと赤チンのシミがついていて、かすかな突き傷のあとがあった。

「オジさん、大分感じが出て来たわ。もっと強く縛ってえ。意外に平凡なのね」

次々と先を越すように真弓にいわれ、私の心は逸り立つ。しからばと縄をといて、部屋の片隅の飾り手すりへと引っ立てて行き、それに背を向けて坐らせると、両手を手すりに



犇々と縛りつけ、両脚をぐいと開股位にして見動きの出来ぬ姿に早縄をかけていった。

真弓もそれとなく、それを希っているように思えた。私の意志も勿論、そこにあった。

気懶いパイプの響きと共に、彼女は激しく呻いて、ぐいぐいと手すりに背を押つけてのけぞった。

鋭く尖った爪先が虚空を掴み、激しく燃焼する体内の疼きに、今はこらえようもなく、キリキリと歯ざしりして激しく軟軟の叫びを挙げ、悶絶するように裸身をのたうたせたのである。

「ああ、もうやめて……」

ぐったりとたるんだ声が、鳴悦に交って微かにききとれ、私はあわてて中止する。

女体を喜悅さす方法は外にないものかと、私自身、近頃しばしばどころか、必ずといってよいくらいに使う、この軽便陶酔器に、むしろマンネリズムと疑義すら感じていた。そのくせ、いつも手っ取り早さをよいことにして頼っているのである。それはプレイの邪道かも知れない。或いは、こうした玩具の出現で、徐々に盛り上げて行く、所謂、男の手間が大いに省けているかも知れない。しかし、

真弓とミチルが相互に使用している如く、その恍惚感が、私という人間でなくても、又、特定の男性でなくても、女性に与える感覚は等しかった。極言すれば、女独り寝の淋しさに使用したとしても、恍惚の感受性は平等であったといえよう。始めて私が使用した当初はそれも女性にとっては未知のものとして珍しかった。

だが、かくも、出廻ってきた今となつては、

「プルトースお前もか」ということになりかねない。ましてや真弓のような夜の蝶にとっては、感受性の漫性化によって、その観念は他の人以上に顕著であるかも知れなかった。その行使は、私という人間の、独特の秘法は何もなかった。この人も又——というマンネリズムの陶酔が、真弓の恍惚の底に流れていたとしても、それは非難出来なかった。

「少し寒くなったわ。解いて——」

やや白けた口調で、彼女は私に命ずるよういった。かりそめの昂奮のさめた味けない顔付になっていた。

ホロ苦い気持で私は縄をといてゆく。誰にもかにも、ハント女性とあれば使ってきたパイプであったが、今、何か真弓によって反省を求められた様な気がした。

(男の人ってみんな、矢鱈にそれを使いたがるのねえ……オジさんも、その例外じゃなかったわ……)

(……例外じゃなかったわ、例外じゃなかったわ……)

真弓のその幾分あざけりを含んだ言葉が、萍のように、私の心の底辺にひっかかっている。まるでエコーのように、その言葉は波紋

を拡げて拡大していった。

浴衣を羽織った真弓に、私は真剣な顔で問いかける。

「真弓は、パイプがきらいかい？」

「ウン、好きだわ——でも、いくら美味し

いものでも、いつもじゃ飽きがくるでしょ。いくら結果がどうでも、結局は玩具の仕業じゃないこと？ 矢張り感激は違つてよ」

「その言葉は確かに教えられるよ」

「人工的なものより、自然に勝るものはないわ。デリケートで千変万化するでしょう。生意気いったわ——」

「その通りだよ。確かに人工的に走りすぎたきらいがあったよ。今、つくづく反省しているんだよ」

「あらッ、私のこと」

「そうじゃない、過去のハントについてさ。」

私は濫用し過ぎたようだ」

「それは受取る人によって違ふのじゃないかしら。私のようにそれに馴れた者、又始めての人。そんなこと一概にはいえないわよ」

私は唯、うなづくのみであった。気付かずして陥っていた情性を、いみじくも真弓は喝破したのである。セクシユアルアニマルの真弓の、いつしか身についた性生活の知恵だっ

たかも知れない。

「ねえ、オジさん。もう一度、お湯につからない？」

「ああ、そうしよう」

「生駒のNさんは、私をよく縛った俣お湯へつけたわ」

言外の請求のようにとれて、

「じゃあ、私もやってみようか」

と負うた子に教えられた感じで、その縄を犠牲にするつもりで、一本縄で、両乳房を強調して後手に縛る。

洗面所の鏡をバックに数枚とり、バスの扉を開いて、湯気を排出させ、岩風呂づくりのバスの石に腰をおろさせて、この緊縛のポーズをカメラに納める。可愛い小妖精はニヤリと笑って、

「オジさん、よくよくカメラきちがいね。縛りかえるたんびに撮してたのじゃ、折角のムードこわれちゃいそうな気がするわ。だからプレイに耽溺出来ないのよ。思い切つてカメラのこと忘れちゃいなさいよ」

私はうなずいて苦笑すると、カメラを置きに部屋に戻った。いちいち真弓の言葉は、もつともであった。私の心では、未だこの上、バスにつかつた真弓、泡にまみれてタイルに

俯伏す真弓などの構成が、咄嗟に脳裡に浮かんでいたのである。

私自身、近頃プレイを主にするといっている癖に、やはり長年、身についた、カメラに対する執念が、時と処を選ばず拾げてきて、長年の習慣はおそろしいものだ、いつも思っているのである。カメラに心を走らせている時、少なくともプレイへの情感は乏しかった。

老いたるプレイボーイよりも、このピチピチしたプレイガールの方が、少なくともプレイに対する感覚は、一日の長がある様に思えた。カメラ・ハントと銘打った、それは私の宿命であるかも知れない。しかし、今、真弓がいった様に、折角、盛り上ったプレイへのムードを挫折させることは確かであった。

裸になるのに手間はかからない。パンティ一枚脱ぐと、内心、つき出た腹にひけめを感じつつ、腰を降ろした真弓の体をかかえるようにして、岩風呂に身をひたして行く。

小一時間経った湯は、既に生ぬるく、勢いよくカランの湯を噴き出させて、ぐっと縛った真弓の体を抱きしめる。

頬を擦りよせてきた真弓が、喘ぐような口調で耳許で囁いた。



私の意志通り、大脳神経は珍しくも勢いよく命令を下していった。

× ×

陶醉と悦楽に火照った二つの顔がある。既に三本目のビールが、殆どカラになっていった。真弓にも私にも快い酔いが廻っている。

酔いが真弓を放恣にさせるのか、大胆にも全裸の膝を乱した姿で、彼女はこれで何杯目かのコップのビールをあけていた。

「ああ、オジさん、ねむくなったわ。泊っていったいいんでしょ」

「うん、そうだね」

生返事をして、内心フト困惑がよぎる。恐妻家でもないのだが、カメラ・ハントだと称して家を出た私に、妻の独り寝の、眠れぬ姿が臉をよぎった。

真弓と情熱の一夜を送りたい反面、明日の仕事と、妻の嫉妬めいた朝帰りの挨拶が気になって、私もつい、心が鈍る。ハントに憂身をやつしながら、放恣になり切れない私自身

の心を歯搔ゆく思い乍らも、いざとなれば、やはり中年の理性が働くのであった。

「まあ、その時はその時のことだよ」

「イヤーン、一緒に泊って——」

真弓は、あの悩ましい秋波をヒタヒタと投げてよこす。

辟易しながらも、悪い気をする筈もない。嫁がせた二人の娘よりも年下のこの真弓に翻弄されて、いつしか私の心は若やいでいた。

「オジさん、もう縛らないの？」

「いいかい、縛っても」

「ウン、いいの。もっと強く縛って……縛って私を苛めて。愉しくなるように苛めるのよ」

「むつかしい注文だな」

「もうあんな大人の玩具なんかイヤよ」
情熱的な迫力に押され、タジタジとなって体をのけぞらせ、私は、この愛情過多に、今日のナイロン氏の「感度良好」という言葉をフト思い出した。A感覚とクリスタールで苛めても、この娘はそれを快楽に代えて甘受しその多様性に一驚したというI氏。

今は私の嗜虐の対象となるべく、自から進んで身を投げ出しているではないか。

フト熟練した手練手管の、年増盛りのテクニクを想像したが、眼前にある真弓は、ま

「オジさん、それだけなの？」
二十才過ぎの、小悪魔めいた可愛い妖精に請求されて、私の手は、たどたどしくとまどう。

「フフ、オジさん案外うぶネ。見直したわ」
自分の言葉に照れて、私の唇に唇を重ねてくると、真弓はうっとりとした様に眼をつむった。適温になった湯に、カラシに手をのばして止めると、ボーッと桃色と紫色にカクテルする湯ぶねで、私は彼女を掻き抱いた。
快い陶醉がヒタヒタと押しよせ、いつしか

ぎれもない、ハタチ過ぎの花のかんばせの、コリコリした、若鮎のような女体であった。濡れそぼって、洗面のタイルに放った俣の縄は仕方ないとして、残りのすべての、この真新しい縄を動員して、この真弓の女体を、牽々と緊縛すべく、私は行動を起こした。

酔いの廻った足許も危うく立上り、手を貸して真弓を直立させると、乳房の膨みを強調する緊縛に入る。いつも、マンネリズムになる。オーソドックスな胸縄をさけて、襷をかけた様な胸縛り、ウェストを思いきりしめつけた胴じめ、グイと締め上げる股縄と、一見乱暴な、そのくせ要所要所を締めつけた緊縛を終えて、ホッとして、又ぞろカメラに向かっている。

矢張り折角こうして縛ったものを、カメラに納めないのは、私の蒐集趣味が承知しなかったであろう。

真弓はやや酔いの廻った、うるんだ眼になって、私のカメラを直視していた。

両手を縛った縄の余白を、軽く足に纏いつけたのは、その余白で吊り下げようとする私の魂胆からであった。ポクッと乳房の飛び出した側面のポーズが、私の嗜虐の血を疼かせた。思わずシャブリつきたい魅力が、双つの

ポインにあった。

男性遍歴を呼応しながら、真弓のその乳量の、汚れなき淡い褐桃色に、案外、口程にもなく女体を酷使してないことが、ありありと窺われたそれは総てに於てもいえることであ

った。

そのくせ、ひとかどプレイガールぶる真弓の本心は、現代に生きようとする、必死の虚勢のようにも見受けられるのであった。

今こうして私と、ホテルの密室でプレイに耽っていても、一皮剥けば、純情さが脈々といきづく、所詮は二十一才の、可憐な夜咲くバラ一輪に過ぎぬのではなからうか。

真弓は大きく息を弾ませ、私の胸に顔を埋めると、大きな隆起を波打たせて喘いだ。

真弓の吐く息、吸う息が妖しく乱れ始め、縛られて身悶えする女体が顔を帯びて、熱く燃える内心を伝えて来た。

臍窩のほぼ中心で結びとめた縦縄の結びめ



を握って引っ張り、ヒョイと腰を持ち上げさせる。その繰り返しに、真弓の体はヒョイヒョイと躍った。

闇の境いの鴨居まで引っ張ってゆくと、爪先立ちに、女体を吊るす。

片手に帯締紐を握り、片手で真弓の片脚を持ち上げると、重心が狂って体が旋回する。ギリギリと爪先きでゆらめく臀部めがけて、私の握りしめたムチ代わりの帯締紐がパシリパシリと飛び交う。

見る見る双臀が赭らんできて、紅を刷いたように美しく染まり始めた。

「ああ……ヒューッ」



こらえ切れず、真弓の紅唇から思わず悲鳴が鋭く部屋の空気をつんざく。

少し手垢に汚れたハンカチを、服のポケットからとり出し、矢庭に口中に押し込もうとする私に、真弓は吐き出そうと懸命にあらがい、やがて、男の力に負けて諦めて口中に頬ばったハンカチの上から、黒い布で猿轡をかませたのである。これで幾分の悲鳴は防げるかも知れない。

私は爪先立ちの真弓の両脚を一気にぐいと引上げた。腹腔が、ぐいと凹んで、横ざまに宙にういた体に、縄目が深々と喰い込んだのか、くぐもりの悲鳴が絶叫に変わって、両脚を必死にバタバタさせてもがいた。右に左に

傾いた体を立て直そうとタタラを踏むように彷徨する。

容赦なく私の平手打ちが、豊かな臀部に飛び、飛び出したお腕のボインを襲う力がこもると、真弓のくぐもりの絶叫は又一入、高まっていった。

苦悶の眸の中に、よぎる被虐の愉悦を私は見通さなかった。

吊るした俤、彼女の足許に転がると、この美女のいたぶりの姿を愉しげに見上げる私であった。

そのうち、この真白い女体に憑かれたかのように、俄破と両脚を抱えこむ。

女体舌舐め。……思いもかけぬ衝動に私自

身驚きながら、やむにやまれぬ気持にかり立てられる想いだったのである。

× × ×

両手の縛りを外すと、息つく間もなく、両手を上にかかげさせて縛ると、マットレスの床を敷いた位置まで引っ張ってきて正座させたのであった。

何かくぐもり声でいっているが、聞きとれないのをいい事にして、依然として猿轡はその俤である。

机上の腕時計をとり上げてみると、もう午後十時前に近い。食事して七時半頃ホテルの薄暗い玄関に立ったのだから、もう二時間半という時間があっという間に経過していた。帰ろうか、泊ろうか——どうしよう。泊りたい心と、帰らねばならぬという二つの心がしきりに相剋をくり返している。

欲望の虜となって傾斜しそうな自己の克己心にムチうってはみたものの、現在進行形のプレイは、余りにもひたむきで烈しかった。私はプレイの最後の限界の大詰めに挑んでいた。

高々と両腕をかかげて、剥き出しになった腋窩にはんの短く、何ミリか生えかけた腋毛が、数日間そらなかった髭のごとく辺りを仄

ぐらくして、妙に生々しく私の眼に映じた。

真弓は至極、神妙になっていた。時々息苦しいのか、鼻孔で大きく息を吸っては、豊かな胸のたかまりをはずませていた。

正座した彼女の体を、マットレスに向かって足蹴にして押倒す。真弓に屈辱感を与えるための余儀ない手段にすぎない。

ウェストを強くしめすぎたせいか、彼女のそれが特徴の、浅い臍窩が、尚更ポツリと飛び出して、生々しい猥らさが漂っている。

私の心を攪り、求めるかのように、真弓の媚を含んだ黒い瞳が、そのあとに訪れるものを期待するかのようになまめいていた。

頭部に高々とかがけていた両手をじりじり空間に上げると、胸を中心に円を描いて、その円の中に私を抱きこもうとするかのように両手を胸の上で挙げた後、私に流し眼を送ってくる。

(どうしたの？ 何もしないの？)

とでもいいいたげな眼の色であった。挙げくたびれたのか、両手首を縛った腕を降ろし、瞳だけは依然として、撮影に余念のない私に投げかけられている。

白磁のなめらかな柔肌に黒の猿轡のコントラストも一入冴えて、洋布団の上に長々と寝

そべる真弓の全身から、男心をとろかすよう

な艶冶な媚態がギラギラと発散していた。フィルムが終わりを告げたのを契機に、私は執念深くいじり廻していたカメラを投げ出すと真弓の前に立ちはだかり、この女性を如何に快適に苛めようかと、しばし思案にふけるのであった。いつものハントの場合、当然の様に登場するバイブレーターも、魂胆を見すかされた様な今となっては、再び使うのが、ためらわれた。

といって、この後、極くノーマルなセックス・タイムに入るには、余りにも刺激的な彼女の被縛肢体である。

根よく時間をかけて甘美な恍惚へ誘導し、悦楽にめくるめく、みち足りた時間を、私も彼女も過ごしたい――。

私の指先が、静かに真弓の猿轡を解いてゆく。狙上の鯉は、ぐっしりとしめりを帯びたハンカチを吐き出して、大きく二度、三度深く息を吸い込んだ。



「ああ、苦しかったわ。先程から何度もとってって叫んでたのよ」

「全然、きこえなかった。でも嵌めているとチューが出来ない」

ざれ言をいって、両手で顔をかかえ込み、深々と唇を吸いよせる。熱い、たまゆらのくちづけに、微かに真弓の動悸は弾み出し、ポインの尖端が、心なしか硬直しつつあった。甘酸っぱい若い女の唾液をのみこんで、そつと唇を離すと、キュッと固く盛り上った乳房に移る。

一方、臀部にのびた片手が、双丘を代わり

ばんこに、ピシャピシャと平手で叩いて赤らめていった。

喜悦の呻きが、徐々に真弓の唇から洩れはじめる。頃やよしと足の方に体を向けて、胸に馬乗りに跨り、手を伸ばして脚首を握ると両の脇腹へ抱え込むようにして、ぐいと彎曲させる。

円々と盛り上った耀くような臀部が、眼前すれすれに聳えていた。私の唇がそれに近づき、白くすべすべした肌に、加減して歯を喰いこませてゆく。

愛咬と人は呼ぶ。ガブリと噛みつくのではなく、徐々に強く歯型を立ててゆく時、その咬痛が悦虐に変化し、くつきりと白い肌に齒列を残すまでに噛みしだいても、真弓は唯もう、熱く喘ぐばかりであった。

強く吸った痕が、真赤なボタンのような、あざとなって、臀部のあちこちに点在していた。

究極の求める処、真弓は又しても激しくギリギリと歯ぎしりして、皓齒の底で、ギリギリ、ギリギリと鳴らしつづけていた、オナナに成熟した二十一才の女体は、悦楽に狂おしく咆哮していたのであった。

静かな安息の飽和状態がつづいていた。依

然として緊縛された俛、真弓はぐったりと眼を瞑って、深い思索の底辺を彷徨していた。

やがてポツリと呟くように

「すぐくノドが渴いたわ、何かのませて……」

オジさんの口移しで――」

「ああ……」

物頼く立上って、冷蔵庫を開くと、コカコーラをとり出して来て、栓をぬくとラップのみに一口、二口のみほし、ロ一杯に含むと、真弓の顔を抱えて、上体を少し起こし、唇からドクドクと流し込んでやる。

白いのどをはためかせて、彼女はゴクツと音を立て、むさぼるように吸い上げていた。女臭のこびりつく私の唇を、真弓はわが身に還元するように舐めずり廻ってゆく。

抱擁のときめきが、ともすれば私の内心を疼かせ、真弓は又しても陶醉に似た、うるおいを臉に示し、私をいざなうかのように、自由のきかぬ体に力をこめてぐいぐいと押しつけてくるのであった。

それはもう、男女の愛情の交換というような、綺麗ごとの表現ではあらわすことの出来ぬ、生理的な欲求からくる。一匹の牝と牡との対決に似ていた。

恍惚の激流に体をひたしきった女体は、最

後の拠点を求めて、すさまじい気魄で迫ってきた。

抱く手に力がこもり、必然的に私の体は深々と崩れていった。

× × ×

「ねえ、泊って……私一人じゃ、つまらないわ。ねえったら」

「ウン」

私は煮え切らない。虚脱状態の俛、枕を並べて、それが男の身勝手というものか、空虚な気持を持て余していた。

「明日の朝、是非ない用件があるのでね」

「朝早く帰ればいいじゃない」

「それが、困るんだよ」

「イクジなし、奥さんが怖いんでしょ」

「正直いって、それもある」

「あかんのねえ、案外……少々ぐらい浮気したって、どうってことないんでしょ」

「しかし……」

「いいわ、もう。許してあげるから両手を前に出さない」

裸身をパツと起こして、真弓はキツとした顔付で叫ぶ。苦笑していわれる俛に両手を出すと、矢庭に女は、私の両手首に縄をかけて縛り上げた。

「どうするの？ 一体」

「まあ、黙ってみていらっしやい。私、俄然モーレッツに苛めてやりたい気分になってきたんだから」

別の縄で、足首も揃えて縛り、仰向きに寝転がっている私の顔の上に、いきなりドカリと尻を据えると、力をこめてぐいぐいとゆすり、

「さあ、綺麗にきよめて頂戴——。いやか、どうだ！」

と、Sに豹変した真弓は、遮二無二、私を責めつけてくるのであった。

Mの感覚をほろ苦く味わい乍ら、いわれる尽に、私は従順になる。

「粉課長はいつも、ノマせてほしいと云ったわ。オジさんはどうなの」

「……………」

返事を渋っていると、いきなり私の体を転回させて、ピシャピシャ尻を叩き、足の縄を

「さあ、立上げるよ」

と前手縛りの縄を強く引張る。のろのろと立上って、曳かれて辿りついたのは三度目のバスルーム。

生ぬるくなった湯に、しぶきを立ててザブ



リと飛び込み、しきりに洗っているようであったが、パツと岩風呂から上ると、凝脂の肌から、つるつる滑りおちる湯のしずくをまきちらして、

「さあ、あげるわよ」

と立ちはだかったかと思うと、私の眼前にいきなり激しいしぶきが燦然と、紅茶に染ま

って、微かなビールの香りと共に噴出したのであった。

ぐっとつむった眼、頬、ひたい、あごと、顔一面に生温い奔流が、相当激しくはじけ飛んだ。

その尽、かたく眼をつむっていると、いきなり、ザブリと頭から湯が浴びせられ、つづいて二杯、三杯と、頭上から滝となって私の体を濡らしていった。

思いもかけぬ、Mの立場に、私は軽い快い陶酔を覚えた。私の求めたプレイではなくても、真弓は私にそうした女王的行为をすることによって、或いは私の反応を確かめているかのようであった。

かつてマコとプレイして味わった被虐の想念が、今真弓によって、ヒタヒタと私の胸底に蘇りつつあった。

Mも亦愉しき哉——。若いピチピチした娘のネクタールの洗礼が、かくも快いものなのか。

うっすらと薄眼をあけて、真弓を仰ぎみた時、そこにすくと立ちはだかる彼女の表情は、いきいきと輝きわたり、発潮とした肢体には、快楽に息づく真弓の本心を、ありありとあらわにのぞかせていた。鋭い官能的な眼

は、マコのプレイに耽溺した時に、そっくりである。

この娘も亦、本性はSか——。それは私や長田実というSMのプレイヤーによって開眼されたものであるにしろ、一旦、快楽に没入すると、M性よりS性の方が、より大きな比重を極めて真弓を行動させていたのに違いないのである。

フトよぎる快楽に、もっと虐められていたい思いが走る。

それも束の間、真弓は又しても濡れそぼった縄を、ようやくにしてほどくと、ヒタと私の胸に縋り、

「オジさん、御免ね。何かむしようにそうしなくなっちゃったの。でも、もう無理はいわないわ。私、独りでねるのもつまらないから一緒に出ます。お願い、玉出のアパートまで送って……」

柔らかいままざしが私に迫り、首筋を抱きしめて、真弓はピッタリと唇をよせてきたのだった。

ひたむきな女——そして、ひたむきの夜は更けて、ネオンも消え果てたキタのホテルを出たのは午前零時に近い。小柄な佐々木真弓は、しっかりと私の腕にぶら下り、小声で囁

くように、

「ああ、くたびれたわ。オジさん、おなかすかない？」

と遠慮がちに、きいたのである。無理もないことだ。

お初天神通りの、食道街も殆ど店を閉ざしている。私の知り合いの寿司屋なら、或いはと、少し歩いた横丁を入ると、のれんは外していたが、ベルを押すと、なじみの板前が顔を出し、やや迷惑げであったが、それでも、さっと私達を入れてくれた。残りのネタで、手早く握った幾つかが並べられるのも、顔なじみの有難さであろう。

にぎり寿司をほおばり乍ら、激しかったSMプレイを反芻する。

「ねえ、いつか又、会ってね、気がむけばだけれど……」

「ウン、又ね」

「Iさんによろしくいってね。本当はアテにしているんだから」

「インケツ重役でいいんだね」

「仕方ないもの。でも、それはそれで又、変わった味よ」

ケロリと応えて真弓は寿司を、ほおばる。「ほんとは私も興味があるんだよ、白状する

けど」

「なら、なにもへんな遠慮しなくたっていいのに」

「いや、今日はタジタジだった。のまされたもの」

「フフ、いわないで——。煮え切らないオジさんに一寸ハラが立ったの。でも私スツとしたわ」

「真弓はSが性に合ってるね。M性の人を紹介してやるよ」

「当てにしないで待ってるわ」
激しいプレイのあとの、恬淡とした仲であった。

梅田新道に立ってタクシーを止める。

一方通行の御堂筋をひた走る車内で、真弓は私の胸に顔を埋めて、仮りそめの眠りをむさぼっていた。

カメラ・ハントの回顧のつもりに、思わぬ華が咲いて、私は充実した気持で揺られていた。流転の夜の蝶は、又どのように変貌してゆくか分からない。

窓を開くと、春宵の冷たい風がさっと吹き込んで、火照った私の頬を快くなぶった。

。。。菱縄マニアの独り言。。。。



見果てぬ夢

早 木 夢 二

菱縄縛りのみの姿が無性に見たくて手近かにある女の裸体画や写真に、自分で菱縄をかき加えることがある。

だから両手は前や横にあって、一向に後手縛りの感じにはならないが、そんな画や写真のモデル嬢たちの豊かな乳房をかこんで、菱形の縄をかき加えるのが、この上もなく心楽しいのである。

ずっと昔は、満たされない欲望の吐け口として自分で菱縄縛りや拷問の姿を描いたものだった。

裸の縛りなど滅多に、お目にかかれる時代ではなかった。

私は今でも自分が全裸で菱縄を打たれると

拷問台にのせられて石を抱いている姿をまざまざと思い出すことができる。

一度、菱縄縛りの女優さんの姿を見ると、その後、どんな役をしていても、菱縄縛りの姿が目にとびりついて、それがその女優さんのイメージとなってしまう。千恵蔵の判官も、菱縄縛りでお白州に引出されていた花柳小菊は、いつも私の頭の中では菱縄を纏う女であった。小川真理美が銀座のバーのマダムをやっている、あの囚衣で菱縄がけの姿（テレビ劇「剣」）だけが、はっきり浮かんでくる。

中尾ミエが歌っていても、八百屋お七の菱縄姿の引廻しシーンが思い出されて、私の頭

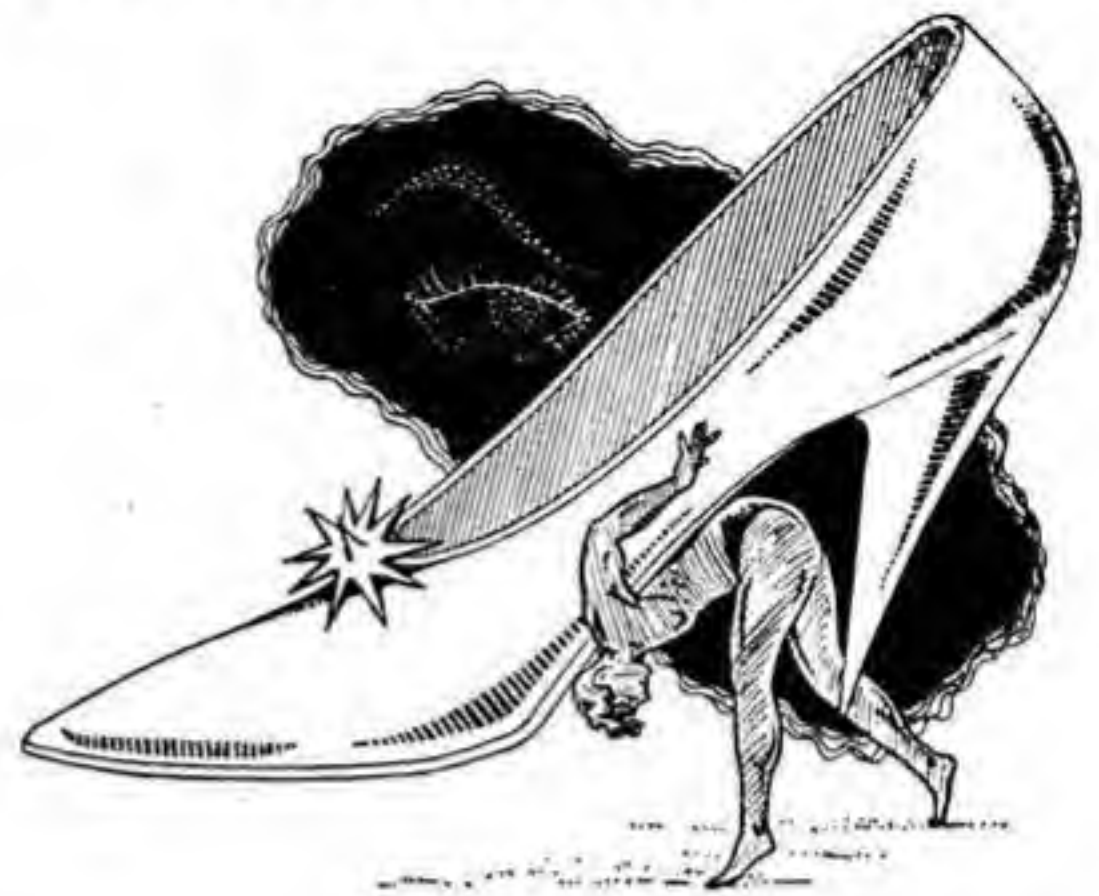
の中では彼女は歌手ではなくて、菱縄を打たれた女優にすぎない。

私は時々彼女らの写真に菱縄を纏わせる。そして、そんな写真を飽くことなく眺めながら、菱縄を纏った女の哀歓といったようなものを、しみじみ感じようとしている。

何か菱縄を求めて狂奔している人生、そう思う時がある。その思いが実を結んで、現実には一人の女を全裸にして思う通りに菱縄縛りをするのが出来る今となっても、なお絵空ごとの菱縄縛りを求めてやまない業の深さに我ながら呆れ返るのである。

呆れているのは私だけではない。被害者？である慶子も、私のマニアぶりには、ほとほと感心？ している。

この頃は、テレビを見る時も、テレビの前に緊縛写真を立てかけて、テレビを見ているのやら、写真を見ているのやら判らぬ私を見る彼女の目の中に、そっと誘いをかけてくるような輝きを見出して、私は行きつく所に間違いなく行きつけた安堵感と、それでいて、一人の女から味わえる緊縛感の限度に、ある種のもどかしさを感じたりして、また見果てぬ夢を追っているのかと、いま更ながら菱縄に憑かれた長い年月をふり返るのである。



8

「供せいごっこ」の次には、「あべこべごっこ」を提案しました。

「閉店から、あしたの……、そうだなア、午前十時まで、君と僕と一さいアベコベになるんだ。つまり何から何まで郁ちゃんが主人で僕が家来になるのさ。その間、家来の僕は郁ちゃんの命令には、どんなことでも絶対従わなければならない……ってわけさ」

「ふーん、面白そうね」

|| M || の || 傾 || 斜 ||

壺

中

の

園

(3)

真 砂 十 四 郎

「それが、ありきたりの命令じゃ面白くないけど、郁ちゃんがおかしな命令を出せば出すほど面白いんだ」

これも郁子は、すぐ乗ってきました。

彼女が次の命令に思案すると、私はさりげなく誘導暗示を与えます。彼女は「うん、わかった」という恰好で、うなずいてから「蒸しタオルで、あたしの足をマッサージしながら、きれいに拭け」

などと命令します。

「はい、かしこまりました」

私は、いそいそと階下でタオルを蒸してきて、彼女の前に平身低頭します。

「郁子さま。どちらのおみ足からお拭きいたしましょうか」

「こっち」

彼女は右足を私の前に投げだします。

「はい、承知いたしました」

ストッキングも脱いで、ネグリジェ姿になっている郁子のたくましい素足の、まず太腿の辺から拭きはじめ、次第に下におろしてきて足の甲、指先、足の裏、踵と、私は心をこ

めてマッサージしながら拭き清めます。

こんな遊びは、続けられ続けるほど命令が次第に複雑になるのは分かりきっています。私は心中、満足感に酔いしれて彼女のとんでもない命令を果たしていたのです。

こんな生活をしているうち、郁子の私を軽んずる気持は日ごとに増長してゆきました。昼間の開店時間中でも、私が彼女に言うことは、とかく「頼む」形になり、彼女が私に言うことは「命令する」形になってきます。まったくもって主従転倒の馬鹿々々しい見本ですが、もともと私の態度が、こういう結果にたちいたった原動力なのですから、是非ありません。

しかし私も、金銭問題については厳密……というより、一応、別のものとして郁子とかかわりのない状態を保っていましたので、出納関係に間違いはありませんでした。

客の注文を郁子が伝票に記入して奥の私のところへ提出する。私はその品物を調理して店へ出す。その数も知れたもので、収支勘定は簡単なものですが、それがこのごろ、二百円、三百円程度の金額ですが、合わないようになってきたのです。収支勘定が一円合わないくても、銀行などでは全員が居残りして大そ

うな騒ぎをするそうですが、私のところなどちよっと、注意をすれば原因はすぐわかります。誰か客のうちの一人が飲食した勘定を、郁子が受取っていないか、或はその金額を郁子が着服したかのどちらかなのです。

数日中に私はドアのかげから、近ごろよく見うける若い男の客が、金を払わずに出てゆくを見つけました。郁子も承知の上で男を送り出しているようですから、馴れ合いといえは大袈裟ですが、彼女がその男にサービスしているわけです。

「ねえ、郁ちゃん。あの男、君の知っている人かい？」

郁子は黙ったまま私の問いに答えません。

「貸し勘定になってるの？」

依然として黙ったままです。

「親類の人？」

「……………」

「友だち？」

「……………」

「知ってる人にしても、伝票につけたものはきちんとしておかないと決算がつかなくなるから……………」

やんわり言いかけたのですが、

「いいじゃないの、コーヒー一杯ぐらい」

彼女の押しかぶせるような答えが返ってきました。

「いつも、あたしがおごってもらってるからちよっとお返しただけよ」

そのくらいのこと、文句があるのか、といわんばかりの不気嫌な表情で彼女は私を睨みつけました。とたんに私は、どぎまぎして、「いや、いけないってわけじゃないんだよ。そうか、郁ちゃんのボーイフレンドか。そりゃ郁ちゃんがそうしようと思ったら、それでいいんだけど、たださ、帳面づらが合わないなるだろ」

「いけないかったら、あたしが返すわよ」

「いや、返さなくってもいいんだよ。ただ、帳面づらが合わなくなるだろ。だからさ、そうだな、こうしよう。郁ちゃんが伝票に書かなかったらいいんだよ。で、郁ちゃんが僕のところへ……………なんというの、あの人の名？」

「矢沢さんよ」

「郁ちゃんが僕に、矢沢さんのだからコーヒー一杯とかケーキ一つとか、口で言ってくれするようにしたらいいんだ。そうしたら伝票に記入されてないんだから、収支勘定には出てこないってわけさ」

郁子は、ふくれっ面で私を睨んでいます。

「それがいい。郁ちゃんの特別注文ということにしよう。ね、これからそうしようよ」

私は郁子の気嫌をとるようにくどくどと弁解して、入金不明の解決法をはかりました。

その後、郁子は奥の調理場へ入ってきて、「矢沢さんの、コーヒー一つ」と私に言うようになったところを見ると、彼女も私の提案を納得してくれようです。

その矢沢君用のコーヒーが店に出ている夜の八時ごろでしたか、郁子が奥へ入ってきて「あたし、きょう早引けするわ」と言いながら、サッサと服の着替えをはじめました。もう一時間ほどのことですが、ウェイトレス不在は困ります。だが、その頃の私はもう「それは困る、いけない」と言うほどの強みは持っていない。

「何か用事でも出来たの？」

とききますと、彼女はジャンパースカートを脱いで自分のスカートにはきかえながら、「ボーリング。矢沢さんと行くの」

それでも淋しそうにしている私に、気の毒

だとも思ったのでしょうか、「お客もいないし、たまのことだからいいでしょ」

と微笑みかけてくれました。

「よし、いってらっしゃい」

気嫌よく彼女を送り出してやるより手がな

いと私は、あきらめました。

郁子は、赤いトックリセーターに黒のミニスカート、その上に白いカジジュアルウェアをはおって、靴はチャックつきの白いブーツです。膝まである長いブーツで、私は土間においてくる郁子の前にブーツを揃え、彼女が腰をおろすとその足もとにつくばって、突きだしている足にブーツのチャックをはずしてはめこみます。彼女の足の下から私の左手を向こうがわに回し、右手と左手でブーツの先端をしっかりと持って「ハイ」と構えますと、彼女は足に力をいれて踵をブーツの内底へズボツとはめこみます。私は左手で彼女のブーツをかかえ、右手でチャックをスルスルと引上げて「ハイ、よろしい」と立上るのです。最初、ブーツにぶつかったときは「もっとしっかり持ってなきゃダメよ、足が入らないじゃないの」と彼女におこられたものですが、最近私の手際も訓練済みです。彼女は私にブーツを履かせてから、いそいそとして店へ出てゆきました。

「お待ちどおさま」

という彼女の声と、何やら聞きとれません

でしたが、矢沢君の低い声がいきりまじって、二人は店を出てゆきました。

ドアの閉まったあと、私は客のいない店へ出て二人の行方を、そっと見送りました。

二人でボーリングを楽しんで、それから何処へ行くことやら。たぶん今夜も、郁子は、「店に泊まった」ことになるでしょう。

その夜の私は、ひとり二階の部屋で、ホテルのベッドで抱きあっている二人の数々の姿を頭に画きながら、ネグリジェの御神体を礼拝したのでした。

9

その年も越して、花の四月を迎えました。

三月生まれの郁子は二十二才の春です。メーキャップもだいぶ巧くなりましたし、服装も私のアドバイスで、色の配合、上下のバランスなど一応、ととのってきたようです。

「大きい商店などで、よく従業員慰安会ってのやるだろ。従業員全部が泊りがけで熱海へ行ったり、箱根へ行ったりするじゃないか。うちも一つ、従業員慰安会をやるうと思うんだけど、どうだろう？」

私は気嫌をとるように提案しました。

「あらア、嬉しいわ。何処へ行くの？」

「うん、何処でもいいんだがね。郁ちゃんの好きなところでいいんだ」

「あたしの好きなところっても、あたし、知らないもん……。何処がいいかしら……」

「塩原あたりはどうだろう？ 一泊旅行に、ちやうど頃合いなんだ」

「塩原って、どこ？」

「上野から汽車に乗って、そうだな、三時間ぐらいかかるかな。温泉なんだ。川のほとりにずっと旅館が並んで、大たい紅葉がいとこなんだが、春もわるくないと思うんだ」

さて、その日取りが、今度の店の休日にひっかけて、その前日と二日がかりの予定ときいて、郁子は急に躊躇ししました。

「というと、十八日ね」

「うん、十七、十八と二日間さ」

「あたし、やめとくわ。残念だけど……」

私はあわてて、何故やめるのか、ききただしました。

「その日、矢沢さんと約束してるの」

「矢沢さん？ デートかい？」

「うん」

「そうか、それは困ったな」

私は、この機をはずしたくない一心に

「それだったら、矢沢君も一緒に行ったらど

うだろ。三人で行くのさ。慰安会っても、君と僕とだからアベックになっちゃうだろ。それより三人だったら、愉快に遊べるじゃないか。三人全部の費用は僕が負担するよ」

と、あわてて新提案を出しました。彼女は目をみはって私を見返しました。

「矢沢君は友だちといっても、本当は君のいい人なんだろ。それだったら、いいじゃないか、二人で旅行できて……。僕は、お供さ。三人で温泉にゆっくりつかって、のんびり遊ぶのも面白いぜ」

彼女は次第に興味が乗ってきた模様です。

「費用はみんな出してくれるの？」

「もちろんさ。つまり僕たちの慰安会に、矢沢君はご招待ってわけだよ」

「ふーん、でも矢沢さん、遠慮しやしないかしら」

「だから君が大いにサービスしてやったらいいんだよ。僕には遠慮はいらんからね」

「一ぺん矢沢さんにきいてみるわ」

それから二、三日して、郁子は、

「矢沢さんも行くって言ってたわ。スポンサーつきなら有難いって言ってたわよ」

と私に、ささやいてくれました。

「そうか、それは此方も有難い。じゃアきめ

たぜ。切符も買っとくし、旅館の予約もしておくからね」

「うん、いいわ」

私は有頂天になって、三人分の用意をととのえました。

その日――。汽車の中から三人は、はしゃぎまわりました。矢沢と郁子を並べて腰かけさせ、私はその前に席をとって、私も矢沢とは店で顔を合わせてはいるものの、話し合うのは初めてですから、私の方から努めて話しかけるようにして気楽な雰囲気をつくりだしました。郁子はもちろん大喜びで、窓の外を見たり、チョコレートを食べたり、矢沢の耳もとで何やら、ささやいては二人でくすくすと笑い合ったり、主催者の私は、もっぱら世話役で大忙しです。

「きょうは旅行で特別だから、これから、あした帰るまで、アベコベごっこ」でいこうよ。郁ちゃんと矢沢君がご主人で、僕が家来さ。今度は、ご主人が二人だから面白いぜ。僕がキリキリ舞いというところだ」

「さんせいッ」

郁子が真面目な顔をして手をあげて、それから矢沢に「アベコベごっこ」を説明していただきます。矢沢はニコニコ笑ってきいていました

が、私もテレくさを隠すため、郁子の合間々々に説明をつけ足したりして、三人とも大笑いになりました。

塩原についてから、タクシーで目的の旅館につきました。簡単な旅行ですから、荷物といっても郁子のレジャーバッグ程度ですが、私が全部持って二人のあとに従い、部屋に入りました。

ベランダのある八畳の和室で、四畳半の次の間付きの、いい部屋でした。

郁子は、すぐベランダへ出て、下を流れる溪流を見おろしていましたが、私は二人の坐る座布団を揃えて並べ、

「さあさあ、二人とも坐った、坐った」

と矢沢と郁子を座敷に坐らせてから、四畳半の次の間に引下り、かしこまって両手を前について、

「さて、本日はお疲れさまでございました。この部屋でお二人さまはゆっくりおくつろぎ遊ばし、おからだを休めて下さいませよう、お願い申し上げます」

と、おどけた態度を見せながら、大真面目な顔をして私は頭を畳にすりつけました。

そのとき、うしろで「あらッ」という声がしましたので、私はびっくりしてふり向きま

すと、旅館の女中がお茶を持って入口のところで立ちすくんでいます。

しまった……と思いました。なんと、

ごまかさなければいけません。私は、さりげない様子でお茶を受けとり、座敷のテーブルに並べてから、女中に「このお二人は高貴の方で、ご両親は元は宮様なんだ。今は臣籍に降下されているけど、私はその家令で、今日は夫妻のおしのびのご旅行におつきして来たのだ」といったふうに説明しました。

女中は「まあ、そうでございますか」と、かしこまって出てゆきましたが、出ていったあとは三人で大笑いになりました。

「矢沢さんが宮様で、あたしが妃殿下なの。いやだわ、廊下を跳ね廻ったり出来なくなるじゃないの」

「しかたがないよ。あんなところを見られたんで、なんとか誤魔化さなきゃならなかったんだもの。それでも二人とも、元宮様って言うたって結構、通るよ。矢沢君だって、それらしい顔してるしさ。郁ちゃんだって真面目な顔していたら立派に妃殿下だよ。では宮様、妃殿下さま。どうぞお茶を召上って下さい」
こうなると私も、むしろ、やりやすくなりました。

「ごめん下さいまし」

ドアの外で声がしますので、私は立って部屋の鍵をあけますと、旅館の番頭でした。

「あの、三階の方にお部屋をおとりしましたので、ごめんでもうではございますがお移り下さいませよう。この部屋より少しはましと存じますので……」

私たちは番頭の先導に従いました。

「どうぞ、こちらへ」

と案内されたのは、座敷が十畳で次の間が六畳、室内バス、トイレつきの前よりずっと上等な部屋でした。

一礼して番頭が引下ったあと、三人はまた大笑いでした。

「元宮様って言ったのが効いたんだぜ。もともと料金が高くなったら困るけど、予約で交通公社へ前払いしてあるんだから、おそらく同じ料金だと思うんだ。だったら上等の部屋へ入るだけトクだよ」

郁子も妃殿下になったような気持で、座布団の上に、きちんと坐っています。

「部屋の中は三人だけで、鍵がかかるんだ。妃殿下さまだって、かしこまっていなくてもいいんだよ。サア、妃殿下さま、お召かえ、おめしかえ」

私はおどけて郁子を立たせ、私が誕生祝いに買ってやったニットのワンピースを脱がせました。矢沢も笑いながら旅館の丹前に着換えます。私は二人の脱いだ背広とワンピースをハンガーに一つ一つかけて、洋服ダンスの中に納めました。

鍵がかけであるとなると、郁子も遠慮がなくなり、丹前姿で仰向けに寝転んで、両手と両足を大の字に拡げて「あーあ」と背伸びをしました。

「ハイ、妃殿下さまのご休息とごさい」

私は座布団を二つに折って郁子の頭に当てがい、裾の乱れを直してやりました。

私は気をつかって時折は二人だけの場をつくってやらなければなりません。次は宮様と妃殿下さまが抱き合って御キッスをする場でしょうから、私は「ちょっと湯につかってくるから」と言い残して部屋を出ました。

一階の大浴場で足をのばし、ロビーで新聞などに目を通し、約三十分して部屋へ帰りますと、矢沢はベランダから外を眺め、郁子は鏡台前に坐って口紅をなおしていました。

「大浴場はなかなかいいぜ。郁ちゃんは、どうする？ 大浴場にするか、それとも、この部屋にはバスがついてるんだが……」

「いやよ、大浴場なんて……。バスの方がいいわ」

郁子は温泉のムードなど、たいして感興はないようです。

「はい、はい、承知しました。じゃ、お湯を出してくるからね」

私はバスルームに入って、浴槽のコックをひねりました。湯は勢いよく流れ出て、大理石張りの浴槽を満たしてゆきます。

「矢沢君、なんだったら君も一緒に入ったらどう？ 僕はいま大浴場の方で入ってきたんで、君たちがお湯に入っている間、ちょっと外でも散歩してくるから……」

郁子にたしかめてみないので、はっきりわかりませんが、二人で一緒に湯に入るようでしたら、かねがねからの二人のホテル行きは間違いありません。

「それがいいわ。矢沢さん、お部屋のお風呂に入りましょうよ」

郁子はあまり私への配慮などありません。思ったことを口に出しますから、ほぼ様子はわかります。何やら言いしぶっている矢沢と郁子を部屋に残して、私は外へ散歩に出かけました。

その夜の食卓は、なかなかの豪華版で、私

たちはビールを三本、あけました。郁子もコップに三杯ぐらいは飲んだでしょう。

「あああ、酔っちゃったわ。あんた、膝貸して……」

矢沢の方にじり寄って、矢沢の膝に頭をのせて郁子は寝転がります。

「おい、おい、あべごべじゃないか。枕、持ってこようか」

「いいの、余計なことしないでよ。これでいいの。ねえ矢沢さん、いいでしょう」

「ああ、ハッハハハ、いいよ、いいよ」

矢沢も気嫌よくビールをあけています。「まったくもって、すみませんな。妃殿下さまはジャジャ馬でいらっしゃるので」

私はピシャ、ピシャと額を叩きながら、矢沢のコップにビールをついでやるのでした。

食事すんだあと、

「お蒲団はどういうふうにお敷きいたしましたようか」

女中が、ききにきました。

「そうですね、若旦那様ご夫妻は、この部屋へ……。ご夫妻だから蒲団は一つでいいんですよ。この部屋へ敷いてもらって、私は次の間で寝るから、向こうへ敷いてください」

「はい、かしこまりました」

十帖の間の真ん中に、部厚い絹蒲団が敷かれました。枕が二つ並んでいます。

私のは次の間の六帖に、これは蒲団がやや劣るようですが、ポツンと敷かれました。

一つ蒲団に二つ並ぶ枕を見たときは、矢沢も郁子も、さすがにテレくさそうでした。しかし私は一向おかまいなしに絹蒲団の前に水差しを置き、灰皿をならべて「ではお休み」と次の間に引下り、間の襖を閉めて電灯を消しました。

今夜は私は、一睡もできないかもしれせん。もちろん目がさえて、眠るところではありません。

座敷の方も電灯が消えて、しばらく何の物音もしませんでした。その間、私は蒲団の中でじっと目を見はって、時間の長さに堪えていたのです。

やがて、ごくかすかに、物音がしました。声を殺してささやく声が、きこえだしました。矢沢の声は殆どわかりませんが、郁子の声がかすかに伝わってくるのです。

私は自分の蒲団の上に、むっくりと起きあがりました。そっと横の畳の方において、私はその忍び声に向かって両手をつき、低く低く平伏いたしました。

「白御ブラウス赤御スカート御セミロング媛の命さま。姫の妙なる御声をもれおきかせたまわり、まことに恐れ多くもかしこき極みでございます。私めはいまここに、もったいなさに身もふるえる思いで、尊き姫宮さまのお姿を拝ませていただいております」

思いつく、あらゆる讃辞ののりとを口の中で次々に唱えて、私は襖へだてた上座を伏し拝むのです。

はじめのサンダルシューズ、次にネグリジエ、次に一人の郁子、それから今夜は二人でいる郁子。御神体の重みは変わることに加わって、私はいま最高の恍惚感に酔いしれたのでした。

10

慰安旅行は無事終えましたが、それから後は、しばしば休日を利用した慰安旅行が行なわれ、例外なく矢沢も加わった三人の旅行となりました。そのたびに味をしめた例の「元宮様」で旅館の人を驚かせましたものの、あとで舌を出して笑い興ずる程度で、他意はありませんでした。回を重ねるうち私は一ぺん、大失敗を演じたのです。私は小銭を入れている財布と、まとまった金を入れている財

布と別々にして持ってゆくのですが、あるとき、うっかり大財布の方に金を入れ忘れて旅館に泊ってしまったのです。

私は旅館の主人に正直に金を忘れたことを訴え、二人をここに残して東京へ金をとりに帰るからと言いますと、旅館の主人が

「いえ、もう結構でございます。お代金は後ほどお送り願いましたらよろしうございますから、どうぞご心配なくおたち下さい」

と「高貴の方」扱いで私たちを送り出してくれたのです。あとで郁子が

「宿帳も、でたらめな名前を書いているんですよ。このまま放っておいても、わかりっこなしよ。宿銭だけ儲けた勘定じゃないの」と舌を出しながら言うのです。

「そりゃまあそうだけど、先方にすまないかな」

私は言葉をにぎしみますと、矢沢までが

「たまにはマスター、出金なしの旅行もいいじゃありませんか。いつもマスターに出してもらってるんだから、ここは一つ経費節約といけますよ」

などと、おだてるのです。

「うん、しかしなァ……とにかく、あとから小為替にでもして送っとこう」

と言った私なのですが、つい面倒で、そのまま数日たってしまいました。その金も三人の旅館代となると、なかなか軽くない負担なのです。そのうちに次の旅行の話を郁子から持ちだされたりしますと、私の懐も楽ではありません。

最初的时候は、私の不注意から起こった料金不払いだったのですが、春も過ぎて夏から秋への頃になりますと、なんと、初めから意識した「金を忘れた」が出てきたのです。

「元宮様」が効くのですか、どここの旅館でもみな「後ほどお送り下さいまし」ですんできました。

私は心中、どきどきして旅行の楽しみどころではないのですが、郁子は案外平気で「いいじゃないの、この手」

と私を、けしかけるようにするのです。私も軽くない負担にやわわっているところですから、つつい、

「へ、へ、へ、それもいいな」

と郁子に追従するようになりました。矢沢も表面は、おとなしい顔をしているのですが内面は相当、図太い神経の持主のようです。

私は「かじか沢」の山賊夫婦の下働きをする下男のように、彼女ら二人の、お供をつづ

けていたのですが「悪事の栄えたためしはない」ということでしよう、三人で泊ったある旅館の部屋へ警官がふみこんできました。「ちょっと調べることがあるから、署まで来て下さい」

私たちは今さらのようにガタガタ震えながら警察に連行されました。

私たちの人相と、その手口が旅館組合を通じて各地の旅館に配布されていたのです。

その翌日の朝刊には

宮様と称して旅館サギ

男女三人組、熱海で御用

と大きく新聞記事に出てしまいました。

私は「今まで料金を払わなかったところは全部弁償するから」と八方、陳情しましたし私の東京の店も調査されたく、私の弁償支払いを条件に、起訴をまぬがれて釈放されましたが、私が自分で店を営んでいたからいろいろなものの、私がサラリーマンでしたら会社はたちまちクビになり、それこそ一生の破滅となったところでしょう。それにしても新聞に出るとは、とんだ恥さらしです。新聞記事には「不審なのはこの家令役の男で、それまでに自分でも相当の金額を費消している点、納得のいかなない節がある」などと記され

ていましたが、私は、ただニガ笑いする思いだけでした。

その秋から郁子は、住込みという名目で私の店の二階に寝泊りするようになりました。六帖の私の部屋を、自分のアパートのようなつもりで、男の写真を壁に張りまわしたり、私に命じて赤いカーテンを買ってこさせたりして飾りたてていましたが、店のウェイトレスはつづけてくれています。それは私にとつて有難いのですが、その後しばしば矢沢が郁子の部屋に泊ってゆくようになりました。

「蒲団はいらないんだから、別に迷惑はかけないわよ。ねえ、いいでしょ」

郁子にこう言われたら、私にことわりようはありません。

「ああ、いいともさ」

矢沢の泊る夜は、私の用は、さらにふえます。コマ鼠のように立働いて、くたくたになった私が次の間の三帖の蒲団の中に入るところは二人はすでに床の中に入って寝ています。

しかし、私には、まだまだしなければならぬ用事があるのです。座敷で寝ている歓喜天の御神体を、次の間に匍いつくばって、長い間「礼拝」しなければならぬのです。

(つづく)

フ オ ト 通 信 山 本 五 郎

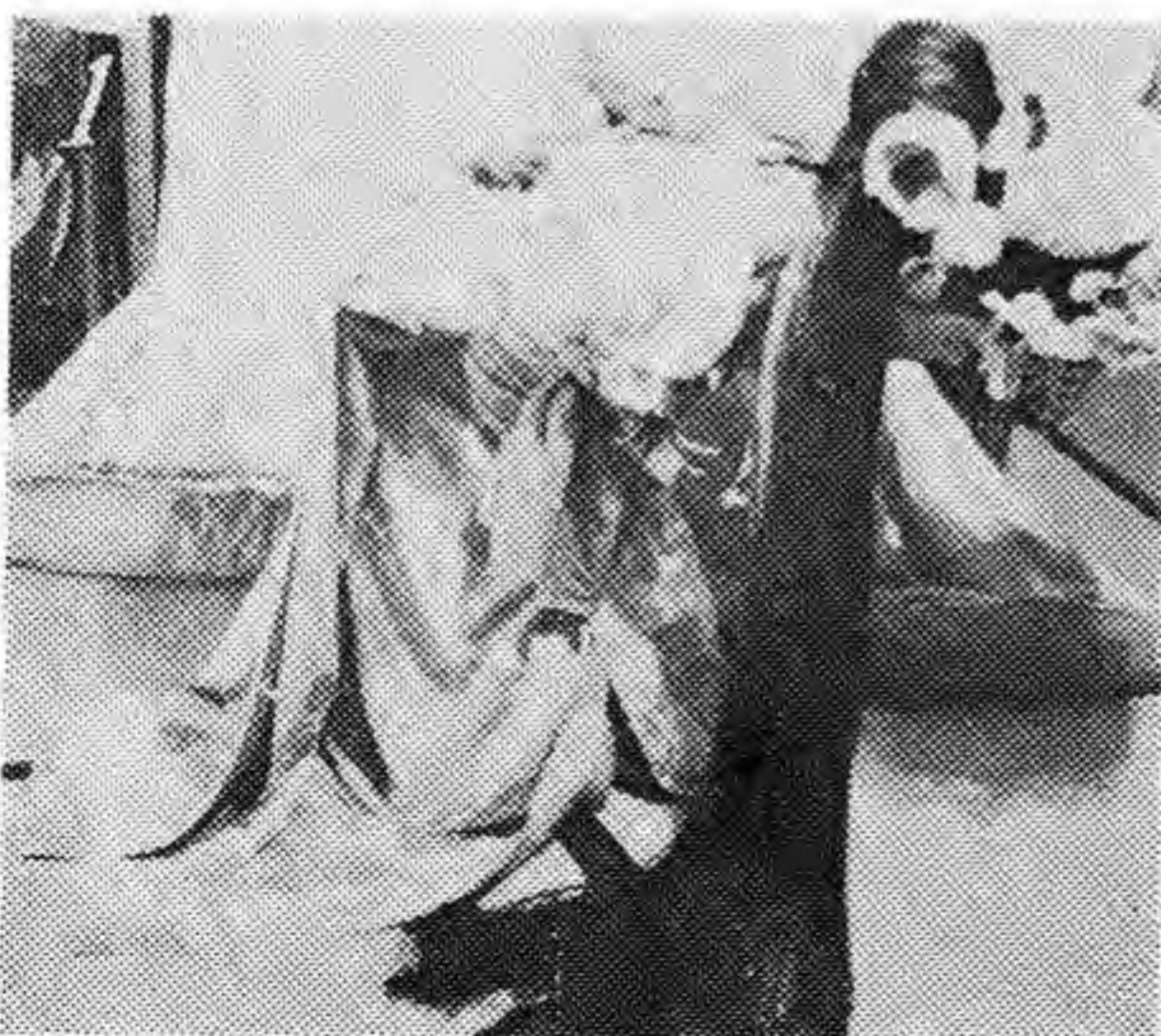
『責め』と『日本美』



待を以て頁を繰りましたが
思わず五、六十も血圧がハ
ネ上った程のショックを受
けました。(私は最近医師
より血圧の高さへの注意を
されています。あまり気に
する程のこともないので
が——)

『妖しい日本美の探究』と
して私の愚作が掲載されて
います。そして何より嬉しい
のは密着判が素晴らしい作
品とお賞めをいただいたこ
とです。掲載された三点は私の好きな作品で
すが、密着判は、はてどんなポーズだったか
なあと思っています。

ともあれ嬉しいやら羞かしいやら、妻には
内緒でしたので、見せてよいものやら悪いも
のやら、ある種の困惑感に浸っております。
おとなしくて古風な妻は、きっと可愛い抗



議をすることでしょう。

ここまで育てるのに随分苦勞しましたが、
まだまだ恥かしがり屋で、この素質は大事に
したいと思っています。

私は打ったり叩いたり苦痛を与えるのは好
みません。(或る程度の苦痛は許容してくれ
ますが)あくまで日本美の追究は、先ず美し
さの表現にあると思います。それは見せかけ
だと攻撃されそうですが、まだまだ私達はカ
ケダシですので大目に見て下さい。

ビーナスはたしかに美しいけれど、美しい
日本女性はやはり世界に冠たる民族衣裳であ

田舎に住んでおりますと本誌の入手も中々
困難です。私は所用にて時々上落いたします
が、その度に古書店にて本誌のバックナンバ
ーをあさるのを楽しみにしております。
過日、京都へ参りました際、本誌昭和二十
九年十一月特大号と今年の五月号を入手しま
した。所用もそこそこに、急ぎ帰宅、ある期

る和服であると思います。

故伊藤晴雨画伯、

牧高志先生を、目標に私も八日本美の探究Vの為に頑張りたいと思います。私もそうですが、大体こうした日本趣味の者には内攻的な性質が強くて、投稿も余り多くはないでしょうが、読者の中には私のように日本美に憧れる人も多いと思います。

写真(1) Ⅱ私の好きな作品です。ハレーションが惜しいです。総緋鹿の子振袖の長襦袢です。髪形は姫君用の吹輪らしく見せ、緋の長いしごきを大きく前で結びました。

所蔵の衣裳はいずれも絹100%の重目の正絹です。しりとした量感があります。衣裳は何とか揃えますが日本髪のカツラは入手に困っています。角かくし、かざり、かんざしつき

とバランスが取れるのですが……。裾フキの厚さは三寸ブキ(十五糎)です。最近の花嫁用打掛で一吋五分から一吋です。

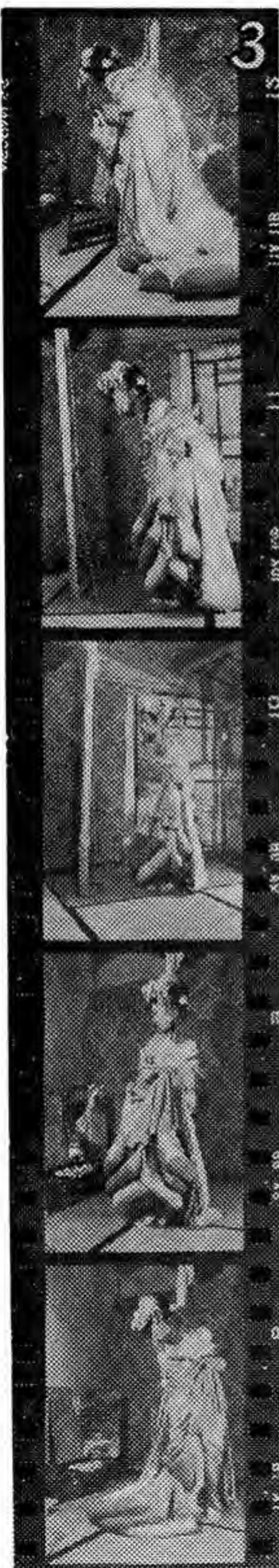
写真(3) Ⅱ歌舞伎に出てくるオイランの裾フキの厚さに豪華さを感じます。大体私の好みは裾フキの厚さにあります。打掛を三枚重ねて着せました。振袖も三枚重ねますと随分重いものです。髪形も伊達兵庫であれば、もっと

私は衣桁を小道具に素晴らしい責写真を物したいものだとは張切っております。いろいろと利用法がありそうです。

写真(2) Ⅱ撮影場所が変わる事によって意味が大分変わってくると思います。残念ながら私の寝室ばかりですので、変化に乏しい作品ですが、この作品は私の好きなものの一つです。私は衣桁になまめいたものを感じます。着物は女の命とかいって色とりどりの豪華な衣裳を衣桁に掛けます。

幹旋していただければ買いたいと思います。女性の最高の美しさは花嫁姿です。

写真(2) Ⅱ撮影場所が変わる事によって意味





懸賞創作入選作品

愛の貞操帯

工月玲子

私はうっとりとしておりました。夫の優しさに、私の心も肌も快く酔っていたのですが突然に堅く冷たい感じを腰の辺りに受けたかと思えますと、ぐっと締め上げられ、パチッと金属性の音がいたしました。

私は快さを妨げられ、とっさにその異物に手を伸ばしていました。それは堅くて冷たい変なものです。私は急いで半身を起こして見て驚きました。ベッドランプの薄明りの中でしたが、それはまぎれもなく細い禪のような銀色に光る金属でございました。私が反射的に除けようとしたしましても、すでにがっちり肌と絡みつき、びくともいたしません。「何をなさったの。へんなことしないで……」

私は、なじるより、頼みました。夫は、「頼む。僕のずっと前からの夢だったのだから……。これを嵌めたまままでいてくれ」と、反対に頼む口調なのでございます。

「これは、いったい何なの」

「貞操帯というものだ」

「まあ！……何故こんなものを私が嵌めなければいけないの」

私は「貞操」という言葉にカッとする想いでした。

「玲子が不貞をする恐れがあるからというのではない。ただ、愛する玲子にこれを嵌めてもらいたいのだ。私の、たつての願いだ」と夫は、駄々子のように頼むのでした。

現在、夫は三十八才、私は三十六才でございます。九年前に結婚し、既に小学二年生の女兒をもうけております。夫はおとなしい性格で、真面目に会社勤めをして今は係長でございます。しかし三、四年前から、私には隠すようにして何かの本を読んでいるのが時折眼につきましたが、男の人にありがちなことだと、別に咎めもいたしませんでした。

私は夫の言葉を聞き、改めて、その貞操帯なるものを、よくよく見てみました。その禪状のものは、厚さ二ミリ程で幅二センチ位のステンレスで作られており、前部には、回りにぎざぎざのある幅一センチ、長さ三センチほどの穴があり、後部には親指が、かるく入

るくらいの穴があいており、腰を巻く輪とT字型になる輪とが繋がる所に、鍵穴があいております。

「私、こんなものは、いやですわ」

「たのむ。お願いだ」

夫は心から、この奇妙なことを望んでいるようでございます。

「こんなものを嵌めていて、子供に知られたらどうしますの」

と私が申しますと、夫は、

「夫と妻の愛情は、子供を愛するのとは別の意味で大切だ。夫婦の愛情の現わし方には、いろいろの方法があるが、妻に貞操帯を嵌めてもらうというのも深い愛情があるからこそだ。石原慎太郎が書いた『スパルタ教育』という本にも、『夫婦間の愛憎の問題を子どもにかくすな』『ヌード画にかくすな』と書いてある。それにしても、子どもに知れないようにすることはできる。とにかく嵌めておいてくれ。お願いだ」

夫は、そんなことをいいながら、拝むようにしてたのむのでございます。ずいぶん自分勝手な理屈だと思いましたが、夫がそれほどまで願っているなら私の心も動きました。

「いいわ」

と私が申しますと、夫は本当に嬉しそうに顔に喜びを溢らせたのでございます。私はその貞操帯の上にパンティをはきましたが、貞操帯の銀色の厚味は、くっきりとパンティからも窺えます。

夫は間もなく、かるい寝息をたてはじめましたが、私は寝つくことができません。寝返りをうちますと金属が肌のどこかに食い込むのでございましょう、痛みを伴って、いっそう神経を刺戟いたします。「いいわ」といったことを後悔しながら、まんじりもしないうちに、目覚し時計が六時半を知らせたのでございます。起き上がろうといたしますと金属が肌に喰い込み、それは、痛うございました。パンティの上から、くっきりとその姿を見せるばかりではなく、シミーズをつけてもまだ窺えます。スカートを着けると、さすがに姿は隠れましたが、かるく叩くと堅い手応えがございました。私は、なんだか悲しくなりました。

その時、夫の目が開いたので、私は、「ねえ、貴方、きのうはいいといったけど、苦しいわ。これのおかげで、少しも寝られなかったのよ。それに動くとき痛いし、やっぱり、はずしてちょうだい」

と甘えたように申したのでございます。夫は待っていたというように、

「金属が当たるところには軟膏でも塗ればいい。それに慣れたら寝られるようになるよ」

といって起き上がり、自分でダンスから軟膏を出してきて、

「塗ってあげよう」

と、いそいそと振舞うのでした。私は、

「それは、私がいたしますわ」

といって自分で塗り込んだのでございますが、夫は、それをいかにも自分がすまないことをしているといった恐縮した素振りで見えておりました。そして、「後ろのほうが少しずれているようだから合わせるよ」といって、鍵をとり出して、後ろの鍵穴に差し込み、ぎりぎりと廻していました。

「今日の朝の支度は僕が手伝ってやるよ。玲子は動きにくいだろうから」

と私の気嫌をとるように、手早く服を着ながらいわれますと、夫がいじらしくなりました。

とにかく、朝のトイレにまいりましたが、やはり、なんだかしにくうございました。後の処置もやりにくくて、時間ばかりかかり、いつものさっぱりした気持が味わえません。

しかし、あれほど夫の熱望することです。こんな不便も我慢しなければならぬまいと覚悟したのでございます。

夫はよく手伝ってくれました。夫と子供を送り出した後、私は嵌められている貞操帯はどんなものか、くわしく調べてみたくなりました。

パンティをずらすと、ステンレスの貞操帯が、金属特有の光をきらりと輝かせました。

前部の鍵穴は五ミリほどの長さで、差し込み鍵になっております。肌を痛ませないためでしょうか、どの部分も、かどはまるくなっております。無駄とは思いますが、外そうとしてみましたが、精巧で頑丈に作ってあるのでございましょう、びくともいたしません。

その銀色に光る貞操帯を恨めしく眺めたりいじったりいたしておりましたが、いつまでそうしていても仕方ございません。衣服を整えると朝の掃除にとりかかりました。ですが体を屈げるたびに、その存在を思い知らされ一息いれるために腰を降ろしますと金属にせかれて休息になりません。小さな座布団を二枚持ってきて下に敷くと、それがショックを柔らげるのでございましょう、いくぶん痛みが薄らいでまいりましたので、いつものよう

に、テレビを見ながら一人で昼食をとりました。でも、お腹がふくれたからでございましょう、貞操帯の締め具合が強く感じられるのでした。

その時、玄関のチャイムが鳴りましたので出てみますと電気屋のセールスマンでございました。その若い男と応待しながら、この人は私が、こんなものを嵌めているとは夢にも思っていないだろうなと思いながら、腰のあたりを、そっと触ってみました。金属独特の堅さが手に跳ね返ってまいりました。

一人きりでセールスマンなどの男を応待するときは、いつも心のどこかに危険を感じていました。今はその危惧はございません。もし、この男がそんな態度をとったとしたらこの貞操帯を発見して、どうするだろう。この堅牢な貞操帯では、いかんともしがたいでしょう。そう思うと思わずクスツと笑いが洩れました。セールスの若い男は、私のその笑いを何と思ったのか、

「いいえ、そんなことはございません。この製品について、もし欠陥がございましたら、すぐお取り替え致します」と

と答えました。

セールスマンも帰って、テレビを見ており

ましたが、手はいつのまにか貞操帯を弄っておりました。どうも気になって、いつものように画面に没頭できません。

排便の必要を感じてあわてました。オトイレに行ったものの食事をしたため金属が動いたのでしょうか、どうも合っていないようなのです。片手で当たりをつけながら他の手で腰に巻きついていいる金属を上げたり下げたりして大騒ぎです。

やっこのことで、どうにか済んだときは、額に汗が、にじんでおりました。後の処理も難かしく、念を入れたのできれいになったのでしょうか、なんだか気持がサッパリせず、もたもたしているうちに、よいことに気がつきました。早速風呂場に行き、電気温水器からお湯を出し、洗い流してやっと落着けたのでございます。

夕方、夫が帰ってまいりましたが、夫は私の今日の苦勞は知らぬげです。子供のいない時に私は、そっと夫に今日の不快さを訴え、すぐ外してくれるように頼みました。でも夫は真剣に頼むのです。

「はずすのは待ってくれ。そのうちに慣れるよ。お願いだから我慢してくれ」

この執念に、私は負けてしまいました。

夜の床に入った時、夫は貞操帯の鍵穴に鍵を差し込んでまわしてくれました。ガチャと金属音がしたかと思うと腰がすっと楽になりました。夫は大切そうに貞操帯を布団の横に置くと、いつものように優しく愛してくれたのですが、しかし、夢心地の私は、すぐに又冷たく堅い金属帯に、襲われて我に返りました。

「いやよ。貴方、今夜はもう止めて。またねられないわ」

と私は頼みましたが、夫は、

「お願いだ」

というなりパチンと嵌めてしまいました。一度除けられて楽を味わった肌は、一層その辛さを嫌っているようです。私はその夜も、まんじりともできませんでした。

しかし、その次の夜は寝不足のためでございましょうか、或は、少しでも慣れたためでございましょうか、ぐっすりとねむれたのでございます。

困ったのは、風呂に入る時でした。子供も一緒に入る習慣ですので、その時は夫も承知して外してくれたのですが、子供は、「ママ。腰のあたりが赤く擦れているね。どうしたの」

と尋ねるのです。

「なんでもないのよ」

と答えたものの、私は内心ぎくりとしたのでございます。でも、二年生の子供には、私がそうだったわけを測り知るべくもなかったことではございません。

人間の慣れとは不思議なもので、一週間もすると、すべてのことがさして苦勞ではなくなりました。テレビを見ている間も、あまり気にならずに済むようになったのです。というものの、やはり必要に応じて外してもらう時は、うれしゅうございました。

そのころ、私は、よい計画を思い付きまして。そこでさり気なく夫に、この貞操帯をどこで手に入れたか訊きました。夫はいいたがりませんでしたが、私が、いわないのなら、貞操帯を嵌めるのは止めにするというと仕方なくいつてくれました。

夫の友人に坂田という齒科技工所を経営している人がいますが、その坂田さんが、金属細工に興味をもち、飾りものや、本立てなどのこったものを作っていることは私も知っておりましたが、その人に頼んで作ってもらったと聞いて、彼なら、こんなものでも作れるだろうと私も頷けるのでございました。私み

その坂田さんとは親しくしております。以前から、よく行き来をし、家族ぐるみのお付合をしている人です。

次の日、私はその坂田さんの家を訪れ、計画達成のため、恥ずかしさを忍んで、お話ししました。坂田さんは愉快そうに

「工月さんは、ほんとうに、あなたに嵌めたのですか。それは面白い。どんな具合か、見せて頂きたいものですな」

といいました。私は、もちろん見せはしま
 せんでしたが、それが精巧で、堅牢にできて
 いることをほめ、どうしてあんなに立派にで
 きたのか尋ねました。坂田さんは、得意そう
 に旋盤などの機械を見せてくれました。いろ
 んな機械が、十畳ばかりの部屋の中に、ぎっ
 しりとつまっておりました。鉄材も、はり金
 から鉄板にいたるまで、たくさん用意されて
 います。彼が自慢そうに機械の説明をしてく
 れるのを聞きながら、ここがよいチャンスだ
 と思い、私は恥ずかしさをおして、

「実は、お願いがございます。……あのう、私だけというのは不公平だと思いますので、夫のも作って頂けませんか」

と申しますと、坂田さんは、案外簡単に、「そう、それはいい。作ってあげますよ。こ

れは面白い、ご夫婦になりますな」

と、さも愉快そうでした。

一週間後には出来上ることでしたが、私には大変待ち遠しゅうございました。でもその約束の日に手渡されたものに私は大変満足いたしました。それは、私のと同様、銀光りのするステンレスで作られており、後ろ側は大体同じようで、私の味わった苦勞を、夫がこれから後するのかと思いますと、なんだか心がときめきました。

私のと違うところは、前部は幅が広くなりごはんしゃもじのような形にふくらんでおり穴はあけられてありますがギザギザはございません。

しかし、夫もきつと嫌がるだろうと察せられますので、私は一計を講じました。坂田さん宅からの帰途、一級酒を買い、ふぐ肉を奮発して、その夜の食膳を賑やかにいたしました。夫は思わぬ御馳走に酒も進みました。私も、どんどん勧めました。酔い潰し作戦だったのでございます。この作戦のおかげで夫がいびきをかき始めた頃、夫の下着を取り除けて腰周りなど、ひもで寸法を計り、その長さに貞操帯を調節しました。それから、すばやくピチッと、嵌めこんでやったのでございま

す。

夫は、そのショックに、さすが目を覚ました。そして異常を知ったのでしよう。

「何をしたんだ」

と叱るようになりました。

「貴方が私にされたことをいたしましたわ」

「きつい、きつい。外してくれ」

「貴方、勝手ですわ。私にはきつい思いをさせて、ご自分だけは外せだなんて……いけませんわ」

と私はいいはったのでございます。そのうち夫は諦めたのか、酒くさい息をはき、すねたようにして寝てしまいました。改めて点検した夫の貞操帯は肌に食い込んで、きつすぎるようなので、少し緩めてあげました。

それから私も眠ってしまったのですが、揺り動かされて目を覚めました。起こした夫が「小便に行きたい。外してくれ」といっていました。私は

「あら、私は外してもらわなかった筈ですわそのままです。いらっしゃい」

と申しますと、夫は、しぶしぶ便所にいったようでございます。

帰ってから、しにくいし、気持が悪いと、ぶつぶつとボヤいていましたが、私は、

「それは私のも同じですわ。嫌でしたら、私の貞操帯も除けてくださいな。そうしたら貴方のも除けてあげますわ」

と申しました。夫は恨めしそうにしていますが、それ以上除けてくれとは、いいませんでした。

夫を送り出した後、会社で腰掛ける時、さぞ痛いだろうと思うと、思わずくすりと笑わざるを得ませんでした。

その夜は、お互い同時に鍵を差し、ガチャガチャと外し合ったのですが、いつもより、私自身、昂ぶっているのが不思議なほど分かったのでございます。

そして、夫が私のを再び嵌めようとした時私も夫の貞操帯を手にとって、

「私だけじゃ、いやですわよ」

と申しますと夫は、うなずきました。奇妙なことに互いにパチッ、パチッと金具を掛け合うのも何か心のときめきを感じさせるものでございました。

それから、たしか三日後のことだったと思います。私の鍵を外してもらった後も、私は夫の鍵をわざと外してやりませんでした。

夫は、約束が違うといったしぐさで、「早く外してくれ。痛い痛い」

と苦しそうでした。私は、どうして痛がるのかよく分かっていますので、少し気の毒な気持ちでしたが、大変小気味のよい思いのほうが強かったのでございます。

「早く、早く」

という夫を尻目に、私は夫の頸を両足に挟んで締めつけるようにしてやりました。苦しむ夫をみて、いい気味だと思っていたのでございます。

私には、以前はこんなサジズム的な気持はなかったのですが、貞操帯を嵌められてからは、いつもそれに関心が向かざるを得ず、それから夫の隠し読みをしている本をちよいちよい見るようになったのでございます。その中の雑誌に、女を縛ったり、女にいじめられて喜ぶ男のようすなどが書いてあり私の知らなかった世界があるのを知ったのでございますが、私は好奇心と共に何かわかるような気持になっていたのでございます。

夫は、たまたまなくなったのか、金属板を叩きながら、

「外してくれ、早く」

と頼み始めたのです。でも、私は、とりあいませんでした。私もサジズムになってしまったのでございましょうか。

苦しむ夫のさまを見て、奇妙に私の心は晴れ晴れとしてまいりました。私も変わったものでございます。しかし、その後、私が大変苦しまなければならぬことが起ころうとはその時は思いもしなかったのでございます。

夫は尚も外してくれと頼みましたが、私は拒み続けました。そして、私も自分の貞操帯を自分で掛けてしまいました。嵌める時は鍵はいらないのでございます。その時の夫の情けなそうな顔付は面白うございました。

そんなことがあってから、夫の提案で、二人が同時に、鍵を廻すことに決まりましたが二人共、貞操帯を嵌めたままでの夫婦の戯れも、また面白いものでございまして、思わぬ楽しいひと時となるのを知ったのでございます。

ある夜、夫はしみじみと

「これからの夫婦は、みんな貞操帯を使い合うといいね。お互いの浮気もなくなるし、夜が一段と楽しくなるよ。また高校生以上の男女も嵌めることにして親が鍵を保管することにすれば不純交際もなくなり、性病も、ずっと少なくなるだろうよ。若い女の子の、どのミニスカートからもちらちら貞操帯が窺えるようになるの楽しいだろうね。僕たちの子供

にも大きくなったら貞操帯を作ってやるか」といいました。そして、すぐに

「外してくれ」

といいます。私は意地悪く、

「まだおあずけよ」

と、じらしてやります。

「痛い、頼む」

私は、夫がとても苦しそうにするまでねばって、鍵を入れてやりました。

こんなこともございました。互いの貞操帯の鍵穴に鍵を入れ、同時に廻す時、パチッ、パチッという、その音が私は好きでございましたが、その日は、待ちかねたように、私の外した貞操帯を夫が手に取り、においを嗅ぎ始めたのでございます。

「玲子のおいが染みているね」

夫のその余りにも楽しそうな様子を見ておりました私も、だんだん妙な気持になりました。思わず夫の貞操帯を手にとっていたのでございます。改めて見るこのしゃくしのようなもの。この中に……と思うと夫が気の毒にもなり、また急にその金属にジェラシーのようなものを感じました。私は、とっさの思いつきでその夫の貞操帯を嵌めてみました。腰まわりその他、全部が大きく、ばくばくで、

かなり隙間があいております。

「やはり、貴方のは、だいぶ大きいわ」

という声に夫は我に返ったのでしよう、ニコリ笑うと、私の貞操帯を自分に掛け始めたのでございます。でも、とても合うものではございません。

「貴方、無理ですわよ」

と私は笑いました。夫は、それでも離そうとはいたしません。よほど私の貞操帯に愛着があるのでございましょう。そんな夫を私は可愛らしく思い、抱き締めてやりたくになりました。夫は、何かを思いついたように

「それにしても、坂田のヤツ、いやに簡単に僕の貞操帯を作ってくれたものだね」

「ええ、喜んで作ってくれましたわ」

と私は、うなずきました。

「坂田は僕たちのだけではなしに、ほかにもたくさん作っているのかもしれないね」

「こんなに上手に作ってあるのですから、きっとそうですわ」

「とすると、本業よりも貞操帯作りのもうけの方が多いかもしれんね。しかし、貞操帯なら凶器類の密造などと違って、社会に害はないね。拳銃のように人を殺したり犯罪に使われる心配はない。拳銃を持っている者がいる

と危いが、貞操帯をつけた者がいても、危いことはない。かえって安全になるよ」

と、一席ぶつのでした。

生理日の時は、体に良くないので私の貞操帯は外しておくことになりましたが、それ以外は絶えず常用が普通になってしまったある日のことでございます。夫が、昼過ぎに会社から帰ってきて、

「急に二泊の出張が決まった。これからすぐ発つから、外してくれ」

といいました。そこで私は、夫がどうかと思ひ、

「いいわ。はずしてあげますよ。でも私のものはずしてちょうだいね」

といってやりますと、夫は、

「いや出張中だからこそ貞操帯がいるのだ。イギリスでは出張中だけ妻に掛けさすのが流行しているそうだよ」

と、すました顔でいうではありませんか。

「私のを外さないのなら、貴方のも外してあげません。夫の貞操帯も大切ですからね」

私は案の定だと思ひながらいつてやりまして。すると、夫は、私に貞操帯を嵌めておきたくてたまらないのでしよう、仕方がないという顔付きで、そのまま出張に出かけたので

ございます。

私には、そんな夫がいじらしくさえ思えましたが、その夜大変なことが起こりました。

夜の十時頃だったでしょうか。もう子供も熟睡しているようで、私も寝ようと思った頃右下腹がチクチク痛みだし、みるみる、その痛みは強まり、なんとも我慢ができなくなってきたのでございます。困りました。貞操帯を嵌めた体では、とてもお医者様に診てもらふ気にはなれません。常備薬を飲みましたが痛みはいっこうに治まらず、かえって増すばかりです。貞操帯がほんとうに憎らしくなりました。痛いお腹で苦しみながら、貞操帯を引っぱり、ねじたり、鍵穴に夫用の鍵を入れて廻してみたりしましたが、びくともいたしません。でも、その痛さは、ただごとではないと思わざるを得ないほどのものでございました。

私は痛さと恐れから、遂に電話でお医者様に往診をお願いしました。お腹の痛みは、ますます増してきます。早く来てほしいと願う一方、心の片隅で、来てくださらなければよいと願う気持ちも、高まってくるのでございます。

遂に、お医者様は、いらっしゃいました。

白髪の混ったお方ですが、付添いの看護婦さんは、高校を出たばかりのような若い美しい方でした。

私はお医者様には見られてもしかたないにしても、この若い美しい看護婦さんには見られたくありませんでした。

お医者様は、すぐに診察にかかろうとなさいましたが私はもじもじしてしまいました。

「あの、すみませんが……」

と痛さを堪えながら、

「看護婦さんに、ちょっと席をはずしてもらえないでしょうか」

とお願いしました。お医者様は、けげんな顔をされましたが、すぐに何かあると察して下さったのでしよう、看護婦さんに席をはずさせてくださいました。

私は、診察の前に、貞操帯のことを打開けておこうと思ったのですが、

「なにか事情があるのですか」

と、お医者様に問われても、痛さと恥ずかしさで、どうしても、いいだせません。すると、ぐずぐずしている私にかまわず、お医者様は私の下腹をあけられて、一瞬ぎくりと手を止められました。

「何ですか、これは」

私は穴があったら入りたい気持ちでした。でも、お医者様は一目で、私の態度の理由をお察しになったようです。

「鍵はないのですか」

「夫が出張で、持って出ているのです。あさって帰るのですが」

「御主人にすぐ帰ってもらえないのですか」

「明日にならないと会社にも連絡する方法がないので……」

お医者様は、仕方がないというように貞操帯を嵌めたままの私を診察され

「間違はなく盲腸炎です。早く手術しないと手おくれになります、これは何とかして、除けられませんか」

と、おっしゃいました。

「やすりで切れば……」

と、私は痛みの中から答えました。

「やすりは、お宅にありますか。……ああ、ないので。それでは私の方で用意しておきましょう」

お医者様が意外に優しいので、私は、ほっといたしました。お医者様は私に同情してくださったのか、或は私のこんな姿に特に興味をもたれたのか、とにかくその場は看護婦さんにも見られないですみました。

それからすぐに医院へ運ばれました。診察室にはお医者様が一人きりで、やすりを持っておいでになりました。私は心から感謝いたしました。

「どこが幅が狭くて薄いのですか」

もちろん、私にはその場所は分かっていますが、恥ずかしくて、とてもいえません。私が黙っていると、お医者様は、さっさと貞操帯を調べておられました。やはり適当なところは私の思っていた通りだったとみえ、そこに、やすりを当てられました。痛みどめの注射を打って頂いていたので、お腹の痛みはいく分やわらいでいましたが、それだけに余計恥ずかしさが強かったのでございます。しかし、なかなか切れないようで、じりじりする思いの私には、一時間も二時間もたったのではと思われるころ、お医者様は、おっしゃいました。

「もう十分近くもやってみたが、殆ど切れていません。堅い鉄ですね。これでは、とても駄目ですな。手術をしましょう」

堅牢な貞操帯は、本当に憎んでも足りません。私は、やけっぱちになって、

「はい、お願いします」

と蚊の鳴くような声で申しました。

「手術をする前に浣腸して腸の中のものを出しておかなくてはいけませんね」

浣腸と聞いて私は、どきっとしました。貞操帯を嵌めたままです……。でも、お医者様は本当に、思いやりのあるお方でございました。私の気持を察してか、

「浣腸は、私だけでしてあげましょう」

看護婦さんに浣腸されるのを恐れていた私は、ほっといたしました。

手術控室に運ばれた私を残して看護婦は室外に出ていきました。お医者様が何か用をいつけられたのでございましょう。

でも、いざとなって、お医者様は浣腸器を持って、困っておられるようすでございました。その時ドアが、あせったようにノックされ、先生がご返辞をなさらないうちに、看護婦さんがとび込んで来て、早口に告げられたのでした。

「二号室の患者さんが、痙攣を……」

お医者様は、どきっとされたようでした。

「奥さん、誠にすみませんが、この看護婦にあとはしてもらってください。……高木くん。たのんだよ」

いわれるが早いか、走るようにしてドアの外に消えられました。

看護婦さんは、すぐ私の処置に掛かろうとされて驚かれたようすで、しげしげと見ておられるようすでございます。私は泣き出したい気持でございました。でも、もうどうしようもございません。

「この鉄のパンティは脱げないのですか。これでは浣腸はできませんよ」

看護婦さんは腹立たしそうです。お医者様は私の気持を察してでしょう、貞操帯のことについて看護婦さんに話しておられないようです。緊急のことでもあり、私がこれで、みじめな思いをしていることを話される暇もなかったのでございましょう。

「脱げません」

私は小さい声でいいました。

「何ですか、これは。盲腸炎の手術は早くしないと……」

看護婦は、つっけんどんです。若い看護婦さんには、私の気持など察することもできないのでしょうか。

「脱ぐことはできないのです。すみません」
それを聞いた看護婦は、貞操帯を弄っているようです。

「まあ、鍵穴がありますね。それに厚い鉄です。変なものですわね」

この看護婦さんは貞操帯というものを知らないのでしょうか。

「鍵があれば脱げるのでしょうか。鍵はどうしたのですか。このままでは出来ませんわ。それにしても何のために、こんなものを着けていらっしゃるのですか」

着けている理由など、とてもいえるものではございません。

本当にこの看護婦さんは無神経です。何か私に恨みがあるようにさえ思えます。それとも、深夜の仕事だから怒っているのでしょうか。美人悪心という言葉通り、この美しい唇から何故このように針のような言葉が次から次へと出るのでしょうか。私は早く、この責め苦から逃がりたい一心で、いつも排便時にやるように、痛みをこらえて腰の所の金属を持って上下させはじめました。

「ははあ、そうするのですか。患者さんは苦しそうですから、私がやりましょう。手を除けてください」

私をいたわって下さるのか、いじ悪をいつているのかわからないようないかたで看護婦さんが貞操帯をずらし始めたのでございます。

「易しそうでも、やってみると案外難かしい

ですね。ぴったりと腰に喰いこんでいるからでしょうね。それにしても変なものをしていらっしゃるんですよ。私、初めて、見ましたわ。ねえ、これは何をするものですか」

私の気持など察する気配もなく、しつこく質問してまいります。しかし私は答える気にはなりません。人手不足のため看護婦の質が落ちたことでございますが、こんなに人の気持を察しられない看護婦も少ないのではございませんか。私は涙が出そうでございます。

それにしても、夫が私にこんなものを嵌めなければ、こんな思いをせずともよいのにと思うと夫まで憎らしくなっていました。

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

貞操帯越しの浣腸は大変嫌なものでございました。それにも増して排便のことを思うと心配でたまりません。

「やっと済みましたわ」

と、看護婦さんがはき出すように言った時は、必死の思いで頼みました。

「あの……看護婦さん。このことは誰にも言わないようにしてください」

「あら、どうしてですか。これ、そんなに恥ずかしいものです」

どうして、こう責め立ててこられるのでしょうか。知っているのに、わざと尋ねられるような気がいたします。早くお医者様がもどって来られればと願っているのですが、むこうの処置に手間が掛かっているのでございます。

浣腸で手間どっているうちに痛み止めの注射の効果も切れてきたらしく、また痛みが増してまいりました。便意を催してきたので、痛いお腹を押さえながらトイレにまいりました。浣腸の効果は充分でしたが後の処置が大変です。家でのようにお湯で洗うこともできません。お腹は痛みますが、私は念入りに拭きました。しかし、いくら拭いても気持が悪くてたまりません。仕方がないと諦めてや

っと手術控室に帰ると、やはり、あの看護婦さんがいて、手術室に運ばれました。そこにはお医者様がおられ、麻酔薬を、嗅がされました。お医者様や看護婦さんの声が、だんだん聞こえなくなりました。

目が覚めると、あの看護婦さんを入れて、二、三人の看護婦さんが側におられました。きつと手術中、貞操帯を見られたらと思うと、私は、もう一度目をつむってしまいました。でも看護婦さんは私の意識が返ったのに気がつかれたのでしょうか。

「具合はどうですか」

とやさしくおっしゃいました。あの看護婦さんの声ではないようです。私は観念して、「どうも有難うございました」

とだけ申しました。看護婦さんは、私の脈をお取りになると向こうの方へおいでになり他の看護婦さんと何やら話しておられるようでした。私の貞操帯のことも話しておられないかと思ひますと、いても、たつてもいられない気持です。看護婦さんたちも、こんな金属帯の中での手術を見るのは初めてだったに違いありません。さぞ手術もし難くかったことだろうと、あの優しい先生に申し訳けない気持で一杯でございました。

それから私はうとうととして次に目が覚めると隣りにもベッドがあり、他の患者さんも寝ておられました。この部屋には四人入院患者がおられるようです。朝のすがすがしい光とともに、別の看護婦さんが来られました。

「個室にして頂けません？」

私はお願いしましたが、看護婦さんの話では、この医院には個室はないそうです。他の患者さんにも貞操帯を見られるかもしれないと思うと気が気ではありません。

恐れていた尿意が起こってまいりました。我慢をしても時間と共に尿意は強まるばかりです。とうとう我慢ができなくなり、看護婦さん呼びました。この看護婦さんは、辛くあたられた高木さんではありませんが、やはり若くて美しい看護婦さんでした。私は高木という看護婦さんに恥ずかしい思いに合わされているので、今度も他の患者さんのおられるところで、ひやひやしていました。どうか優しい看護婦さんであるようにと祈るような気持ちでした。

尿意を告げると、すぐ用意して、布団の中に尿瓶を差し込んでくださいましたが、そのまますれば貞操帯が邪魔して、尿が布団に散るに違いありません。そうなることは平素の

経験から、よく知っているのですが、もし布団を濡らそうものなら、何といわれるかわかったものではございません。要求は激しいのですが、思いきれないのは大変に辛うございます。しばらくして看護婦さんは、

「済まりましたか」

と、いわれましたが、私は頭を横に振るしありません。

「あのう……」

私の必死の表情に、その看護婦さんは察してくださいました。きっと、もう聞いて知っておられたのでしょうか。

「出にくいでしょうね。ビニールで覆ってあげますから、安心して、してください」

その優しい言葉は私には涙が出るほどうれしうございました。私のことは、もうこの医院の看護婦さんに知れわたっていることでしょう。看護婦さんを通じて、隣の患者さんも御存知かもしれません。その患者さんの私を見る目が私を嘲笑しているようにさえ思えます。早く夫が帰って貞操帯を外してくれ退院できることを私は心から切望致しました。辛い恥ずかしい一夜が過ぎ、先生の配慮で子供が病室に連れてこられて一安心いたしました。その後は長い日中でしたが、やっとそ

れも終わり、夜の影が差し込む頃、夫がやつと姿を見せてくれました。その途端に、

「貴方」

と、私は思わず泣いてしまいました。

「すまなかったね」

夫は心から詫びているようでした。これまでの私の苦しみが夫には、よくよくわかっているのでございましょう。貞操帯を嵌めた同志が手を取り合ったのでございます。それから、すぐ外してもらったのは、いうまでもございせん。勿論、夫も外した筈です。

すぐ退院するのは体に良くないとの夫の考えで一週間、医院におりました。その間、私は何ともいえず間が悪い思いで過ごさねばならなかったのでございます。勿論、朝夕に舞に來てくれる夫も同様だったと思います。

退院後、私たちはもう貞操帯は嵌めませんでした。私の、海へでも捨てなさいとの意見をきかず、夫は二つの貞操帯に機械油を塗り紙を巻いて箱に入れ、大切にしまっているようでございます。夫としては、またいつの日か私に嵌めようとしているのでございましょうか。私もあんな結末にさえならなかったらまんざらでもなかったのでございますが。

(おわり)

史実研究

切腹百年史

中 康 弘 通

女性篇

(その六)



一七 母子心中種々相

先にも戦前の例を少し記したが、母子心中はたしかに、社会問題として取り上げられる

昭和三十八年八月十五日午後、八尾市で公務員の妻(二十八才)が、菜切り包丁で乳呑子の長男を刺殺したのち自分も腹を切って苦悶中を発見された。出産後のノイローゼから

のが当然なほど、日本には多い現象である。

この「切腹百年史」でも母子心中による女性の切腹がずいぶんある。戦後になってもこの傾向はなくなりはない。

なかでも目立つのは、産後のノイローゼによるものである。

発作的に母子心中をはかったもの。入院した出血多量のため重体、とある。

三十九年五月二十二日には、桜井市で、会社員の妻(三十二才)が、やはり乳呑子の長男と服毒、死に切れず、菜切り包丁で咽喉と腹を切り、入院後死亡。是も産後のノイローゼによるものとされている。

四十年六月七日には、「赤ちゃん殺し、割腹」の見出しで報ぜられた事件がある。守口市に住む工員の妻(三十六才)が、乳呑子の長男を斬殺し、自分も刃わたり六寸の菜切包丁で腹を切って重体、とあるが、これも産後のノイローゼで、前夜も「死にたい」と云い当日の朝、ガスをくわえようとしてとめられ、夫がこのことを喜○子さんの実兄に電話しに行ったすきに、切腹してしまったもの。

四十三年四月十九日未明、京都府下長岡町で桜並木の池畔に、幼い女兒の死体が臥かせてあるのを、新聞配達青年が発見した。池の杭には血まみれの女性がしがみついているので、病院に収容したところ、左胸部と左腹部に刺身包丁で刺したという傷があり、母子

心中と判明した。

京都市内の商家の妻（二十九才）で、産後体を悪くし、ノイローゼが昂じて入院中に、外泊許可を得て子供を連れ出し家出、子どもを両わきに抱いて入水したが、自分は死に切れず、用意の刺身包丁で胸と腹を刺して再度入水したが、なお死に切れなかったもの。

同じノイローゼでも、二十八年七月十三日の午後、大阪の福島区で起きたのは、夫の留守がちを苦にして六月ごろから神経衰弱になっていた、というケース。

公務員の妻（二十七才）は突然、「こうしたら死ぬる」といざま出刃包丁でみずから腹部を突き刺し、更に三才の、長男を刺殺した。そのまま放心状態で坐っていたが、外科病院に入院後、出血多量で死亡した。内気な性格から、発作的に死をえらんだもの、とある。

三十九年五月二十七日には大垣市で、会社員の妻（二十五才）が、やはり乳呑子の長男を斬殺したのち、刃わたり六寸ほどの文化包丁で腹を二創まで切ったが、幸い未遂に終わった。原因は、転居による環境の変化と、夫

の帰宅のおくれなどから、ノイローゼになったもの。

三十九年七月三十一日早朝には、横須賀市で船員の妻（三十才）が、刃わたり七寸の果物ナイフで二人の幼女を斬り、自分も腹を刺して母子心中をはかった。

幸い生命はとり止めるもよう、とあるが、前年、死産、転居、更には不在がちな夫と折合いが悪い等でノイローゼになり、神経科に入院したこともあったというから、原因はノイローゼによる発作と云えよう。

「あんなおとなしい人が……」と云われるほど、内向的で口かずの少ない性格が悲劇を招いたのかも知れない。

ノイローゼを超えて精神異常というケースもある。たとえば二十六年九月二十四日朝、東京の目黒区で、団体職員の妻（三十四才）は、四才と一才の女兒の頸を出刃包丁で切りおとし、自分も咽喉を突き、腹かき切って絶命した。

彼女は四月に頭を打ってから精神異常をきたしたもので、九月に入ってから特に様子が不審で、長男（七才）は後嗣ぎだから残し

ておくが、娘たちは他家へ養女にやって、あたしは死ぬ」と口ぐせにしていたという。

原因の変わった例では、西宮市で三十八年八月二十四日、船員の妻（二十九才）が、二人の女兒を薬を吞ませて死なせたのち、自分もネグリジェ姿のまま服毒、更に出刃包丁で腹を切り、苦悶して絶命した。

原因は、七月来のケネディ暴落による株価変動を苦にしたものとみられている。

三角関係も、あり勝ちな原因の一つで、四十年二月二十七日夕、東京の板橋で、無職、（三十四才）が、二児を薬で死なせたのち、約五寸の氷かきで腹を三カ所も突き刺し苦しんでいた。愛人の本妻と争いが起こり、苦しめてのことらしい。

いたましいのは交通事故によるもので、四十年五月十日には、千葉市で、未亡人（二十四才）が、刃わたり二尺三寸の日本刀で乳呑子の長男を刺し殺し、自分も咽喉や腹を刺して重体、とある。原因は四月に事故死した夫のあと追い心中とみられる。

原因不明も例外でなく、四十一年八月一日に東京の葛飾区で、大工の妻（二十二才）が刃わたり七寸の菜切包丁で、長女（六才）、長男（二才）を斬り、自分も腹を切って首を刺し、血まみれで苦悶中を集金人が発見して入院させたが、良子さんは重体、子供二人は助かった、とある。原因は不明。

昭和三十五年には、大分県下で、農家の妻（二十二才）が、乳呑子を刺し殺し、自分も出刃包丁で腹を切って死亡しているのを発見された。原因は調査中、とある。

一八 原因不明、原因未詳

母子心中の項にも記したが、この百年史にも原因不明の自殺や心中を散見する。普通に考えても、自殺するというのはよくよくのことで、その自殺でも手段が切腹となると、なおさらのこと、女の身でわれとわが腹かき切って死のうというのは、よくよくのことだから、何かやむにやまれぬ事情があったに違いないのである。

自殺の因子プラス切腹の因子、と、因子が重なってはじめて遂行できるものと云える。

しかし一応、家人にも心当たりがない、というのは、何か故人の内心によくよくの因子があったのであろうか。それを、何びとも察することが出来なかったのであろうか。

ともあれ、原因不明を伝えられる婦女の切腹事件は、必ずしも少なくない。

昭和四十三年三月十二日の朝、川崎市で、大工さんの若妻（二十六才）が、苦悶しているのが発見された。入院したのち出血多量で四時間後に、死亡したのであるが、遺書がない。二年前に恋愛結婚した喜代子さんは、近所でも評判のオシドリ夫婦で、一と月前に女兒出産、産後の経過も順調で、当日、実母も来合わせていたが変った様子も見えず、

「主婦が腹切り自殺図る」

「腹切りの主婦死ぬ」

と朝日新聞の夕刊、翌朝刊にわたって報道されたこの事件は、謎の自殺とされている。

年月日は正確ではないが、三十四年ごろ、

「女の切腹」と報道された福岡市の事件――

ある主婦（三十六才）は、自宅台所で刺身包丁を以て腹真一文字にかき切り、割腹自殺をとげた。「長らくお世話になりました」と

の遺書のみで、ご主人にも心当たりがないという。

是らは調査の結果なおかつ原因不明であるが、「調査中」とのみ報ぜられて、後報の見当たらなかった事件も少なくない。

戦前では、昭和十一年五月六日静岡県下で農家の主婦、○沢敏子さん（三十七才）が、ワンピースの裾をかき上げ、刃わたり五寸の短刀で、臍の一寸余り下辺りを横一文字に六寸もかき切り、左乳下を刺して果てているが原因未詳。

その半年前、十年の十一月十日には北海道で、酒屋の主婦、○河内アヤさん（四十才）が、和服の帯を押しさげ襟をひらいて、あらわにしたみぞおちを細身の出刃包丁で、長さは二寸ばかりだが、かなり深くかき切り、苦悶中を発見されたが、手当ても及ばず絶命している。是も原因未詳。

戦後では、昭和四十年八月十八日、京都市東山区の旅館で、昼少し前から休憩していた女工さん（二十八才）が、持参の刃わたり四寸の出刃包丁で、腹や咽喉、胸を刺して苦悶

中を発見されている。入院したが重体で、原因調査中とある。

同年四月二十七日の昼さがり、東京都下で二十三才の娘さんが、家の中から「医者を呼んで」と通行人に叫び、風呂場の窓からとび出して路上で絶命した。

調べでは、血まみれの奥三疊の間に台所の包丁が投げ出してあり、戸じまり充分で、物色のあともないので、自殺の線が濃くなっている模様と報道してあったが、娘さんの遺体は右脇腹に三個所の刺し傷があった。

当時の他紙では、OLの彼女が突然昼に帰宅して間もなくの出来ごとだったらしい。

昭和四十一年七月二十日の午前二時ごろ、伊豆大島の三原山外輪山、御神火茶屋上の見晴らし台階段で、血まみれの腹を抱えて苦悶している若い女があった。

二十才ぐらい、紺のツーピースに黒の中ヒール姿である。病院に収容したが重体。

警察の調べでは、「杉並の〇〇〇、果物ナイフで刺した」というのみで、腹部には四カ所の刺傷があり、原因不明のままである。

「若い女、切腹自殺はかる」という見出しが

眼を引いた。

一九 ノイローゼ?

一七項にも、ノイローゼによる母子心中とというのが多いが、ダブルスイサイドならぬ単独の自殺でもノイローゼによるものが少なくない。本稿で記した女子大生の切腹自殺(未遂、既遂各一)なども、ノイローゼによるものとされていた。そうした、ノイローゼが原因と伝えられるものを、ここに幾つか記してみよう。

昭和四十一年八月二十六日から七日のあいだに自殺していた美容師(三十三才)は、住込み先の美容院で、営業用のカミソリとハサミで、首や腹を切って死んだ。夫の転勤で店をやめることになり、店につきこんだ資金がムダになるのを苦に、ひどいノイローゼにかかっていたという。

三十九年一月八日昼前、佐賀市で公務員の妻(四十一才)が、居間で腹に刺身包丁を突き刺したまま、虫の息になっているところを発見された。近くの病院へ運ばれる途中で絶命。

佐賀署では次の理由から自殺と判定したとのことである。

- ① 外部から侵入したあとも、抵抗したあともない。
 - ② そばに身体解剖図が拡げてあった。
 - ③ 包丁は自宅のもの。
 - ④ 最近ノイローゼ気味だった。
- 以上であるが、特に②項は何か深い内面的事情を考えさせるようである。

是と似た事件の一つ、三十八年七月十二日早朝、彦根市の自宅炊事場の土間で、うつぶして絶命していた工員の妻(四十一才)は、やはり神経衰弱から、刃わたり八寸の刺身包丁で、腹を二寸ばかり切って自殺したもの。

三十六年七月五日、日立市で主婦(五十七才)が、夫の家をあげた少しのあいだに、出刃包丁で腹と咽喉を切って死んでいた。

多賀署の依頼で鑑定した日立製作所病院外科は、次の理由で自殺と判定した。

- ① 顔が柔和である。
- ② 手をにぎっていない。
- ③ 傷が身体の内がわに向かっており、自分でやったものだ。

以上であるが、この主婦は神経衰弱気味で夫の元の勤め先であった足尾鉾山へ帰りがついていたといわれる。

昭和十三年五月二十六日、東京の本郷で主

婦齊〇ハル（四十七才）は、剃刃で七寸も腹を切り、更に額、胸、咽喉を刺して絶命したが、神経衰弱と原因を伝えられている。

昭和三年六月二十九日、神奈川県下で農家

の未亡人東〇みな（四十一才）が、朝、剃刃で腹と咽喉を切ったが未遂に終わった。前年夫に先立たれ神経衰弱が昂じたものという。

（未完）

あるマジメなたわごと 須 渾 朔

本誌に『実話と体験』原稿募集が発表されたのは、たしか二年余りも以前のことであつたと思う。その中に『不思議な体験』との一項目を発見して、怪談ファンの一人である私としては、わが意を得た思いでとても嬉しかったものである。無条件に『靈魂』『怪奇』『妖怪』……的なものの出現を連想したからであつた。

当時、早速に江川詩二氏という人が、乱歩作品や、既刊雑誌に発表された関連記事などを引用した『新分野開拓に望む』なる一文を投じられていたようであるが、私としても大いに期待するところではあつたものの、時がたつと共に不安？ が頭をもたげ始めたのであつた。

その第一としては、本誌の性格上、それがたとえ僅かな一分野のものとしても、主流派？ 読者の意に叶うかどうかということとであり、その第二として、創作ならとも

かくとして、読むに耐える『実話』が集まるだろうか？ という点であつた。

ファンの一人として、私はもちろん従来から怪奇的なものを漁っていたし、目につく限りは読み尽したとも思うのだが、欧米には怪奇小説の伝統があつて、昔から夥しい怪奇誌が存在するそうであるが、日本ではごく少ないようなのだ。短い年月で姿を消した『不思議な雑誌』という安手の体裁の雑誌なども、私としては、その稀少性の故に、欠点には眼をつぶりながら読んでいたのであるが、このジャンルのものは、材料不足におちいりがちで、すぐマンネリズム的になりやすいことも長続きしない原因であろう。

果たして？ 本誌上には、私のその期待にこたえてくれる記事は載らず、不安事項だけが適中したらしい。現代には第三者に満足を与える『不思議』は存在しないのだ

だろうか？

事実としての裏付けはともかくとして、やはり『四次元の世界への蒸発』とでもいうような記事となると、それが『S・F』小説としても夢中になつてしまふ私としては、むしろ、本誌の『実話と体験』に限定した良心的？ 募集を恨みたい思いがするのである。たとえば、SMがらみのものでも、真実性に乏しくとも、S・F的であろうとも、その怪奇的不思議を満喫できるものの開拓を、一分野として考えてもらいたいと思うのである。何も、ユーレイが出た、妖怪に化かされたなどばかりが怪奇でも不思議でもなく、今日的なショックングな読物は、結構イケルんじゃないかと思うのだが……。

現在、出版界は乱歩全集をはじめとして夢野久作、橘外男、小栗虫太郎等の、いわゆるアウトサイダー的異色作家の『四次元もの』のブームとか。わが沼氏の『家畜人ヤプー』も同系統ともいえるが、奇ク向き怪奇小説の開拓を切望する。

0号重拘束

強制的に連れ戻されてしまったB二〇三号の運命は完全に絶望的であった。もはや自殺する手段すら喪わされるであろう。そして死ぬよりも苦しい数々の刑罰が待っているに相違ない。許された救いは発狂することだけだが、それも高度に発達した拷問技術とトランキライザーなどによって不可能に近い。とすれば、昔物語にある地獄の責め苦がB二〇三号の日常となることは目に見えている。

アラビア海で、望月レイ子が逃亡を企ると

いう事件があった。B二〇三号は、そのときは、責め手に廻っていた。ひどい仕返しだった。それでも、望月は、まだ未決囚だったからこそ、アノ程度で済んだのである。いや、責められるのは看視にスキを見せたアマゾン女兵の方かも知れぬ。

彼女は将校以上を逮捕した場合に定められた「二重菱縄」というヤヤッコしい捕縄術式に従って高手小手に縛りあげられていた。徳川時代、武士を捕えたときの古式が採用されているのである。舌を噛まないように革製のギヤグがはめられている。勿論、全裸に引剥かれて、身につけたものといつては、ここに

述べたギヤグと縄でしかない。

深淵に墜落して行くような恐怖と共に、後悔の念が、むら雲のように広がって行く。

逃げなければよかった。——と試みてみても、今は昔に返すすべもない。

馬鹿だったと今更のように思う。

紀州白浜海岸近くの沖合にシュノーケルを出したネプチューン号が、秘密諜報員と連絡をしていたとき、B二〇三号は当直員の一人だった。岸边に点滅する故郷の灯火をながめているうちに、フツとたまらなく家へ帰りたいようになってしまったのである。



泳ぎに自信があつたこともいけなかった。何かにとり憑かれたようになった彼女は、ソツと反対側の舷側に廻り、仲間に気付かれないうようにして海中に沈んだ。ズツと遠廻りをして海岸に向かう。

この逃亡が存外うまく行つたのには、そのとき一隻の漁船が近づいて来たことが原因の一つになるであろう。ネプチューン号は急潜水した。そして、次に浮上したときは、時間の関係で下番者が当直を交わっていた。つまりB二〇三号はフリーになっていたのである。それだからこそ、誰も注意せずにいた、その間に大いに時間を稼いだことになる。

次に困つたのはハダカだったことである。岸に泳ぎついたのはいいけれども着るものがなかった。しかし窮すれば通じるといふか、丁度近くに温泉旅館があつて、その大きな浴場に、忍び込むことに成功した。深夜である。浴槽に浸かっていると、暫くしてドヤドヤと仕事を終えた芸者や女中の一団が乱れ込んできた。入れちがいに脱衣所へ出ても誰も気にする者もない。手近の着物を一寸失敬して廊下へ出る。すぐ目についた蒲団部屋でユカタと丹前を手に入れて浴場へ戻りそれと着がえて、着物をもとの籠に戻す。こうしてB

二〇三号は、少なくとも次の日の朝までは、この旅館にいても、怪しまれないパスポートを手に入れたことになる。何しろ何百人という団体客まで泊っている大旅館である。一人の女が、まぎれ込んでいたって定まった丹前さえ着ていれば、誰がどこの人やら判りはない。その夜は適当な空き部屋を見つけ、勝手にフトンを敷いて横になる。気が立って眠れないのではないかと心配したが、それよりも疲れがひどくて、グッスリと寝込んでしまった。

翌朝は六時すぎに目がさめた。矢張り行方が心配だったからだろう。ユカタだけで全くの無一物では一体どうしたらよいだろうか。絶対絶命の場合である。善悪にかかわらずわっている時間すらない。となれば、誰かの部屋に忍び込んで、当座の小遣いだけでも盗もうと思ひ立った。団体客の例で、朝食は広間に準備される。そこへ行っている間は寢室に隙が出来る。女中たちも給仕に忙しい。そこに枕かせぎをするチャンスがある。彼女は団体客に食事の準備を告げるアナウンスを聞いてからユックリ部屋を出た。

「オイ、何をしている」

前号まで——有明の東京における斗いは終わった。女囚を満載した原潜ネプチューン号は日本を離れようとしている。最後の土壇場になって脱走を企てたB二〇三号、すなわち杉本美和子も捕えることができた。喪つたのは自殺した野沢洋子だけだった。エミー司令、高橋副長などの美人乗組員は男子奴隷を駆使して本艦を操縦している。セルに収容された女囚たちは文字通り生まれたままの赤裸である。こうして物語は次第に有明の国へと移行して行くであろう。

不意に背後に男の声がした。ギクツとして背広に突っ込んでいた手がとまる。

まさか残っている筈がないと思ったのに、この男だけが部屋風呂に入っていたのである。こうなつては、もう観念する他はない。

急に男の方を向き直つて、

「申し訳れございません。実は、連れの者が身ぐるみ持って逃げてしまったのです。それで、ツイ……」

男がニヤツと嗤った。

「何故、フロントに言わないのですか」

「それは、できません」

必死になって嘘をついた。

「もし警察沙汰になったら私、困るんです」

「なる程」

男は、アッサリと言った。

「わかりました。事と次第によっては相談に乗ってあげてもいい。魚心あれば水心ありですね……」

と、又もニヤリと笑う。相手の意図が見えすいても、背に腹はかえられない現状では、「オ、お願いします。お助け下さい」と手をついて頼むしかない。

この男が、パチンコ王の金子一郎こと、韓国人、金東一と知ったのは後のことである。金は勿論、一目見ただけでB二〇三号の美貌にホレ込んでいたのである。

こうして彼女は、ようやく万死の中に一生をかちとることが出来た。

勿論、代償は必要であった。しかし、時が時である。彼女が支払い得た唯一のものは、その第一級的美貌と肉体しかなかったのだから、金の好意を受けるようになったからといって、あながち責める訳には行かないであろう。

B二〇三号こと、杉本美和子にとって故郷の金沢へ帰りたいのは山々だったけれども、そこには必ず有明の手が廻っているにちがいがなかった。で、必死に望郷の念をこらえ、金

の囲い者になって、時を待とうとしたのである。

しかし、有明の方が一層ウワ手であった。多少の遅れはあったけれども、彼女の足どりは次第に洗われて行って、やがて金のスケとなつてかくれていることが知れるや否や、金ともども攫うという計画が出来上つたのである。すなわち金が小笠原へ行こうとしていたのに目をつけ格安のチャーター便でさそつた。一も二もなく彼はOKして、女共を連れ

てセナス機に乗り込んだのである。これが彼にとって死の道へ連なっているなどとは夢にも思わずに。

女とは思えない超人的な力をつくしてB二〇三号は逃げに逃げた。しかし、所詮、有明の実力に向かつては螳螂の斧でしかない。

以上に述べた経過をたどって、再びネプチューン号に連れ戻されたときは、もはや、彼女には一片の自由すら許されないことになつていたのである。

苦痛の中で、こんなことを考えるともなく考えていると、突然、パツと明るくなつて数人のアマゾン女兵達が入ってきた。

「恐怖のあまり失禁しそうになるのをこらえるのが、やっとだった。ガタガタと慄えがくるのは、おさえることが出来ない。」

ところが、入って来たアマゾン女兵たちも全く同様なのである。如何に人々を人と思わないように訓練され



ている彼女たちであるとはいっても、相手がかつての仲間であつてみれば、いささかの惻隱の情が動かなければ人間ではあるまい。更に命じられたことが、あまりにも惨烈なのでそれから来るショックもすくなくないのであろう。いずれにしても命令は果たさなければならない。

一団の責任者は高橋副長だった。彼女はエミー司令からの指示で、B二〇三号に対する暫定処置を執行することになった。

B二〇三号の属していた特科N第四分隊は隊員六名で、それを指揮する責任者が少佐の小川晶子だった。肉体番号B一六八号といえはB二〇三号とは同期生である事が分かる。ただ小川晶子の方が、あらゆる点で成績がよかったので出世が早かったのである。ここでの成績というのは必ずしも地上的な意味でのそれを指すのではない。矢張り専制君主である有明への服従度が大きな要素になることは否めないからである。

つまり、有明に認められなければウダツがあがらないともいえよう。

さて、その小川晶子にしてからが、たとえば同期生とはいえ自分の部下から脱走兵を出したとなつては、彼女自身も懲罰は、すでに始

まっているのだ。高橋副長を通じてあたえられた有明の命令は、今、目前に武士菱縄をかけられているB二〇三号に0号重拘束を処置せよということであつた。0号重拘束というのは肉体拘束の最も嚴重な程度を指すので、後述する一号、二号より重い。普通、有明の国では肉体に傷痕の残るような刑罰は採用されていない。拷問をする場合でも出来るだけ精神的肉体的苦痛が大きい方法が望まれているが、回復できないアザや傷を残してはならないのである。ただし、0号という評価がずっと全く違ってくる。すなわち、一生、消すことの出来ないような負傷をさせても、又、場合によっては片輪にしても差支えない。又重拘束とは何等の拘束法に従って相手の随意に動く部位、たとえば目、口、手足から、いたるところの括約筋まで完全に固定することを指すのだ。

高橋副長は簡単に、脱走罪の嫌疑によって軍法会議に送致するまで、0号重拘束に処すと宣告して、小川少佐に執行をうながした。

先ず小川晶子から始めなければならぬ。その分担も予め高橋副長から指示されていたからである。彼女は先ず開口器を用いてB二

〇三号の口を大きく、アーンとあけさせた。ゴムのギザギザのついた釘抜きで舌をはさんで思いきり引き出す。そうしておいて、片手で尖端を鋭く研いだ焼串を舌の横側から、出来るかぎり根本に寄せて水平に突き刺す。鮮血が噴き出して鉄串は反対側に抜けた。舌の根本が横に串ざしにされた事になる。その両側をコルク栓でとめると、それに歯が当たって口を閉じること、舌を噛むことも出来なくなってしまう。つき出した舌をひっこめることすら不可能である。

そこで高橋副長の指図があつた。今まで坐禅を組ませてあつた足を解いて別々に高く吊りあげろというのだ。二重菱の後手が吊られていたのと合わせて、B二〇三号の身体は天井から臀部を床にスレスレに据えて、三点固定されることになる。アケツピロゲになったところにB二〇三号のイレズミがクッキリと浮き出していた。誰かがアルマイトの洗濯盆を持ってきて下へあてがった。かなり大きな盥盆なのに、豊かなヒップで一ぱいになった。たしかに皆何かに憑かれたように夢中になっていたから気づかなかつただけけれども、B二〇三号は、あまりの苦痛に括約筋をコントロール出来なくなりはじめていた。それで、

床全体を汚さないために金盥を必要としたのである。

次席の先任将校が、両足をひらいて高く振りあげた形のB二〇三号に進み寄って、屈み込んだ。途端にB二〇三号の全身が激しく痙攣した。舌をつき出した口の奥から声にならない悲鳴が洩れる。全身が油汗で蔽われてテラテラと光ってきた、この将校の持ち分は二本の金串で十文字に縫い止めることだったのである。これに続いて、次から次へとアマゾン兵士たちが入れちがいに哀れな肉塊に近づく。そのたび毎に、B二〇三号は絶叫し、もがいた。一人が右の上脛をメクってヘアピンで縫い止める。これでB二〇三号は脛を閉じることが許されなくなった。もう一人の手で左脛もヒキ剥かれた。

あまりのことに気を喪ってガックリと首を落とすのを、そうはさせないというので両耳

と鼻が夫々針金で三方に引かれる。これではたとえ眠っている間でも、B二〇三号は頭をシャンとあげていなければならない。

有明の部屋に伺候しているエミー司令のところへB二〇三号に対する0号重拘束が終了した旨の報告があったのは、それから間もなくのことだった。

聞いただけで吐き気がするのをこらえながら、エミー司令はこのことを有明に伝える。

「よろしい。ところで……」

と有明が言った。

「久しぶりだ。今夜は君に伽を頼もうか」

エミー司令はパツと顔を輝かせると、形を改めて、ひれ伏しながら、

「ありがとうございます。おなさを謹んで頂戴させていただきます」

といった。こうした場合の定り文句である



うか。

未 決 服

そうこうしている間にも原子力潜水艦ネプチューン号は快適な水中速力で突っ走っていた。巡航で三〇ノットも出る。それで、次の日の夕方には、もう青幫のジャンクと洋上で落ち合うことが出来た。例によってネプチューン号は艦体をかくし、何隻もの大きなゴムボートだけを浮かべて荷役を受けた。食糧や物資のほかには、いつものように捕獲した女たちも数多く荷造りされていた。今回は特に二人の男、新津謙介とホセ・アマビスカも梱包の中に入っていた。彼等は二人共、長いこと自らの糞尿の中にドブ漬けにせられていたので、荒れ果てた皮膚がボロボロに崩れかかっていた。あのような境涯から比べれば、たとえ鎖で自由を奪われていたとしても、このネプチューン号の三等暮しは清潔という点で天国のように思えたそうである。苦楽は共に比較の問題にすぎないという例証であらう。

林美玉も又拉致されてセルの一つに呻吟していた。有明が林美玉を殺さなかったのは彼女の若さと麗質を買ったからである。物馴れ

た彼の眼識には、林美玉こそ磨けば磨く程、光沢をあらわして行く秘玉として評価されていた。

次第にあきらかにして行くつもりだが、有明の秘密国家は地下に建設されていた。そこでこの国から一般の世界を指す場合に、よく「地上」という言葉を用いている。アマゾン女兵の間などではシャバなどと呼ばれることもあった。いずれにしても遥かに遠くなってしまう世界であることを印象づける。

一等扱い、つまり特別室に収容された者には急激な変化を与えることを避けるようにきめられていた。地中海で、例のヨット、キャロリーヌ二世号から捕獲された王明齡などは私物持込みを許され、扉から外へ出られないということ以外を除けば丁度、豪華船の一等キャビンに在るような生活を、していたのである。

しかし山本百合子の場合は、浴室から直接誘拐されてしまったこともあって、下着一枚も持ち込まれていなかった。有明の指示を受けて、百合子の世話星、エミー司令が自らすることになった。このことは、百合子が有明によって最高の評点を与えられた蒐集品で

あることを示していたし、又、百合子がそれを望み、且つ必要な訓練を終わし、忠誠試験にパスしさえすれば、この国の高官に任命される道がひらけていることを意味していた。ことと次第によっては、エミー司令のライバルとなる可能性さえある。しかし、この国では又、マスターに対する忠誠競走は大いに奨励される反面、当事者間の葛藤や嫉視反目は厳重に罰せられる。ライバルを嫉妬することは絶対に許されない。むしろ後進ライバルをひき立てて行ってこそ、はじめて有明の恩寵をつなぐことが出来ると判断されていた。高官たちが争って自らの部屋を買い求め、それに磨きをかけて後宮に備えるのが流行となっていたのも無理からぬことである。

それはさておき、有明の考えもあって、エミー司令は、山本百合子に地上の衣服を与えることを止めてしまった。これは前述のように一等扱いには異例のことだったが、その代わり、いきなり全裸の暮しをさせるのは無理だろうというので「未決服」と呼ばれるものを始めから与えることになった。これは新入りの女囚に対して、羞恥心を克服させる前の心理的クッションとして採用されたものであ

る。早く裸体に馴れさせるのを目的としているから最少限度しか覆うことが出来ない。もう一つ、手足などに種々の拘束を施したあとでも、容易に着脱出来るようにデザインされていることも一つの特徴かも知れない。

目白の山本邸から拐かされた翌日の夜、百合子は館山沖でネプチューン号に収容されたが、最初エミー司令が入って行ったとき、丁度、一昼夜以上にも亘る長い睡りから醒めたばかりのところだった。

人が入っている気配に何か肌をかくすものとさがしたけれども、そんなものは一切残されていない。ねかされていたベッドのシーツも袋になってマットと一体になっている。本能的にとび起きると、部屋の片隅に身をすくめて立つ。その姿勢はたくまずして、あのヴィーナスの像そのままだった。さすがにこの生けるヴィーナスは、類い稀れなものであった。それは女のエミー司令でさえウットリとしてしまうような天性の美しさだった。

もう涙をポロポロとこぼしながら、この純情なヴィーナスは哀願した。

「おねがい、入ってこないで下さい。アッ」息を呑んで、絶句する。かまわず押込んで来たエミー司令を見て、あの浴室の出来事を

思い出したからである。

泪が一ぱいの両眼が、恐れて、一層、大きくなった。唇をワナナかせて途切れ途切れにうったえる。

「どうして、私は、こんなことになったのでしょうか。あなたは、どなたですか。私は、何も、していません。どうぞ、どうぞ助けて下さい。助けて……」

エミー司令は相手を安心させるようにニコリしてみせた。星恵美子もこの女を嫉妬していたのかも知れない。はじめて何か優越感のようなものが湧いて来たから。

「気を落ちつけて下さい。今更どうにも仕様の無いことですから」

と、教えたとすようにいった。

「ある立派な方が、あなたを必要とされているのです。そこで、あなたは大切にされる筈です。決して危害の加えられる心配はありません」

「いやです。いやです。アア、どうか、どうか帰して下さい」

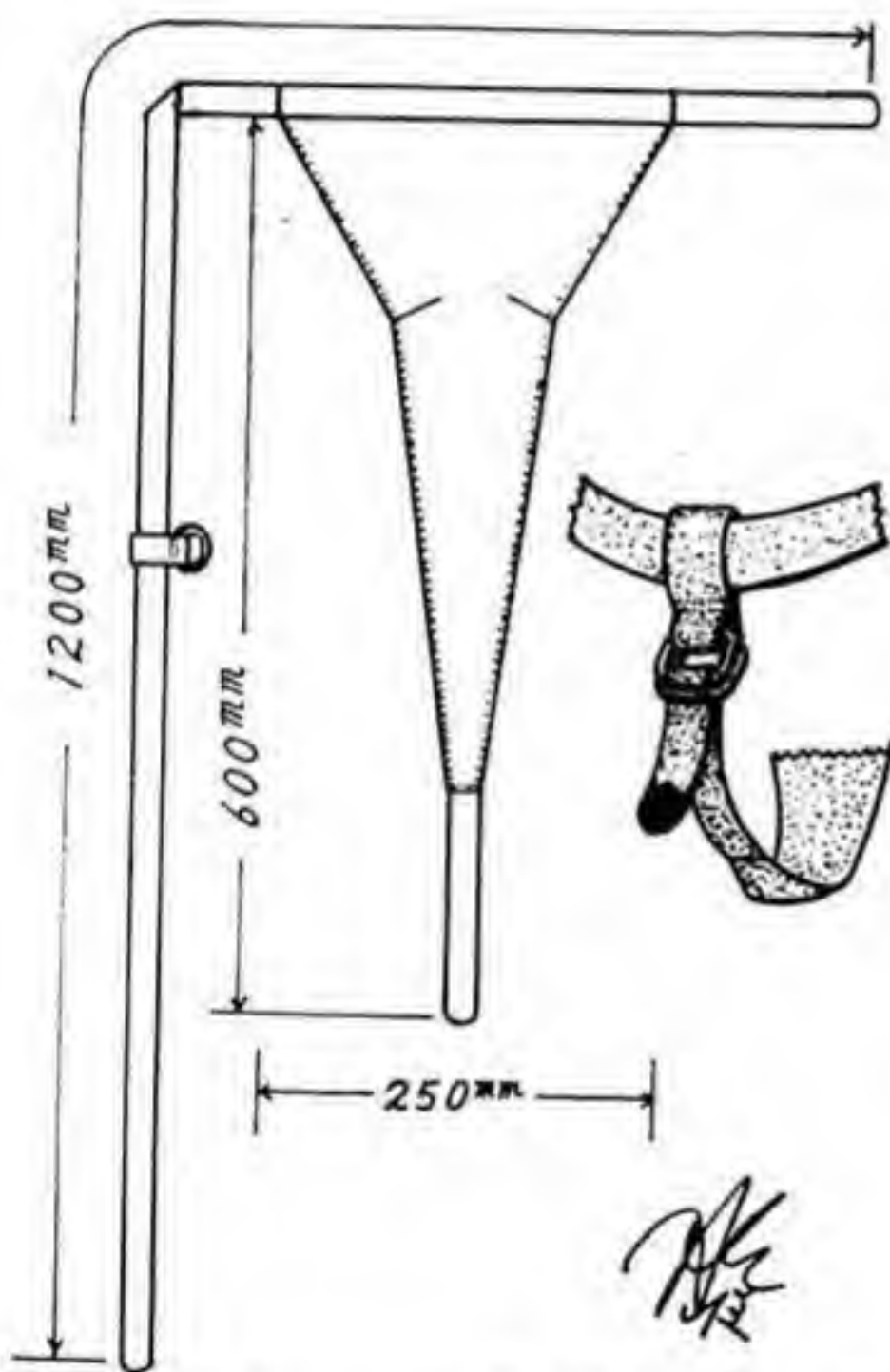
ヒステリックに泣きじゃくる百合子を見ながら、自分にもこんな時があったっけ、とエミー司令は思った。

「百合子さん、よくきいて下さい。私たちは

あなたを奪いました。ここへ来られた方は誰一人、生きて地上に帰ることはできないのですよ。この私でさえ、そうなのです。百合子さん、ここへ来た最初のころは、私もあなたと同じでした。どうしようもなく恥かしく、苦しい日々でした」

といいながら、フト遠くをみつめるようなまなざしになった。有明を敬愛するあまり、ガボンへ独行した彼女である。つまり、自ら志願して有明に加担したようなものだ。そんな彼女に対してさえ、この国のレセプションは厳格だった。上級者になればなる程、それは、きびしいといってよい。数々の試練、忠

誠試験を経て正式に任官したあとでも、アマゾン女兵の幹部候補生としてのトレーニングが待っていた。もっとも、その頃は今のようには陣容が整備されていなかったから、有明自らが教官だった。その点は、今のより大いに幸せだったかも知れない。同じ苦痛でも恋する人から加えられたものの方が、どれ位、耐えやすいか知れないのだから。それにしても、あの大后さまの心ひろいお力添えがなかったら、とても、こらえ通すことが出来なかったのかも知れない。本当なら、マスターのお情けを受けるようになった星エミー司令を憎んでもよい立場だったのに。と考えてくる



と、今、目の前にいる山本百合子を、もっと大事にしてやらなければならぬと思う。丁度、自分が大后さまから受けた恩顧を、今ここで山本百合子に返さなくてはと思いつたのである。

そんなことを考えているエミー司令の善意が敏感に百合子に作用して行った。たかぶった心が幾分か柔らいで、その間隙を諦めが埋めて行く。

何一つ知っているとはいえないのに、この組織が容易ならぬ大きなものであることはカンでわかった。到底、逃れられないだろうと思うと、絶望感が、ひしひしと胸をしめつけてくる。はりつめた反抗の構えも果無く、肩を落として屈み込むと、両掌で顔を覆ってさめざめと泣きくずれる。そのたおやかな曲線が又、そのまま「跪くヴィーナス」のポーズだった。

ややあって泣き濡れた顔をあげた百合子の表情には、もはや全く反抗の色がなかった。繊細に打ち慄える美しい睫毛の間から、伏目勝ちにエミー司令を見上げて、

「でも、どうか何か着るものを下さいませんか。これじゃ、これじゃ、あんまり……」

羞恥におののきながら、泣きじゃくる。

「いいですよ。肌をかくすものは差上げましょう。ただし、この国の制服しかありませんから、多少お気に召さなくても我慢していただかなければね」

といって持参した二枚の布切れを示した。

「さあ、着せてあげますからお立ちなさい。

まごまごしていると、男の人が入ってきますよ」

男が入って来るといわれて、真青になって立上った百合子は、あわてて布切れに手を伸ばそうとする。

「ホホホホ。はじめてじゃ、着方がわかりませんよ。さあ、私のいう通りになさい。これがショーツにあたるものです」

主体は、やや薄手の帆布で作られたハイカラな越中褌のようなものだ。結び合わせる細い帯だけが柔らかい、テトロンで作られている。

腰のまわりにそれをつけられたとき、百合子は、

「アッ」

といって、みるみる顔を真赤に染めるのだった。なる程、前だけは三角形の帆布がゴワゴワと、それでも人目をかくすように蔽ってくれたのだけれど、後の方は依然として丸出しだったのである。丁度、ストリップパーが着けるバタフライを、もう少し太くしたものだともいえるのだから、縦紐が尻にギュッと喰い込んでいるのも、はじめて経験する感覚で何とも気持がわるい。

「おや、イヤなの。それなら結構よ。とってしまいましうか」

わざと意地悪く、からかうので、あわてて

「いえ、いいんです」

ベソをかきながら、答えなければならぬのもみじめなことである。

「こっちは上半身に着るハッピーのようなものです。お嫌なら、着ていなくても少しも差支えありませんが、念のため、着方だけは教えておいてあげましょう」

と、これもゴワゴワの布地で作ったものを百合子の肩にかけた。これはもう一つ例えてみれば肩が横に張っていないカミシモの上だけのようなものだ。肩から二本、前に吊れる巾15センチばかりの带状の布切れが、わずかに乳房をかくすだけにすぎない。

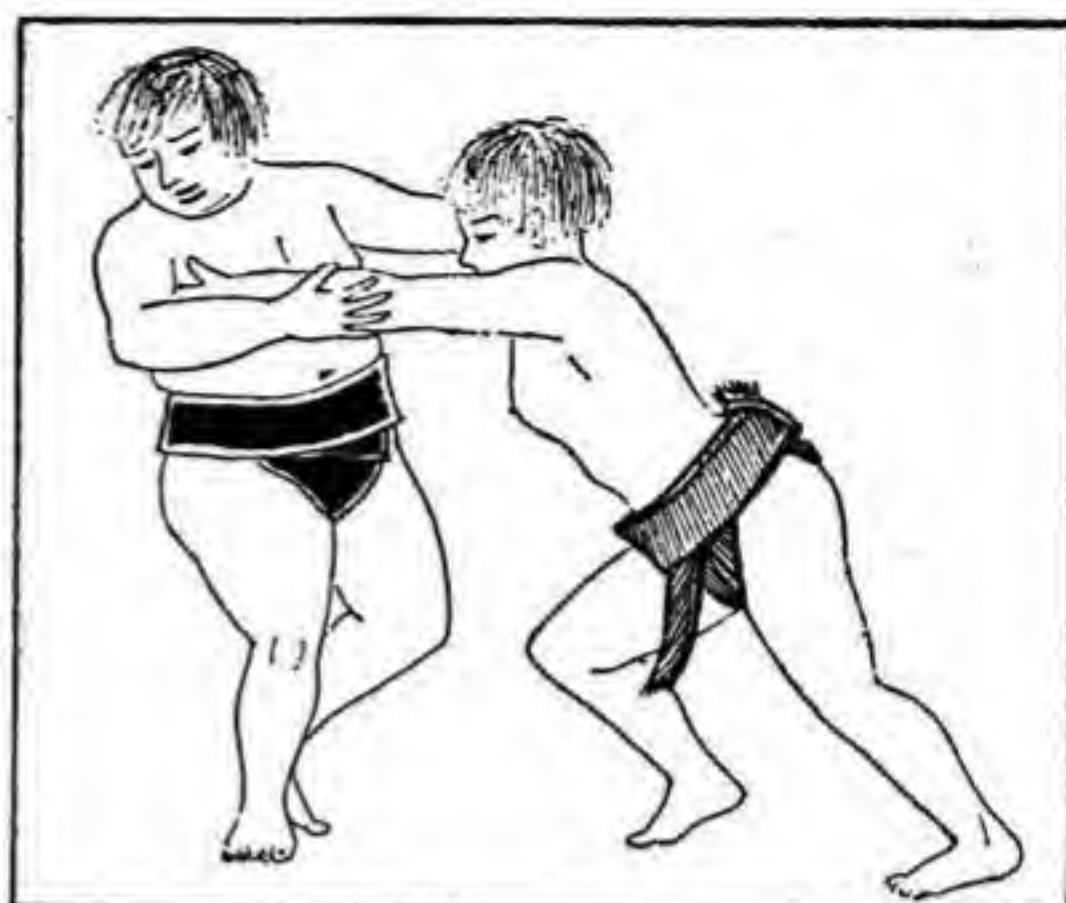
無理矢理に着せられてはみたものの、何ともいえない奇妙な感覚に、改めて驚愕する百合子だった。恥かしい裸身をかくすようになっていくのに、それでいて、裸でいるより恥かしく、いいようもない程不安定だったからである。

(未完)

(注) 今回は下帯だけのカッティングを図示しました。上着のデザインは次回に掲載いたしますので、ご期待下さい。

× × ×

× × ×



暗いいやな冬が去り、陽光の季節、新生の春がめぐってきて、私は、とうとう——最上級生に進みました。

ステキな先輩たちと、オソルベキ後輩たちに恵まれて、私の相撲部生活もいよいよ仕上げの年を迎えたのでした。頭の上のつかえが取れたような、伸び伸びした気持と、急に責任をおつかぶされた不安が入りまじって、複雑な感じ、それに、テレくさが加わります。だというのに、こともあろうに、この私がキャプテンの重任をおおせつかったのですから事は重大です。

娘相撲物語……………最終回

花の女斗美たち

奮斗士好太 (カットも)

もっとも、このキャプテンなるものは、このところおかざりみたいなので、めんどろな仕事は大ていマネジャーがやってくれるのです。そして、このやっかいなマネジャーには、まじめな西田さんにひきうけて貰ったのでした。

それでも、キャプテンたるもの、必然的に実力第一人者と見なされますから、練習をサボるわけにもいかず、自分ばかりに夢中になってるわけにもいかず、けっこう気がつかれるのです。そして、さし当たりの目標である県下高校体育大会へのメンバーも決めなくて

はなりません。西田さんをのぞく四人の三年生と、あともうひとりを二年生から選ぶのです。

ところでヤンチャだった後輩たちもキビシイ練習に鍛えられ、明かるいふんい気に洗われて、すっかり成長して、マワシ姿も板に付いたリッパな女力士に成長しました。体格なら私たちの方が顔まけするくらいに大きくなって、どっちが、上級生だかわからないくらい。それだけに馬力もあります。申し合いのように、力だけというわけにはいかない時は小柄な津野さんなどにウマクあしらわれてま

だまだモロイところを見せていますけれど、ぶつかりがいこんなかでは、いいかげんな受け方をしますと、ふっとばされそうになったりするほどなものでした。

彼女たちに必要なものは、キャリアを積むこと——技やなんかは自然と身についていくものなのですから。

ところで、わが精鋭をすぐった選手陣は、マネジャーの西田さんを除いた四人の三年生はいいとして、残る一人を誰にするかで、部長先生を中心に、頭を悩ました。南、今野、原の三人が候補にあがり、ここまでは文句のないところなのですけれど、この三人のうち誰にするかが難問なのでした。

まず今野さん——一七三センチ、六八キロの体格は、もうどこへ出ても立派なものですけれど、大ざっぱな相撲が欠点。

南さん——のんびりしてるようですが、運動神経はいいし、キビキビした相撲ぶりは私や松田さんの推せんするところ。

原さん——ちょっとヒョワな感じ、でも練習熱心でグングン実力をつけてきています。なによりも彼女の場合、気迫があります。ただグラマーぞろいの選手の中に入って体負けしなければいいが……という心配があります。

結局、南さんか、原さんかという線にしばらくたつたのですが、思いがけなく原さんが練習中に足首をネンザしてしまおうという事故に見舞われてしまったのでした。幸いネンザそのものは重いものでなかったのですけれど大事な時に練習を休まなければならず、こうしたヒョウなことから南さんの方に選手の座がころげこんで行ったのでした。何だか申しわけなさそうな顔つきで……。

でも、彼女はみんなから特訓のシゴキを浴びて、のんびりしてるヒマなどなく、文字どおり汗と砂にまみれて最後の仕上げに取り組んだのでした。それこそ火の出るようなけいことでも云うのでしょうか。南さんと、これも補欠の座がころげこんだ今野さんに対するシゴキはモーレッツにきびしく、かわいそうになるくらいで、連日二十番三十番、ぶっ続けの申し合いです。

私たちは交代で当たりますが、彼女たちは休めません。最初のうちこそ馬力にモノを云わせ、ファイト満々で立ち向かいますけれども十番十五番と続けますと、息が切れ、からの動きもにぶくなって足がもつれ、当たりも弱まります。

相撲の練習は、ひと口で云うならば、スタ

ミナをつけることと、反射神経の訓練みたいなものだと思います。

くり返し、くり返し、からだを動かすことによって、頭で考えるよりも先にからだの方がその時の状況に応じた動きをするように覚えこませることなのです。何の用具も手に持たず、マワシ一筋を身につけただけの全裸の裸と裸の勝負。目ばたきするほどの、ほんの一瞬の間に勝負の決まってしまう、キビシイスポーツなのです。それこそ呼吸することによって注意を払わなければならないのです。相手のマワシをさぐる両手の指先から土俵の砂の一つぶ一つぶに神経を働かすカガトまでピンと張りつめた気持が必要なのです。ハズミで指先が土俵をカスッても負けは負け。その一瞬のために私たちは身につけたただ一筋のマワシに、青春の喜びも悲しみも、苦しみを楽しき、そしておとめの夢と祈りのすべてを包んで汗と砂にまみれるのです。

「ダメダメッ、そんな当たりじゃ」

必死にぶつかる南さんの背にようしゃのな

い声がとびます。
「腰が浮いてるわヨッ！ もっと腰を落とすてッ！」

「休まないでッ！ ソラッ押して！ 押すん

だったらッ」

押しとばされ、転がされて砂にまみれたからだ、マワシにまで汗がにじんでマダラ模様になってみえるほど、それは激しいシゴキでした。汗だか涙だか——、グシヨグシヨにぬれた顔に、目だけが激しいファイトを燃やしてキラキラと輝いています。

ゼイゼイとのどがひきつったような荒い呼吸、まるで上半身がふくれたりちぢんだりしてるみたいに見えるほど、肩から胸もとおなかのあたりまで波打たせながら、日頃とは人が変わったみたいに歯をくいしばってぶつかって行く彼女たち……。

投げつけられ、転がされるたびにすりむいた肌に砂をこすりつけられるような痛さ……。でもそんなものは、からだ中の関節がバラバラになってしまふような苦しさの前にはものの数でもないのです。

十五番二十番と続くうちに、もう彼女たちは、ただつかまっているだけ。投げられ、ヒネられるたびに、右へ左へとこらえようもなくヨロヨロ、ヨタヨタとふらつきます。

「ダラシないぞッ！」

「そんなことで大会へ出られると思うのッ」先輩たちの叱声は、彼女たちにとってオニ

たちのどなり声にも聞こえるのでしょ。

「ホラッ、何してるのッ、その格好は！」

「ダラシないぞッ！ そら、しっかりしてッファイト、ファイト」

本番を目近に控えた仕上げの段階ともなりますと、激しい練習とともに、それを見守る周囲の声も、しぜんきびしくなります。

ヨロヨロしながらもぶつかって行く彼女たちを、ヒロちゃんなどは、ようしゃなく押しとばし、突き転がします。

「ソラ、もういっちょッ」

「ダメダメッ、そんな当たりじゃア」

転がされて、もう立ち上がる気力も尽きたみたいなのに、

「ダラシない格好して、ヘナヘナするんじゃないわヨッ」

「立つのよッ！ いつまでも坐っていると水ぶっかけちゃうヨッ」

と、情ようしゃもない声——。

「いつまでこんなところでおスワリしてるつもりなのッ。このふんどしかつぎめッ。サア、起きて起きて」

と、津野さんなどは、タテミツを握って、まるで荷物をぶらさげるみたいにして強引に立ち上がらせるのです。

髪がベットリと額に張りつき、全身に水を浴びたような汗——。その汗の上に、背中からおシリにかけて、ぬりつけられたみたいにくっついてる砂。解け落ちそうに乱れたマワシ。そのマワシも汗がにじんで、マダラに染め上げられています。肩が大きく上下し、激しく波打っている胸のふくらみ……。でもそれは、こうしたキビシイ練習に耐え、それを乗り越えていく女力士たちの最高に美しい姿でもあるのです。

そして、それは、何も彼女たちだけのものではないのです。私たち三年生も他校の選手たちもみんな激しい、苦しい練習に打ちこんで、自分の体力と精神力のギリギリの限界に挑んでいるのです。

からだ中の関節がバラバラに分解してしまつたような苦しさ。もう物を考える力もなくなって、からだだけがひとり動いているみたいない感じ。なんでこんなにまでしななければならぬのだろうと思ったりします。でも一晩泥のように眠ると次の日はまたケロリ……。これが青春の強さなのです。

そして、晴れの舞台、運命の審判席——。

県高校体育大会がやってきました。

私としては三度目の大会です。最初は間の

ぬけた応援として、そして二度目は選手として……。それぞれに立ち場はちがったもののどちらも敗戦のくやしさを味わった大会でした。

今井さんや、小林さんたちの先輩が涙をのんだその同じ土俵……。そのかたきうちのために私たちに残された、たった一回だけのチャンス……。おとしの新人戦や去年のこの大会と、二度とも吉永さんに敗れて、かんじんの時に勝利の味をかみしめることのなかった私です。

去年の夏の前田さんを招いての特別練習やその後の吉永さんとの「秘密練習」でチョッピリ自信をつけた私だったのですけど、果たしてそれが公式大会へつながるかどうかという一抹の不安はぬぐえないのでした。でも、不安は、自信を得るために必ずふまなくてはならない過程なのであり、不安を克服した後自信でなくては本物ではありません——これは頭のいい松田さんからの受け売り——。彼女のような秀才を裸で力くらべするだけのバーバリストの中へ入れとくなんて——というのは文化部のお嬢たちの悪口——。ナァ、あのひとたちは、おツムの方でもかなわない松田さんが、すばらしい肉体美の持ち主

だってことにたまらないコンプレックスを感じてんのサ——というのがそれに対するヒロちゃんの批評。当の松田さんは、そんなかげ口なんかに耳もかさず、一段とたくましさを増した肉体美に若々しいファイトをみなぎらせて、今や練習の中心的存在として活躍しているのです。

「準決勝進出」

ちょっと情ないのですけれど、これが私たちの今年の目標なのでした。「優勝を狙う」といきたいところですけど、正直なところ現実ばなれがした感じ、目標は高いほどいいとおっしゃる部長先生もさすがにそこまでは口にされずニヤニヤするばかり。タカ派の津野さんからハト派の西田さんまで大分差のある目標でしたけれど、目標はやや高いくらいが……という松田さんの意見が採用されたのです。

ところで新聞の批評は次のように報じていました。

○団体では昨年の優勝校麗華女学院が相かわらずズバ抜けた強さを誇り、これに対抗できるところはちょっと見当たらない。ほかはまだ実力にかなりの差があるようだ。個人戦でも麗華の浅見（3年）、波川（同）が優勝を

争うものとみる。とくに浅見は一七八センチ七三キロの大型で、慎重な相撲ぶりには定評があり、昨年優勝の前田ほどの破壊的な攻撃力は持たないが、安定性ではむしろ前田を上まわっている。波川も一七五センチ、七〇キロと浅見よりは小柄だが、きびんな動きと鋭い投げの威力は十分。このふたりの間に割りこんでくる可能性ある選手としては、東陵高の押田（3年）一七五センチ、六八キロ、藤園高の吉永（3年）一七〇センチ、六三キロらだが、優勝するには力不足。

結局私たちは、団体でも個人でも、まるっきり相手にされていなかったのでした。もっとも昨年の成績が三回戦で〇―五と一方的に敗けているのでしたから問題にされないのも当たりまえかもしれません。

けれども、問題にされていないことで、私たちはかえってファイトを燃やしました。誰も口には出しませんでしたけれど、よし、あの記事を書いたひとに無能ぶりを思い知らせてやるワ」と心に誓って、火の出るような練習に最後の仕上げをかけたのでした。

さて、県下高校総合体育大会。

ことしも天候に恵まれて、梅雨入り前の明かるい初夏の日ざしが青い空にあふれ、白い

雲に照り映えていました。

野望に燃えた青春の息吹きが各会場に渦巻き、期待と不安が交錯して、興奮に頬を紅潮させた選手たちのざわめきがさらに興奮を高めます。

部長先生を先頭に、選手五人、補欠一人、マネジャーの西田さんの一行八人は、見覚えのある会場の学校の門をくぐりました。残りの二年生や一年生の新人たちの応援組は、一汽車おくれてやってくるようになっていきます。彼女たちは、皆しっかりしてますから、おとしの私とヒロちゃんみたいに汽車に乗りおくれたりすることはないでしょう。

開会式――。

マワシ姿に、上半身だけコートを羽織ったグラマーたちの勢ぞろいです。

たくましい腰をキリリと引き締めた紺のマワシ。ポチャポチャとおもちのようにやわらかそうな、ポリウム満点のおシリをズッシリと支える黒いマワシ。スックリと伸びたバネの強そうな浅黒い脚線美のつけ根を飾る紫のマワシ。クリッとした形のいい丸いおシリをいろどる緑のマワシ……。裸で勝負を競うスポーツでも、身につけるただひとつのものに花やかさを忘れないのは、やさしいおとめ心

の表われ。女子高校相撲ならではのゆかしさです。

マワシの乱れは心の乱れ。いいかげんなマワシのつけ方をしている者は女子相撲部員の資格なし――というのが部長先生の常々の教えでした。ですから津野さんが、新人たちに口やかましく注文をつけていたのも、こうした部長先生の意に沿ったものと云えないこともないのです。実際キリリと締めこまれたタテミツなど、おシリのアクセントとしては最高の美しさじゃないかと思えます。ただ一筋のタテミツが、それだけのことでおシリの表情をスックリと引き締め、ピリッと緊張させつややかな若い肌の魅力を、一層引き立てます。

長い伝統がつくり出した最も単純なスタイルの持つ古典的な美しさが、そのまま現代的な感覚につながって、こんなモダンにスックリとまとめられたユニホームがほかにあるだろうかと思うのです。とくに今年からは、マワシの前の端に校章をつけ、それを折り込まずに前へ垂らしておくことになったのです。その長さは大体前ぶくろのかくれる程度ということで、そのため、スックリと整えられた前ぶくろの魅力は見られなくなった

のですけれど、それに代わって、とりどりの校章が高校生らしい純粹さを盛り上げ、若いおとめたちのマワシ姿を一層花やかなものにしていくのでした。ただこのことが決まってから大会まであまり期間がなかったため、今年に限っては、今までのようにマワシの前の端を折り込んでもよいという特例があつて、私たちのチームもそのスタイルをとったのでした。

さすがに、この会場へ集まった選手たちは皆一分のスキもないリリしいマワシ姿。はげしい練習にきたえ上げられた肉体の見事さ、ハチ切れるような若い肌のつややかさはたとえようもなく、戦うおとめたちのきびしい美しさにあふれて、堂々たる女力士ぶりなのでした。

合い集うグラマーたちの姿に、さすがに上気した面持ちのひとつ、強豪の呼び声高い選手の状態に圧倒されてか不安をかくしきれない初々しい感じの子。ひとりひとり見れば、純真でお茶目で夢の多いごくふつうの女の子。でも今日は、もうひとつのファイトあふれる面をむき出しにしているのでした。

お互いに戦いの前の顔合わせに斗志を秘めて、自然ときつくなる視線。とくに注目を浴

びているのは優勝候補の麗華女学院チームです。グラマーぞろいの中でもひととき目立った存在の大型娘たち。どこかの化粧品会社のPRにあった文句みたいに赤道の向こうからなんとかかという、小麦色というよりも、チヨコレート色と云いたいほど見事に日焼けした腿が、彼女たちのたくましさを一層ひきたてているのでした。そして、他校の選手たちから向けられるキビシイ視線にも少しもおじける様子もなく、きたえ上げられた肉体美を若々しい萌え黄のマワシに飾って、堂々とふるまっているのです。となりに並んだU高の選手たちより頭ひとつ大きい感じで、U高のひとたちは、戦う前からすくんでしまっているようでした。

でも、わが花岡高のグラマーたちは、みな立派でした。

松田さんも、津野さんも、ヒロちゃんも、緊張したキリッとした顔は、ふだん見られないような（失礼）いい顔です。のんびりしていて、時にはハクチ美みたいに見えることもあるくらいの南さんも、今日は引き締った表情……。こんな顔をしていると、このひとは相당한美人、ミスなんとかと呼ばれても当たり前前みたい、そのくらいの値打のある美女の

表情にはなります。

開会のあいさつ。選手代表の宣誓。そして競技ルールの説明——と開会式は簡単に終わりました。こんなものは簡単な方が大歓迎。きまり文句のあいさつなどをダラダラと聞かせられていきますと、せっかくのファイトがしぼんでしまいます。そして取り組みのおそいチームの選手たちは控え室へもどり、早い組のひとたちはそのまま会場に残ります。私たちの取り組みは二番目なので、マワシ姿のまま選手席へ——。

最初の組のひとたちが東西の控えに並び、土俵をはさんで礼をかわします。そして、羽織ったコートを脱ぎすて、ハチ切れそうな若い裸身をマワシひとつに飾って土俵へ上ります。紅潮した頬、緊張し切った表情が何とも云えず美しく、青春の息吹きが土俵いっぱいにみなぎります。身につけた技と力を競う裸と裸のぶつかり合い——これこそ私たちおとめの最高の晴れ姿です。

押し合いもみ合い、汗びっしょりの大相撲のすえ、力尽きて、砂にまみれ、解け落ちそうに乱れたマワシに無念の想いを表わして土俵を下りるひと、立ち合い一瞬の奇襲に力を出す間もなく敗れて唇をかみしめてもどって

くるひと、勝利の喜びにおどり上がるように仲間に駆け寄るひと……。明かるさと暗さの二枚のカードは、私たちみんなに、公平に与えられたもの、勝利の喜びも、敗戦の涙も、私たちおとめの青春を飾る宝石にかわりはなないのでした。

東陵高4-1C高、花岡高5-0U高

藤園高4-1C高、麗華女学院5-0S高

清辰高3-2O高、若葉女高3-2T高

双葉高5-0E高、宝山高4-1J女高

一回戦の成績は以上のようなようでした。大体、予想されたような成績で、ここまでは番狂わせと云えるものはありませんでした。相変わらず麗華女学院は文句のない強さを発揮し、星花高のキャプテン押田さんの、鮮かな勝ちぶりも注目を集めました。もうひとり、藤園高——つまり吉永さんのところの例の羽入さんのスバラしいネバリと投げわざの鋭さが目立ちました。羽入さんの相手のひとは身長はないもののかなりな重量型、軽い羽入さんがどんな相撲をとるか興味を持っていたのですけれど、羽入さんは堂々と正面からぶつかり合いました。突っぱりあいもせず、すぐに右四つ、間をおかせず寄り進むのを羽入さんは、左へちよっと回りながらの上手なげ、

思わず「うまいッ！」と口から出てしまったほどのタイミングのよさ——。相手のひとがよろめくところへつけこんでの寄り、タジタジと土俵ぎわまで後退した相手のひとは、そこで重い体を生かして、けんめいに残しました。そして寄って行く羽入さんを吊りぎみにうっちゃろうとします。体重のない悲しさ、羽入さんはたちまち足が浮いて「逆転か」と思わせましたが、両足をバタつかせてこの吊りを残しました。そして右足のつま先でこらえますと、浮いている左足を相手のひとの右足にからませて、それをハネ上げながらの思い切った上手なげ、土俵ぎわで体が反っているだけに、今度は残しようがありません。相手のひとのふとった体は、まるで投げ捨てられたように土俵下へころげ落ちて行ったのでした。

「ウワア、スゴイ」

隣に腰をおろしていた松田さんが思わずウナりました。

ほんとうにそれは目を見はるような勝ちっぷり。羽入さんの運動神経のスバラシサと投げわざのスゴさをまざまざと見せつけられた一番でした。

私たちから少しはなれたところで観戦して

いた麗華のひとたちの表情にも、はっきりと驚きの色が浮かんだのがわかり、彼女たちは明らかに緊張したのです。そして藤園高が勝利をおさめて退場したあと、次の取り組みに備えて、マワシ姿で観戦していた彼女たちは、待ちかねたように腰を上げ、コートを脱ぎ捨てて、四股ふみ、伸脚などの準備運動を念入りに始めたのでした。一回戦の彼女たちの対戦相手は軽い相手（彼女たちにとっては）のS高ですから、彼女たちを張り切らせたのは羽入さんの相撲ぶりだったことは云うまでもありません。

こうして一回戦の八試合は終わり、この結果、私たちの二回戦の相手は東陵高、そして吉永さん、羽入さんたちの藤園高の対戦相手は優勝候補の強豪麗華女学院のグラマーたちと決まりました。

私たちの相手の東陵高は、さして強敵とは思いませんけど、ただキャプテンには、新聞に、個人戦の優勝争いに加わるひとりとしてあげられていた押田礼子さんがいます。彼女は一年生からの出場でキャリアは十分。一回戦の勝負も、落ちついた相撲ですこしのあぶなげもなく、余裕たっぷりの勝ちをおさめています。彼女は、二年前、彼女の一年生の時

の大会で、私たちの先輩、今井さんがムネンの踏み越して勝ちを逃がし、涙をのんだ、あの相手のひとなのです。

彼女はあの時以来すっかり自信をつけて、とうとう個人優勝を争うまでに成長してきたのです。からだもすっかり大きくなって、柔らかそうなからだつき、厚味のある肉づきは彼女のチームの中ではとびぬけています。黒いマワシがピッタリとよく似合って、敵ながらリリしい女力士ぶり。

「油断できないワ。きっと今井さんの仇うちをしてあげなきゃ……」と、心に堅く誓っての出陣です。

ところで、いざ、ぶつかってみますと、この東陵高は、捨て身の強さというのでしょうか。私たちは思いがけぬ苦戦に追いこまれてしまいました。先頭の南さんが順当に勝ったあとヒロちゃん、津野さんとたて続けの敗戦……。ふたりとも、相手を甘く見たようなあつけない負け方で土俵下に残った私たちはちよっとショック。また去年みたいなことに……と不吉な思いが頭をかすめます。でも、松田さんががんばって理詰めのうまい相撲で勝ち、ようやく2対2にこぎつけました。いよいよ私に重い責任が負わされました。

名前を呼び上げられて立ち上がった私は、背中に注がれているチームのひとたち、そして応援にきてくれた小林さんや、笠原さんたちの視線を痛いほどに感じました。深呼吸をした私は、マスコットを折り込んである前襟のあたりをひとつポンとたたき、おなかにグッと力をこめました。おなかの底の方から熱いものがこみ上げてきて、手足のすみずみにまでしみ透って行く感じ——。キッと唇をむすんで土俵に上がります。相手の押田さんもさすがキャプテンのいさぎよい態度。大柄なはっきりした顔立ちの大きな目がキラキラと光って私を見つめています。

立ち合いに逃げのない相手——。突っ張っていかうかしら……と作戦を立てていた私でしたが、押田さんが仕切り線ギリギリに仕切るのを見て、頭の中に何かヒラメクものを感じました。「一回戦での私の勝ち方を見て、押田さんは突っぱりを封じる作戦にくる！」そう思った私は、立ち合い一気にとび込んでもろざしを狙った方がよいと考えました。

立ち合い——。果たして押田さんはすばやく体を寄せて、組み止める作戦に出てきました。私はその押田さんの胸をめがけて低く立ち、両ワキを強く締めて前マワシをさぐりま

す。そして、グイッと引きつけてのくいさがり——。注文どおりの体勢——。押田さん是不意をつかれた様子で、明らかに構えが乱れました。もう、あとは何も考えず、一気に攻め切ることです。私は前マワシを握った両腕にからだ中の力をこめて、がむしゃらに寄り進みました。土俵ぎわ、まわり込んで逃げようとする押田さんを寄り立て攻め立て、必死の攻撃——。

こんなふうに書きますと、ずいぶん長い時間だったようですけれど、立ち上がってから勝負がつくまでは、ほんの十秒くらいのものだったのです。

押田さんは唇を噛んで土俵を下り、私は、全身で呼吸をしながら勝ち名乗りを受け、土俵下でみんなの手荒い祝福を浴びました。

「あんたもウマイ相撲がやれるのネエ」

と、小林さんにほめられたのか、ヒヤかされたのかわからないようなことを云われ、

「さすがはキャプテン、完全に脱帽だワ」

と、松田さんに云われて、誇らしさ、嬉しさに胸がいっぱいにふくれ上がるのでした。

これで、念願の準決勝進出が実現したのです。今井さんや、小林さんたちが破れなかった準決勝への壁——それが私たちによって、

とうとう突破することができたのです。

「よくやった」

部長先生もほんとうに嬉しそうでした。

これで私たちの今日の試合は終わったので、控え室へ引き揚げ、マワシを解きます。急に疲れが出て、服を着るのがおっくう。でも、麗華女学院のグラマーたちに挑戦する吉永さんたちの取り組みがあります。見のがすことはできません。まだ汗のおさまらないからだに大急ぎで服を着て会場へひきかえします。けれど、勝負はもう決まっていました。4-0、麗華はやはり強く、藤園は一勝もあげないままに最後の一番。浅見さんに挑戦する吉永さんの仕切り。

立ち上がると吉永さんは回転の早い突っぱりの先制攻撃をかけました。浅見さんは一歩二歩、後退。でも、吉永さんの突っぱりは、相手を突き出してしまおうというものでなくて有利な体勢をとろうというものなので、一応浅見さんの出足を止めることに成功しますとすぐ左で前マワシをとって、くいさがりました。そして、右で浅見さんの差し手を強く押っつけます。

この吉永さんの右の押っつけはスゴク威力があつて、例の「秘密練習」の時、私も二三

度カマされて、何もできずに敗けてしまったことがあります。

でも、今日の浅見さんは、さすがに県下ナンバー・ワン。右の上手をガッチリと引きつけ、ちょっとそり身になってますけれど、けんめいにこらえています。とくいの体勢に入った吉永さんは、左の下手をこじ上げ、右から押し上げるようにして、息つくひまを与えない連続攻撃。とにかく、大きい浅見さんに立ち直るひまを与えたら、まず勝ち目はないと思わなければならぬだけに必死の攻勢です。右腕を封じられて立ち腰になった浅見さんがタジタジと後退。

私たちも思わず腰を浮かせます。絶対の強味を持つと云われる浅見さんが、この大苦戦なので、無理はないでしょう。藤園高の土俵では総立ちの声援、反対側の麗華陣の選手たちも硬い表情でくい入るように土俵を見つめています。もう一息ヨッ、吉永さんガンバッテ！私も心の中でそう叫んだとき土俵ぎわまであと二、三步というところへ攻め進んだ吉永さんが右足を大きく引いて出しなげのような引きわざ。私は思わず「アッ」と声をあげてしまったのでした。

右でマワシをひいてのひねりわざだったら

あるいは、きまったかもしれないのですけれど、左下手だけの中途半ばな引きわざでは威力は半分以下です。どうして、あんなことを「と思う間もなく、傾きはしましたけれど重い腰で残した浅見さんは、吉永さんのさがるのにつけ込んで左下手を深々とひいてしまったのでした。しかも、その差した腕を返されて、吉永さんの右上手はマワシに届きません。

思わず藤園高側からもれる嘆声……。勝負はここまで。このあと不利な体勢からなお寄り身をみせた吉永さんを、じっくり構えた浅見さんが左の下手を強く引きつけますと、吉永さんは力尽きたようにガックリと右ヒザをついてしまったのでした。

5-0。ここでも麗華女学院は絶対的な強さを見せ、わずかに吉永さんの大健闘がなぐさめになっただけでした。

帰りの汽車の中。一緒に乗り合わせた吉永さんたち藤園高のひとたちと、私たちは麗華女学院の恐るべきグラマーたちへの作戦を話し合いました。話題の中心は、やはりキャプテンの浅見マリさんのことです。

「とにかく、重いなんのって……」

と吉永さんは、まだ興奮の残る顔で話しま

した。

「なんで、あなたあそこまで攻め込んでおきながら、引いたりなんかしたの？」

私が質しますと、吉永さんは、

「そう思うでしょ。まあ、誰だってそう思うでしょうけど、とにかく、とくいの体勢になっても押し切れないのヨ。でも、右上手をとられてなかったらよかったんだけど……。ほんとのところ、あそこで力尽きちゃったってわけなの。もう、からだが動かなかったワ」

吉永さんはサバサバした顔で笑いました。

「でもねエ……」

私のあきらめ切れない顔に、

「そのかわり、あなたに仇うちをたのむワ」

吉永さんが真剣な顔で云いました。明日の準決勝に進む私たちは、その準決勝になるかあるいは運よく決勝に進出することができるか、いずれは麗華のひとたちとぶつからねばならないのです。あのひとたちが、準決勝の別の組で敗ければ顔は合いませんが、おそらくそんなことはないでしょう。

汽車が私たちの町へ着くまでに、私と吉永さんのたてた「対浅見作戦」は次のようなものでした。

1、絶対にマワシをとらせず、離れて戦う

こと。

2、突っぱりには割り合い弱いので、少しさがって仕切り、立ち合いに突っばる。

3、相手に落ちつくヒマを与えず、できるだけ短いうちに勝負をつける。

4、万一、マワシをとられても、投げわざはダメ。むしろ相手の引きつけを利用して自分から、体を寄せて足わざを狙ってみるのも一法。

ずいぶん知恵をしぼったつもりですけど考えてみれば虫のよい話です。このとおりできたら誰だって負けることはないでしょうから。ただ、突っぱりには割り合いに弱いようだという吉永さんの話が私に力を与えてくれました。

「テルちゃんの突っぱりだったら、かなりいいところまでイケルと思うワ」

吉永さんは例の視線で、私の目を真っすぐに捉えながら云いました。その言葉には私への暗示と、吉永さん自身の願いがこめられているようでした。

「やるワ。あたし……」

吉永さんと私は堅く手をにぎって、別れました。

「ガンバッテネ」

「ウン。きっとガンバル」と、松田さん。

「あたしたちの分もヨ」

「モチヨ。まかしといて」と、ヒロちゃん。

ほかのひとたちもそれぞれに誓い合い、藤園高のひとたちは手を振って帰って行きました。

大会第二日。準決勝の取り組みは、藤園高を5-0と一方的に破った強豪麗華女学院と若葉女高を4-1で退けた清辰高。それに星花高を苦戦のすえ退けた私たちには、宝山高を同じように3-2と接戦で破った双葉高でした。麗華女学院が決戦へ進出するのはほぼ確実にすけれど、私たちにしても、双葉高にしても決勝へ進出するというのは番狂わせに近いもの、今年もまず麗華の優勝に決まったというような声が、準決勝の始まる前から私たちの耳に入ってきて、血の気の多い津野さんやヒロちゃんをくやしがらせるのでした。

「馬鹿にしてるワ」

と、ヒロちゃんは口をとがらせて、

「新聞の云うことなら、なんでもそのとおりになると思ってるんだから、頭の程度が知れるワ」

「そうヨ、そうヨ、あんな押田さんが個人優勝を争うなんて笑わせるワ。テルちゃんにか

かったらひとたまりもなかったじゃないの」

と、津野さんも調子を合わせます。ほめられて悪い気はしません、なんとなくくすぐったい感じ。松田さんも私の顔を見てニヤニヤしています。

準決勝の相手、双葉高は結果から先に言いますと、二回戦の時の東陵高より楽な相手でした。先頭の南さんがキャリアの不足からうまくつけ込まれた感じで負けたあと、きのうの名誉ばん回にハッパをかけられたヒロちゃんと津野さんは、落ちついた取り口で二勝をあげました。ふたりの対戦相手も実力的にちよっと差のある感じで、まずは順当勝ち。続く松田さんも彼女とくいの理詰め相撲で文句なしの勝利！とうとう私たちは決勝進出という夢のようなことが、ほんとうになってしまったのでした。

いよいよ張り切る私たちに対して双葉高のひとたちは気力でも対抗できません。ちょうど去年の私たちのように――。

南（2年）きりかえし ○小原麗子（3年）

○津野（3年）おしたおし 石田真弓（3年）

○水野（3年）おしだし 柏木雪子（3年）

○松田（3年）よりきり 加賀幸枝（3年）

○石山（3年）つきだし 立花澄子（3年）

これが準決勝の成績でした。

肩をたたいて喜び合う私たち。準決勝進出をきいて応援に駆けつけてきた今井さんや榎本さん、中川さんたちが、小林さんや笠原さんときのうの勝負を話し合って一層喜びを高めています。

「ありがとう、仇うちしてくれたんだって」
今井さんが、私の肩をわざと乱暴にたたいてお礼を云います。

「ハイ。うまく作戦が当たって……」

「文句なしだったって云うじゃないの。さっきも見てたけど、強くなったわね」

「あたしの突っぱりにも負けなくらいね」
中川さんのマジメくさった顔にドツと笑いが湧きます。

「こうなったら優勝をねらうんだ。いいか、麗華の連中は堅くなってるぞ。お前たちの方がマークされてなかっただけ気が楽だ。思い切ってぶつかれ」

部長先生も少し興奮なさってる様子。

「アラ、麗華女学院に決まったんですか？」

西田さんにきかれた部長先生はあわてて、
「いや、まだ決まらんが……、たぶんそうなるだろう」

「この子たちより先生の方がのぼせちゃって

るワ」

笠原さんにひやかされて、部長先生は額の汗をぬぐいます。誰もが興奮し、のぼせている私たちです。

「気力でぶつかるんだゾ。この時のために猛練習をしたんだってことを思い出すんだゾ。あとは何も云わん、悔いのないようにやれ」
部長先生の言葉に、私たちは唇をかみしめてうなずきました。

ところで、優勝を争うことになった両校のメンバーは次のとおりでした。

(麗華女学院)

水木真沙子(3年) 一七二センチ、六三キロ
八代 純子(3年) 一七〇センチ、六五キロ
片山由美子(3年) 一六七センチ、七二キロ
波川 悦子(3年) 一七五センチ、七〇キロ
浅見マリ子(3年) 一七八センチ、七三キロ
平均身長一七二センチ、体重六八キロというグラマーぶり。このなかでも、やはりキャプテンの浅見さんはズバ抜けています。一回戦から順調に勝ち進んで準決勝まで全部5-0とひとつの勝ち星も相手に与えていないのですから、この恐るべき娘たちは、やはり私たちとはひと桁ちがう実力の持ち主だと云われ、優勝は決まったなどとうわさされるのも

当然かもしれません。

でも、私たちは決して戦わないうちにファイトを失ったりオビエたりなんかしません。たとえ準決勝までの戦いぶりがヨロメキの連続で、半ば好運に恵まれたものだったにせよ苦戦を切りぬけてきたことが、私たちの気持ちをすっかりリラックスさせ、もう思い残すことなく、どんな相手であろうとぶつかって行ける度胸をつくり出してくれたのでした。ところで、強豪麗華に挑戦するわがスバラシキ娘たちのメンバーは次のとおりです。

南 悦子(2年) 一七三センチ、六五キロ
津野 玉栄(3年) 一六六センチ、六二キロ
水野ヒロ子(3年) 一六七センチ、六〇キロ
松田 佳子(3年) 一七二センチ、六七キロ
石山テル子(3年) 一七六センチ、六四キロ
平均身長一七〇センチ、体重六三キロですから、麗華のグラマーたちと比べますと、身長、体重はひとまわりずつ小型です。でも、私たちには彼女たちに優るとも劣らないファイトがあります。マークされていなかった気楽さがあります。優勝しなければならぬという、張りつめた気持を持たなかったゆとりがあります。部長先生のおっしゃるように、ここまでできた以上、優勝をするつもりはない

などとはいいませんけれど、たとえ負けても悔いのない勝負を、しようということなのです。

私たちはマワシを締め直し、念入りに柔軟体操をして、最後の試合に備えました。

「サア、しっかりやってネ。向こうだって、あんたたちと同じくらいドキドキしちゃってんだから。あんたたちが強いんだか弱いんだかわからないんで、ウス気味悪がってんのヨキッ」私のマワシを手伝ってくれながらの笠原さんのユーモラスなほげましに、私は思わず笑いが湧いて、気持もほぐれます。

グッと腰を落としてウンとおなかに力を入れ、立ち合いの練習をするうち、何となく自信みたいなものが湧いてくるのでした。

「時間だわヨ——」

西田さんが呼びにきました。一瞬、感電したみたいにビリッとからだが震えます。松田さんが近寄ってきて、いきなり私の手を握りしめ、

「がんばりましょうヨ。一生に一度だわヨ」

と、ささやきました。黙ってうなずき、力をこめてその手を握り返します。おたがいの若い心とからだだが、ピッタリと一致した気持ちでした。

会場は決勝戦らしい、興奮したふん囲気にあふれていました。麗華の優勝に決まってる——とは云っても、麗華びいきは、その優勝の一瞬を見とどけたく、反対のひとは、麗華の万一の敗戦を期待？してそれぞれに席を立つ人はいないのでした。

満場の視線が私たちに集中し、全身の皮膚が痛いような感じ……。土俵をはさんで一礼し、まず南さんが土俵に登ります。さすがののんびりやさんも初出場での大任ではあがるのは当然。相手の水木さんはやや固くなっているように見えるものの落ちついた動作はキヤリアの差でしょうか。勝負は簡単でした。足の出ない南さんに対して鋭く突っこんできた水木さんは、攻め返そうとして南さんが上体に力を入れたとたんパツと体を開いてのたきこみ……。南さんはつつかえ棒をはずされたみたいで形でパツタリと両手をついてしまいました。

「ワァッ」と歓声がわき、優勝の一瞬も近いとみて麗華の応援席は色めき立ちます。

土俵をおりる南さんのこわばった顔……。でも私たちは、皆ふしぎなくらい落ちついていました。静かなファイト……。

二番目は津野さんと八代さんです。

スックと立ち上がった津野さんは、悪びれず土俵へ上がります。思わず見とれるような落ちついた彼女の態度。でも、そのしなやかな彼女の姿体のすみずみまでにファイトを秘めた女豹のような後ろ姿なのでした。キリリと締め込んだマワシの青い色が、ひととき鮮かに、リリしさを引き立てています。

対する八代さんは、麗華陣のなかでは、そんなに大きい方ではありませんが、それでも津野さんにくらべますと、身長も体重もひとまわりずつ大きいのです。

グッと腰を落として仕切りに入った津野さんのまるいおシリが、わずかにプルンと震えました。よく注意してないとわからないくらいなのですけれど、これは彼女が奇襲戦法に出るときによくやるクセなのです。

「アラッ、こんなときに彼女まさか……」とハッとした時、パツと立ち上がった津野さんは低く突っこむとみせて、いきなり左へ交わりながら、彼女の突進を止めるべくグッと伸ばしてきた相手の八代さんの右腕をかかえてのトツタリ。空を突いた八代さんのからだが大きく泳いでアツと云う間の一瞬の勝負。勝ち名乗りをうけた津野さんが、案に相異した固い表情で戻ってきました。あとで話してく

れたところによりますと、夢中であんなことをやったものの、勝ち名乗りをうける時になって、もし失敗していたら……と考えて、急にコワクなってしまったのだそうです。とにかく大会初の黒星を麗華に与えた彼女の一勝は貴重で、これが勝敗を分ける、キッカケでもあったのでした。決勝へきての初の黒星に麗華陣は明らかに動揺したようです。そして逆に私たちの方は、スゴク自信が湧いてきたのでした。次に土俵へ上がるヒロちゃんも頬を赤くして立ち上がりました。けれど彼女の場合は、ちょっとばかり張り切りすぎ……。

肥満型で押しがとくいの片山さんに対して真正面から組みに行ったため、突き放され、マワシのとれないまま、まともの押し合いになっしまいました。こうなっては一〇キロの体重の差が大きくモノを云います。

「チェッ」

私のとなりで西田さんが舌うちしました。

「あんなバカなことやるなんて……」

土俵上のヒロちゃんも、さすがに途中で気がついたとみえて、相手の前マワシをねらう戦法に切りかえたようでしたけれど、苦しまぎれのくい下がり許すほど相手の片山さんも甘くはありません。両ワキを堅くした教科

書どおりの押しで、ヒロちゃんの体を押し上げるようにして寄せつけません。

突進するヒロちゃん——。ぐっと腰をすえて一步も退かず向かえうつ片山さん——。激しくぶつかり合うふたりのファイトあふれる裸体の美しさ……。緑と青のマワシの目にしみるような鮮かさ……。丸々とした片山さんの豊かな乳房がゆれ、ふっくりした、おなかが波うちます。たくましい太腿からポリウムあふれるおシリのあたりがプリプリとふるえます。こんなスゴイ彼女のファイトを呼びさましてしまったのが、ヒロちゃんの失敗でした。

二度三度とふたりの体がぶつかり合い押し合い突き合いするうちに、軽いヒロちゃんの体が起き、片山さんは逆に丸いからだを低く構えて、ヒロちゃんに立ち直る間を与えず土俵ぎわへ追いつめ、重いからだをなだれこむように押し出しました。激しい動きの相撲でしたけれど、内容はほとんど、片山さんの一方的な攻勢——。ヒロちゃんは、いつものように低くとび込んで前マワシをひいてくさがる戦法に出ればよかったのに張り切りすぎて、それを忘れたのが敗因でした。これで一対二。私たちは追いつめられ麗華陣はやや

安心の空気が流れました。望みの綱の松田さんはさすがに堅い表情。唇をキリッとむすんで土俵へ——。相手は個人戦にも名を上げられていた波川さん。タテミツのあたりを気にして、ちょっと手をやった松田さんは、この強敵を相手に堂々とふるまって清くチリを切ります。

「リップだワ……。彼女……」

この窮地に立たされた松田さんに同情した私でしたけれど、この強敵に一步も退かない彼女に、今さらながら感心するのです。でも、彼女は正攻法が身上です。津野さんのように奇襲をやれないだけに、正直云って、勝ちめは薄いのです。不安な緊張……。そして期待もこめて私たちが見守るなかを、ふたりはキレイに立ち上がりました。

猛烈な松田さんの突っぱり！ 今まで見たことのないスゴイ突っぱりです。私たちは驚き、そして胸を躍らせました。強豪波川さんが突き負けて後退しました。でも、自信満々の波川さん。さがりながらもゆとりを持っての応戦。何とかさばいて組み止めてしまえばこっちのもの……。そんな表情もうかがわれて、松田さんの突っぱりに調子を合わせるような感じの突き合いです。けれど、この波川

さんの応戦ぶりが松田さんの斗志を一層かり立てて、ますます燃えさかる火の手のように激しさを加えさせてしまったのでした。回転の早い松田さんの突っぱりは、息つくひまを与えず、波川さんの肩から胸のあたりに命中し、次第に彼女を土俵ぎわへ追いこんで行きました。ようやく波川さんの顔に焦りの色が浮かび、松田さんの攻撃をもてあました様子がハッキリと誰の目にもわかるようにでてきたのでした。必死に俵を伝って逃げる波川さんの苦しそうな顔。激しく追いうちをかける松田さんの真赤な顔、コワイ表情……。

とうとう逃げきれなくなった波川さんのからだが弓なりにそりかえるところを、ファイトの魂になった松田さんのロケットのようなスゴイ突っ張りがとどめをさしました。ドッと土俵下へ転落する波川さんに場内がどよめきました。番狂わせ！ 強豪麗華の二つ目の黒星！ 肩であえぎ、おなかを激しく波打たせて、からだ中で荒い呼吸をしながら土俵を下りてきた松田さんに、ヒロちゃんがまるで子供みたいにとびついて行きました。ガタガタと全身を震わせ、泣いてるのか笑ってるのかわからないような表情の松田さんですけれど、私を見つめる視線に、何を云いたいのか

私はハッキリわかりました。

2—2。思いがけない——それは優勝決定戦でした。立ち上がった私は、前マワシをグイと押し下げ、そしておなかにウンと力を入れて、にぎりこぶしで前マワシをたたきました。熱いものがおへソの下あたりから、胸もとへグッとつき上げてきます。力強いマワシの圧迫感が私を激励してくれます。もう一度グイと前マワシを押し上げて土俵上へ。

対する相手の浅見さんの堂々たるグラマーの姿体が向こう側から上がってきます。ムックリと丸く肉の乗った広い肩巾、分厚くひろやかな胸には、ふたつのふくらみが、さらにもう一段の丘を形づくって彼女の動作につれてプルンプルンとやわらかくゆれます。ふつくらと豊かなおなかもほどよく引き締まって若々しい緊張をたたえ、どっしりとたくましく張った腰にキリリと締め込んだ崩黄のマワシのリリしさ……。スッキリと整えられた前ぶくろをはさんだ左右の太腿のすばらしい張り……。すっきりと土俵を踏みしめたたくましい両足の安定感は、並みだいていこのことでは崩れそうにもありません。私の足くらいもありそうな太い腕……。あんな太い腕でマワシをとられ、グッと引きつけられたらおしま

いです。ちょうど、日光の恵みを十分に受けてのびのびと育った果物のように、すべてに実り豊かにみずみずしい裸身なのです。ニクラシいくらいの肉体美——。

まさか、このひとと優勝をかけて戦うことになるなんて……新聞の記事に反撥して、チヨッピリ空想してみたりしたもの、現実問題としては考えてもみなかったことです。でもその空想は実現し、浅見さんは私に相対して土俵に入っているのです。私は緊張のために、自分の顔が蒼白になっていることをハッキリと感じました。胸のどろきがふだんの二倍以上の強さで血液を押し出しています。でも、私は自分自身びっくりするくらい落ちついていました。相手側麗華の控え席に腰をおろしているひとたちがスゴク堅い表情になって、またたきもしないで私をニランデいるのがハッキリ見えましたし、チラリと目をやった横の席の土俵下には、私に敗れた押田さんの顔のあることもわかりました。

向かい合ってそんきよ。もう勝負は始まりです。目鼻だちの整った、少しばかり小づくりの感じの浅見さんの顔——。首から下のボリューム満点のグラマーぶりにちよっとそぐわないみたいな感じ……。短く無雑作にカツ

トした髪。でも、その表情はこわばって、両ひざに置いた手も、こきざみにふるえているようです。一回戦からズツと無キズで勝ち抜いてきただけに、最後の決勝戦で、いわば無名の全くマークされていなかった私たちに二勝を奪われたということがかなりのショックだったにちがいありません。絶対の自信が崩れかけて、極度の緊張が私たちの何倍もの重荷になって、彼女たちの上に乗るかかっていったのです。

胸の鼓動まできこえてくるような一瞬の静かさ……。大きく息を吸い込んで、グッと力を入れる下腹にマワシの力強いささえをもう一度確かめて、

「ヨシッ、いこうッ！」

と胸の中で気合いをかけて腰をあげ、足もとを固め、ややうしろへさがっての仕切り。私の視線の中には、もう浅見さんの姿だけ。その丸い肩先から豊かなふくらみのあたりをにらんで、全身の力をこめての突進です。

両手突き先の先制攻撃——。たしかに手ごたえは十分ありました。柔らかい、けれどスゴク重い手ごたえ……。突っぱった私の方がハネ返されるような感じでしたけれど、効果は十分。浅見さんの方の出足も一瞬止まった様

でした。その手ごたえの残るうちに……とけんめいの突っぱり——。その私の突き立てる腕を下からハネのけようとする浅見さんの反撃——。その肩のあたりへ伸ばした私の右手がうまくのどもとを捉えました。

「シメタ！」

これは計算以上の条件、願ってもない攻撃体勢です。私は左の手で浅見さんの右手をけんせいしながら、のど輪にかかった右の手にせいっぱいの力を込めて、それこそ命がけで押し上げました。

苦しそうにゆがんだ浅見さんの顔のけぞり、上体も起きます。ズルズルと後退しながら、でも、さすがにナンバー・ワンの実力者浅見さんです。のど輪にかかった私の手を強引にハネのけ、なおも突進する私のからだを右からいきました。目標はずされて思わず、のめりかける私……。一瞬「シマッタ」という思いが頭をかすめました。危うく背を向けそうになって、立ち直った私の目に、意外にも大きくよろめいている浅見さんの巨体がつります。

上体を起こされた体勢からの強引ないなしに自分の方もバランスを崩してしまったのでしょう。もう構えもなにもありません。私は

反射的にからだごとぶつけるようにして突進しました。上体ばかりで足が続かずほとんど前のめりの体勢……。そんな格好で、もたれこむみたいになって後退する浅見さんを、追います。もう完全に腰が崩れて俵づたいに逃げながらも浅見さんは、私の腕をとっての最後の引きおとし——。体の伸びきっている私はこらえようもなく土俵をとび出しました。同時に、浅見さんもドツと俵の外へ倒れたのがチラリと目に入って……。起きあがって土俵へ戻りますと、観衆の声が急に耳にとびこんできて、からだ中から一度に汗がふき出してきました。

短かったけれど激しい勝負でした。でも私は力のかぎり戦いました。マワシをとらせないという作戦はともかく成功したのです。笠原さんが固く締め込んでくれたマワシはチツトも乱れていません。右の横ミツのあたりが、浅見さんの引き落としに土俵からころげ落ちた時についたものです。その横ミツから腰のあたりについている土を払い落としながら、チラッと見る私たちの控え席は、みんなが立ち上がって何か叫んでいるのでした。

興奮の残る頭の片すみで「あのひとたち、

何を云ってるんだらう?」と、ボンヤリ考えながら、ろくに相手の浅見さんの方を見もしないで礼を交し、土俵を下りかけました。私は、すっかり自分が敗けたものとはばかり思いこんでいたものですから……。

ヒロちゃんが何やら手を振り、松田さんも審判の方を指しています。

ヒョッとふり返った私の目に、審判の手が私を指しているのが……。

ハッとして、ドキッとして、それから、からだ中の血が逆流したみたいな感じになってカアッと熱くなりました。耳が遠くなったみたいで、半分夢をみてるみたいな気持のうち、に勝ち名乗りをうけて、土俵を下りる私へ、ドッとみんなが駆け寄ってきました。ことばにならないことばをてんでに叫んで抱きつい

てきます。

「おめでとう!」

吉永さんも頬を真赤にしています。笠原さんも中川さんも心から喜んでくれています。

「おいッ、石山ア、やったなア」

部長先生も笑顔をつくりながら鼻をつまらせて……。そんな部長先生の胸へ私は、からだを投げかけるようにして、シガミつきました。胸がキューンとつまって、目がかすみました。声をあげて泣き出す私へ、部長先生は「バカだなア、泣いたりするヤツがあるか、表彰台でベソかいてたりしちゃ笑われるゾ」そう云いながら、自分でも鼻をすすっている先生なのでした。

「泣くもんですか、私は勝ったんだから」と、けんめいに自分に云いきかせました。

天星社刊

《限定版グラビア写真集》

在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

「優勝」

私たちは、とうとう夢を実現させました。多分に幸運に恵まれていましたけれど、でもその幸運をのがすことなく、しっかりと生かして優勝に結びつけることができたのは、私たちの力、そしてその力を鍛え上げてくれた先輩のひとたち、そして温かい友情で育ててくれた吉永さんたち、そしてライバルなのにそんなことをちっとも気にすることなく指導してくれた前田さん……。そんな人たちのおかげで得られた栄光の座なのです。

そして、この栄光の座は、南さんや、今野さん、原さんたちの有望な後輩によってきつと守られるものと思います。

すばらしい後輩たち。でも、他の学校でも黙って見ていることはありません。唇をかんで引きあげて行った麗華のひとたちは来年を目ざして、今までもまして激しい練習を展開するでしょう。藤園高の羽入さんもその投げわざに一層みがきをかけてくるでしょう。でも、私たちの後輩は、きつとその強敵たちに勝ち抜いてくれると信じています。幸運に恵まれた私たちの優勝は、「実力どおり」の優勝に引きつがれることでしょう。

(終)

譜系 of 絵図め責女

川田定子 of 受難



造彦 南文と絵

昭和十六年一月（一九四一年）。太平洋戦争勃発直前。最後の引揚船で、アメリカから帰国した川田夫妻検挙を皮切りに（昭和十九年七月頃まで）起こった出版界関係者30名にのぼる拷問傷害致死などの事件は、世間にあまり知られていないが、特高警察の凄惨な追求は、恐ろしいほどの鮮烈さで知る者をして地獄のどん底に、突き落とさずにはおかなか

った。

この事件は、昭和四十年一月十八日の東京12チャンネルで、「横浜事件」と題して、元中央公論編集長―畑中繁雄氏と元改造編集員―若槻繁氏の談話体験などを中心に放映したから、御存知の方も多いと思うが、司会は例の三国一朗氏。番組は既刊『私の昭和史』で「拷問された言論」とのみだして、出版され

ている筈だからご覧いただければ、なお詳細な当時の模様が分かって頂けると思う。

○

畑中氏は警察（神奈川県）の特高係に（その上司の命令で）頭髪を掴まれ、床下へ押しつけられ、泥靴で、いきなり踏んづけられたという。所謂、取調べの先制攻撃という奴であった。

相手の度胆を抜いて心臓を震えあがらせておいてから、じわじわと本調べへと入っていく。相手は恐怖を感じているから△何をされるかわかったものではないので▽意外にスラスラと白状して終う。刑事の使う奥の手の残酷さである。いったい何のために何の理由で検挙されたか分からないうちに、とんだ災難だ。また他の刑事の一人は、私の手を取って△私は共産党でした。申し訳ありませんでした▽と云うような意味の書類に、強引に拇印を押させられ、それからブタ箱へと押し込まれた。

○

翌日からは、竹刀や竹ベラ（ものさしのよななもの）で叩かれた。気絶すると冷水をかけられたり、カンフル注射を打たれたりして

また繰り返しだ。しかし医師の注意で、これ以上やれば△死ぬ△と云うので、いくらか方法が変わったという。

まったく、もって滅茶苦茶な仕打ちではあるが、当時の警察署とは、すべてこういった特権の場であり、現代の民主的な警察とは、月とスッポン。鷹とトンビの差であった。

○
 そうこうしているうちに歳月が経ち——終戦の頃ともなれば、予審判事の説明で、アメリカ軍が上陸したらお前たちは△宮城送り△になるから注意するよう達しがあった。宮城送りとは「死刑」の執行を意味することは衆知の事実だ。

○
 こうした酷い事件も、終戦後——多くの加害者である特高刑事の中から「有罪」の判決を受けた者も出たが、僅か刑事の3名だけ。というのは△戦時法△であったことと△証拠不十分△で、△起訴△出来なかったのだと云う。3名の元特高係は、被害者の男の一人が「折れた前歯」を証拠に起訴したのを裁判で認められたのだが、他の多くは有罪の確証が認められない筈、いまに到っている。

被害者にとっては、まことに痛恨極まりない思いであろうと推察する。

○
 ここで、若槻氏の談話を、かいつまんで述べてみよう。氏は△戸部署（横浜市中区）で、いきなり、特高の先制攻撃を受けた。燃えた煙草の火を、額に押しつけられ、殴られた。しかし、私なんかは手ぬるい方で、ただ一人の女性だった川田定子さんなどは、女だけに悲惨なものであった。丸裸に剥かれて天井から吊るされた。文字通りの「吊し責め」で、所謂、言葉の上だけの「吊し上げ」ではない。その上での「凌辱」であった。例えば、洋傘の尖がった鉄棒の先で、腹部や背中や局部を突かれ、何度か「失神」もした△と語っている。

○
 定子さんは川田思考氏の細君であった。アメリカから持ち帰った△労働運動の文献△が横浜水上署の眼に触れ、それが陸上警察署特高係の絶好の餌となったのだ。当時、獲物もなく、精力を持て余していた戸部署の特高係は、帰国したばかりの川田夫妻の持ち帰った文献をきっかけに、出版関係

を洗いかけたのだが、中でも、アメリカ仕込みのモダンでインテリ。美貌の川田夫人を眺めては黒蟻にたかられた白い芋虫同様、ひねりくねり逃がれようとする女の苦しみを、見て、その妙味に耽っていたのであろう。

若槻氏や畑中氏は、夫人への拷問の模様について、詳細をさけてはいたが、それは夫人へのいたわりであったであらうし、それだけに相当苛酷な拷問図絵であったであらうことは想像出来る。

○
 封建時代の昔から、女性に対する拷問の種々相は悲惨を極め、それだけに夫人の苦悶も亦一入であったらうと推察されるのである。

○
 帰国早々にして、故国の警察署で、丸裸にされて凌辱の拷問を受けようとは、流石の夫人も予知し得なかったことであらうが、夫人は、その後、この衝撃がもとで、頭がおかしくなり、病氣後、死亡したと云う。

異常な戦禍の連続であった当時の日本——その異常さをうまく利用して生きた者も多かったが、大部分の国民には冷酷悲惨——特に女性には余りにも酷かった。これはその一例でもあると云えよう。



あさじ

エロス
の使者

孤

独

谷

信 三

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

カット・室井亜砂路

私はこの文を読んだ人の批判が欲しい。批判によって私が孤独でなくなるから。それにしても私はいつまでも孤独だと思う。他の人が僕のことを、ああいうことはやめなさい、君はもっといい生き方にその力を転用させなさい、などと言っても私はやはりその言に動かされることはないし自分はやはり自分の思う通りにしか生きることが出来ないと思う。

人の言を容れられないのは、自分なりの生を納得していて、それをけっして他の人に譲り渡せるものでないことを、知っているわけ

だ。その点ですごく孤独であるが、同時に、人が人を求めずには生きられないのも、その孤独の底で知っている。私が批判が欲しいと言ったのは、それによって、私が心の底で他人と立ち交り合えるからである。

それにしても私は、私の快感の依ってくるところ、その確かな感覚を私だけのものとし続けるだろうし、その快感を手離しはしない人間として、他人と交り続けるだろう。だから私という物体は、自分と他人の間を、ゆらめき動き、そしてそのような人間としての私

を、死ぬ迄引受ける存在であるのだろう。

生きるものとして快感を得るのが何故悪いことなのだろうか。私は、ごく自然にそういう世界に入っていた。始めに私を受け入れるような世界があり、ある日気がついてみると、いつの間にかその大きな口を持った世界に、吸い込まれていたのだと思う。

このことを自制心が弱いとか、理性が弱いからだとか言って、片付ける道学者じみた口調を私はとらない。そのような存在として私はあるのであり、生まれたときから、いや生

まれる前から、私はこうあるより仕方がなかったのだと思う。宿命論者だなどと言ってももう遅い。

私が私の持ちものを一人の前にさらすことにひかれるのは、それが快感そのものであるし、ほとんど他人によってその快感を教えられたものではない。ほとんど言ったのは、例えば風呂屋に行けば、裸になるとき、番台にすわって見下ろしている女、室内にいるためか、たいていは色白の、また、たいていは小太りの女の視線を少しは意識せずにはいられないし、海水浴場とかプールとか、裸になる機会は、幾らもあって、そんな時には他人が目の前、もしくは体の前にいなければならぬからであり、いつでも周りに他人がいる自分を発見しこそすれ、自分一人で身につけられる快感はなかなか無いからである。それでも、その快感はまさしく私が引っ張り出したものであるし、それは、こうすれば人は確かに目をそむけるだろうというような、手応えのある感覚として私を充足させ、のがれ難い誘惑として現われるのである。

この点で、少しく知能的だと思われるのは動物はこういうことをしない、筈だからである。人間に近い類人猿にも、また、このよう

なことがあるとするなら、私は、これを人間特有なものだと言う考え方を、改めなければならぬだろう。

○

私は、まず汽車にのります。余り年老いた女性や、叫ばずにはいないような若い女性は目標から除きます。

女性は、性的な夢のうちに存在していると、いうのが私の考え方です。そして、それをさまたげているのが、私達の住んで仕事をしなければならぬ昼の世界です。夢の世界また夜の世界に住んでいて、昼の世界では目隠しをしなければならぬような女性を私は素早い目によって区別します。足の半分でもそのような世界に踏みいれていく女性がいたら、それも私の楽しみの対象です。そして大抵の人が夜、夢をみることに、私はすべての人の魂の出来工合の同じであることを信じざるを得ないし、私の行為は、夢の中にいるに似て甘美で断ち切り難い誘惑のある、異質だけれども享受してしまうと体ごとのめり込んでしまわざるを得ないもので、私は未だそれに接したことの無い人達には『くい改めよ、そうすると汝は救われるだろう』というような、宗教的な気持で、接してないとも言え

ないのです。と言うのは、まず最初には、私の発情があるからであり、私は前に腰かけた女性の前で、どうしようもない誘惑を押さえきれないからです。

最初に快感指向があり、女性がその席にいる間中、私は夢うつつで、私の快感追求に耽るのです。勿論、意識はあるし、前にも書いたように女性の出方をいろいろかがいながらのことなのです。通常の意味での夢うつつとは違います。自分が別人のようになっていたという他、適当な言葉はありますまい。そして、それをしてはいけないという禁止の言葉は勿論、私には無いのであり、然し確かにその都度何かの決心はするのです。発情がまず始めにあり、それをおぼろげに取り巻いているのが、やはり何かの禁止の軟体であることも確かのようにです。宗教的な気持とか、決心とかいう言葉を私が書かざるを得ないのも、そういう事情があるからに違いありません。

○

私は女性と視線を交すことによって、彼女との遊びを始めます。座席についてからではなくて、汽車を待っている時に、私は私の目と反応し合う女性を探すことによって対象を

見つけます。私の孤独は、見つめ合うときから、いや、まさしく発情し出したときから融け始め、対象をみつけたとき、その女性は、彼女自らの視線によって、私の体の後にある特有の影、もしくは、光を識別するのでしょうか。私はそうすることによってしか自分の孤独を融かさないのです。

最初に私が、自分と他人との間をゆらめき動くとき書いたのは、そういうことであり、私自身の孤独が融け込めるような世界のみを信じていると言えましょう。そういう世界に解消する孤独を私は背負っていると信じているのであり、反対にその恩寵の中に守られている私には、最初から言うべき孤独などはないのかも知れません。それでも、この現実世界においては、まぎれもなく孤独である、と言えます。

三人の女性がいて私一人の時には、私は、ほとんど無造作に行動を起こし出します。

通路に他人が立っているときとか、私が幾ら隠しても見られて危険であると思われるときには、私はいらいらした気持で、雑誌などでまぎらそうと無理に読んだりしなければなりません。

私は、女性の横に席をとらずに前にすわり

ごそごそと始め出します。そうすると正面の彼女は、必ず興味を引かれるようですし、いくら眼をそらそうとしても、結局は私のしていることを目にするわけです。

通路をへだてた隣の席の人に気づかれぬように私は新聞紙を二つ折りにし、片方の手で持った新聞紙でさえぎります。私は、わたしの行動を見てもらいたために、もう真赤に頬を染めて横を向いた女性の気をひこうと咳払いしたり、足を鳴らしたりします。そうしてその間中、私は奇妙な安心感の中にいて女性のいろいろな動きや反応に拘らず、しんとした緊張感、生きているのだという感じ、気持のふくれあがりなどを感じます。私が恩寵の中にいる感じは、そのとき私のものであり、私がまるで違った人間であるという認識は、私を王族の座に列し、あまつさえ、色白の柔らかき奴隷どもよ、汝らはどうして目覚めないのか、と心の中でつぶやいたりしています。

○

私が旅に出、田舎の朝早い列車にのるときには、私はもっと行動的になります。他人がまばらだという理由で……。一つの箱の中に私と、働きに出る女性が、一人だけというこ

とさえあるのですから……。

そんな時には最初に二言、三言話しかけ、私が悪い人間でないことを知らせてしまいます。そして、私の与える印象というのは、決して相手が言葉に出さないでも、悪い印象ではないということを私自身がよく知っています。暇がある限り旅に出ている私は、旅につきものの憂愁、ロマン、飛躍を身につけています。あまつさえ孤独だと信じている私には、人をけっして恐れさせない人なっつこさがあると思うからです。

そのうえで、私は始めるのです。ファスナーを下げ、長時間そのままにして置き、女性が、ときどきこちらをみやり、逃げ出さず、前の席から動かないことをみてとり、女性が私の顔と注意箇所とを交互に見やるようになり、時間のせいで慣れてしまうと、私は次の行動に進むことにしているのです。

この間、汽車はもやのかかった中をゆっくりと移動し、規則的な通過の音のみで他にはもう何も聞こえない中で、注意をただ一点に集中させ、前にすわっている「私のものである女性」の交換の中で私だけの快楽追求をするのです。

列車の外のただ青い風景が見透かせること

によって現実であることを思い出させるのですが、どうかすると記憶も定かでない、夢のうちの時間に還ってゆく感じを私に持たせるのです。そんな時の私の頭脳の大部分は、未だ開発されていない未文明なものだけになるのに違いないと思うのです。

私はその夢の中をさまよった末に、かろうじて自己を取り戻し、白い霧の中で、再び規則的な音をたてる汽車の中で、オーバーに身をくるんでしましますが、妙にしょげた気分です、然し、見られていることに軽い緊張をおぼえたまま、実にその一点だけが現実に連なっていて、あとはこの世のものでないような幻のうちにいると思わざるを得ないのが常なのです。現実の「私の女性」が降りてしまったあとでも、私には、汽車の通過する音が単調にきこえるのみで、自分さえ形の無いものに思われたことが幾度あったことでしょう。私が働きかけたその瞬間瞬間の連続した時間の長さだけ、私は私の実存から触手を出し、感じたということでしょうか。

私はこうしてだんだん私の深みに入ってしまったわけですが、遠くに旅に出て、知己もないところに行った場合は、私はもう無造作に快楽追求をしてしまいます。小さな駅の待

合室で……。人数のまばらな汽車の中で……。あとから乗り込んでくる人は私を必ず避けまです。その頃になると、このこと自体がすでに私の楽しみであり、私の存在様式になってしまいました。避けた人が周りにいて、ちらちら私の方をみやるということがあるだけで、私は慰められました。

私は多分、そういうことにしか意を用いない、しつらえられた人間の形をした浮遊物なのでしょう。しかし、そういうことにしか意を用いないことによって私は私であると居直ります。私は人間がどういう形をとって生きてもいいと信じているからです。私が孤独のうちに育んで来た信念は、したいように生きるということにしかありません。その中にしか人間の真実はないと思っていますのです。

それから私は、もう一つの私のしたことを告白しなければなりません。これだって世界に対する私の孤独の然らしめるところだと思えますが、鏡を使って隣の便所をのぞく、ということなんです。私の隠れた楽しみ。便所に入り込み、二時間も三時間もネバッている時の充実した気持。

横に飛び出す水沫。立ちションの女性。入ってきたたん水音をあげる女性。紙を使わ

ない女性。生理をとり替える女性。私はこの世の女性を物としてしかみていなかったようです。

この「のぞき」は然し、女性が見られていることを知らないということが、私の方で不満だったのか、長くは続かなかったのです。尤も、私はその頃に結婚し、結婚相手にいるんなことを試みるようになったからかとも思えますが、しかし、きっと結婚しなくとも私にはもう続かなかったに違いないと考えています。私の不満は、露出で解消しこそすれ、のぞきではけっして解消されないと思われるからです。

○
のぞきとは何か興味本位だけのものであり、私の孤独は露出によってこそ全般的な宇宙との連なりを感じるのですから……。

私は世界との連なりとか言うが、どういう意味で言っているのだろうか。私は最近はいないが、野ぐそというのをもっと若い頃よくやったのを思い出す。何かほこらしい気持が一日中続き、そのためにたしかに快適であった。私だけというひそかな気持。草いきれと大気のおい。遙か遠くより、やっと聞こえてくる街のざわめき。それらが私の脳細胞に

微妙な変化を与えたに違いなく、いやなに幻想だよ、と思ったとしても、その快感は何ものにも代え難いのであった。そして若かりし頃の私は、それを機会ある毎に選んだのは言う迄もない。しかし、私の精神構造はどうなっているのだろう。露出の興味がわくようになると、それまでの野ぐその習慣を、いとも簡単に止めてしまったのだ。つきものが、ある朝突然に、めざめとともに、とり払われたように……。

私は受け身な人間には違いないようだ。快感をこの世から受け得るとなれば、誰が邪魔だてしても受け身の姿勢を崩さずに、受け取る。この世の成り合いから受け取れる快楽には、けっしていやいやなどしない。それと同じに、次の対象が見つかる、簡単に前の快楽を放り出してもしまいかねないのだ。私は孤独だった。そして、その孤独が、次から次へと流れゆく人のあえなさを、当然至極のものと受入れることが出来たのだ。

私が次々に興味の対象を変えていったからといって、どうして他人が非難出来ようか。もし私が次から次へと女性を渡っていったとして、女性の方でどうして、私に非があるなどと言えるのか。私は前にも書いたように女

性を、物を見るような目付でしか見ない。快楽を得るための手段が、直ちに色恋沙汰でなければならぬとは納得がいかなぬ。

然し、事情は変わるものである。放浪の終りに、色恋ではないが、私は愛してしまったのだ。

彼女も又孤独な女性で、私と同じように、強い特徴を持っており、私が始めから発情していたとするなら、彼女は女性にありがちな性的なことは少しも知らず、その代りにつましく生きること、この世を受け容れていたのだった。そして、その姿勢が強かったように、開眼した彼女の性的な力も強大であった。性的な力とエネルギー全体は、どこかで繋がっているように思えてならない。

だが、私の愛は、彼女を得て初めて、いや彼女とともにいてサディスティックなプレイをしている間中は確かにあった。しかし私の孤独は、彼女と離れると、すぐにまた私にとり付き、私をあてもなく旅立たせるという工合だったのだ。

私は今、自分の昔を思い起こし少しセンチメンタルになっている。どうしてあんなことをしたのだろうか。今はもう、ほとんど露出、のぞきはやらなくなっている。今はこれ

まで発情のみに頼ってきた自分を、少しばかりうらめしく思う。私の発情、私のロマン、今は幻想のみが頭を駆けめぐる。

○

私の彼女はミチという名だ。孤独であって愛に対する感応を奇妙に欠いていた私は、現在、ミチを痛めつけることによって、私自身の愛を得ていると信じている。鞭打つときミチは、私に何かを哀訴し、憂愁と悲嘆とを込めた目差しで私を見る。その瞳は私を打ちのめさずにはいないのだ。私は、心の中で愛をこめて、ミチ、ミチと呼びながら、反対に鞭打ちをますます強くする。

私はその頃から新たな異常な快感を憶え出し、女性を物と見ていた心で、ミチを愛していると思わざるを得ないのだ。

私にサディスティックな所があるのは何故か。私もまた人の子として、永遠であり絶対であり、真であるものを求め続けて来たに違いない。いやそうであった。いやこれからもうであれかしだ。だが、それは愛に対する無感動として挫折に終り、私の始めの希望が強ければ強いほど、その反動がきたのだと思う。私は肉体を使って、そいつを私の内で殺そうと願っているのだ。

私のミチ。お前の受難が強ければ強いほど私の中で美神はうち倒れ、私はお前のうめき声とともに征服感に浸って、お前とともに天上に飛び上るのだ。

ミチは昨夜、私が買ってきて与えた純白のシュミーズをつけたまま私の前に近づき、耳許でつましく礼を言ったのだった。ミチは今夜も永遠の愛を、事の始めに私に誓い、いつまでも私をしたうと言った。

ミチよ、私の従者よ。お前の苦悩は私が静めてやろう。私はこうささやきながら、ミチとダンスを始める。永遠のダンス、そいつは私の遠い昔の夢の、残りカスである。私はダンスをしている間に、どういう風にやろうかなどと、ミチと数少ない問答を、取り交すのだ。私の従者ミチよ。このとき、私はお前をいとおしむ。しかし、鞭打つときお前はもう物でしかない。私の復讐を、お前は齒をくいしばり耐えなければならぬ。お前が辛い孤独な生活を小さい時から耐えてきたと同じ場合に。つましく。

私は今、筆をどういう風に進ませたらいいものか迷っています。私にとって、行為は勿論大切で、私のそのときの心理とともに、言

葉のないそれ自身充足した世界にかけのぼる手段であり、血しぶきの一瞬、私は、私の目指す果て迄一気にのぼりつめるのです。が、それが正しく果てだとは言えないのです。未だ未だ奥があるように思います。私は、私人の生命の奥迄所有したいのです。そして間違いなく今度は、破壊してしまいたい欲望をどこかで感じます。

このようなアンビヴァレンツに支えられている私のサドを書くとするれば、際限なく奥深く進み私の筆は止まるところを知らないことでしょう。そして、現実の私は、私流のダンスをミチとまず最初にするのが習わしだとは言え、それからの行為は多くの人が本誌に発表されているようなプレイを、一步も出ないようなのです。その上、長い間、孤独であった私は、誌上のものをあまり参考にしないし却って色々な責め方があるのに驚いているぐらいなのです。

熱中すると、その傍を流れてゆくものが目に入らず、全てのものを自分のものにしようとする、却って自分のものが無くなってしまふと思っているからでしょうか。

私の孤独はそういうものとしてあったに違いない、私はいつの頃からか、私の頭脳を支

配してやまなかつた観念のために、私の体を燃やすことを少しも厭わずに若い情熱を培いまた燃やして来たのです。

何が背徳行為なのか、何が聖なるものなのか。そこには一つの真理があるはずで。そして、誰も彼もが、同じその真理を頭上に戴くことは出来ないという宿命があると思います。これは現実の世間をみてくださればお分かりの通りであり、私は私の真実を掴もうとつっぱしってきたのです。

やはり、私はミチと交わしたその夜に限ってのことを、気がすむ迄書くより仕方がないと思います。プレイの最中に思いつきでいろんなことをするように、想像によって進む筆は止まることを知らないからです。そして、その思いつきじみたことなどを書くのは、今の私には面倒なのです。私は今、明らかに心理を重視しているのです。私が孤独のうちに育んできた私自身の心理を……。

私は前に、私の美神がうち倒れると書きました。その通りです。私は若い頃から、深夜の町角や黄昏れどきの公園を、理想の女性を追いかけてさまよいました。汨々と燃る黄昏の浜辺を一人、ゆえ知らぬ情熱をもて余し、逍遙したこともあったのです。そして、その

海辺で一糸まとわぬ男女がたわむれ合い、うち笑い、転げながら最後の一つになるのを見ざるを得なかったとき、私のそれ迄の考え方は消え去ってしまい、不思議な予感が私のうちに目芽え、その予感のうちに私自体が融け去るような世界を垣間見たと信じたのです。私はそれ以来、その予感の実現に序々にではあるが務めてきたつもりです。

あのとき、あの二人を打ち殺すほどに体力があり、もしそうしていたなら、私はサドの同調者としての自分を、その時以来、はっきりと自覚出来たのでしょうか、私はあの時、人間同士における信頼、友情を全く失う迄には至っていなかったのです。あまつさえ、息をひそめてうかがい、ため息については、私の、情熱の種類を理解し、納得したものでした。即ち、私は、あのような男女調和のなかには住めない人間だと……。自分は非調和の世界に住む人間だと、予感してしまったのでした。

○
ミチは、純白の薄物を身につけねばならなかった。充分に行き届いた光の中で、ミチは私の昔に愛することの出来た実体の再現として、美しくあらねばならなかった。ごく薄い

布を透してうかがえる肉体のありよう。私はそれらを、古代ギリシャの一本調子の、然し神のみが知るような妙なる音楽を、心のうちでききながら、あかず眺める。

そして、強い酒を少しずつ口にふくませながら感興が一通り去ったところで、ミチの肩より下に流れる黒髪を束にして、手首の所にゆわえるのだ。その上で、再び永遠の愛の誓いを短く言い添えて、それからミチの体に、さまざまないたぶりを加え始めるのである。

私は前に「血しぶきの一瞬」などと書いたが、それは比喻にすぎず、現実にはそこ迄はやらない。ミチがあんまり可哀想だからである。これ迄、私は大変行きすぎたことを私の孤独のうちに言ってきたとは言え、現実のミチという対象を得てからは、人間的な感情が急速に芽生え、生長しているのがわかるのである。

○
ミチは自由にならぬ自分の体の状態を知ると、もう冷静でいられないのに違いありません。ミチの私を迎える気持が高まってくるのを知るのは、私には容易なことなのです。この点で、私達のプレイは、お互いの気持をほとんどないがしろにしないプレイだと言うこ

とが出来ます。更にミチが望むなら、彼女が欲するようにもしてやります。

私は彼女の足をいっぱい引いて結び、煙草を楽しみながら、孔雀の長い羽根でくすぐってやります。ミチはいろんな言葉を口ずさみ、私のプレイ心を昂ぶらせます。

プレイ中にミチが言うように私は悪い人間です。気持が昂ぶるにつれて、愛するミチですら、ただの物としてしか眼に映らなくなってくるからです。その時迄に室内の光は弱くしてありますが、それでも充分に物の形は見極めることが出来るのです。

私は物の形に発情します。私の発情は物と一緒にであって、私自身に、フェティシズムの傾向があるのではないかと思います。私は未だそのような世界に入っていたことはありませんが、物に囲まれて暮らさざるを得ない人間が、特定のものに発情するのは理解出来ないことではなくて、そうするのが、人間の精神のひとつの素直な現われであるべきだと思います。私自身は、小さい頃からの放浪の結果、そうする機会がたまたま無かったに過ぎないのであって、今、ミチを前にして、明りを全く消してしまわないのも、ミチの体に発情しているのだと言う風に理解出来まし

よう。

もし、私のように旅を続ける人がいたら、私が次のように言ったとしても、充分に理解出来るのではないかと思います。『私は人体だけでなく、外界のあらゆる一切のものに発情出来る……』と。

次のような話を、ここで語って置きましょう。これに全く類する思いは、私の胸のうちを放浪の間中よぎっていたものであって、具体的にここで紹介するために抽象描写するにすぎませんが……。

夕暮れ、向こうにたたずむ家々。夕げの匂い。そして、私の一夜の宿となる緑の大木の下。私の体は石に大地の冷たさを感じつつ横たわっていながら、私は自分の体を失った感覚の源泉にすぎないことを自覚し、ようやく満天に輝き始めた星が、木々が、風が私を祝福してくれるのを知ります。私が生きていくことを……そして生き続けることを……。向こうに見える街々と、そこにいるであろう家庭の子供達の幻は、私の孤独を一層、強めはするのですが、木々の一揺れが私に、遠くからの風を送り、それは耳たぶを撫ぜ、そこから入り込み、奇妙なことに私が、その家庭の子供達に劣らず、楽しく、強いことを思い

出させてくれるのでした。私の発情に自然は充分に答えてくれ、私が世間的には孤独であるにも拘らず、本当は皆と同等であることを知らせてくれるのでした。

とは言え、この認識が、それほど孤独の淋しさを減ずるものではないことはいふ迄もなく、苦しみの中にこのような認識を得たのに違いありません。

今、ミチを得て私の孤独は少なくともミチという間は孤独ではなくなりミチは私のペットであると共に、ひとつの神であるともいえるのです。ここに私のサドからマゾへの転換点を、指摘することが出来るかとも思われます。

私はミチを、したたかに打ちすえると、快感の異常な高まりを抑えるため、しばらく休憩をするのですが、休憩の後には彼女を自由にし、私への奉仕をさせるのです。ミチには女性に多く見受けられるであろうファリシズムがあり、何よりも私への愛情の故でしょうが、彼女が最初に知った男から教えられたという、彼女一流の流儀で奉仕してくれるのです。然し私は、後のプレイ続行のために、ある程度に、止めて置くように言っているのです。彼女はそのことを理由にして、あなたに

もマゾがあり、それが、そのような時にほの見えるのだ。などと喋りますが、私は耳を貸しません。成程ミチは私の神だ、然し断じて女王様ではないのだ、私の友だ、召使いだと言いつ返すのです。

男性がある目的をもって欲情を抑え、快楽の引き延ばしを図ることは何もマゾではないのだなどとミチに説明するのですが、ミチが怒らないでね、と前置きして話したのを聞きますと、私は考えざるを得ないので。そして、諸氏にそれを問いたいと思っているのです。

私は、マゾにも転換可能なのでしょうか。私は前に自己破壊の衝動があるとも書いた筈です。それは確かにある。然し、私は今迄、孤独な一人の男性として各地を放浪して来た者です。肉体を兼ね備えた物としての私は、もし現実にそういう衝動で、私の身体を傷つけていたとしたなら、私は旅をする者としてこの世に立ち現われることは不可能であったでしょう。

ミチと親しく暮らすようになってこの点を衡かれた私が、このように動揺するのは何故でしょうか。

私の可愛いミチ。お前の口にしたことは

このように私を考え込まざるにはいけないのだ。私は放浪し、自然との交感を私の運命として歩んできたのだった。種々様々な性癖を私がその間に身につけたとしても、私は自分の身体を傷つけるような趣味だけには無縁だった。ミチ、私の魂の中に迄入ってくるミチよ。

○

「怒らないでね。私が踊り子だったとき、知り合ったあの男の人のことよ。踊りがすんで一休みしていたりすると、チョコレートを持ってきてくれるようなやさしさが、あの人はあったの。私は小さい時から一人ぼっちで育ったけれど、他人の方が信じ易かった。あなたは違うわ。おもしろいわね、私と同じように一人っぽっちで育ちながら、誰をも信じていない。あなたは男だから？　そうよ、そうに違いないわ。」

あの人は私にいろんなことを教えたわ。あの人はチビで、背は私より低かったの。あなたは体つきも感じも違う。時々他の踊り子の友達からも、しごく真面目で大人しいとあの人のことをきいていたから、あの人が、私の靴をちゃんと揃えて持ってきたりしてくれると、悪い気がしなかったの。もうそのキ

ャバレーに務めて十年以上になるときいていて、私としては、いつか友達以上の親近感を持っていたというわけよ。私が初めて彼の部屋へいったとき、私は未だ処女だった。処女だったのよ……。彼が、そういうことに全然知識を持っていなかった私を、今のようにしてしまったの。今でこそキャバレーと言っても、素人さんだって平気で遊ばれるようだけど、あの頃は今より暴力団が入り込んでいてそれはうさんくさいものだったのよ。あの人は、そのママに拾われた人で、店の掃除から、ママの身の廻りの雑用一切まで、全部やらされてたんだけど、ママのアパートでは便器迄、なめさせられたと言うの。掃除の仕方が徹底していないなどとテイのいいことを口実にされて……。あの人は、まだ少年だったでしょ。断わり切れなかったわけよ。あの人があなたがそれでも似ていると言うのはね……。いやよ、そんなこわい顔をするのは……。だから怒らないでねっていったでしょう。違うのよ。あなたとあの人は。体つきも何もかもが違うの。だからそんな顔しないで。ネ。

ただ、私の感じたことを言うからねえ、あなたは、私の例の奉仕プレイであの人と同じような反応をするの。私はあの人に最初から教

えられて、普通のことかと思ってたけれど、あなたは始め驚いてたわね。

そりゃ、遊び方は全然違うわ。でも結局は同じことに落着くの。とくに、最後まで行きつかないようになっていうところはまったく同じだわ。違うのはプレイの方法だけ。例えばねえ、あなたは薄物を私に着せて縛るし、裸にする時には自分で剥ぎとるけれど、あの人は、絶対に縛らないし、私にぬいでくれと頼むの。あなたは私の顔の上から浴びせるけれど、あの人は正反対に浴びるのを喜ぶし、飲ませて欲しがったわ。私がいじめたみたいになっちまうんだけど、私としたら、何も彼もあの人の言うままなのよ。結局はあの人がかうしろ、ああしろと命令したのよ。

今は、あなたが私をいじめるようにして命令してくるわ。でも、立場が変わっただけであの人が昔、私にやったようなことを、今は私があなたにしている。そして、あの時の私の代りをあなたがしているだけ、というような気がするようになってるの。それでも私、今のうちに、いじめられる形のほうを嫌だとは思わない。それどころか、今のほうがずっと……。何と言ったらいいのか……。私は昔からそうだったみたいなの。私、なんだか自分を

取り戻したような気がしてるのよ。ね、それで、私がまるでさかさまになったように、あなたにそうなって欲しくないのよ。私、こんなに嬉しく楽しいときはないもの。

でもね、あなただって、いつかさかさまになるときが来るようで不安なのよ。あなたって、私が一生懸命に奉仕してる時に、やめろって強い口調でおっしゃるでしょう。なんでも頼むようにしていたあの人も、それだけは一緒なのよ。……私ね、今、本当にあなたを

愛してるわ。それでも考えてしまうの。一人で考えていると不安になるの。今、もしあなたがさかさまになると、私はもうついてゆけないと思う。

私のことを特殊な女だと思えないでね。普通の女よ。でも、……普通の男は私はいやなの。もしあなたと一緒にいられなくなったらと思うと……。あなたはあまりに自由よ。どこへでもふいと出かけてしまう。それが不安なの。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

| | | |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

本当に人間って不思議だわ。私、わからなくなってしまうの。あなたとあのひと、同じ男で、同じ欲望があって、あの人はマゾで、あなたがサド……。私ね、小さい時から人よりは苦勞してきたから、貧乏性なのね。これから先々のことをやっぱり考えてしまう。私がさかさまになったと言ったって、私の場合は、あの人の命令通りに動くだけで、自分からはほとんど何もしなかったの。だから、私はそうでないと云えると思う。……だけど……今、あなたがもし……こんなこと考えるのはひきょうかしら」

○ 私とは又もや、人間の心のわからにくさ、多様さに直面して頭を抱えるのでした。ミチはいつの間にか、こんなことを考えていたのでした。そして、私は、私の欲望のうちに果てさかさまのような現象を求める時がないといいきれんだろうか、と考えこまざるを得ないのです。かつて、未だ知らなかった性癖をいつの間にか身につけており、自分のものとしたことがあったように……。私は、他人の心のわからにくさは、そのまま自分の心のわからにくさに通じるような気持ちに陥ってしまうのです。

(終)



能登で迎える三日目の朝だった。
みぞれは、もう止んでいたが、晴れたかと思うと、急に曇ってくる。気分の変わりやすい人をお天気屋というけれど、能登の天候はヒステリカルだった。それが名物といわれる

—— 告 白 小 説 ——

旅の虐被

(3)

由 利 美 千 子

味なのだ。天候は、それにふさわしく荒いのもかもしれない。

朝食が終わって着換える時、彼は、昨日フンドシにした荒縄を私の首にかけた。私は、もうさからわなかった。それが、この荒涼とした風景にふさわしい私の衣裳だと思えたからだ。

彼はデザイナーが丹念にドレスのデザインを作りあげていくように、私の裸身を縄で飾った。

ネックレスのように首にまわした縄は、みぞおちの辺でペンダントのかわりに丸いコブをつくり、両方の乳の下から背にまわし、背で交叉して、もう一度、乳の上をぎゅうっとしめた。

乳房が上下の縄にはさまれて、西洋梨のような形で前へとび出した。

それは裸体にまとった縄の衣裳で、手の自由はうばわれていなかった。ただ彼の好みの衣裳を着せられたというだけで、美しいドレスを着せられるのと同じ意味だった。

「さあ、今日はもう一度、金沢へ戻ろうね」
彼は云った。

「どうして？」
「約束じゃないか」

「どんな約束した？」

私の胸に一瞬不安の影がさした。彼の『約束』という言葉は恐ろしかった。

「兼六園で君は、もう成巽閣へ行くのは厭だといったらう」

（そうだ、私はケープの下の縄目を気にして車へ戻りたがったのだ）

「ボクはたしかに、帰りによろうと云ったはずだよ」

（たしかにそんなことを云っていた。しかし彼が普通の姿の旅行者として私をつれていてくれるはずがない）

私も、もう大分、彼という人間がわかってきていた。

（今度は、どうするつもりなのだろう）

幾分、私は大胆になっていた。

「とにかく、服を着ていいよ。ドレスアップは、あとで又、するよ」

彼はというと、私にセーターを着せ、例のケープはスーツケースにしまつて、そのまま宿の人におくられて車の人となった。

素裸にかけられた縄がチクチクして、上半身が痒かった。私はモゾモゾと体を動かしたが、縄のかかっている所がすべて痒いのだから、たとえ手が自由でも、その痒さをとめる

ことは出来ない。乳の下を搔けば背中が痒いし、背中を搔けば胸が痒かった。

「かゆいわ」

私は声に出して訴えた。

手足が自由なのに、こんな苦痛があるとは思わなかった。

「かゆいのよ、どうしたらいい？」

私は泣きそうな声をあげたが、彼は知らん顔で運転を続けた。

私は、車のシートの背もたれに自分の背をこすりつけたり、胸や脇に手をいれてポリポリと搔いた。しかし、搔けばかく程、痒さは増すようだった。

「お願い、縄をとって……。痒いの。どうしても縛りたいなら細引にして……。細引なら痒くないわ」

私は云った。

彼は皮肉な笑いを口元に浮かべて私をジロツと見た。

「君は囚人なんだよ。囚人が、そんな贅沢をいうもんじゃない。荒縄を素肌に巻いたら、かゆいぐらい知ってるよ」

にべもない返事だった。

「ひどいわ。先生のいじ悪！」

「君は、だんだん無遠慮になって、ボクの好

きな言葉を口にするようになったね」

「だって、こんなにかゆいのは我慢、出来ないわ」

「痛いのは我慢、出来るのかい？」

彼はというと、車をとめた。

そして胸から万年筆をとり出すと、私の指にはさんでギュッと握った。

「痛っ！」

思わず大きな悲鳴が、私の口からとび出した。びっくりするような痛さだった。指が折れるかと思った。

彼が手をゆるめてくれてもまだ、私の心臓は不意の痛さに音を立てていた。

「こんなこと、たいしたことじゃないよ。君の指の間はまだ二カ所、使える。手を出してごらん」

いわれて私は、思わず両手をうしろへかくした。

「おだし。出さないのか。おとなしくしないね」

彼は私の二の腕の、やわらかい所をつねった。

「痛い——」

「手を出すか」

「出す……出す……」

私は、先ず抓ねることをやめてもらいたかった。

彼は指をはなした。

私はほっとしたが、痛さの余韻はまだ二の腕に残っていた。多分、紫色の痣が残っただろう。

私が恐る恐る出した指の股へ、彼は万年筆とボールペンと鉛筆をはさんで、ギュウッと握った。

「あぁ……」

それは、痛いというようなものではなかった。

私はお小水をもらしてしまいそうだった。指が折れる……。

「やめて……やめて……」

私は絶叫した。

「昔の特高は、こうやってアカをいじめたんだそう。このぐらい、なまぬるい方だよ。ボクは君の指を折りたくないから、これでもかげんしているんだよ」

何といわれても返事も出事ない。私の呼吸は息をとめてこらえることに苦しくなると息をはき、又息をとめるので、正常には出来なくなっていた。ただ息をすることに一生懸命といったよかった。

「なぜ……なぜ、こんなことするの？」

私は、あえぎながら云った。

「可愛いからさ」

彼は急に手をはなすと、私を抱いて激しく唇を重ねた。

長い口づけだった。

私は、かわいたものが水をほしがるように彼の舌を吸った。

○

車は海岸ぞいに走っていった。

大谷峠を越えて飯田へ出た。灯台のある緑剛崎へは、そこからさらに半島の先端へ向かって車を走らせなければならなかったので、灯台は割愛することにした。

晴れてきたせいか、ちらほらと観光客らし

い人が多くなっていた。

「降っていればいいのに……」

彼は普通の旅行者と反対のことを言った。降っていれば人は少ない。半島の最東北の端にある無人灯台で、彼は又、私をいじめる新しいテを考えたのだろう……。

人気のない灯台のらせん階段を、彼に縄尻をとられて、素足でふんでみたかったように思った。

（私も、とうとう彼好みの女にされたのだろうか……）

私は思った。

（いいえ、私の血の中に、それを求めるものがあつただわ。彼に私がひかれたのは、彼の血の中に、引き合うものがあつたからなんだわ）

そうも思った。

「こっち側の景色は、やわらかいね」

彼が言うまでもなく、車の外にひろがっている海は美しく陽に輝いていた。温かい陽ざしだった。

外海が老女なら、九十九湾は中年の女のよう^{つくも}に静かで深く澄んでいた。

「君は泳げるの」

彼がきいた。

「泳ぎなら得意なの。人に教えられるくらいだわ……」

言ってしまったってシマッタと思った。

泳げないといえはよかった。

（何をするつもりかしら？）

彼には、うかつにものが言えないのを、今までに充分、知っていた筈なのに……。

「小木には温泉がある。風呂へ入っておひるを食べよう」

そのやさしさが、くせものだった。しかし、風呂に入れば体の痒さはましになる。

そう思うと、又、痒くなった。さっきの痛さで、ふと、痒いのを忘れていたのだ。

宿屋らしい建物は多くはなかった。温泉といっても、わかし湯なのだろう。それよりも釣舟や、遊覧船の発着場が目についた。

「風呂へ入る前に乗ろうか」

彼は云った。

車を預けて、釣舟を借りることは容易だった。船の中で食事をするといって、お茶の道具に折詰などを舟にのせた。

車の中から彼がポストンバッグをとり出して、それも舟に乗せると云った時、私の二の腕は、筆の穂先で逆なでにされたような気がした。

そのポストンバッグに何が入っているか、

私はよく知っていた。

船頭が一緒にいくというのをことわって、彼は自分でこぐといった。

(どうするつもりだろう)

私の皮膚はチリチリとした。勿論、私の縄の衣裳はまだそのままなのだ。沖へ出て、人目のない所で、私はそれをとってもらわなけ

ればならない。さもなければ、私の皮膚は痒さが嵩じて皮膚病になるかもしれない。

彼は上手に舟をあやつった。

舟は小さな岩だけの島や、岩の間をぬけて沖の方へ出て行った。

昨日の天気にくらべて、嘘のように静かだった。

内と外の表情とよくいうが、海の景色も内と外ではガラリと違うものらしい。

それにしても平日の早春の海に、釣舟の影は少なかった。

湾の中ほどに、緑の木のおい茂った島があったが、それも遠い視野にかすんだ。

「さあ、縄をといてあげようか」

彼が言った。

私は、いそいそと裸になった。

荒縄をといたあとは、くっきりと赤く痕になっていた。

「ひどい人！」

私は彼をかるくにらんだ。

けれどすぐ、私が痒かったあとを思いきりこすっているその手を、彼は後へ逆手にとりあげた。

「あっ！」

というひまもなく、私は後手にされ、細引

をかけられていた。

「ひどい……ひどいわ」

私は云った。

「こんな所で……」

「さつき君は細引でなら縛っていいと言ったじゃないか」

(どうしてそんな、ひとの言葉尻ばかりを、とらえるの)

私は、うらめしそうな目で彼を見た。

しかし彼は容赦しなかった。

細引は胸にも二の腕にもびしびしとかけられた。

そして、胴もおなかも、まるで小包でも作るように十文字に結かれた。

脚だけは自由だったが、腿のつけ根にも細引がまわされた。

私の体は又、身動きも出来ない程かたく縛られてしまった。

脚が縛られなかったのは、他のことが待っていたからだ。

「さあ、海にとびこむんだ」

彼は云った。

「こんな恰好で……？」

「心配するな、ボクが縄尻をしっかりと握っていてやるよ」

「だって……冷たいわ」

「水が冷たいのはあたりまえだ」

「でも……」

多分こういうことになるとは予期していたが、水の色を見ると足がすくんだ。

「さあ、立つんだ」

促がされて立ったものの、手を縛られて棒のようになった体は、立つだけでも安定感がなかった。

よろめくと舟がゆれた。その拍子に彼は私をぐんとついた。

「ひどい……」

私の言葉は波に消されてしまった。

鼻から塩からい水が、口とのどに注ぎこんだ。

心臓麻痺をおこしそうに水は冷たく身をひきしめた。

私は、やっと立ち泳ぎして水面へ顔を出した。

そのとたん、彼は私の頭を櫂のさきでグンとおして、水へ沈めた。私は海水を、したたかのんで沈んだ。苦しかった。私は必死に又海面へ顔を出した。

彼はそれを待ち構えているように、櫂をもって立っていた。

「どうして……どうして、こ、こんなひどいことを……？」

私は、とぎれとぎれに言った。

湾の中とはいえ大分、沖に出ていた。波が私の顔にあたる。私は、ともすると沈みそうになった。手が使えないのだ。ただ、縛られていない足だけをたえず動かして、水を蹴っていないなければならない。

「さつき見なかった灯台のある所は狼煙^{のろし}という町にある。昔、ここでのろしをあげたらしい。キミは、その女間者だ。誰に頼まれたのどこへ通信したの、それをいうまでは許されないのだ」

彼は言った。

「そんな、ひどい……」

私がいうと、彼はものもいわずに縄尻をたぐった。

私は厭でも舟の方へ引きよせられた。

「さあ、いえ、誰にたのまれた？」

彼は私の髪の毛をつかむと、水へ私の顔をつけた。

私は息が出来なかった。

彼が、やっと手をゆるめてくれると、私は僅かに水面に顔を出して息をする。

大きな口をあけて息をするので、その次に

彼が私を海面につけると、私はガバツと海水をのんでしまう。

塩からい海水に私は、むせた。

目からも鼻からも、血が出るような苦しさがかった。

細引は水を吸いこんで、私をさらに緊くしめあげた。

「さあ、どうだ」

彼は何度も何度も私の首を海面へつけてはあげ、つけてはあげた。

「ゆるして……。かんにんして……」

私は悲鳴をあげた。

「よし、そのまま休め」

彼は冷たくいうと、髪を握っていた手をはなし、縄尻をとっていた縄を長目に持ちかえてくれた。

休めといわれても、どうして休むことができよう。

私は海の上へ縛られた姿のまま仰向けに浮かんだ。

波が私の体をゆする。

棒のように私は海面でゆれた。大きな波がくると私は波の下に沈んだ。そして又、浮いた。

空が青かった。

水が塩からかった。

けれど私はやっと正常の息をとり戻した。

「これは大人の遊びなんだよ」

彼は言った。

「どうだ、参ったか？」

参ったというのは癪だった。

私は首を横に振った。

「よし、そんならもう少し沖に出よう」

私は彼が舟へ引きあげてくれるのかと思っ
た。

しかし、私の縄尻は舟の中の棧へ結びつけ
られた。私は大きな魚が舟によって引かれて
いくように、縛られたまま彼の漕ぐ舟の横で
波をかぶりながら引張られた。

手首の感覚がなくなっていた。

「どうだい？ いい気持かい？」

彼は私をからかった。そして、時々舟をと
めて、私の乳首を權のさきでついた。

そうされまいとすると、私はうつ伏せに引
かれていかなければならない。うつ伏せにな
れば顔は水面につく。

すると彼は、わざと權のさきで背中をつい
て、浮き上がらないようにした。

「ひどい……ひどい……」

浮き上っては彼にいい、もぐらされては水

をのんだ。私はのんだ水を排泄し、そして又

それが混った海水をのみこまされた。

もう足で立ち泳ぎする力もなく、魚のよう
に舟に引かれているだけだった。

○

随分、長い時間のようだったが、舟へ引き
上げられて縄をとかれると、そんなに長い時
間ではなかったように思えた。

縛られているということは、彼のとりこに
なっているということだった。

そして、私が彼のとりこであると同時に、
そうしている限り、彼の心を私は握っていら
れるのだ。彼も又、私のとりこであるはずだ
った。

だから縄をとかれると、云いようなない不
安な気持がした。

(縄は私の下着なのかしら？)

私はそう思うと、おかしいような、悲しい
ような気がした。

私はふと、子供の頃を思い出す。

同い年の女の子と、私の家の座敷で遊んで
いた。

床間に並んで違い棚があり、廻り縁になっ
ている大きな客間だった。女の子の遊びはき

れいだからといって、私たちはその客間で遊
ぶことを許されていた。ままごとをするにし
ても、買物ごっこをするにしても、広い方が
よかった。向こうのはしと、こっちのはしへ
お店を開いても、歩いていく道中がある。ま
まごとにしてもそうだ。

そして私は、その部屋が何十畳敷かの大き
な客間だと記憶していたが、本当は十畳ぐら
いの普通の広さだったのを、あとで不思議に
思ったことがあった。小さい子の体の大きさ
には広く感じたのだろう。今はもう、その家
もない。

しかし、その屋敷で私は犬になっていた。
友達の子が飼い主で、私は首に紐をつけ
られ四つ這いに這って部屋の中をまわった。
友達に紐のさきを床柱に結えつけ、私にチン
チンや、ワンとなく芸をさせたり、部屋の隅
においてあるお菓子を口にくわえてとってこ
させたりした。

私たちは面白がって、それをしていた。私
は犬になることに抵抗を感じなかった。

しかし、私達に紅茶をいれてもってきてく
れた母がそれを見た時、

「何をしているんです！」

と、大きな声で、それをとがめた。

持っていた紅茶々わんをおとしそうにして驚いている母に、私たちが驚いたくらいだった。

母は紅茶のこぼれたのをふきもしないで、私の首の紐をはずすと、

「あんたは……どうして……」

と、涙声になっていた。

その母の取乱し方が、子供心にやきついて離れなかった。

「こんな遊びをするなら、うちで遊ばせたりしませんよ。勿論、外でもいけません。何故こんなことを……」

母は上気した頬をしていた。

私の首を縛っていた紐を、母は手早くくるくるとまわめて手の中へもつと、部屋を出ていった。

母の剣幕があまりに激しかったので、私は父にそれをいわれ、父からも叱責されるかと思つたが、父は何もいわなかった。母は父につげなかったのかもしれない。

そして、今にして私は思う。

母の血の中にも、被虐を好む血が流れていたのではないかと……。

だからこそ、同じ女の子が二人よって、私の方が犬になっていたことに、はっとしたの

ではなかったか……。

今は亡き母に、その真偽をたずねることは出来ない。

けれど、もしかしたら、母が望んで出来なかったことを、私は今、しているのではないか……。

でも、もしそうだとしたら、それはあまりに悲しい成就のしかたである。

あの空で、もし、母が見ていたら、母は怒るだろうか、顔をそむけるだろうか……。

母は恥かしいに違いない。私も又、母に恥かしい。恥かしさなしに行なわれる正常な愛の讃歌ではないのだ。

(お母さん、ゆるしてね)

私は青空に浮いた白い雲に言った。

あの気ままな雲は、母に告げにくだろうか――。

「どうしたの、怒ったのかい？」

彼がきいた。

私は今、考えていたことを彼に告げようかと思つたが、やめた。

幼い日と同じように、彼に犬にされる日はいつかあるだろう。自分の口からそれを催促するようなことはいうまい。

もし、それを今、言ったら、母が怒るに違いない。私は私、母のことまで臆測でものをいうのはよそう。

「苦しかったんで、ほんとに怒っちゃったのか？」

彼は心配そうだった。

「いいえ、でも、一寸疲れたわ」

私は明るい笑顔を彼に向けた。

拷問に続く拷問と同じだった。

そこに愛という名の感情が、たゆたっているから、こらえていられるのだ。

私の体は縄をかけられていない今、厚いタオルと毛布にくるまって、のびのびしているが、縄をかけられたように縄目が赤い痕になっている。腕には紫色の痕もある。昨日、打たれた背中には、縄目とは別の痕が走っているはずだった。

私は毛布をかきよせて、そんな私の裸身をいとおしむ。

「寒いかい？」

「ええ」

水からあがって、かわいたタオルで濡れた体をふき、厚いタオルと毛布にくるまっても、冷えきった体は、そう急には温くならなかった。

「これを飲むといい」

彼はボストンバッグの中からコアントロのミニチュアの瓶をとり出して、湯呑茶わんについでくれた。

「リキユールグラスがないから、これで辛抱してもらうんだな」

そういう彼に、私は何とっていいのかわからない感情が胸へふくらんだ。

その洋酒は、私が好きだといつか彼にいった酒だった。

フランス産だというそのリキユールを、おいている酒場が少なくくらいで、普通の洋酒喫茶などには見かけないことが多かった。

いつ用意したのか、そのミニチュアを買ってきてくれたとは……。

「先生……」

私は言葉がなかった。

私がヘネシーのブランデーを用意したのは叔母の店にあったのを、他の小瓶にうつしてきただけだ。

しかし、彼はこれをどこかで探して買ってきてくれたのだ。

（有難う、先生……。私、先生に何されてもいい）

言葉には、とても出来なかった。私は、た

だ彼の目の瞳の奥へ、自分の瞳を吸いこませてしまうように、じっと彼を見た。

「さあ、のみなさい」

彼にいわれ、私はその甘くて、強い酒をのんだ。胃のあたりからキューツと、おなかがあつた。

「今夜は和倉へ泊ろうね。金沢までとばすのは一寸、無理だろう。ボクは一週間、仕事をしなくてもいいようにしてきた。まあ、ゆっくり行こう」

彼は云った。

私も又、一週間と叔母にことわってきているからかわないが、この私の体の痕は一週間で消えるだろうか。

当分、叔母と一緒に風呂へ入れない。その口実を今から考えておかなければ……と私は思った。

○

和倉温泉は能登の入口に近い。

私たちは能登をまわってきたから出口という方があっている。

彼は私が船の中で母のことを考えていたのを、よほど疲れて、ものもいえなかったのかと思っているらしく、一緒に風呂へ入っても

おとなしかった。

風呂は快かった。

体中に温かい湯がしみ通るようだった。

私は鏡に私の裸身をうつしてみた。

乳の上下にみみずが這っているような赤い痕が出来ていたが、腕は鬱血した血がひろがったのか、紫色から蒼い色にかわり、入れ墨でもしたように変色していた。

「ひどいわ」

私は、わざと彼に言った。

それは二人だけに通じる甘えだった。

「もっとひどく痕になっているかと思ったけど、たいしたことないね」

彼は、うそぶいた。

「どうだい、今晚もう一度、いじめられる元氣ある？」

「ないわ、もう厭、かんにんして……」

本当は、まだいじめられてもいいと思って

いた。

けれど、いじめてほしいという女を、いじめてもつまらないのではないだろうか。

さっき『大人の遊び』だといった。『大人の遊び』をたのしいものにするためには、いじめられることが好きでも「厭、厭、」と抵抗すべきだということを私は知っていた。

「ひどいわ。厭、もうかんにんして。もうダメ……」

そんな悲鳴なしに人を縛って何になろう。もし私が喜々として縛られたら、縛るといふたのしさがなくなり、そして私も又、縛られるたのしさが失われる。

理屈っぽい云い方だが、それは文字に書くから理屈っぽいのであって、もっと自然に、私はお互いの暗黙のうちに、それを心にとめているのだった。

お料理は、おいしかった。

曾々木の海岸で、色のかわったマグロのさしみを出されたことを思えば、品数も豊富で手もこんでいた。

しかし、私には、後手に縛られて犬のように皿の中へ首をつっこんで食べた片山津の御馳走が忘れられない。

(又、私を縛ってくれないかしら?)

私は自分から、それを望んだ。

しかし、彼は普通の恋人同志のように、静かで、やさしかった。

女中が和倉太鼓の観賞をすすめた。

「今はシーズンでないのですぐおよび出来ません。観光客が多い時は、団体さんでないと

でも見られませんか……」

いわれて彼は、その太鼓のショーとでもいうような一と組をよんでもらうことにした。

それは小さなお座敷で演ずるには無理なものだった。けれど舞台付の広間へ出て行くのを私が厭がったので、七人から八人がかりでするという人数をへらして、三人でやらうことにした。

歌舞伎の楽屋を通ったことがあるけれど、そこに吊り上げられていた大太鼓のような大きな太鼓を縦にして台の上へおき、それを打つのだった。

一人は鉦をたたいて、それに合わせる。体の奥底がゆすぶられるようなリズムだった。

針巻をして、半てんを着た男は、若い衆とよぶにはふさわしくない中年男だったが、やっぱり若い衆といたい元気で、踊るように太鼓を打った。

僅か十分か十五分かの演奏だったが、その人たちが去っても、まだ太鼓の音が耳に残っていた。

原始人の昔から現代の洋楽のドラムに至るまで、私たちは太鼓の音に血をさわがせてきた歴史がある。

彼の血も又、さわいだらしい。

「ボクたちの太鼓を打つ番だ」

もう寝ようという時に、彼は云った。

「さあ、脚をのばすんだ」

私がいわれた通りに両脚をのばすと、「手ものばしてごらん」と彼はいう。

そして、私の右の手首と、右の足首を一つにして縛り、左の手首と、左の足首も同じように一つにくくった。

そして、次に、両手と両足を一つにくくりしっかり結えた。

私は前かがみに体を折りまげて、不安そうに彼を見た。

いつも後手に縛る彼なのに、反対の姿勢になっている。

すると彼は立って、足首と手首と結んだ細引を欄間の下の鴨居にかけた。

私は手と足を上にして、お尻をむき出しに彼の方へ向けるよりしかたがなかった。

彼が何をしようとしているか臆ろげにわかってきた。

「厭よ、痛くしちゃ……。打っちゃ、厭?」

私は云った。

それは「打って……」と、催促しているよ

うなものだった。

鴨居にかけた縄を鴨居をくぐらせて彼は引いた。私のお尻はますます高く、むき出しになった。

首は上へあげているのには重すぎる。だらんとたらし首から、長い髪の毛が畳を掃くようにゆれていた。

「どうするの？ もう、厭！」

私の手首も足首も私の重量を支えようとしたり、音をたてるように痛くなってきた。

「どうだい？ いい気持ちかい？」

彼は、いつ手に入れたのか、太鼓を打つ撥を手にしていた。

その撥のさきで、仰向けになっている私の

足のうらをスーッと撫でた。

「あっ！」

と、私は思わず、足を引こうとしたが、固定されている足を動かしようもなかった。

すると彼は手にした細引をゆるめた。

私はドスンと音を立てて、畳の上へ尻もちをついた。

これも尻もちをつくというのだろうか。

手も足も結わかれて、尻だけ出ている私なのに……。

「大きな音だな」

彼は、イマイマしそうに云った。

それほど大きな音がしなければ、何度かそんな形で、私に尻餅をつかせるつもりだった

のだろう。

たしかにそれは、下に臼に入った餅があれ、尻で餅をつく形になる。尻もちとは、こんな拷問から生まれた言葉なのだろうか。

彼は手にした細引を、床柱に結びつけた。

頭をたれていると血が下って苦しかった。

私は頭をもちあげては、又たらし、又、もちあげた。

「さあ、太鼓をならしてみるか」

彼は撥をかまえると、私の尻を打った。

「あっ！」

と、私は息をのんだ。

それは尻もちをつくより小さい音だった。

和倉太鼓は鳴りひびいたが、人間の尻の太鼓は、にぶい音をたてる。

「ドンドン」と鳴るかわりに、「ポンポン」と音をたてる。

「プーン、プン、ポンポン」

私の尻は赤く腫れ上っていった。

そして私の髪は、ゆさゆさと揺れた。

いつ果てるかもしれない大人の遊び……。和倉の夜は更けていった。

——(未完)——

カット・出門 順

「伝言板」

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用はお断り)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号出版株式会社へ願います。



浣腸マニアの手記

羨 望

広 田 玲 子

長く「奇ク」を愛読して参りましたが、内心ではあんな人とうとうしてみたい、ああしてみたいと思っても、周囲の環境が思うにまかせず無為に時を過ぎてしまい空しい思いを抱いている女でございます。心の中では同性と、あるいは異性とSMプレイ、と願いながら、わずかなまねごとで、その場その場を濁してしまい、あとになってあの時、思い切った打明ければよかったと悔いを残して参った女の繰言と、お聞き捨てをお願い致します。

どのように、私のこの思いを告白致していいのかわかりませんので、失礼なことかもしれませんが、「奇ク」誌上の「浣腸マニア」の方のお書きになった文章に感想を加えて、私の浅薄な思いを述べさせて下さい。

ご投稿なさった浣腸マニアの皆様、私の心に秘められた思いを、私以外の皆様がなさっ

ていられると思うだけでも、幸福感を感じるのです。でも少しは羨望感も起こるのです。いけないことなのですけれども……。

過去二、三年間位の「奇ク」しか、私の手元には保存してはいません。余り沢山ですと隠し場所がなく、もし周囲の人に読まれて、「変態的だわ」と言われる危惧におびえてしまっているのです。買う時も苦勞します。男の人ばかり立ち読みしていらっしゃる本屋さんの一画に、そっと置いてあるのですもの。いつも数冊の婦人雑誌と一緒に、必ず女店員の方がいらっしゃる時にだけ、犯罪人のような気持で買い求めて、又、整理する時にも人目に立つのをおそれて、かみくずと一緒に秘かに燃やさなければならぬ立場なのです。繰言が多くなりました。先ず四十一年八月号の水城由紀子様の「浣腸とおシメとゴムの

魅力」から始めます。水城様のご文を拝見致しましてから、どんなにかお便りを差上げたかったことでしょうか。でも、とうとう差上げる事が出来ませんでした。お手紙に「浣腸」と書くことさえ、耐えられない位羞かしかったのです。水城様のお使いになった浣腸器とおムツカバの事を思っ、眠られぬ夜が続きました。もし水城様とお便りが交換出来るようになったら、どんなに幸せだろうと、その後も長く思っております。

もしも、水城様からいただいたおシメカバ―やパンティに身を包んで、浣腸の苦しみを与えられたら、あたかも水城様に浣腸していただいたような気持になって、この上もない幸福な気持になることでしょうか。

同年九月号の「保健婦さんと浣腸」の吉野珠子様、私は、吉野様のお書きになったものを拝見して思わず微笑むのでした。私にも辞書の「浣腸」の項目で、ハツとした思い出があるからです。ある種の魅惑的な感じを「浣腸」という項目から感じているからです。それに保健婦さんに浣腸された吉野様のご体験に、親しさを感じたのです。私もやはり高校生の時、同級生の加世さんという方が、便秘で苦しいと言いついて一緒に医務室まで行ってあげて、加世さんがご自分で「出来たらお浣腸していただきたいのですが」と保健婦さんをお願いしていただけるのを、ドア越しに聞

いたことがあるからです。女子高校生の医務室での浣腸は、清純？ な感じのプレイのよさな気がするのです。私だけの意見かもしれませんが……。

少し飛んで四十三年六月号の「おしおき」の南洋子様。私、とてもうらやましく思われました。洋子様や晴美様のされるようなおしおきなら、玲子は毎日でもされてみたく思うのです。おしおきされるなら、実母よりも義母の方が何か厳格そうで、おしりを叩くにしても、浣腸の責めをするにしても容赦しない気がします。日常いじめられている義母から私もパンティ姿で後手に縛られたら、きっと憎しみの目で、悪魔のように美しい義母をにらむことでしょう。そして、その私の目付が気に入らないと言って、義母は苛酷な折檻を施すことでしょう。そして怒りにまかせて義母は、強烈なドナンやグリセリンの浣腸を私に施すことでしょう。やがて、羞恥に悶え苦しむ私。そんな白昼夢を思い描くのでした。洋子様、きつと責められる喜びを感じになっただけなのではないでしょうか。玲子はうらやましいのです。とっても。

同号の「私の夢」の園部まり様。私、女性の方が、男性の方を責める夢を持っていたら、それを初めて拝見致しました。でも美しい男性との恋の物語は昔から多く残っています。まり様は、きつとその恋の物語に「浣腸」と

いう愛の言葉を語りかけられたのでしょうか。

秘結で来院の美青年に、美しき女医先生から浣腸の宣告が下ります。数人の女性に囲まれて美青年はどんなに羞かしいことでしょう。

医師や看護婦にされることだからと思って、あきらめの涙を流すのでしょうか。

あるいは、妹達の見ている前で、母親や姉から浣腸を受ける男性も、興味を感じます。

案外、私にもSの気が、園部様と同じようにあるのかもしれませんが。

同年八月号の「私と浣腸」の中野昭子様。可愛い（ごめんなさい）と言う感じで、拝見致しました。

A子さんやA子さんのお母さんに見られての石ケン浣腸は、どんなにか羞かしかったことでしょうか。昭子様はイルリの浣腸がお好きなのですね。私も一、二度、イルリの石ケン浣腸を施されました。ガラス製浣腸器の様な抵抗もなく、羞かしさに思い惑っているうちに、五、六百CCが注入されてしまうのでした。私のお友達の中にも、盲腸の手術を受けた方は多くて、そういう方とは案外気やすく浣腸のことも話し合えるのです。便秘に同情して下さる方ですと、特に「浣腸して下さいませんか」と申し出ても「いいですわ」と気軽に承諾して下さいます。昭子様のお書きになった文章はとても読み易くて、私に、きつと優しい人柄なのだわと、感じさせてくれるのでした。

るのでした。

同号の「独りだけのカン腸プレイ」の大川恵子様。プレイのご様子を拝見してきつと綺麗な人だと思えます。鏡に写った白い裸身、ピンクの小悪魔がその白い裸身を桃色に染めて行きます。苦悶の後、極限の羞恥を人眼にさらす時、悔恨の中に一筋のM的な喜びがあるのでしょうか。女って、誰かにいつも眺められたい欲望があるのかもしれませんが。

「浣腸実験委員の報告」の立川令子様。夢のような生活をお過ごしのことと存じます。私も入社して浣腸実験委員になってみたい思いで一杯です。

十二月号の「浣腸の思い出」の藤村由紀子様。美しく拝見致しました。お母様に由紀様がイチジク浣腸をかけられる様子を想像して、私がマニアのせいかもしれません。美しい愛情のある行為だと思います。幼年期、思春期と、女性的な変化を、微妙に「浣腸」に対しての変化が、上手に表現されています。由紀様が、鏡に写る姿に見とれてプレイするようになったとありましたが、多くの方の共感を得られることだと思います。

表題に「手記」と入れてしまいました。手記どころか、自分の気持ちもハッキリとしない訳のわからないものとなってしまいました。本当は私の想像したプレイも書いてみたかったのですが、これで置きます。

江戸奇譚

六尺呻吟帖

有川章



きもせず人ごみへ消えて行っちゃまいやがったのさ。

「畜生」

こんな所に姿を見せるようじゃ、^{ねぐら}罫も遠くなさそうだね……。

ね、聞いておくんさいな。あたしのだらしなさを。いえさあ、あの憎い男、新三のヤツに……この気持を裏切られた恨みは、七生までも崇ってやらなきゃ納らないのさ。

あの時にゃあ新三は二十九。遊び人だが真面目なところのある、情の深い、いい男だったんだけどねえ。安料理屋の仲居のあたしと末は夫婦と約束を交わして、熱い熱い仲だったのさ。

たけど、半年もすると、そろそろと冷めたくなってきた。あたしも随分入れ揚げたよ。バクチの資手^{もとで}になるぐらいは知っていたが、可愛い男のため、けんめいに尽したもののさ。

しばって、しばって、しばりとられてポイと捨てられたあたしだったよ。新三はいつの間にか得体の知れない女に、夢中になっていたのさ。あたしが見たことはないが、人づての話だと、上方から流れこんだ来た淫売芸者のなれの果とか、五、六人の男のかけもち妾だとか……。とにかくロクな女じゃないことは確かだよ。

よほどの凄腕だろうね、自由自在に大の男

あんまりいいお天気だったものだから、あたしやつい金比羅様の縁日でもひやかしてみようってえ気になってねえ。いえね、どうせ用もないからだだし、ポカポカするような陽気なもの、あたしだって浮かれ出しもしようってえものさね。

ブラブラ虎の門の方へ歩いていくうち、ヒョイと横のそば屋から急ぎ足で出て来た男とすれ違ったのさ。

「アッ、新三……」

あたしや、びっくりして見返したが、新三のヤツは気がついたのかつかないのか、ま新しい粋^{いき}な単衣^{ひとえ}をヒラヒラさせながら、振り向

を手玉にとるようじゃ……。そんな女にのぼせ上っている新三だって、バカな骨頂さ、末は命も落としかねないよ。どうなっても、あたしの知ったことじゃないさ。だけど、あたしや新三を、このまま見のがしちゃあおけないってえ思ひさ。八ツ裂きしてもあきたらない裏切り者だからね。

「畜生」

必ず罅を探しだしてやる。

そうそう、あたしの名はお米^{よめ}って言うの、もう二十五の年増だよ。ホホ……。

あたしや、それから毎日、眼を皿のようにし、足を棒のようにして、ヤツの行方を追いつめた。

とうとう見つけたよ。

女の執念かねえ。ヤツが、虎の門から遠くもない神谷町の、ケヤキ林に囲まれた旗本屋敷の跡を直したような、だだ広い家の中に入っているのを、この眼ではっきり見定めてしまったのさ。

新三の住む家とは思えないが、ここにきくと女がトグロを巻いてるのだろう。あいにく小雨が降っていたが、あたしや傘をすぼめながら横手の黒板塀を伝わって、縁側の見える正面の塀の穴から覗いてみたのさ。

新三がヤニ下って酒を飲んでいたよ。女の姿はあいにく後向きで分らないが、青の花模様の長襦袢一枚で、くの字型に坐って何か笑いながら酌をしている。まっ昼間からイケ図々しいヤツらだよ……。

○

ところがさあ、そこであたしや生まれて始めて凄^こい責め^めってえもんを見たよ、責めだよ。凄^こい責め、男責め。

わけは、こうさ……。

いい気な新三が急に苦しうに、からだを揺すって口から涎を垂らしはじめたんだよ。

「ウウ、どうしたのか」

と蹴^もくのを、スツと立て膝で煙管を吸いつけて横向いた女の顔が憎いほど北叟笑む。

「ホホホ……苦しいのかえ、脆^{もろ}いもんだねえまったく」

衣紋を大きく抜いた女の首筋から、赤黒い文身の端がのぞいてるじゃないか。あたしやゾーッとしたよ。

「この薬は骨の随まで通る凄^こいヤツだよ、苦しいだろうねえ。オイ、新三ッ」

強い南蛮渡りの痺れ薬を盛りこまれたらしいんだねえ。ヤツはどうすることもできないらしく、苦しうに起き上ろうとする胸を、

ドンと蹴った女の朱唇が火のようだったよ。「新三ッ。一人でデレデレしやがって、このあたしの情夫^{いろ}になったつもりでいたのかえ。いままでにおまえからしぼりあげた金が五百両、そろそろ、このくらいで用済みにしてやるのさ、金だけはねえ」

スツくと立った女が、

「だが、そのからだにや、まだまだたんと用があるんだよ。お分かりかえ。フッフフ。あたしやね斑蛇^{またらへび}のお銀と言われた女だよ。女蛇は男を巻き殺すってね、ホホホ……。さッ、キリキリ裸になるんだよ」

「ウウッ、お、お銀……」

新三の口惜しそうな、身顛い。もぞもぞしてるのを蹴倒して、帯、単衣を毫り取って裸にしたお銀が、太々しく笑ってた。

六尺禪一本の新三。いつものことながら真っ白い切りたての禪だったよ。

「禪一本でよッくお聞き。斑蛇のあたしと分かってながら、今までの男冥利の数々。おまえあたしの為ならどうなってもいい、どんな目に合ってもいいと言ったねえ。あたしの湯文字まで洗ったことがあったねえ。それほどあたしにぞッこん惚れのお前だ。今日は覚悟してくるんだろうねえ」

「チヨッ、ざまあないよ。女の湯文字まで洗わされてたらしいんだね。お銀の今締めている、あの真ッ赤な湯文字も、きつとヤツが洗ったんだろうよ、きつと……」

毘にかかった新三はこのお銀の前で、ぶざまな七転八倒の苦しみをみせて、六尺禪一本のままの、みじめな晒し物になってたよ。

「姐御、うまくいったらしいね」

と笑い声がして、奥のほうから二人の女が単衣に伊達巻一筋のしどけない姿で出て来たんだよ。

「ホホホ。脆いもんさ。ご覧、このざまを」とお銀。

「あの凄い南蛮渡りじゃあ、たまらないだろうさ。たっぷり効いてるらしいわね」

と、新三の傍へしゃがんで見入る二人も、莫蓮女らしいんだよ。十六、七のが、お千代二十一、二のが、お美代と、呼ばれていたわけ。

○

「姐御が、最後の最後まで楽しみにして残していた男だけあって、いいからだしてるじゃないの。ご覧、浅黒い大きな図体、生き顛ふるいしてるわ、余ッぽど苦しいんだねえ」

とお美代が、しげしげと見回してたよ。

「それにお美代ッペ、ごらんよ。切りたての六尺禪がピーンと張って食い込んでさ。こいつア姐御も、さぞかし責め甲斐があるだろうねえ。ホホホ……」

とお千代が笑うのが下司っぽくってねえ。

「とつときの男一匹の裸さ。できるだけ大勢に見せてやりたいんだけどさ、お千代、みんな来るのかえ」

とお銀が、帯をゆっくり解ときながら言っただけで、

「あいよ。雨で暇だし、おかみさんもいっしょで、十二人は来るわ」とお千代。

あたしゃ驚いたねえ。大勢の女たちの見物客が来るらしいんだもの……。一人の男の裸を責めるのに、何ということ……。仕度は出来ている、というお美代とお千代が、細縄を取り出して新三を縛りかけたんだけどさあ、それへ

「初めから、亀甲縛りにおし」

とお銀がいつけて、スルスルと長襦袢を脱ぎ赤い湯文字一枚になっちゃったんだよ。

それがさあ、燃えつくすよう凄いい恰好に見えるのさ。それに、抜けるように白い、その背中から腰にかけて、長い長い斑蛇が這って

るんだよ。それが、肥り肉の尻にぴったりまつわりついている薄布の湯文字から出てきたよう、女のあたしでも思わず見とれるような、怖いほどの色気があるんだよ。男ではとても……。ことに新三みたいな淫蕩女に弱いヤツにはねえ。

ギッチリと亀甲縛りされた新三は、お銀たちに縁から小雨の庭に引きおろされて

「くくッ、口惜しい、お銀ッ」

と必死にあがいてやがるのさ。水溜りの中で、みじめなものさね。

「姐御、来たわ」

お千代が、横手の木戸口を開けるとドヤドヤと女たちが入って来たんだけどさ、傘を差し合ったり、雪駄履き、浴衣がけや、半襦袢と湯文字一枚のもいるんだよ。みな、しどけない恰好で十二人、縁の軒下にかたまつて、腕き転がっている男を物珍しそうに眺め始める。みな近くの矢場女で、年かさの櫛巻き頭のおかみらしいのさ。

「こいつだよ、責めにかける男ってのは。とつときの男さ。痺れをかけられてるから、脆いもんさ。六尺禪一本、大きなこの図体がこれから男の呻き声をあげるんだよ。あんた方男一匹の真ッ裸を真ッ向から見たことがある

かえ。それも、死ぬような地獄の苦しみにノケ反りかえっているってえヤツを……。ホホッホ。これから、それを思う存分に見せてあげるよ、身顛いするような凄いヤツをね。おかみさんにも、後で手伝ってもらいたいんだが、やっぱり湯文字一枚になってやった方がいいよ。第一、雨ん中だしね」

凄いことを言うお銀、恐ろしい、淫婦。

どんな責めが始まるのか、あたしや思わず固唾をのんで身を乗り出しちまったよ。

○

新三としてみりや、煮えくり返るような無念さだろうよ。この淫婦に骨までしゃぶられ揚句の果てが裸責め。しかもあばすれ女十五人の眼の前で、とことんまで苦しめ、恥かしめられるのだ。口惜しそうに睨んでたっけ。ドドッ……。

とお銀の泥足が、新三の身動きも出来ない五体を、力いっぱい蹴り回し始めた。

「もがきなよ」

泥水にまみれ、横になったり転がったり、芋虫のような新三さ。

「くくくくくッ」

お美代とお千代が、これも着物をかなぐり捨て、赤い湯文字一枚になって、雨の中へと

び出してくるなり、

「どう、口惜しいかい？」

と、踏み付け、動かさない。

それを、ダッダッとか蹴り回すお銀。蹴り上げる度に腿の付け根まで湯文字が捲れ上ってさ、内腿までがまる見えだよ。

「姐御っ、凄いッ」

おかみたちが、声を合す。お銀がいつの間にか、長い長い皮鞭を握って、遠くから風を切って振ったからさ。それが、ピシッピシッと、小気味いい音をたてて、新三の尻から腰を狙って叩きつけられ始めるのさ。

「ヒイツ、ヒツ」

苦しそうに呻いて、からだを弓のように反らしてとび跳ねる新三のヤツ。

「苦しいかい？ え、そんなに苦しいかい」

とお千代がうれしそうに笑いながら、新三の顔を覗きこんで、

「もっともっと、体いっぱい、隅から隅迄打ちノメされるんだよ。ホホホ、みんな。禪が邪魔だっというんなら、ムシってやってもいいんだよ、素ッ裸にさ」

女たちを振り返って淫ら笑した。

「ホホホ、姐御のことだもの、このままじゃ済まないだろうよ」

とおかみが笑う。

このおかみも相当な女らしい。

みるみる新三のからだは、真ッ赤に腫れ上った。すると今度は長縄を出して、新三を吊りにかけ始めたのさ。打ちこんであつた太い柱の梁に、縄をかけ直した新三のからだを、お銀やお美代たちと、おかみも手伝って「ヨイショ」と声が揃うと、高々と吊り上げられた後手縛りの雄犬一匹。

「きッきッ……」

歯をかみ鳴らして、呻くだけ。

「いいざまだねえ、ぼちぼちと本格的に責めてやるよ。男らしく苦しんでご覧、これから責めはね、生易しいもんじゃないよ。斑蛇のお銀姐さんが、手ぐすね引いて待っていた生地獄を、味あわせてやるからね」

お銀の髪はとけてサンバラ、雨の雫が脂ぎった肌に光っている。赤い湯文字がピツタリ腰にまつわりついて、ゾクゾクするほどの淫蕩さなのさ。

○

お銀の為なら何でも、どんなになってもとほざいたらしい男だ。この裸の逆さ吊りなんか、平気でなけりやならないのに、ヤツはだらしなく弱々しい音をあげているんだら、情

けないったらありやしない。お銀は鞭を握るとピシッピシッと早打ちに、縦横、目茶目茶に打ち始めたよ。

「ヒヒッ……」

新三が、ひきつけるような声をたてて大きく揺れ回るのさ。

「マア苦しうに、あんなに悶えてるわ」

「随分派手じゃないの。裸の男の蹴きっぷりたまらないわねえ」

「男一匹じゃないか、もっともって存分に苦しんでこそ、女も惚れるんだ」

「あんたア、この恰好に惚れたのかい。この真ッ赤に腫れ上った裸によウ。ホッホホ」

「あたしゃア、こいつを思いきり責め上げてサ、息のとまるまで可愛いがってやりたいねえ」

「アラおかみさんたら……」

と女たちが勝手なことを言って、じろじろと眺めているんだけどさ、おかみの言ったように、ほんとに新三のからだはこんな苦しい責めにかかっている、浮気っぽい女をひきつけるだけの値打がある様なんだよ。こう言うあたしも、くやしいけど初手から惚れたんだからねえ、真ッ白な六尺禪一本の裸にさあ。新三は禪を七日目ごとに代えていたよ。

古いのは洗いもせず捨てちゃんだ。だからいつも二、三反のサラシは買ってあったね。堅肥りの腰とキュウツと締まった六尺禪つてえものは、とてもたまらないね、女をひきつけるよ。川柳に「禪に男を見せている湯屋の中」という文句があるそうだけど、びったりなんだよ。

この男の禪一本になった姿に、何とも感じないっていうような女がいるだろうか、今の責め場でなら尚更だよ。男を見飽きたこんなアバズレ女たちでも、きっと新三は特別だろうさ。

「姐御ッ」

案の定、おかみが、新三の傍に寄って食い入るように、眺め回しながらいい出しやがった。

「このぐらいで逆吊りはやめて、じっくり罵り責めにしたらどう。痛い、苦しいだけが貴めじゃないからね」

「あたりまえさね、あたしもそう思ったところさ。ネ、どうしてやろうかねえ、おかみにやいいテがあるのかえ」

と、お銀も賛成らしい。そりゃそうだろうよ。

「ホホホ。任せておくれな」

やっぱりおかみは新三の六尺禪に心をひかれてたんだよ、その眼がただじゃないのさ。

「そいつを下ろしておやり」

お銀は、美代たちを手伝わせて、新三のからだを泥土の上に手荒く引き落としたよ。

「マアマア、そのざまじや責められないね、泥を落としようよ、お美代」

というなり、手桶の水を二、三杯浴びせかけたのさ。そして頬丈な戸板を二枚、つなぎ広げて置いて、その上に新三を転がして、

「お前さん」

おかみが、すっと立ったまま足もとの新三を、じっと見詰めて声をかけてた。

「ウッウッ」

何をされるか思ったんだろうね、新三は頓えていたよ。

おかみはお辰って名らしいけれど、するりと着物を脱いで真ッ赤な湯文字一杯になったんだが、それが、いい年増のくせに赤いのを締めているんだよ。年増はみな浅黄や白にきまっているがねえ、この女、きっと淫乱なのだろうよ。

でもさ、凄いい台詞が、その淫乱女の口からとび出したのさ。

「お前さん、これからの責めは姐御に代ってあたしがとつくりとやってやるからね。さっきはその大きな四体が、鞭を受けて随分苦しんだようだけど、あたしの気に入る苦しみじゃないよ。男ってもんはね、女の前で責めにかける時ア、もっと女心をわくわくさせる苦しみ方を晒さなきや駄目さ。これからお前さんにかかる責めてえのがどんな責めかお分かりかい。教えてやるよ、よくお聞き」

と新三の顔の傍へ立ち膝して、腰の褌をじろじろ見詰めているのさ。ぶっかけられた水と雨でびっしょりの褌が千切れるように、食いこんでいる。

「ホッホホ。男一匹、切りたての六尺褌をして、ノメノメと女の尻に引っかけたのかい褌が泣くよ。ひとつ素ッ裸ッになって、男としてこの六尺褌がどれだけ大事なものを、死にもの狂いで覚えてごらんナ。口惜しさ、恥ずかしさ。頭のとっぺんから、足の爪先まで、真ッ青になるほどの地獄でなきやあ覚えられないだろうけどサ。生き地獄だよ。それこそ男の生き恥が、女の眼の前へぶちまかされる責め地獄ってヤッサ、フッフフ。オッホホホ」

とお辰が、さも嬉しそうに笑っていると、お

銀に言われてお千代が、何か入っている茶碗を持って来てお辰に渡したのさ。すると、お辰が、新三の口をコジ開けて無理に飲ませたんだがネ。まさか気付く薬でもあるまいと思つてると、それがとんでもない薬だったんだよ。めっぼう男に効くヤツさ。今から褌まで剥かれようってえのに、こいつは新三のヤツもたまらなかつただろうよ。新三ときたら普断でさえ……。いえさ、とにかくあたしも惚れたぐらいだからねえ。

「サ、覚悟はいいかい」

お美代とお千代が、新三の手足を踏み、押さえつけて、お辰はジリジリと褌に手をかける。

「ゆ、許してくれッ」

口惜しそうな新三、ざま見やがれだよ。

○

「男らしくすんのよ。大の男一匹、女の前でノタ打ち回る。こいつア面白い見ものよ。あたしたちはね、男が落ちて呻く地獄の声を聞きたいのサ。ホッホホ、分かったア。男ってもんはね、褌をムシられたらどうなるもんか堂々と立派に晒すもんよ」

とお千代。小娘のくせに、利いたようなことを言うよ、まったく。

「い、い、淫婦ッ！」

喚く新三。

その、素ッ裸で縛られている新三の尻を、ドーンと蹴ってお辰が、

「どうだい、この情けない恰好。みじめだねえ」

とそのまま足で仰向けにしたから、たまらないよ。薬の効きめは観面^{てきめん}、憎いヤツだけだどあたしや思わず眼をつむりたい思いだったよ。

「ウウッ」

新三の真赤な顔。その時のざまったらなかつたねえ。

「南蛮渡りの秘薬って。たちまちだわねえ、ホホホホ」

「いい眺めだねえ」

お美代やお千代たちが、嘲け笑ってる。

「チ、畜生ッ！ 口惜しい……」

新三のヤツが、ざまアなく悶えているよ。満座のなかの笑いものだ。そりや、ヤツだって口惜しかろうよ。

あたしや、ふと気がついたんだが、お銀が石に腰かけて、紙にせつせと筆を走らせているのさ。絵を書いているんだ。お銀に絵がかけるなんて驚きだけど、きっと新三の姿絵だ

ろうよ。雨はやんで、なま暖かいのに気付いたのもその時、初めてだったネ。

「一番気にいった絵になりそうだよ。もっともっと、ありったけの責めをおやり。男の地獄を見せておやり」

とお銀が立って来て、新三を余計みじめにさせるためだろうか、力いっぱい泥足で踏みつけたのさ。

「ざまァ見やがれ」

「くくくッ、お、お銀ッ」

新三って、こんな目に遭っていながらも、女の名を、呼んでやがるのサ。ほんとにバカさ。

今度はロウソク責めとみえて、お千代が百目ロウソクを二本、持ちだして火をつける。一本はお辰が持って、仰向けになったままの新三の腹の辺りへ、高いところからポタリ、ポタリとロウを垂らし始めたのさ。

○

「ウウッ」

真っ青になって苦しむ新三。

「ホッホホ。口惜しいの、苦しいの、恥かしいの。男が六尺までムシられたんじゃないの。一人前のツラするんじゃないさ。おまえは犬さ。晒しものに、してやるわ、ざまァ見やァ

がれ」

とお千代が、ロウソクを傾けて、新三の急所に狙いをつける。ひどいことするよ。

「千代ちゃん、存分におやり。ホッホッ」

と女たちも、傍近く寄って見物する。

ポタリ、ポタリ。

ロウが、容赦なく落ちていく。お辰の持つ

ロウソクもいっしょに狙い始める。

「くくくッ、ゆゆ、許してッ」

新三のヤツ、いいざまだよ。このだらしないさは何んだい。

「だんだん、いい絵になっていくよ」

とお銀は満足そう。

男の地獄。あたしやじりじりしてきた。遠くから隠れて見ているだけじゃものたらないあの女たちといっしょになって翳ってやりたい。ヤツは、あたしにとっては憎い裏切り野郎だ、殺してもあきたらないヤツさ——。

とうとう、あたしやお銀たちの間に割り込んでやったよ。新三が驚いていやがった。そりゃそうだろうよ。

「お米ッ、助けてくれッ」

と、余計にわめき、騒ぎだしたのサ。

「淫婦に、い、淫婦たちに……」

新三の縛り上げられた五体が、おこりにか

かったみたいブルブル顫えている。フン、いいざまさ——。

それから一刻ほど、手を変え品を変えての翳り責め。新三は女達のなぐさみものとしてありったけ、いたぶりをノメノメとうけたのさ。もっとも、こう縛られてちゃあ、逃げられやあしないけどさ……。

「六尺一本だけでも、許してくれッ」

と新三は、情けない声で頼み出しゃあがったさ。これだけでもう、オモチャにされたんだから、どうでもいいだろうと思うんだけどサやっぱり恥ずかしいのかねえ。

「オヤ。まだ、六尺がほしいの。ホッホホ」

お千代が禪の端をつまんで、新三の眼の前でヒラヒラさせる。

新三のヤツは、もう裸じゃない。六尺以上にロウの禪を締めこんでるんだがねえ。もっとも跳くたびにポロポロ剥け落ちるのだけどサ。

それからどうなったって？……フッフ後のざまは想像しておくんなさいな。何分にもあばずれ女が十六人も集っているんですからねえ……。

とにかくお銀てえ女は底知れない淫婦さ。ほんとに恐ろしい淫婦——。



— 耽 — 奇 — 録 —

A 感覚の世界

西 条 夏

覚 え 書

少年の夢みがちな官能に映ったいくつかの狂態が、のちの半生にとって、何物をも隔絶した陰湿な美の世界の源であったということは、私に限らず、多くの人々も思いあたることがあるに違いない。

私は、最近の本誌に掲載されている小説、随想をはじめとする諸作品の中に、私の古い印象にあるような不可思議な光を放つ陰微な香りが次第に失われていくような気がしてならないのです。

しかし、こればかりは、時流であると言わねばならないのかも知れません。

私が旧号の全体の雰囲気郷愁じみたものを持っているがための不満か、とも考えてみました。

世は公然としたS・Mの商品化の時。そんな時だからこそ、私の影の世界が、影を失ってしまわないようにと願っているとも言えそうです。

一つの性癖の芽生える時の、あの不思議な官能のうごめき。その官能の、人知れず記憶の底に横たわっている姿態を、そっと取り出してみたような感覚。

幼年の頃の、暗いトイレの片隅で育った情熱。地方廻りの演劇の舞台で観た、女座長のストリップまがいの所作の中にあつた性。

そんなものが、たまらなく愛しいのです。しかし、これからペンを執ろうとするのに、そう懐旧趣味にひたつてばかりはいられません。まぎれもない戦後ッ子である私には、やはり、新宿があり、巨大な電気スタンドの下の青春があつたのですから。

過去に二度程、断片的な生活を載せていたいただきましたが、私の精神的露出癖が満足していかないようです。そこで、耽奇録などと云う気取った題を記して、書いてみようと思ったわけです。本誌上に現われた幾多の性癖の中にも見当たらないような代物が飛び出すかも知れませんが、せいぜい羞恥心をかなぐり捨ててみるつもりでいます。

A 感覚の世界

A 感覚と云う言葉は、確か、作家の稲垣足穂がよく使われていたのだと記憶しますが、いったい、このA 感覚というものは、男女を問わずに、人間の共通して持ち得るものなのでしょうか。

評論家の加藤郁平氏は、その評論「美神と

失神」の中で、——「婦人科」の三字にギョッとするのは初めに住んでいた場所に触れる無気味さであり、「肛門科」にギョッとするのは、別の故郷に直面するから——と、面白いことを言っているようです。

確かに、人間には幼年の一時期、誰しも肛門愛期というのがあるらしいのですが、それが直接、A感覚の世界の発端であるとは考えられないのではないのでしょうか。

A感覚という言葉をごとまで広げて使うかも問題ですが、まず、男性の場合のそれと女性の場合のそれとは、大きな差（特に精神的な意味での）があることを考えなければなりません。

ここで私は、私の幼年期のことを思い起こしてみます。

小学校へあがる数カ月前の思い出ですが、近所の同じ年の男の子と、毎日のように奇妙な遊びに耽っていたのです。その頃は、まだ空地も多く、家陰の小さな空地は私達の格好の遊び場でした。

私達はこの奇妙な遊びを「お尻ごっこ」と呼んでいた覚えがあるのですが、どうして、そのような遊びを始めたのか、今となっては定かには思い起こさせないのです。ただ、お

互いに身体をくすぐり合っていて気がついたときに、それが愉しみになっていったということだけが、今、思い出せるのです。

考えてみれば、七才にも満たない幼児が衝動的に、「お尻ごっこ」なるものを演じていたということから推してみると、そこに、まぎれもない肛門愛が存在していたことになりましょう。ただ、この幼児期の現象は、それだけのものであり、それからのちに、そのまま継続していくものではなかったようです。私は、この遊びを、A感覚の源に求めることは出来ないと思うのです。

私達は、初めの頃は、路端に落ちていたクギやピンの頭などを利用していましたが、終わりに近くなると、家から母親の口紅のキャップや、クレヨンを持ち出して用いていたことを覚えています。

しかし、このような遊びも、ものの一カ月とは続かなかったのです。幼児の飽きっぽい心は、別の遊びをすぐに見付けてしまうのです。

それから三年程して、小学校での思い出にこんなこともありました。

それは、本誌でもたびたびお目にかかる、「浣腸」なのですが、私には、あとにもさき

にも、この時、施された浣腸の他は、された経験もなく、また自分自身、施したことも、現在に到るまで無いのです。

このことは、「A感覚の世界」を書くにあたって当然とりあげなければならないと思うのですが、私の場合「浣腸」は、内臓快楽ともいべき位置にあり、章を改めたいと思うのです。

ただ、初めて施された小学生当時の思い出は別の意味で印象に残っているのです。

私は実家の改築中、遠縁の家に一人で預けられていたことがありました。丁度、夏休みでした。水が変わった為か、ひどい下痢に襲われ、それが治ると今度は便秘です。家にいる時は、薬で治してしまうのですが、その遠縁宅では、便秘には浣腸ということになっていたのでしょう。私は否応なく横にさせられました。その時、私に施したのは、私より七つ年上、中学三年のTという女の子でした。

物心ついて、異性に対する本能的羞恥を覚えた私は、初めて、あの「お尻ごっこ」で満たされなかった、受動的アヌエロティークに心は、ときめいていたのです。

しかし、それよりも、もっと強く印象に残っていることは、Tが、いやいやをする私を

なだめるように言った言葉なのです。

「夏ちゃん、いたくないのよ。お姉さんだってしたこと何回もあるのよ。終るとすっきりしていい気持ちになるわよ。それに、こんなに細いんですもの、少しもいたくなんかないわお姉さんなんか、もっと大きいのをしたんだから」

この従姉の言葉の中に、私は、自分が施されているという受動的エロティクもさることながら、のちになって私の最も大きな性癖の一つともなった。能動的な、それも、対象を女性とする、アヌエロティクの、精神的な源を探り出すのです。

思えば、ここで、当然、最も密接な関連性を持つホモというものを考えてみる必要があるでしょう。

もしも、私が、従姉の言葉の中に、幼な心の妄想として、彼女に接近する浣腸器の図を思い浮かべることが、自分の施されている図に勝って脳裏に焼き付いていなかったとしたら、私は、現在、自分の性癖が、受動的なホモの状態に置かれていたかも知れないと思ってみるのです。

しかし、今にして思えば、同じアヌエロティクでも、男性の場合と女性の場合とで

は、精神的にも肉体的にも大きな違いがあるわけで、私が受動的ホモになり得なかったということは、あの「お尻ごっこ」でも、また「浣腸」に覚えた胸の高まりも、所詮、その時限りのものであり、いわば、幼児肛門愛期の一つの現象にすぎなかったでしょう。そして現在に到るまで、私自身、受動的願望を覚えなないのは、男性としての受動的ホモ願望は芽生えなかったということでしょうか。

話は前後しますが、では、能動的なホモ願望——つまり、相手を男性とした場合のアヌエロティクは感じるかという問題になります。

二年程前になりますが、一度だけ新宿のゲイバーに勤める二十七・八になる男と一夜を共にしたことがあったのですが——その時は女装した彼との、切腹プレイに夜を明かしたのですが、ここでは異った内容です。別の機会に譲るとして——その彼が語ったところによりますと、お客のほとんどが受動的な要求をするということで、能動的立場オンリーという客は滅多にいないのだということなのです。まあ、一人に聞いたのでは判らないのでしょうが、プロのゲイボーイの客には、そういう人種が多いのももっともでしょう。

女の代用品とするような男の場合は別として、私は決して能動的立場をとるホモが少ないとは思えません。むしろ、その種の人は、非常に精神的なものを重んじて、プロのゲイバーなどには行かず、また女装した相手を選ぶことも少ないように思えるのです。

ここで、能動的立場をとる場合、相手を男性に向けるか女性に向けるかということになると、それは単にアヌエロティクのみの問題ではなく、それこそ、その性向の出発点から考えなければならず、ここに、三島氏の「仮面の告白」の続篇でも出現しなければならぬこととなります。

何故、私の性向が、男性に向けられなかったのかを論ずるより、何故、女性に向けられたのかを書く方が、前者の疑問も自然と判明するでしょう。

以前に書いた「レダの血は薔薇」にも少し記しておいたと思うのですが、一言にして言うならば、受け取り方によっては、男対象の背徳性もさることながら、本来、予期しなかったであろう女性の怖れと、それを想う私の心の戦慄の方が、より大きな緊張感と陰微な輝きを与えてくれるためでしょうか。

男の場合は決まっているわけですか。

らその意味では男相手という形態的な異常性の他は、ごく単純な既定コースで、なんら変わる場所はないわけです。ところが、女の場合（特に私の意志を全く知らない時は余計なのですが）の心の戦慄は、私にとって名状しがたい魅力なのです。

ある一方では、むしろ一般化され、とりたてて書くこともないようなものと考えられますが、単なる物理的収縮度云々ということにあるのではなく、実に処女性にあるのだと思うのです。そのためには、まず女性が、その意味での処女であるということが大切になってきますし、また貴重なものといえるでしょう。

私の云わんとしているのは、つまるところ女性の処女地ということに集約されましょうか。

ここで、また話をもとに戻して、中学生の時の出来事をひろってみましょう。

現在、スクリーンで活躍している、女優のEのようなモノセックスな容貌の持ち主で、丁度、E嬢が、女賭博師もので演じているムードにも近いような鉄火肌の持ち主で、さらに、E嬢のように、（実際にEは、稲垣足穂の少年愛の美学などが愛読書だということを

知って驚いたことがあったのですが）私の官能を刺激した人がおりました。

その人はいつも和装で、そうでない時は、正反対に、身体にくい込むようなGパンスタイルなのです。

私は、その身体の線に、一種の目眩みに似た強烈な魅力を感じていたので。特に背面に焦点を合わせた私の視線は、喰い入るようにその揺れ動くヒップの豊満さに引きつけられてしまったのです。

その人がいったいどのような素姓の人かは判然としなかったのですが、近隣の人らしいことと、年齢が二十五、六であること、そして、夜の勤めらしいことが判っていたすべてでしょう。

私は、はじめて、意識として、その視線が何故に背面に引きつけられるのか、少年の、未知のものへの単なる好奇の目ではなく、はっきりと自分の欲するものが何であるかが明白になった思いがしたのと同時に、形のまともらなかった夢想が、ここで実現の形をとって表へ出てきたのです。

ある悪戯を考えました。

ある日、その人のあとをつけて、アパートを確かめると、一通の手紙を、留守中に、ド

Aの下へ押し込んできたのです。

出来る限り筆跡をわからなくして（事実、その必要はなかったのですが）次のような内容を書いたのです。

「私はいつもあなたを見つめています。ご存知でしょうか。そうです。なぜ見つめているのかお知りになりたいことでしょうね。

私はあなたのある一点を好きになってしまったのです。それに恋いする余りこのペンを執ったのです。あなたは私にとって、豊満な聖処女なのです。この意味がおわかりでしょうか。あなたは処女なのです。そして、それを犯すのは、このボクです。さて、どのような手段で犯しましょうか。残念ながら私にはあなたに近づく手段はありません。そこで私は考えました。私はこの眼の力であなたを犯してみましよう。

お気付きのことでしょうが、私が犯そうとしているところは、あなたの身体の中で、おそらく、あなた自身、よもやと思われるところなのです。未だあなた以外の人の手の触れていないところ。わかりましたか。そう。そこは扉です。門という字のつく場所なのです。出来ることならこの私の唇で接吻を許して欲しいのですが。

この手紙をお読みになってから、あなたは外出される時、あなたの一点に注がれる一人の男の眼があることを、お忘れなきように。あなたが歩くとき、立ち止まるとき、腰をかめるとき、あなたのその一点を射ている視線に、あなたは耐えられるでしょうか」

この手紙を読んだ彼女が何を思ったか、私には知るよしもなかったのですが、それでも心なしか、外を歩いている彼女が、絶えず、人の視線を感じているかのような、ぎこちない歩き方をしていたことのあるのを覚えてい

るのです。

この頃から、以前に書いた「レダの血は薔薇」の冒頭にも掲げた、奇書探訪が始まり、そして、Kとの恋に連なっていったのですがここでは重複を避け、前に書けなかった二、三の話を記してみよう。

谷崎の作品に、「青野氏の話」というのが

「ご送金についてお願い」

○従来、ご注文に利用していただいております「切手代用」は、都合によりまして、今後は一切お断りします。現金書留、小為替、もしくは振替にてお願い致します。

あり、その中で、主人公が一種のピグマリオンとして扱われており、女性に見たてた人形のお尻へも口吻する部分があるのですが、その人形を少女、それも十才から十二才位までに置きかえたらどうでしょうか。

およそ、通常感覚では不潔感の方が先にたってしまうかも知れませんが、その対象が初潮前の少女のものとしたら、ずい分様子も違うようです。

小学校の校庭開放指導員のアルバイトをやっていた時のことです。夏のプール開きの日に私の順番がやってきました。保健室で生徒達の出席簿整理をしていると、

「お兄ちゃん。この子がお腹が痛いんだって寝かせてあげて」

と同級生らしいのが連れて来た。可愛らしい感じの六年生の女生徒。

水着のままでは校医を連れてくる間、冷えたらまずいので、

「あのね、洋服に着がえて寝なさい」

と言いますと素直に言うことをききます。

私はその子の脱いだ水着を干すために屋上まで持っていったのです。誰も見ていない屋上で、干した水着に鼻を押しかけると、少女の甘ずっぱい何とも言えぬ芳香が頭の中に入

りこんで来るのを覚えました。私はいつか陶酔の境にいたのです。

思えば、あの時、部分による匂いのちがいを確かめるゆとりがなかったことを残念に思えてなりません。

さて、清水正二郎氏の書かれているものは、どういうわけかアヌスを扱ったものが多くあります。氏が四十四年十一月十九日付けの、Tスポーツ誌上に「ワセリンの秘密」という小文を載せているのですが、氏はジャクリーン夫人がワセリンを持ち歩いてい

た事実を書いて、アメリカでは、すでに、男女間のアヌス性交が常識化されているほどに普及していると書いています。

ただ、白人と日本人とを比べてみて、體質的に日本人には余り向いていないということ

は言えるのだそうです。

やはり去年の「週間M」のカウンセリングルームで、「同時に二人の男とセックスした私」というタイトルがあり、混血少女が体験した衝撃のW・W（ダブルウェイ）とサブタイトルが付けられていました。

私には、最早、アヌスエロティクは異常でもなんでもなくなりつつあるように思えてなりません。

告

白

関谷富佐子

いけにえになった富佐子



一、富佐子の美容室

十一月だというのに、春のようなぽかぽかと暖い陽気です。

富佐子は何時ものように、着ているものをすべて脱いで三面鏡の前にべったりと坐って体の手入れをしています。

髪の毛と眉毛以外の毛を一本一本、丹念にとり除いてゆくのです。

こうしてムダ毛をとり除いてゆくことにより、肌の感覚がより鋭敏となり、肌着が肌にくい込んだ時、一層その意識が高まるのが感じられるのです。

私の除毛作業はすべて鏡の前で行なわれますので、私がこうしたことに興味を覚えて以来鏡の前に坐った時は肌を覆っているものをすべて取り除く習慣になってしまいました。鏡にうった自分の裸形を眺めるのが楽しみ

になってきました。

ピンと張った乳房を、一つ宛形を整えるように下から上へともんだり、さすったりしていると、だんだん乳房が硬くなってゆくのが自分でも感じられます。

そんな胸を鏡にうつして眺めると、乳房が更に上向きに張ってきて、誰か男の方に見られたい、見て欲しいという気持が湧いてきます。出来れば、背後からぎゅっと乳房を握りしめて欲しくなってきました。

鏡に自分の全裸の体をすみずみまで、ゆっくりとうつしてから、コールドクリームをたっぷり掌にのせ、太腿から膝、足首、足の指先まで、ゆっくりと筋肉と肌の張りを感じながらマッサージをくりかえします。

足をピンと伸ばしますと膝の裏や太腿で、やさしい曲線が次々と形を変えて、筋肉が収縮するたびに、肌にえくぼのような窪みがあ

らわれます。自分の足や太腿を、あちらこちらと動かしてみても、肉づきのよい白い肌に見とれている私は、ナルシスの気があるのでしようか。神秘の丘の曲線にも、なんとなくひかれる自分は、みだらな女なのでしょうか。

毛を除くということに普通以上の関心を持っている私は、自分の体を自分で眺めてみたい、きれいだと思ってみる心が、いつとはなしに芽生えているのに気づいて、びっくりするのです。それが鏡という媒体を通して眺めるとき、鏡にうつっているのは、自分であって自分でないのです。

でも私は、自分の裸体だけではなく、町で、ふと見かける若い女性や、ミニで電車などに坐っている女性の姿にも美しいと感ずることが多いのです。その女性の体を所有してみたいと思うことさえあります。

男性の方には自分の裸体を見て喜びを感じることはないでしょうね。富佐子にとっても男性の裸体なんか嫌悪の情をもよおすだけであって、少しも見たいなんて思いません。

自分の裸形を見て楽しめるのは、やはり女性の特権なんでしょうね。もっとも富佐子は男性に見られるという受け身の時の方が、より大きな喜びがあります——。

硬くなった乳房、逞ましい造形を持つ太腿の曲線、ふくよかに盛り上った臀部そしてやがては後手に縛られることになる両腕にもゆっくりと油塗りのお化粧をします。それはムチで打たれる前には必ずするお化粧です。

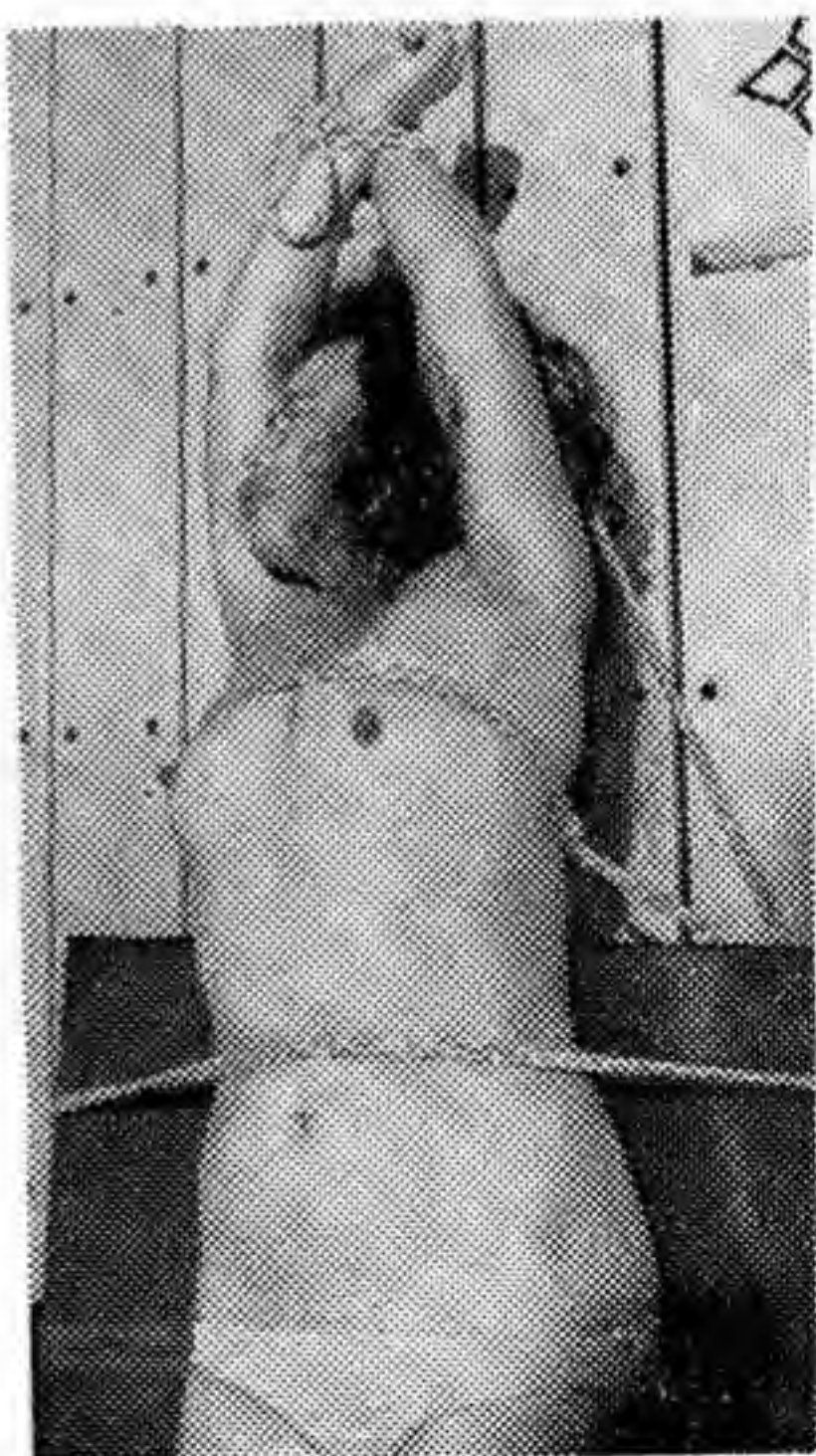
富佐子は自分の裸形を鏡にうつすことで、いつも誰か別の人がそこにいるような気持になります。私が鏡にうつった富佐子を見ると、別な人が私の裸形を見ているのです。

女の体を美しいと思い、お互いに相手が興奮するのを見つめあって語りあうとき、誰かに見られているような気持になって、恥かしさと不安は一層強い刺激となって全身の肌をつつんでしまうのです。

こんな富佐子の心情は、読者の方にわかって頂けるでしょうか。

二、外出の着付

満足するまで、体の手入れをしていると、今はこれから行われる儀式のことが、ぼんや



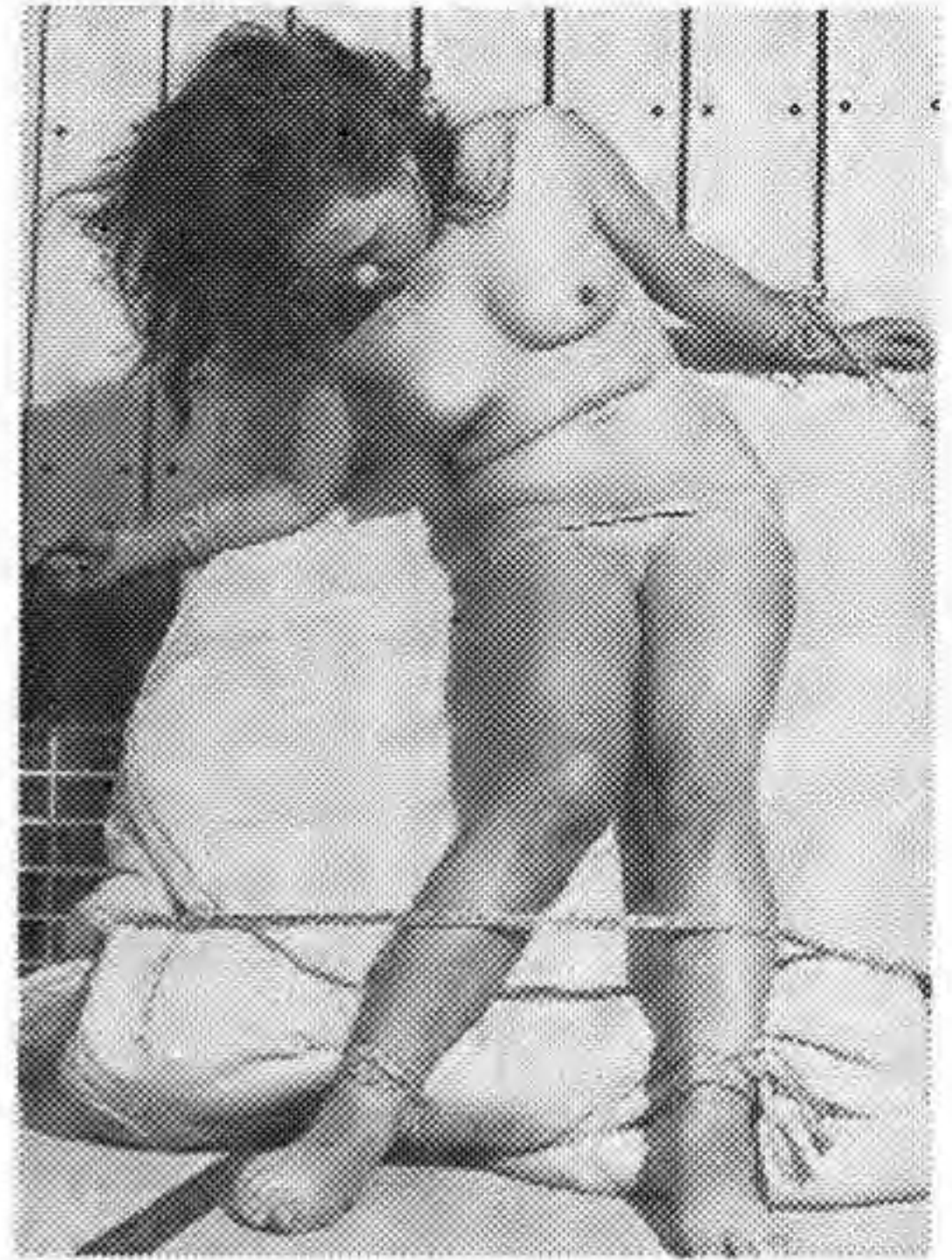
りと思い出されてきました。

いけにえに指名された富佐子は、一体どのような、どんなにいたぶられるのでしょうか。

いつも、その儀式が初まるまでは、不安がいっぱいなのです。約束の時間が迫ってくる、富佐子はいけにえの装束を身につけねばなりません。

ビキニ型のショーツと、それとおそろいのブラジャーが、富佐子の感覚帯をしめつけるのです。その上に綾線織の白のツーピースを着ました。もちろん超ミニです。白いハイヒールを出して穿いてみました。

ヒールは普通のより高いものです。つま先に体重をかけて歩くと、どうしても腰を充分振らなければ体の重心がとれませんので歩き



難しいですが、今日は歩くことはありませんし、ゆっくりと歩いて超ミニを見せるのには好都合です。

こうして、いけにえの装束は出来ました。これで儀式の場所まで大ぜいの人々の中を観察されながら歩いて行きます。

約束の場所は五分ぐらい歩いた所でした。一步外へ出ると十一月の風が超ミニのスカートの下からビキニのショーツに爽やかに触れてゆきます。慌ててパンティ・ストッキングを着けたしました。

広い駐車場のある約束の場所には、もう迎

えの車が来ておりました。

車の間をゆっくりと歩く富佐子の姿を通行中の人や車の中の人達が、一せいに注目しているのを感じながら、迎える車の助手席に腰をすべらしました。車はすぐスタートし見なれた景色が流れて行きます。

超ミニのスカートはクッションのよいシートに坐ると膝頭だけでなく太腿まで現わしています。もう自分で何も考へなくても、何もしなくても、いけにえの台に登らせられるのだと考えますと、じわじわと迫ってくる不安感が重くのしかかってきて思わず両膝をしっかりと閉じ合わせておりました。

三、儀式場

やがて車は、私の心の動きなどとは無関係のように、その儀式が行なわれる場所に到着しておりました。車がスタートしてから此处へ連れてこられるまで、まるでタイムマシンで運ばれたような気持です。

玄関に入って案内の女の子と視線が合うと可愛いらしいその子は、今日これから行なわれる儀式をすっかり知りつくしているかのよう、いけにえに捧げられる富佐子の体を、上から下まで眺めて、ポツと顔をあからめ、くるりと後を向き、ぎこちない足取りで会場へ案内して行きました。

会場にあてられた室には、男の人たちの話し声が低く聞えています。今日の見物の人達は三名でした。富佐子はそこへ引き寄せられるように入って行きました。

いけにえとしての初対面の挨拶やら、今日の儀式の次第やらを聞いているうち、不安な気持も幾分薄らいできました。三人共、上品な標準語を話す教養のある人達のように、言葉の端々に私へのいたわりがにじみ出るように感じられるのが好感が持てました。でも、皆相当なマニアの方と承っておりますので、私は彼たちの視線を痛い程全身に受けて、思わず身をすくませてしまいました。

しばらくして控室へ案内されました。その部屋には大きな三面鏡が置いてあります。その前に立ってミスカートを取り、ストッキングをはきました。ストーツを脱ぐとビキニのショーツとブラジャーだけが、わずか

に肌を区切っています。

鏡にうつっている、そんな自分の体を眺めていましたが、意を決してブラジャーをはずして脱いだ着物を整理し衣紋箆へ重ねて入れるとショーツを脱いで一番上に置きました。

体にまといつくものが全く無くなりますと又新しい不安感が襲ってきます。でも、今日も儀式的なかできっとムチ打ちが有るにちがいないので、もう一度体中に油をぬっておかねばなりません。

先を細く裂いてある皮のムチは、肌にまといつき皮膚を切ります。その時の痛みは心よいものですが、切れた皮膚は永い間しみになっている残るので充分に油をぬっておくのです。

鏡の前に坐り、首すじから肩、肩から腕のつけ根、乳房と上半身からぬり、臀部と太腿は特に注意して油光りするぐらい丹念にぬりこみました。臀部と太腿は特に激しいムチ打ちを受ける個所ですから……。

四、儀式の用意

「用意が出来ましたか」

声と共に襖が開いて、迎えの人が入ってきました。

「ええ、整っております」

富佐子はこっくりうなずいて

油をぬり終った裸体を開いて見せましたが、これから皆の前へ連れ出されるのだと意識すると恥かしさが一度にどっとこみあげてきて、思わず坐りこんでしまいました。

「どうしたの？」

というやさしい声に

「このまま裸で引っ張り出されるのは恥かしいもの、縛ってから連れてって——」

と言っていました。縛られて

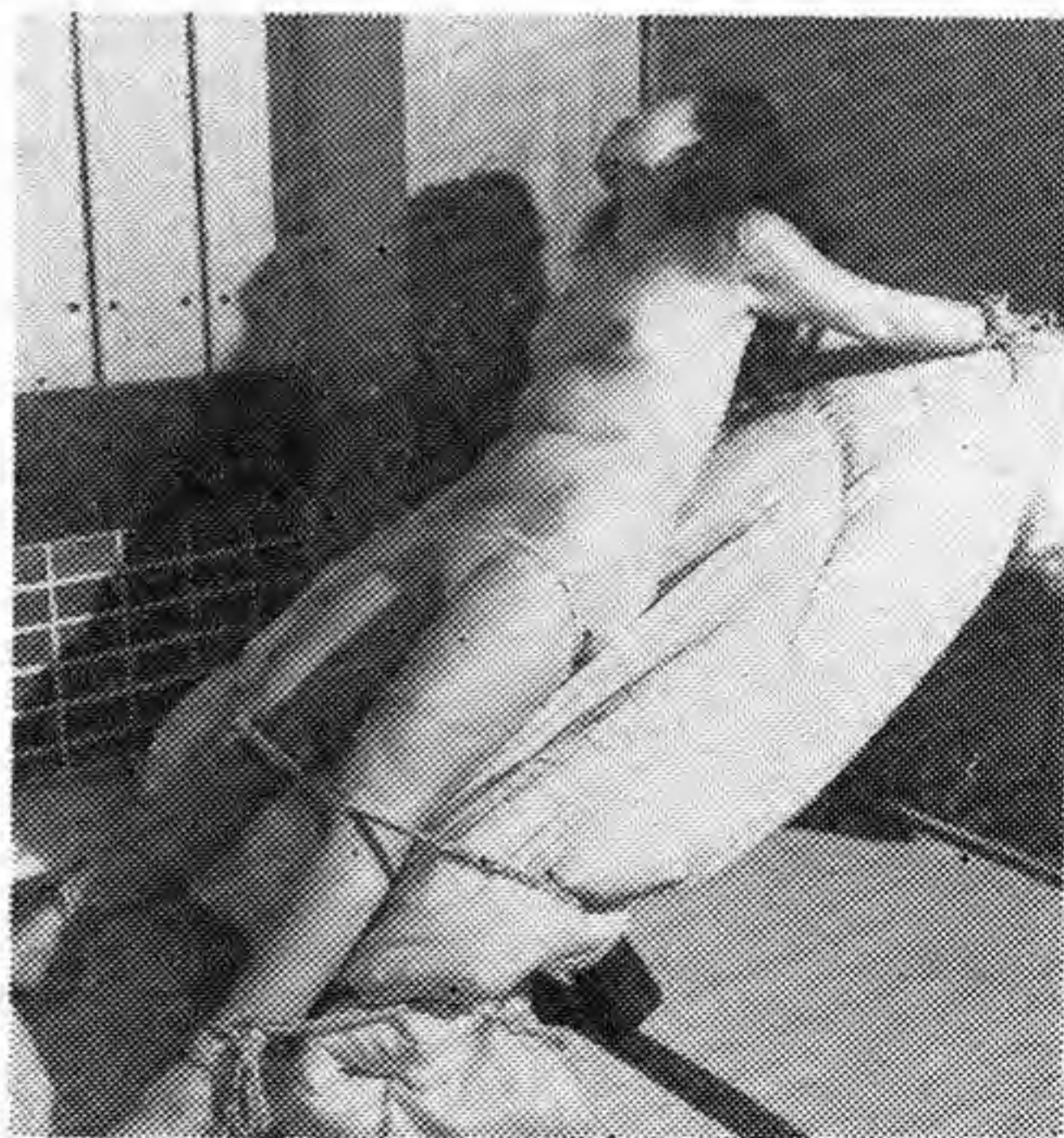
無理矢理追いつ立てられる方が富佐子にとっては、気が楽なのです。お風呂へ入る時の様な姿のまま自分から三人の男の人達のいる部屋へ歩いてゆく方が、ずっと恥かしかったのです。

「ああいいよ。でも最初はいけにえの裸形をゆっくり眺めてもらうのだから、あまりごたごた縄を掛けるのはまずいね。簡単に後手だけにしてあげよう」

衣紋箆から浴衣の紐を出してきました。

「膝の上にお坐り」

富佐子はだかれるように坐ると、両手を後

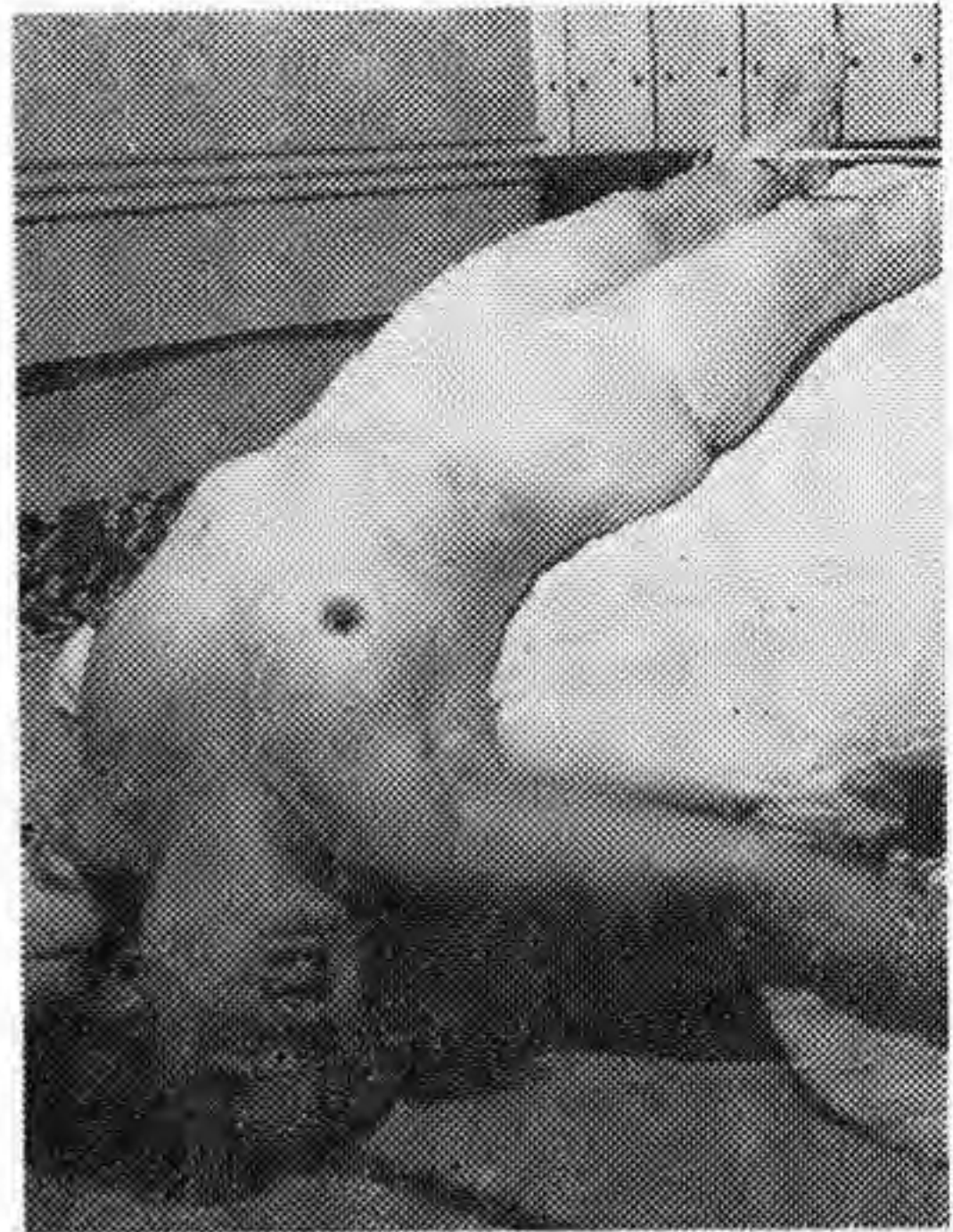


に回しました。手首だけをしっかりと縛られると、思わず体が硬直してしまって、一人で立ち上ることが出来なくなっていました。

「しばらく、このまま、だいて——」

迎えの男は、いとおしいもののように髪をなでていましたが、やがて富佐子の硬くなった乳房や張りきっている太腿を、もみほぐすようにしていました。

富佐子も何かを求めるように顔を上向けて



以前に見たことのある邦画の一場面を思い出していました。

女性の産業スパイが金属性の模様入りの仕切立に全裸で両手を縛られています。彼女はスパイに失敗して捕えられても、どんな恥辱にも耐えられるように訓練されるのです。

乳房や太腿にさわられたり、裸にされたりするのは勿論、最後には圧力計で圧力を測られたりするのですが、その女性は太腿をふるわせながらも、しっかりと立っていました。富佐子も、その産業スパイの女性のようにいたぶられるのですが、とても立っている自

信はありそうにありません。

「もう気持が落着いた？」

そう問われて思わずうなずいた富佐子は、後手のまま立ち上げてもらい肩をだかれる様にして儀式の行なわれる部屋へとつれて行かれました。

その部屋の照明はすべて赤色であり、部屋全体の色も、中央に置かれてある大テーブルも家具調度類も、すっかり赤く染まっていました。富佐子の体も赤い石膏で作られた人形のようにでした。充分にぬり込んだ油のため、赤光りにテカテカと光り、それは奇妙なブロンズでした。

中央の大テーブルに膝と肩でだき上げられた富佐子は、テーブルの周りに集まった男の人たちの観察するのに最もよい場所に坐らせられました。

後手首を縛られたままの文字通りの全裸体ですので、富佐子は恥かしくて、おもわず膝を合せ安定を取るように足首を少し左右に開いて坐ると、臀部が直接テーブルに密着してひんやりとした感触が体の芯にまで、しみと

おる様でした。

出席した三人の男の人たちは、そんな富佐子をぞんぶんに眺め、乳房や太腿の張り具合をたしかめるように、手でふれてみたりするのです。恥かしさのため私はもう声も出なくなり、出席者のいろいろな問いも耳に入らない位です。只、うなずいたり顔を横に振るだけでじっと坐っているのですが、いたたまれない気持でいっぱいです。

「こんなに見られているより、いっそのこと吊るして——」

富佐子はやっとのおもいで叫んでいる自分に気づいて愕然としました。

後手を解かれて鴨居に吊るされるため、前で手足に縄を掛け直された時には、富佐子はその人の胸にだかれるように、ぐったりと体をあずけていました。

縄が鴨居に掛けられ、ゆっくりと引かれると富佐子の体はだんだんと持ち上げられ、ついに爪先だけがわずかに着いているだけでした。

三人の男の人たちは待っていたように富佐子に近寄り、身動き出来ないでいる体を存分にしらべます。富佐子は口唇がひきつりからからに乾いて声が出なくなっています。

「さあ、ぼつぼつ初めましょうか」

男のなかの一人がムチを手にして構えました。一打、二打、三打――。

激しいムチが富佐子の臀部でさくれつしました。臀部の筋肉がぶるぶるとふるえ、太腿がつっぱるように緊張しているのが自分でもよくわかります。

全身の力を臀部から太腿、そして胫から爪先へかけて、力の限りこめている――何物にも変え難い――痺れるようなところよさ。

私は思わず

「ア、ゆるして！」

と叫んでいました。それは痛さのために叫んでいるのではなかったのです。余りのところよさに、富佐子の全裸の体が、どんなに変化するのか、それを見ようと十幾つの男の目が注がれているなかで、富佐子の羞恥心が言わせた叫び声でした。

私が「許して」と叫んだので、最初の男の人はムチの手を止めて次の人に替りました。

二番目の人、三番目の人。

私にはもう誰が誰だかわかりません。次々と打ち下ろされるムチが臀部に当たったり、太腿に当たったり、或はそれ以外の個所にも当たっているかもしれません。



「アア、許して、かんにんして――」

そんな叫び声を必死になって只、口から出しているだけでした。

周りの見物の人達は、どのように聞いていたかわかりませんが、富佐子にとっては、そんな叫び声を出している方が、一層こころよかったです。

打たれれば打たれるだけ、富佐子は悲鳴を挙げていました。もう全裸の体がどのような

なっているのか、自分がどんな恥かしいことを叫んだりしたのか、それはわかりません。

只、体が硬直したり、痙れんしたりしているのが、朦朧とした意識の中でわかっていました。男の人達が何度も交替したのか、今、誰がムチ打っているのか、うっすらとそんなことを考えながら、打たれれば悲鳴をあげ、悲鳴をあげては打たれていました。

悲鳴をあげればあげる程、富佐子の体は快感に打ちふるえるのです。意識的に悲鳴や叫び声をあげているのではないのですが、心の中には秘かに叫び声を大きくあげる方がこころよいのだという気持があります。

ヒ―ヒ―悲鳴をあげ、体に当たるムチに拍車をかけられて一層もがき、呻めき、果ては許しを乞うて、言葉にならない言葉を吐き、自分の悲鳴に酔いながら、激しいムチ打ちのなかで気が遠くなってゆきました。

気がついた時には、縄は解かれていて一人の男の人が、痙れんしている富佐子の臀部をやさしくさすってくれていました。太腿や胫の筋肉はまだ強直していて、まだ自分の自由にはなりません。

富佐子はぐったりとなって、その人にだかれています。他の男の人達は、そんな私をじ



っと立ったまま眺めているのです。富佐子の不安感は薄らいていましたが、それだけ恥かしさは一層増していました。

別の男が中央の大テーブルの上にマットレスを敷き、四方の脚の部分に太い縄を取りつけています。そんな作業をぼんやりと眺めていた富佐子は、次に行なわれる儀式のことを想像して再び体が固くなってくるのでした。

盛り上った乳房の脇に鈍い痛みがあるのは自分では気がつかなかったのですが、さっきのムチ打ちで当たったのでしょうか。自分では少し肉が付き過ぎたと思う太腿にも、幾筋ものムチが赤く残っております。

鈍い痛みが、背中から臀部、それに内腿のあたりにも、ころよく残っていて、自分では五分か、せいぜい十分ぐらいだと思っていた最初の儀式が、案外、三十分も一時間もだったのかもしれないと思う、自由を束縛された裸の富佐子の姿を、どのように観察されたのかと、いけにえとしての恥かしさと喜びが、ひしひしと感ずるのでした。

テーブルの用意が出来上ると、再び富佐子はだき上げられて、その上に仰向けに置かれました。もうすっかり観念した富佐子は言われるがままになっていました。

右足を伸ばせというので右側へ出しますと足首に縄を掛けられてテーブルの脚に縛られました。左の足首も同様に左側のテーブルの脚にしっかりと固定されました。

両手も左右に開かれテーブルの脚の部分にがっちり縛られてしまいました。三人の見物人も加わって五人がかりですから、忽ちのうちに富佐子は大の字に仰向けにテーブルの上で固定されてしまったのです。

頭はテーブルの外に落ち、がっくりと長い髪の毛をたれています。顔が仰向きですので口唇が自然に開き気味になってきます。全身の力を抜いていますと、何となく舌が口唇の外へのぞいてくるような気がします。口が乾くので閉じよう閉じようとするのですが、どうしても舌がのぞいてくるのです。

口が乾くのは興奮しているしと言われますが、富佐子は儀式が始まる前には、いつもこんな気持を味わいます。儀式の最中はもう夢中で、そんなことを考えるひまなんかないのですが……。

一人がテーブルの上にあがり富佐子の腰を持ち上げ縄のゆるみの無い様に体を引き上げますと、他の一人は枕や座布団を差し入れます。それから肩の下、背中に座布団を置き胸がぐっとそる様にさせます。枕や座布団が無くなると、掛布団を押し込んでいきます。

なにしろ、手と足を思いきり左右に開いたまま、テーブルの脚に固定されていますので

富佐子の体は胸をそらしたまま、そり返ってしまします。あとになって、お尻や腰の下には敷布を丸めて押し込んだので、下半身は特に突き出した様な恰好になってしまい、頭を垂れている富佐子には、自分の体が見えないだけに、どんなになっているのか不安で仕方がないのです。

体の奥底が、もぞもぞとする様な焦燥感が富佐子を居ても立ってもいられない気持ちにさせます。

足の裏を擦られた、たまらないようなくすぐったさに身をよじって、ふと気がついて、誰も足の裏を擦っていないかったというじれったさ。富佐子の足の方で、男の人たちの動く気配をぼんやりと感じながら、うっとりとしていました。

五、ムチを待つ富佐子

大の字の形にしっかりと固定された富佐子は、室内が急に静かになったので少し眼を開いて見ました。

薄暗い赤い照明に、海の底の様な感じがします。

その時富佐子は、自分が大きな岩の上に、大の字の形にくさりで繋がれているのではな

いかと錯覚しました。頭を下げたまま放置されていると次から次へと変わった幻想が起こってくるのです。

パチンと小さな音がすると、顔の部分だけが白色のまぶしくは無い程度の明かるさのスボットに照らされました。きつとムチ打ちの痛みに悲鳴をあげてもだえる表情を観察されるのでしよう。

誰かがこれからムチの跡をつける太腿や腰の張りぐあいを試す様につかんで見ておられます。それを汐に皆様が、乳房の硬さや形を直接、手を使って調べています。

手足をびんと張り体をそらす様にしっかりと固定されていますので、いくら力一ぱいもがいても、顔以外は腰がわずかに動くだけで、それも逃げたり、隠したりはする事は全く不可能です。

そのうえ私の眼からは触れられる肌の部分は一切見えないので、恥かしさは最高の状態となり、体中の筋肉がこわばって肌の感覚が無くなってきました。

両足を思いきり伸ばして、突っ張りたい気持ち。でも足首をきっちり固定されていますので、自由がききません。只、足の拇指に力を入れてピンと張るくらいが関の山です。

手首と足首に括られた縄の圧迫感がきつく朦朧とした意識が戻ったり、それもやがて消えてしまい、痛いのか痛くないのか、自分の手足であるのか無いのか、体全体が、ふわふわと空中に浮かんでいる様な気持ちです。

更に新しい刺激を求めたい、と思います。体が弓の様にそり返っています。無防備にさらけ出された体の前面が、もうこれ以上さらけ出す事は出来ないという、あられもない姿態で放置されている富佐子。

ムチ打って欲しいと真実思います。こんな富佐子の気持ち、わかって頂けるでしょうかしら。

その時、ムチで打たれると、その痛みによって体の存在が意識に浮かび、それから体をムチ打たれることにより肌の感覚がわき、喜びが持続していきます。

精神的な羞かしめは悲しみとなりますが、肉体的な恥かしめは、女性しか知る事の出来ない喜びを感じます。

これから富佐子は、いけにえとなって、その喜びの花園へ導かれてゆくのです。早くムチ打って欲しいと思います。

(おわり)

連載 アブ紳士行状記

M 派 交 友 録 (七)

— 本村信雄の巻 Ⅱ —

鬼 山 絢 策

禿 頭 紳 士

「拝啓 突然の出書失礼御許し下さいませ。
最近、奇譚クラブの再刊せられていることを
知って古本屋を漁り、入手しました。

昨年の十月号、並びに今年新年号で貴先生
の御文章を読者通信で拝見し誠になつかしく
存じました。殊に新しい創作御執筆中と承り
一日も早く御発表の日を待望しております。

尚それにも増して御迷惑でなくば時々の御
交際を御願いたし、種々御指導を仰ぎたく
存じますが、如何でございましょうか。

私は先年、先生の御創作「へぼきゅうり」
と「らぶ・すれいぶ」に魅了せられ感激して
その追想に、今も尚、日々を過ごしている者
であります。

私としましては、余り嗜虐的な縛りや、鞭
打ちなどは、考えただけでも身内の痛む思い
がして堪えられませんが、貴先生のアイデア



カット・春川ナミオ

によるマゾヒスティックなスレイプとしての
如何なる屈辱にも、女性への奉仕であれば、
喜んで勤めさせて頂きます。

もしも理想の女王様がおられるなら、適当
な方法で試練の資料にも御使用願えれば幸甚
と存じます。

何卒、御返信を頂きたく、よろしく御願ひ
申し上げます。

七月十二日

本村 信雄

鬼山絢策先生 御侍史」

○
手紙が保存してあったので、原文のままを掲げた。達筆で書かれてあるし、文体が古いので、かなり年配の人であることが察せられる。

苦痛を好まず屈辱に魅せられるというところも私と同型であるので、早速、返信した。

住所が横浜伊勢崎町の喫茶店Mの気付けになっている。ちょっと遠いので何度も会ってから用件を持ち出すのも面倒くさいと思ったから、いきなり私の希望をぶちまけて書いた。

つまり写真のモデルになってもらいたいと書いたのである。写真製作に御協力を頂けるなら、お会いしたい、と書いて出すと、折返し返事がきて「ともかく御会いしたい」というので、新宿駅で待ち合わせて、会った。

本村氏は五十才を、だいぶん越しているのではないかと思われる。背丈は1米55ぐらいで、小柄だが小肥りに肥っていて、鼻下にグレーのひげをたくわえ、かなり強度の眼鏡をかけている。恐らく近眼と老眼が混っているであろう。その眼鏡の奥から温和な眼が、のぞいている。中折帽子をかぶっていたが、帽子をとって挨拶したところを見ると、その頭が、みごとに禿げている。

まことに失礼なことだが私はその禿げた頭を見た瞬間「これは写真になる」と思った。横浜の喫茶店気付けと住所をかくし、もちろん名前も仮名である。

しかし、これは私にとっては、むしろ信用できる人物と解釈した。

職業は学校の先生であると言われたが、どうも定年すれすれか或いは越しているようにも見られるので、校長さんのように思えた。

学校と言っても、いろいろあるが、私の見たところでは小学校ではない。また大学でもないような気がする。中学校か高等学校あたりと見た。

とにかく名前も住所も身分も隠して来られたので私も深く知ろうとは思わなかった。第一、私だって名前も住所も変えているのだから人のことを、とやかく言えた義理ではない。

花村などと違い、秘密主義な点に私は信頼感がもてた。だが、それだけに写真のモデルになってくれるかどうかと危ぶまれたが、私にとっては、それが主目的なのだから、とにかく私の希望を述べた。

「その撮った写真はどうされるのですか」「別にどうするということはありません。誰

にも見せず、私の金庫に厳重に保管しておくだけです。一部はモデルの方に差上げますが、絶対に人に手渡さない、人に見せないと言うことを約束して頂きたいのです」

「現像や焼付けはどういう風にするのです」「全部、私が深夜に家族にも見せず一人で処理します。他人の眼には触れさせません」「とすると、あなたが写真を撮る目的は何なのですか」

「サア、それは自分にも分からないのです。写真を撮るということ自体に、興味があるのです。それと自分で現像や引伸しをする時の楽しさ、そして、よりよい写真を創って行くための創作意欲、そんなところでしょうか」

「前にも写真撮影の経験はおありですか」「あります。相手の倉田さんも、その経験があります」

「その写真を見せて頂けないでしょうか」「それは困るのです。誰にも見せないと約束してありますから」

身分もあり、思慮も深いだけあって、いろいろ質問してこられた。その質問も急所をついている。最後に私は、

「要は私を信じて下さるほかありません。い

かがですか」

「ところで費用の点は、どういう風に……」

「旅館とかフィルム代とか、そういったものは一切、私が負担させて頂きます」

「その女性の方に対する謝礼は？」

「いや倉田さんは相当な身分の奥さんです。謝礼などは差上げておりません。そんなものを出したら失礼ですし、受け取る人でもありません。すべて趣味の上から出発しているのですから」

「分かりました。それでは、お願いします」

ヘネシーVX

早速、由紀さんへ電話して、本村氏の概略を伝えた。

「年よりを、いじめるのは可哀想ね」

「でも先方は非常に熱心で、是非お願いしますと言ってるんですから、願いを叶えてやったらどうですか」

「フフン」

由紀さんが「フフン」と笑った時は大体、承知したことなのだ。そこは今まで何度か、このフフンを聞いているから、そのへんは、のみこんでいる。

「ともかく会ってもいい」と言うので、早速日取りを手紙で打ち合わせて、新宿駅西口のホームで待ち合わせた。

約束の時間に由紀さんと二人で行くと、本村氏は、もう先に来て待っていた。

「あの人です。会ってみますか」

「ここまで来たんだから、しょうがないでしょう」

ということで、私は由紀さんを本村氏に引き合わせた。

「やあ、これは……」

本村氏は由紀さんが、予想していたより美人なので、とまどったようだ。

本村氏は帽子をとって身体を90度に折り曲げ、最敬礼をした。その見事に禿げ上がった頭を見た由紀さんは私の方を見てクスリと笑った。

駅頭では話もできないので、

「どうします？」

と目線でサインを送ると、由紀さんもOKとうなずいて見せた。どうやら本村氏の頭に興味を抱いたらしい。

私は、その場で参宮橋の都ホテルに電話して部屋をリザーブした。

昼間、男二人に女一人の客というのは、かなり奇異な感じを受けさせるものと思える。

女中に三人とも人相をジロジロと見られるのは、由紀さんは前からイヤがっていたが、私もいい気持ではない。そういえば電話をかけた時、

「お二人さんですか」

「イヤ、三人なんですがね」

と言うと、

「エ？ お三人さんですか」

と聞き返されたのも、妙にくすぐったい気持がした。

だが、年配者と見て安心したのか、比較的いい部屋へ案内された。十畳ぐらいで、次の間が三畳ほど、まずこの位の広さがあれば楽である。

「ビールでも飲みますか」

さすがに年配だけあって、本村氏は三人の不自然さをなくそうとし、また話がとぎれないように適当に由紀さんに話しかけ、ひたすら御機嫌をとっている。

「妾、ブランドーを持ってきましたのよ」

「ブランドー持参とは、恐れ入りました」

と本村氏はニコニコしていたが、由紀さんの取り出したブランドーを見ると、笑いがとまった。

ヘネシーのVXである。

若い人なら洋酒と言えどジョニーウォーカーの赤とか、オールドバー、ジョニーの黒など見れば驚くかもしれないが、ヘネシーVXはケタが違う。ジョニー黒は当時一万円ぐらいだが、VXとなると三万円近い。ヘネシーにもいろいろあるがVXは日本ではナポレオンと並び称される最高級酒だ。

本村氏も知っていたと見えて、

「こんな高いお酒を頂いてもいいんですか」と眼を丸くした。

どうせ、わざわざ大金を出して買ってきたものではない。どこからかのもらいものだろうが、亭主がアメリカへ行ってから一本持ち出してきたのだろうが、ちょっと度胆を抜かれた。

由紀さんは栓抜きを取り寄せて気前よく栓をあけると、私と本村氏にすすめた。

由紀さんは、ひと口、飲みほすと、「妾、お風呂へ入るわ」

と例によりサッサと洋服を脱ぎはじめた。

芸 苑 社

頼んだビールや肴が来るまでは、カメラの

支度もできないので、ビールとブランデーをチャンポンに飲みながら、話をした。

「すばらしい美人ですね。くろうとですか」

「イヤ、前にも申しあげたように人妻です」

「あなたの奥さんですか」

「違います。あなたを、せんさくしない代わりに、彼女の身分もそこらへんまでにしておきましょう」

「失礼しました。しかし、あの方なら喜んで奴隷になります。何でもします」

「ところで、あなたは奴隷の経験はおありですか」

「あります。あなたは門田奈子というひとを知っていますか」

「ああ、あの芸苑社の……」

「あの女に、ひどいめにあいました」

ここで佐次浩介と門田奈子のことについて触れておこう。

はじめ、この二人及びそのグループを「佐次浩介の巻」として、独立した章で書こうと思っていたのであったが、友達でもないものを「M派交友録」の中に独立して加えることはいかにも友人の一人であるかのような感じにとられることを恐れた。それでは他の友人に対して失礼である。彼は友人としても失格

であり、M派というたてまえから見ても、彼はSであるから失格である。それに、もともとたいして交友があったわけではなく、二回ほど会っただけでデータも少ない。ただ私の友人である本村氏や、前回の花村などが関係しているの、どうしても彼のことを書かねばならなかった。

それと、もう一つ。Mの世界、Sの世界には必ずこうした毒虫がいることを報告して、こういう方面に興味のある方々に、くれぐれも御注意申し上げたい。前者の失敗を見て後者の戒めとする意味でも、大いに意義があると思うので、私の知っているだけのことを書いておく。

話は逆行する。

記憶もさだかでないが、たしか31年の十月ごろだったと思う。

佐次浩介から手紙をもらい、是非会いたいと言ってきた。

彼が本誌に投稿していた頃のものを読むとSの作品だったので、あまり気は進まなかったが、ともかく喫茶店で会って見た。

二十七、八の細おもての美青年で、いかにも文学青年といったタイプ。言葉つきも柔ら

かく女性的で、愛想がよい。

前に岩本巖の人物を書いたが、顔形は違っていたても、態度、物腰が彼と同型である。

実際には岩本の方が佐次よりあとから会ったのだから、私としては岩本に会った時「ああ、この男は佐次浩介と同型だな」と思ったのである。

「先生の作品は、すばらしい」とか「私は、Sよりも、むしろMの理解者です」とか、さかんに調子のいいことを言っていたが、「実は、こんど同好の士の趣味のクラブをつくりました。先生にも是非、入会していただきたいのですが……」

と言って、ガリ版でプリントしたパンフレットを出して来た。

○

奇譚クラブ誌友を中心とする

アブ・マニアの会、遂に誕生！

芸苑社友の会 御案内

奇譚クラブは世界一、面白い雑誌であります。幸いこの雑誌によって、私共の欲求は殆ど満たされていますが、何せ公刊誌のこととして種々の制約（以下五字不明）があります上に、奇クにもなしえない部面はいろいろあります。

そこで今回、誌友同好者の会を設立し、我々が奇クによっても充しえない夢を逐次、実現したいと思ひます。

あなたもぜひこの際、御参加下さいまして共々に灰色の生活に桃色の光をとまされますよう、お祈り致します。

一、名称。当分の間、表面上「友の会」と致します。本名は「アブ・マニアの会」

二、入会資格。

マゾ、サド、フェチ、ソドミヤ、レスボス責め、縛り、女装、切腹、浣腸、禪、その他、あらゆるアブ・マニヤ。男女年齢を問わず。

三、機関誌。

公刊誌としては「奇ク」で充分なので、これを会の機関誌として、その発展に協力する。他に連絡用として毎月、会報を発行する。

四、主な事業。

左の各種を企画していますが、会員の希望にて其他、何でも行ないます。

1、手紙の交換。交際の斡旋（本名、住所を公開することなく秘密裡に文通と交際が出来るように斡旋します。つまり、会員の住所は会に登録されているだけで、一切、

他には洩らしません。文通の方法は会報誌上、又は奇クに「友の会内、誰々」として通信を発表する事を許しますから、その人に来た手紙は、まとめて廻送され、それに対する返信も封筒に「友の会、誰々」と書くことによって秘密は、いつまでも保たれます。交際も、これと同様に会を通じてなされます。

（これこそ理想的な方法なのです）

○

ここまで読んできた中で、私はいろいろの疑問を生じた。

「これによると奇クに密接な相互関係をもっているようですが、奇クに対して諒解を得てあるのですか」

「ええ、そりやもう、奇クは双手をあげて賛成してくれています」

「奇クの編集長を知っていますか」

「箕田京二さんでしょう、よく知っています」

「会ったことがありますか」

「イヤ会ったことはありませんが、文通は始終しています」

この中には、いくつもの嘘があることは、すぐ分かることである。

第一に公刊誌である奇クが、こんな危険な

秘密クラブに協力するわけがない。ひとつ間違ったら発売停止である。従って「もろ手をあげて賛成」は嘘。また編集、或いは営業責任者にも会っていないで、諒解を得られるはずがない。

だが奇クを利用して会員を殖やそうとは、うまい手を考えたものである。奇クこそ、いッラのカワで、手紙の使いやっこの役目だけを仰せつかるわけである。

しかも「奇クに発表することを許しますから」とは何ごとか。

「MSに関わらず、あらゆる分野を総合して募集するんですか。それでは純然たる趣味の会ではなく、営業的になりますね。営業的になると法に触れる恐れがありますよ」

「その点は大丈夫です。あくまでも営利を目的としたものでなく、趣味同好の士の集まりなんですから」

危険な商売

私は、更に先を読んだ。

○

主な事業
2、資料の交換、売買の斡旋。（奇クを始

め類似誌、文献、写真、絵等の不用品、重複品、又は処分品を、希望値を明記して会にお送り下されば会報誌上を通して売却して差し上げます。これらを買いたい方は、会報誌上の分譲目録により申込まればよろしい。又、特に希望の品があれば誌上に「求む」仲介広告を出せばよろしい）

3、資料の展示、交換、即売会。（一定の日時会場を定めて開催。会員は出品自由）
4、責め写真の撮影会（毎月、一回以上、開催。会員は出席、撮影、見学自由です）

5、女装の会（毎月、一回以上、定期的に開催。一定の場所に集合して女装の上、種々交歓）

6、各種プレイの会（女を縛る会、男を縛る会、洋装の会、和装の会、切腹の会、その他、それらの複合した会合や単独のプレイなど、会員の希望により開催）

7、非公開、回覧雑誌の発行（公刊誌にのせ得ない極端な内容の物を、写本形式で刊行）

○

「非公開雑誌とは、どんなものですか」

「まあ昔からいろいろありますね。壇の浦合戦記とか外国にもファニーヒルとか」

「つまり純然たるエロ本ですね。それは危険だ。また資料の売買というのも賛成できません。こんなことをやると法に触れますよ」

「いや、そこは秘密にやりますから大丈夫です」

更に別紙として

○

入会申込書

今般貴会に入会したく会費（一年分、六百元・半年分三百円）同封して申込みます。

住所

氏名

年令

才

私の傾向は○○○です。

希望（今月中に左のうち何か一つ、会合をやりたいと思いますので、あなたはどれを希望されるか、一つだけ○印をつけて下さい）

1、責写真撮影会

2、女装の会

3、資料の交換会

芸苑社友の会 御中

（以上、たまたま保存してあったので、すべて原文のまま）

○

いまこれを読むと、会費一年分六百元とい

うのが、ずい分、安く感ぜられる。まあ現在に換算すれば二、三千円というところか。それでも安い。しかし会費をとるということはよくない。ここに至って、この会が純然たる営利の会であることが暴露された。

「いかがでしょう。先生にも是非、御入会を願って、いろいろと御教示をたまわりたいのですが……」

「とんでもない！ こんな危険な会になんか入れやしない。」

「いや、私の考えているものと、行き方が違うから遠慮しましょう」

「そうですか。先生なら別に会費は要りません。会費は免除しますから、ひとつ顧問になって頂けませんか」

それは、なお困る。

体よく断ると、また私の好奇心をもやすようなことを言い出してきた。

「残念ですね。まじめな会なんですけど。それに今月Mの撮影会をやることに決定しているんですが……」

私のヨワイとこを、ついてきた。

「いつやるんですか」

ウツカリ聞いてしまった。

「今度の日曜です。おいでになりませんか。」

御入会はそれからでも結構ですよ」

「そうですか。何時、どこでやるんですか」
「それは、いずれ決定次第、御通知します」ということで、その日は別れたのである。

会 の 正 体

間もなく通知が来て「今度の日曜、午前十時。集合場所は新宿駅西口改札所前。目印は友の会の旗のあるところ」というような文面だった。

深入りしたら危いぞと思いながらも好奇心を抑えきれず、ノコノコ出かけて行った。

新宿駅の西口改札所を出て「友の会」なる旗を探したが、そんなものはどこにもない。

佐次が一人、立っていて、キョロキョロと忙しそうに、あたりを見廻している。

「ヤア………」

と声をかけるとニコリ笑って

「わざわざ、どうもすみません」

と相交わらず、お愛想がいい。

「他のかたは？」

「ハア、それがどうも会員の集まりが悪いもんでして……」

相交わらずキョロキョロと落ちつかない。

「場所は、どこなんですか？」

「ハア、場所はもうちゃんと、とってあるんですが……」

人の顔もろくろく見ずに、うわのそらで返事をしている。

「あ、そうそう……」

と後ろを振り返って合図した。

五、六歩さがったところに立っていた女性がツカツカと歩み寄ってきた。

「門田奈子さんです。こちら鬼山先生」と紹介した。

門田奈子なる女性はニコツと笑って会釈したが、やややせぎすで、そのくせ顔は丸顔で取り立てて美人というほどでもない。

「あなたのお作は、奇クで拝見しています」

女性にしては、しっかりした文章を書くように記憶していた。

5分ほど立ち話をしていたが、一向に会員なる人々の集まる様子がない。佐次は明らかにイライラしてきた。

「ちょっと電話をかけてきます」と立去ろうとした。

「まあ、あのね、立って待ってるのも何だから、その食堂で待ってますから」

と言葉をかけておいて、私は門田嬢？ を

誘って傍の食堂へ入った。

その時、門田奈子はチラリと後ろをふり返ったその視線の方を見ると、駅の片隅にもう一人、男が立っていた。

会員だか同人だか分からないが、此方へ来る様子もないので、二人で食堂へ入った。

西口は不便なところで喫茶店がない。

「今日は、あなたは撮影する方ですか、される方ですか」

「サア、どっちでしょう。ホホホ」

「一体、あなた自身はMなんですか、Sなんですか」

「それが分かんないんです。時にはMになったり、どうかするとSになる時もあるんですよ。自分でも分かんないんです」

なかなか惻口な返事をしている。

「近頃は、お書きにならないようですね」

「ええ、仕事の方が忙しいもんですから」

「お仕事は？ どのような方面の……」

「フフフフ」

私の顔を見て笑う。門田奈子が佐次浩介の恋人で芸苑社の同人だとは、この時は、まだ知らなかったのである。彼女の方は既に私が知っていると思って話したのであろう。私が知らないことが分かると彼女は、ますます口

を閉じて、突込んだ話は皆、上手にそらしてしまった。

30分もたったろうか、佐次がツカツカと入ってきて、

「どうも今日は会員の集まりが悪いので中止になりました」

と言う。多分そんなことだろうと思った。

「また改めて御通知しますから。今日はどうも、すみませんでした」

「そうですか。それは残念ですな。まあ、飯でも食べて行きませんか」

「今度会報を発行しようと思ってるんです」

「ああ何かこの前のパンフレットにそんなこと書いてありましたね。どんな会報ですか」

「何しろ会員がどんどん殖えているもんですから、とりあえず20頁ぐらいのものになるでしょう」

「この前のような、とうしゃ版ですか」

「イエ、今度は、ちゃんと印刷させます。何しろ会員が多くなってくると、とうしゃ版では具合が悪いですから」

「会員は何人ぐらいいるんですか」

「二百五十人ぐらいいます。もっとも全国的ですから、地方の人が多いのですが」

「ホウ、そんなに大勢いるんですか。大した

もんですね。じゃあ、いい商売ですなあ」

私は、皮肉とも嫌味ともとれる言葉を言っただつもりだが、佐次は全然こたえず「ハア」と言っていてニコニコしている。

捨て鉢商法

その後、二、三日して私は所用があつて中野へ行つた。その時、ふと思い出したのが芸苑社である。

手帖を見ると中野区大和町とあつて、ちゃんと番地も入っている。電話はない。

来たついでに調べて見ようと思つて、あちこちで聞きながら訪ねて見た。

北口の商店街をズツと突き抜けて、薬師通りへ出ようとするところを右の方へ曲つたところ辺りとは分かったが、さて、それからが分からない。

だが大和町二三番地というと、どうもこの一角で、その中にこれ以上、汚いところはないと思われるボロ長屋の小路があつた。

その路地へ入って見ると、悪臭がプンと臭う。その一軒一軒を仔細に見て行くと、三軒目の長屋に「青木」と書いてあつて、その下に紙きれが貼つてあり、ボールペンのまづい

字で「芸苑社」と、やっと読める字が書いてあった。

「ハハア、此処か」

或る程度は想像していたが、こんなにも、ひどい家に巢食っているとは思わなかった。
「なるほど！これじゃ法に触れるもへったくれない。身体を張って何でもやってこます気だろう」

とテキの正体を見たのだった。

よ き カ モ

私は本村氏に、そのいきさつを話した。

「あなたは中野の、あのボロ長屋を訪ねては見なかったのですか」

「そこまでは調べませんでした。しかし私の時は芸苑社は確か目黒だと思いましたよ」

「ハハア、するとカモからまき上げた金で少しは、ましな所へ越したのか、事務所をどこか違う所へ移したのかもしれませんがね」

「身なりも小ザッパリしたものを着てましたし、会費も別にそれほど高いとは思わなかったから入会したのです。すると、すぐ門田奈子を紹介してくれたんです」

「門田奈子は佐次の情婦ですよ」

「その時は女性会員だと紹介されました。そしてプレイに入っただですが、二人きりで適当にやっている佐次が入ってきたのです」
本村氏の話によると、佐次が入ってくると今まで控えめだった門田奈子が俄然、荒っぽくなったと言うのである。

殴るのも平手で思いきりピシヤリと叩くし、蹴るのも力一ぱい蹴とばしてきた。

本村氏はもともと苦痛を受けるのは好まない方なので「あまりひどくやらないでくれ」と頼むと「じゃあ縛りをやろう」と言って、

佐次が縄を持ち出してきて、本村氏を後手に縛りあげてしまった。すると門田奈子は、

「サア、こうなりや、こっちのものだ！」

と顔の上に跨がってきた。その時になってもう一人、若い男がカメラを持って入ってきた。本村氏は写真に撮られるとは思っていなかった。

佐次が、ああやれ、こうやれと指示して、門田奈子とその通りに動いて、いろいろな屈辱シーンの場面を写真に撮られた。

「そして最後に、あの女性の会員は、あなたを余り好まなかったのだが、私から無理に頼んだのだから五千円やってくれ、と言うのです。五千円は、ちと高いじゃないかと言った

のですが、イヤあれだけの女性は、めったにいるもんじゃない。それに、あの写真は絶対秘密にしておくから、と言うのです。私は写真を撮られたことを後悔しました。そこに弱味があったので五千円、払ったのです」

「それ一回きりだったのですか」

「イヤ、それがねえ、私もバカですわねえ。まあマニアの弱点で、しょうがないのでしょうが、月に二回ほど送ってくる会報や、手紙での誘いを受けると、やはりまた、ノコノコ出かけて行ったんですよ」

「場所はというとどこでやったんですか」

「目黒の篠塚という、小さな家ですよ」

「篠塚という名は聞いたことありません」

「行ってみると佐次ともう一人のカメラを写した男は来ていましたが、門田奈子は来ていないのです。どうしたのかと聞くと、いま来るから、そうガツガツするな、と佐次の態度が前と変わって横柄になってきました」

本村氏は完全に彼等の術中に陥ってしまったのである。

——(続く)——

×

×

×

×

×

×

週刊誌に登場した
M氏の行状記にふれて



まぼろしの
沼正三

新宿町人

「週刊文春」誌4月20日号

「大詰めにきた、『家畜人ヤプー』の作者探し」という記事のキリヌキを前に、私は、いまペンを走らせている。

『それが——白人の支配する二千年後の宇宙帝国……。そこでは日本人はヤプーとよばれる家畜人となりASHICKO(尿)やUNGK(大便)を直接、口で受ける。肉便器(セツチン)、歯をぬかれて、女性のオナニーに使われる舌人形、男性用の唇人形、女性生理用の生理極小畜(メンスミユゼット)などとして使われている——』という全文ゴジックのリードがまず目を射

る。そして、あるマゾ氏(沼正三氏とまぎらわしい人物)が登場し、

「尿、大便を食べるなんて……」

という記者氏の驚きにたいして、M氏は、「いや、もっとも汚いからいいんです。ボクら、普通の人よりずっと、ウンチを不浄のものと思ってます。不浄だからいいんです。腸内にあって害がないんだから、純医学的にいっても食べてだいじょうぶです。『不潔』と感じるのは日本人のゆがんだケツペキ感からなんですよ。オシッコならなおさらいい。ビタミンB1B2もあり、ホルモンもある。ハゲ頭によくききますよ。」

ほんとなんです。バーのホステスとキスする勇気があるなら、お嬢さんのオシッコウンチなんて、それこそなんでもないでしょう」

と、堂々と語っている書き方が、オープンで明かるくて、サバサバしており、不潔感がみじんもないのである。トルコなら、のぞみを叶えてくれて、相場は……と、くわしいうえ、

「糞尿は汚いから食べる」

「ヴィーナスの抱擁より足蹴り」

「マゾにも三種ある。汚物を好むブタ派、

女王のシモベとなるイヌ派、自分がウマになるウマ派」

と、ショッキングな文字が並ぶ。

なおこの記事は、つづけて、「家畜人ヤプー」が出版されて、はや二カ月。すでに、五版、二万五千部を売りつくし、英訳の話もあるし、草間弥生がプロデュースして、ニューヨークで上演かも……という情報も添えられているし物議? は相かわらず続いている。

ただ文中、ひとつ理解できないことがあるので、念のため、ここに書き添えておくのだが、「沼正三はどこにいる?」のいわゆるヤプー伝説にふれて、例の、あるすあまとりあ

の高橋鉄氏が、「その沼正三は、この人物ではないか」と、見解を述べており、沼氏（らしい？）が、一時「男中」として高橋氏の宅に住みこみ、「女の来訪者があると、とんできて、「足をなめさせてください」といったとか、年賀状をもらった」最近、高橋氏が主宰する雑誌A誌に、沼正三氏の原稿を依頼したら、その、かつての男中氏が、ちゃんと持ってきた」と、いかにも、わけを知っているかのような談話があるが、たしか高橋先生は、沼正三氏から、わが奇巧誌々上で、スカトロジの語の解釈をめぐって論争を仕掛けられ、沼氏一流のものすごい巾のひろい知識に、圧倒されたのか、自信を失ったのか、あるいは、黙殺かは知らないが、ついに、マスクをかぶり通した「学者」である。

いわば、沼氏にねじ伏せられたみたいの高橋氏だが、そんなえらい先生の自宅に住みこむ沼氏だろうか。せっかくの名推論ながら多少ウラの事情を知っている筆者は、ハテナ？とマユにツバつきたくなるのである。

なぜならば、私の知るかぎりの沼正三氏は理論派であり、相手えらばぬ実行派である反面、白痴をよそおって、カメとよばれる男中になったり、といった「愚行」をきらうホワ

イトカラー氏と思えてならないのであって、ちよっと、高橋先生が、推測しておられるような人物のイメージとは、ちがうように思われてならない。このことは、だいじなことで、ちよっと余談に流れたが、ふれておく必要を感じる一人である。

つぎは同じところに発行された「女性自身」誌の「マゾヒスト某氏（手元にキリヌキがなため、その姓名は省略）44才の生活」

という、特集記事に移ろう。この「女性自身」では、主人公の某氏が、白痴と啞者をよそおって、ある美人の「女流芸術家」の家に住みこみ、ワザと失敗をやって、ご主人さまから手ひどい罰を受けるくだりが出てくる。「彼女、しまいには、うんちを強要しましたよ。ウソではない」

云々と、その残酷な？ 女流芸術家が、むりに、そのような食べものでない食べものを食べさせるシーンが出てくるし、レモンティをのみたがる主人公の生態が、リアルに出ているのである。

正直のところ、この種の情報には動じないつもり筆者だが、この二つの記事には、いささかの感慨を抱かせられた。

というのは、「家畜人ヤプー」の出版いら

い、こういったニュースが、あちこちの週刊誌を賑わす傾向が目立ちはじめたかにみえるからである。

女性自身とは、申すまでもなく、レッキとした女性、それも若い層を対象とするものであることは、いまさらいうまでもない。

その女性誌が、堂々とマゾヒストを登場させ、本誌あたりでさえ、避けているからにみえる、うんちというナマの、ズバリの表現を用い、しかも、それを「強制されて、食べさせられる」という、まったくのSMの話題をとりあげているからである。しかも、この特集題目（マゾヒストのタイトル）を大きくうたった、車内吊りのポスターを、あの、規制のやかましい国電車内に、掲示をゆるしているのである。

マゾの男性が、しばられ、クサリで打たれる写真まで大きく掲載されており、内容においても、取材にあたった女性記者（若い、美人と、筆者は勝手に想像している）と、初対面の喫茶店で、すでに、直接拝受を哀願しているのである（その記者は絶対イヤといい、はじめはトイレへ立つとき、（終わったら、流さないで出てきてください」と求められ、理由もたしかめずに、そのM氏のたのみをき

いたが、出てくるや否や、入れかわりに、あわてて、出たあとへ飛び込むM氏の行動に、妙な予感を抱き、あとから追ったら、案の定彼女が彼女のレモンティに顔をよせる寸前だったので、むちゅうでクサリを引き、水を流して、M氏の「トリック」からのがれた、と述べているが、そして、前に引用したようにM氏が、女流芸術家のうんちを強要されたという告白へとつながるのだが、すくなくともこの対面記が、この号の主要記事となっており数十万部と公表される同誌の読者の目に洩れなくふれたと思うと、興味がある。

げんに、その号発行の直後、買ったばかりの同誌を抱える若い女性を、二人ならず、四人、五人と、みかけたが、それらの女性が、どんな表情で、マゾヒストというものを理解したかを想像すると、いささか愉快である。さて、殆ど時を同じくして、二大週刊誌がマゾヒストをとりあげたのは、偶然とは言え考えさせられる。

両誌の記事を詳細によむと、どうも両誌ともに登場する主人公のM氏が、同一人物にみえてならないのである。そして、いちおう、記者の取材のカタチをとってはいるが、どうも外部からの持ち込み——いわゆるトップ屋

といわれる人からの提供とみられるのだが、どんなものか。

そして両誌とも、どうやらそのM氏を、沼正三——ときめたがっているのではないか。もっとも、両誌とも、かなりの取材費をかけ、根拠をもって、さように判断したのであらうから、このさいは、我々シロウトの第三者が、へたな口をださないほうがよいのだらうが、「それでも地球は動く」と、あくまで自説をまげなかった、西欧の学者のように、「でも私は、沼さんと思えない」と、私は言いたいのである。

たまたま、四月十一日に、高橋先生の雑誌「A——誌」四月号が発売され、これには

特別連載、ある夢想家の手記——

女性の理想像

なる記事が沼正三の署名で、たしかにのせられており、私は、時おくれのエープリルフールに、みまわれたきもちである。

うたがってはわるいが、ホンマかいな、ともういちど、マユにツバをつけたくなった。というのは、どうもその文章が、往年の沼正三調とちがうように思われてならないのである。

十年たてば、思想も変わり生活も変わる。

いわんや文章をや、と言われてしまえばそれまでだが、いちおう権威のある「七〇年の人性誌」とタイトルつけたA——誌が、まさか沼正三でない沼正三氏をのせるわけもないだらうが——。

だが、このA誌の沼正三氏がホンモノだとしたら、沼さん、人さわがせも程々にしといて——と言いたい。

だって、かくれかたがバツグンだったワリには、再出現ぶりに、ニュアンスがないじゃない。

「家畜人ヤプー」が、二万五千部も出る時代なのだから、沼さんが、「おさわがせしました」

と、だしぬけにカムバックするのはおかしくないかもしれないが、カムバックするならするで、もうすこし、ムードを盛ってほしい。そして、どうしても解けないギモンはかつて、あれほど世にかくれようと努力してきた沼さんが、まるで人間が変わったように前記二大週刊誌を舞台に、テレもせず、堂々と、本名まで推測させるような現われかたをした点である。

沼さんよ、あまり人さわがせしないでくださいね。



第一景 破壊

私はその周囲を、ものわがりの悪い「女」という名の生ける物によって、かためられる不運につきまとわれ通してあります。田舎では母で、東京に出ては叔母です。

母は私の顔を見るなり、

「今日はお花じゃなくて」

「あら、お料理はもうやめたの」

「だめじゃないの。お裁縫のおけいこに行かなくては」

創作

地球を鞭打つ

(前)

宇

光

仙

と、口からあわを飛ばします。

私はわざと口笛を吹きながら、男物のスラックスで身体を装い、ステレオのジャズ音楽に合わせて踊るのみです。母は、そんな私にやっきになって説教を始めます。それでも知らんふりをします。

母のいい分は次のようなことであります。つまるところ、

「お花を習うのは、花の生命に触れることによってその心を学びとることに通じ、お料理は、愛する夫や子供たちの明日の健康を約束

するものを、作ってあげることに通じる」

というのでありますが、そんなことで「女らしさ」が身につくというのでありますならば、大変な甘さであります。

『両手にあまる程の免状を持ち、顔を白壁のように塗りつぶして、ウェディング・ドレスを着て欲しい』

ということに、どうしてうなづくことができませんようか。そのようなことは無意味なことなのです。いかに母が手放しで喜んで下さるにしても、そのようなことは何の意味もあ

りません。少しも女らしくはないのです。母はそれでも、

「そのようなことは、とても女らしいことですよ」

というのです。私はただただ呆れるばかりです。「女」ということを隠れみのにしていることが明確であります。母のいう「女らしさ」は、格式や世俗に縛られた「女らしさ」にすぎないのです。

叔母も同類です。たまたま風呂の脱衣場で一緒だった時に、

「へえー。幸ちゃんの下着には色がついてるのねえ」

と叔母は、大いに呆れたというふうに驚くのです。ですから、

「ええ、そうよ。これが私の好みよ」といってやりました。

一体全体、色物が何であるというのでしょうか。身につけるものが色なしでありさえすれば、純潔で清潔でこの上なく女らしいというのでしょうか。

私がためらいもなく湯舟をまたぐと、叔母はあきれたように、

「幸ちゃんたら」

と声を張り上げてから、私の身体を見世物

でも見つめるような目つきになって、

「額ぶちなしの『絵』なんて『絵』ではないわ」

と、洒落たことを醜態そうに吐き捨てました。額ぶちなしの「絵」とはうまいことをおっしゃいます。

「おばさんを見直したわ」

といいながら、私は湯舟に片足をかけながら、その「絵」のポーズを変えて叔母に見せつけてやりました。

「おばさん、私は処女よ」

と偽っているのであるが、叔母はそのことを見破る冷静さを欠いて、唇をわなわなと震わせながら顔をそむけて、

「おやめなさい。今すぐに、おやめなさい」と繰り返すのみでありました。私はどちら

かというと、頭に血の上る性分であります。

しかも私は、その時に叔母が非常に戸惑っていることに気づき、

——無理押しをしたい——

という気になっていました。ですから私は体勢をガンとして崩さなかったのです。

「とても素敵な気分だわ」

と、私は挑戦するつもりですから、余計に反抗的なしぐさで、片手で湯水をすくいまし

た。

「幸ちゃんを見そこなったわ」

と、叔母はいきり立ちました。

いつもは消極的で受動的な「女らしさ」が奮い立ったのです。

——面白い——

私は、私のいい分を主張しているのであります。だからといって、叔母にもいい分があることを否定するものではありません。それゆえ叔母も主張したらいいのです。私に落ち度があるなら指摘したらよいのです。納得させたらよいのです。

ところが、その叔母は青筋を立てて、急いでお湯から出て行こうとしていました。あれだけ怒りを見せながら、避けて通ろうとしているのです。主張しないのです。それでいてきつと陰口をたたくのです。

「帰さないわ」と、私は通せんぼしました。すると叔母は、私を押し倒そうとしました。私はそのことに逆らい、私たちはもつれ合ったのでした。

その中で私は叔母を圧倒しました。つましく息づかってき、あたかも「女らしさ」の「形」に忠実に生きる雛形のごとき叔母が、飢えたように自由を貪り喰い、男か女かの明

らかな性差を持つことなく成人してきた私にかなうわけがありません。

「冗談だったら、おやめなさい」

と叔母は、私によって湯舟に沈められ浮上した後にまづいいました。それは水泳選手がゴールした時にも似ていました。私はそんな叔母の顔に唾を吐きかけざまに、無言のまま叔母の顔を押え込んで、さらに湯舟の中に沈めてやりました。そのことは、続いて六回だけ繰り返されました。

叔母は疲れた兵士のような目で私を見つめました。両手を左右に開けて湯舟に支えを置き、身体が崩れ落ちるのを防いでいました。長い豊かな髪が顔面に流れ、それを四十の半ばの女に思えない、きめ細かな肌と胸にほとばしっています。何か暴力による別の世界をのぞいた気になったに違いありません。

私はそっと手を差し延べてみました。すると案の定、おそろおそろではあったが、叔母の手が答えました。私は叔母を湯舟から引き出しました。そして立ったまま、まず髪をきれいに整えてやりました。どうしたとか叔母の目の輝きが序々に妖艶になり始めていました。

私はタイルの上にタオルを敷いて、その上

に仰向けに横たわり、それから、

「おばさん。私の足元の方を向いて、私の耳元に両踵を揃えてお立ちなさい」

と命令しました。

叔母は、私のいったことが良く聞きとれなかったのか、あるいは理解できなかったのか知りませんが、すぐには命令に従いませんでした。そこで私は全く同じことを繰り返しました。すると叔母は心を決めたように小さく同意の意味をこめてうなずいてから、そろりそろりと私の頭に近づき、ひどくためらった後に言葉通りにしてくれました。

「私が何を求めているか、知らないとはいわせないわ」

と私は、気尽な王女きどりで、立ちつくす叔母にいいました。

「私の両腰のわきに両手をつき、おばさんは四つん這いになるのです。その次には両足を左右に十センチずつ、ずらすのです。」

と、私はさらに言葉を続けました。

そこで私は一息を入れ、叔母がその言葉に従う様を、じっくりと眺め、見つめながら楽しみました。衝激的な試練に、叔母は恐れてさえいました。

つい先日のことですが、私がスー・スルー

な下着だけで昼の暑さをしのいでいると、叔母は、

「幸ちゃん。あなた、まる見えよ」

と、険悪に眉をひそめたものです。叔母の言によると、それらはすべて寝室という密室のムンムンした悪臭の中に閉じ込め、隠そうとすることが「女らしさ」らしいのです。

「でも、おばさんと二人きりだわ。それにおばさんの家には男性がいないんですもの、別に気遣う必要はないはずよ」

と私が口答えをいたしますと、

「だからこそ、より厳しく心をただし、きちんとするのです。それが「女らしさ」、慎ましさというものです」

と叔母は説教を始めるのです。私は頭にきました。ですからダンスをかき回し、オーバーを着けてやりました。その時に叔母はすっかり偉ぶって、

「幸ちゃんて、まだまだ子供ねえ」

といったものであります。

その子供に、今、叔母は盲従しているのです。叔母は盲従することに、まんざらでもないという気分にあると私は見てとりました。嫌であつたら私を残して部屋に逃げて行くことだってできるのです。そのことは、思い立

ち、実行するための勇気を少しだけ持ち合わせるなら、すぐになえられるはずです。しかし、叔母は四つん這いになったままです。私の命令を待ち受けているのです。

もはや言葉で説明して命令を発する必要など、どこにもありません。それでも叔母にはできません。叔母は、自分は女らしい女であり、そして今、自分が強いられていることは「女らしさ」に欠けるものだという美德観念に責められているのです。

「膝を折り、腕を折るのよッ」

と私は多少煩しさに不快感を覚えながらいました。私は両手で眼前に迫った身体を受けとめました。その身体は、夫に早くして先立たれ、二人の娘の成長に気安めを見い出している叔母の身体でした。私は叔母の、私とは異なる額ぶちのある「絵」に興味を持ちました。そのことになじむことによって、不快感がいくらか和らぎ出しました。ところが、

「やめて！ 幸ちゃん」

と叔母は、私が興味を覚えたにもかかわらず哀願し出す始末です。

しかし、私は耳をかせませんでした。これまでの手続きに多くの労力を注いできましたし、私はその代償を得る権利があるのです。

いつでありましたか、三文映画を見ていますと、女性がお酒をあふることによって、その白肌の刺青のつぼみが、花を開く情景がありました。そのようなもので、叔母の悲鳴に似た哀願も移り変わって行きます。しかしながら三文映画の情景と異なって、一通りの変化のみではなく、この世に既存する形態にはとらわれずに新鮮な輝きを持っています。

「許して！」

というなり叔母は、私の命じた姿勢を崩してしまったのでした。おかげで私は不快ではない重量を全身で支えねばならなかったのですけれど。

全く異なる環境で生まれ育ってきた二人の生命、しかも世代が大きくかけ離れ、互いが一定の距離を持っているにもかかわらず、親しみをこめ、やさしさをこめ、いつくしみ合う結果が生じたのです。母がもし、この様を見る機会を持つなら、気を失うことに間違いがありません。

いつか、母は

「女には、男にない強さと誇りがあるのよ」

といってくれたことがあったのですが、その言葉の裏付けを実感したのです。叔母はいつものつつしみを捨てて、たんなる動物と

なったようです。そのことは人間生活を向上させるひとかけらの匂いも持ちはしません。むしろ文明に逆行することであります。だがその理由でもって陽の当たらない密室に閉じ込め、葬ることは許されてはならないはずで、以後、下着を干すのも陽当たりが良く風通しが良く、かつ人目につきやすい往来に面した場所に、できますれば門柱を利用すべきであるのです。

いつの間にか、私たちは膝立ちで抱き合っていました。その後になって叔母は消え入りそうな声で、

「軽蔑なさらないで、お願い」

と、たのみ込んできたものです。

「私、ずっとおばさんが好きだったし、今はさらに好きになったわ」

と私は口から出まかせで答えました。

某婦人誌で身の上相談を担当している叔母は、二人の娘を好み通りの花嫁衣装を着せて送り出し、今、家の中に他にいるのは、女中一人のみでありました。私たちは、というより私は叔母の寝室に導かれ、そこで浴室の労力の代償としての取り残しを、明け方までかけて、プロレスまがいにようやくのことで取り立て終えることになったのです。叔母は

私の容赦ない締め上げに、呻き、苦しみなながらも未知の陶醉に喜悅したようなのです。

「私は今度、身の下相談も引き受ける必要があるわね」

と叔母は、私にいじめられ、責めに悲鳴をあげきってから、一人泣きました。

私は苦笑しながら、叔母が自ら苦しむことを希望し、私を煩わして文明という化物からの脱走を試みていることの手助けをしていたのですが、私は先程から睡魔に押しまわられて出しているのです。私の意識は序々に曖昧なものと化して行きます。

私は恋人を想い出しました。まず過去を破壊し、過去に全く関わりのない未来を築くことを説いた時の、恋人の真剣な目の清らかさを思い描きます。恋人は、かがみ込むような姿勢で私を説得します。

「すべてをまず破壊してみようではないか。これまでのように、あっちこっちをつくろって、それで事をうまく運ぼうなんて気は、起こさないようにしようではないか。粉々に砕け散った破片のきらめきを、よく目をすまして観察し、その上で新しい事を始めようではないか。なあ、君。事を起こそう。とにかく陽気にやろうやという大らかさを失わなきや

きつとうまく行くんだよ」

破壊してしまっただ後に何が芽ばえ出してくるか、それは心配なことであります。以前より足場が悪くなる恐れがあるのです。でも恋人は繰り返していいいます。

「とにかく陽気にやろうや」

私は鞭が欲しくなります。恋人が虫さえ殺すことのできなそうな目を無理にすごんで私を打ちつけるべく、その目を見開く様が欲しくなります。

私は、

「へえーい。へえーい」

とあえぎ、逃げながらも、鞭の餌にされる袋小路に追いつめられました。恋人は傷ついた私の自由を奪ったまま、一方的に愛の言葉を伝え出します。その言葉はほとぼり始め私は理解できない自身にいらだたずにはいられませんが、その内に言葉は、勢いを増しに増し、受けとめようとする私からあふれそうになり、私は最新の注意を払い、こぼすまいとします。繊細な感情の糸が切れ切れになりそうになり、緊張が打ち続く。が、じきに絆が深まっていることに気づき、ほっとするのです。

でも恋人は、

「とにかく陽気にやろうや」

と眩くなり私を突き放し、陽気さにふさわしく鞭を打ちつけ出します。その鞭音の高みに合わせ、私の恋人はますます歯切れ良い口調で叫びます。

「地球を、鞭打つほどに、とにかく、陽気にやろうや！」

私は今や睡魔にとらえられ、虫の息であります。私はどんな強がりをもってみたところで、どんな夢をもくろんでみたところで、その美しい未来にあるのは、所詮空しくあてどのない世界であろうと思う。私もどきが、どんなに力んでみたところで、どうということはないはずなのです。それだからといって私には沈黙していることはできませんし、手をこまねいていることも耐えがたいのです。空しくあてどのない世界に易々と入り込むことはできないのです。

——現状の延長線上には期待できず、夢が持てない以上、現状を破壊してみよう。その方がずっと期待があり、夢も持てる。

廃墟とおぼしい町々が開け出します。私はそれをねじ伏せ、それを拒絶します。そして呪文のように、恋人の云った言葉を噛みしめ繰り返して咳きます。

「とにかく、陽気にやろうや」

第二景 停滞

私の性格としては、叔母のような人間は理由なく嫌いです。しかしながら、互いが全くの秘密を持たずに、いわば一心同体的生活を続け合う内に、私の叔母を見る目は変化したというべきかも知れません。第一に叔母は口やかましく、私に対して「女らしさ」を求めることが全くなかったことだけでも、大いに救いがあります。

以前であるなら、洗面所でちょっと足を洗ってみても、

「顔を洗うところで足を洗うなんて、何という不潔なことをやってのける娘でしょう」

と、さも大事件のようにいったものですが今は何もいいません。しかし、私が外出しようとする時には、鋭い刃で切りきざむように質問を浴びせるようになりました。

「今日はどなたのところに出かけるの。その方は女の方、それとも男の方」

「あら、そのスーツはどなたに買っていたただいたの。さあ、正直に隠さずにおっしゃい」

「おばさんが嫌いだから、幸ちゃんは外出するのね」

「今日は顔色がよくないわ。どこか具合が悪いんじゃないの。外出は見合わせた方がいいわ。そうよ。そうしなさい」

今日はそれがとくにしつこく、しまいには泣き出す始末です。これはもっとも、先程の恋人からの電話を、叔母が聞いてしまったことによるのですが。でも、私が恋人と会おうと誰と会おうと自由なはずです。ですから私は、この出がけに際しての足留めに対する報復として、意地悪をしてやろうと心を決めました。そしてとりあえず出発時間を一時間だけ延ばし、待ち合わせを一時間だけ遅刻することになりました。

もっとも叔母には、

「私、今日は外出するのをよすわ」

と、うそをいい、

「だけど、その穴うめをして下さるという約束をして下さらなきゃ、いやよ」

と、全面的奉仕を要求してやりました。

「もちろん、幸ちゃんのいうことには何でも従うわ、おばさん」

と叔母は「女らしさ」丸出しで、話に乗り出してきました。

「でも、昨夜なんて、何よ」

と私は、その上にさらに「悪乗り」をしな

がら、

「全然つまんなかったわ」

と「おい」とすねて身体を回転させ、叔母に背を向けました。

「今、約束をしたでしょう。ね、だから」

と叔母は、私の前に跪いて、すがりつくように哀願を始めたのです。

私はしばらくはご気嫌ななめでいる必要があると思い、「つん」と横を見続けました。

そして頃合いを見計らって、

「じゃ、本当に約束を守ってよ」

と少々荒い口調で、

——無理やりに外出をよしたんだから——

という意味合いもこめていうと、叔母は私のスリッパの上に頬を押しつけるようにして崩れてしまいました。いささか重症です。こうなってきましたと、まさしく幼稚園の学芸会のようなものであります。私はおもがゆさのために叔母を押しつけました。二階への螺旋階段を、一段一段確かめながら、いくなれば「女」ゆえに最も消えうせたい程の羞恥心をえぐる策を練ったのですが、急には、これといった案が浮かびませんでした。

思うのに、理想と現実との間には無限の距離があります。ない知恵をかき集めて難しく

いうことを避けるために、単刀直入に表現いたしますなら、現実の恋人はオナラもするし糞もする。呆れて二の句のつげないようなことを言葉にすることもあります。彼は、もし暴漢におそわれたりしても、劇映画の主人公のように簡単に始末をつけることなどはできずに、私をおいてきぼりにして逃げ出す方でありましょう。胸にはほどよく肉がつき、筋肉が豊かであることはすべて想像の恋人にすぎません。鞭を打ちつけてもそれには限度がありますし、辱かしめることにもその手段と程度に限られる以上、おのずと頭をつかえさせてしまいます。

私は、叔母とのたわむれにおいては加害者の立場にあります。しかし、叔母の額ぶちなしの「絵」一つを取り上げましても、ほどよく艶をもち、生々と紅潮していることは数少ない。カサカサしていることもありませんし、鳥肌立ってすくみ上っていることさえありません。それで、さめざめとした気分にならないとしたら、むしろおかしいと思います。でもそれを承知の上で、押し進める必要があります。鞭を打ちつけるにしても手加減をする必要が認められます。それゆえに、私は充足することなどありえませんが、肌

は白雪のように清く、物腰はいつもしなやかで、脚はすんなりし、乳房は形よく盛り上がっていると思ひ込むのです。

そんな時には、

「とにかく、陽気にやろうや」

と呪文をとえろと恋人はいうのです。

狐と狸のばかし合いです。いつも欲求不満で、その歪みが積もり押し出します。頭の中がむしゃくしゃした感情で、はちきれんばかりになります。

「幸ちゃん」

という、私を呼ぶ叔母の声が背後で生じた。後ろを振り向くと、唇を紅でござり塗りとった、痴女を思わせる叔母が、媚を見せていました。私は一瞬「ぞっ」としました。そのことによって、私は本来、同性との愛には耐えられない性格であることを、とっさに理解したのです。

「汚らしい。触れないで！」

といいながら、私は叔母に平手打を浴びせてしまったのでありました。

このようなことは反自然的な行為であると思うのです。なるほど、すべてを破壊し、そこから新しい芽を見出すことは、考え方としては理解できないことはありません。だが

冷静に考えてもみたら、これまでの人間の歴史は、地球の誕生に比較するなら無限小であるにしても、人間の生死という尺度では無限大であるといっても過言ではありません。その歴史が排斥したことは、やはり人間が互いに助け合い集団をなして生きて行く上でささわりのあることに違いありません。とすれば、私たちが見出す芽は、過去の指し示す進路をはずれることのないところに落ちてしまふのではないのでしょうか。私の恋人は口では大きなことをいっていますが、心の内ではそのような以外の何物でもないことを知っているから、例の呪文を唱えることをやめないのかも知れません。

「とにかく、陽気にやろうや」

と、私は一人呟くつもりが、思わず大きな声で叔母に浴びせる形になり、その言葉は、叔母を俗にいうシビレさすことになったらしいのです。叔母は、

「幸ちゃん。わたしの幸ちゃん」

と、へどの出るような、ネチネチしたいいまわしで近づいてくるのです。

吐き気がこみ上げそうになります。私は、叔母が平手で打たれることを望んでいることにすぐに気づきました。しかし、そのことが

手に取るようにわかると、私はかえってそうしてはあげまいと思うのであります。でも、それでいることはできませんでした。

男を断たれ、死ぬ程までに欲しいと思ひながら、社会的名誉という殻を手放す勇氣を持たずに、自らも美徳家であることに、むなしみがきをかける努力をしている、愚かな、
「女らしさ」に満ちた女は、秘密をわきまえてくれるであろう私を餌と見ているのです。

油ぎった手が私を壁際に追いつめ、私の腕に触れます。「ぞっ」とする。

「いやなら、わたしを打って——」

と、叔母の目はいいいます。

「誰がおばさんごときに、いい思ひをさせてやるもんですか——」

と、私は切り返してやります。

「幸ちゃんの手は打ちたがっている——」

と、叔母が暗示をかけ出します。

「そんな古めかしい手にのって、たまるもんですか——」

と、私は毅然と胸を張ります。

ところが、私の胸に叔母の身体のぬくもりが伝わる程になるに従い、私は手を振りかざさずにいられなくなっていました。勝ち誇った叔母の顔が私に媚を投げてきます。

『パシーン！』

と、小気味よい一発が音を発しました。

続けざまに十発は飛んだはずです。本来であつたら、それは十発ぐらいでやんではならなかつたのでしょうか。中毒する位に浴びせるべきでした。そのことによって、一人で陶醉の思ひをさせることを拒絶することができ、さらには苦痛とすることができのです。

ところが十発目ぐらいに叔母の身体に血が飛んだのです。それは鼻血でありました。私の部屋には、叔母が「女らしさ」を私に強いるために用意した、純白のカーペットが敷きつめてありましたので、飛び散った赤色の斑点は、いとも鮮かに私の目に映りました。

私は、それを美しいと思ったのです。

私は足元に崩れている叔母を、仰向けにして、鼻血が多量に流れ出ることにまず氣遣う必要があります。

「煩わしい——」

と、舌打ちせずにいらませんでした。

「この、足手まといめッ——」

と吐き捨てながら、私は叔母の右手を取って、その人差し指を鼻筋の目と目の間の位置に置かせ、

「強く押しつけなさい」

と、いいつけました。

その後で、私は憎しみをこめて流れ出ている血を両手のひらに塗ってから、叔母の顔にこすりつけてやったのです。するとどうでしょうか。叔母は、

「この上のない幸せよ——」

といわんばかりの微笑をするではありませんせんか。

「氣遣いめ——」

と思ひながらも口にせずに、ブラウスの衿元に両手をかけて、一気に力をこめて引きました。ブラウスは引きちぎれながら左右に傷口をひろげました。

「これが私に、偉そうに『女らしさ』を説教した教師か——」

と思ひながら、タイト・スカートに手をかけ一層の荒々しさでもって引き下げるように破り取ってやりました。次はブラジャー、その次はパンティです。

叔母は抵抗一つせずに「じっ」としていました。包丁で真一文字で切り込みを入れたように、叔母の身体は上面だけが露わになりました。私は、ここで女中を呼びました。

この女中は好奇心が旺盛で、かつ、金のためなら身体を張るし、軽い口も重くする現代

女性でありました。

彼女は部屋に入ってくるなり、すぐにすべてを読み取ったらしく頷き、そして急いで引き返し、戸締りをしてから、息をきらして再び部屋に入ってきました。

「もう、止まったと思うわ」

と私は叔母にいつて、押さえつけていた手を払いのけました。事実、一分程経過を見守ったのでありますが、鼻血は止まったらしく一滴も流れ出てはきませんでした。

私は女中に手伝わせて衣服を脱ぎ終えてから、彼女に手伝ってやったのです。

「あなたのチンパンジー、また見せてもらえるかしら」

と私がいうと、彼女は、

「お安い、ご用です」

というなり、腰をやや落とし気味にして、左手で脇腹をポリポリやりながら、右手は頬をチョコチョコと搔きつつ、叔母の周囲を廻り出しました。

彼女は、その一挙一動が、あたかもタクシーのメーターが料金を加算して行く時のように無駄がなく、すべて金に換算できるんだと思ひ込んでいらしいのです。彼女は一万円札とはいわないまでも、せめて五百円札位で

つくった布団にうずもれて眠ることをもくろんでいるのかも知れません。それも一つの生き方であるし、私には関係がなく無関心なことです。

「蚤をとりなさい。チンパンジー」

と私が次の演技を求めますと、彼女は即座にしゃがみ込み、蚤を取り始めました。

「あなたはおばさんに、蚤を移したのよ」

と私が声をかけますと、彼女はこれまた即座に叔母に近づきました。

彼女は全く無差別に事を運ぶのです。彼女にはためらいというものが無いに等しいのです。同性であろうと異性であろうと、果ては自身であろうと、そのことによって金が得られるなら、唾を飲むことはしないのです。

私の恋人は小説家を志す者であります、彼女を連れて一週間旅行を続け、「ベエールは朽ちた」という長編の三文小説を仕上げましたが、それによると彼女は、

『まれに見る豊かな情感を持ち、窒息させられそうな女独特の悪臭に満ちた、脂肪の固まりにも似た女性』

であることになっています。現実の彼女を見ていて、なるほどそのことに違いはありませんでしたが、難点は肢体の豊かさに比較し

て顔がまずいことです。いわゆる十人並に入るのが、やっとなのです。

私は二人をうながし浴室に向かいました。恋人と会う時間がとくに過ぎてしまっていました。しかし、今、私は気分が乗っていませんし、そのことをすっぱかす決意までできませんでした。私はそこで、叔母に昨夜はどうしてもできなかったことを行なってもらおう腹づもりでいたのであります。

ところが今日も叔母は、おめおめと十七、八歳の小娘のように泣き出し、またまたお手上げとなってしまうました。そこで私は女中と策をねり、叔母を玄関まで連れて行って、そこで無理やりに浣腸を施しました。そして押さえ込みを続け、便意のために青ざめるまではおろか、震え上がるまで手の力をゆるめませんでした。その間にも、二人が交互にくすぐりを加えたものです。

もうがまんが出来なくなったのでしよう、叔母は、死にものぐるいで、あばれ出しました。果ては私たちの腕や足に噛みつき出したのです。一瞬、私たちはひるんでしまいました。そのすきに叔母はトイレをめざして駆け抜け、扉の音も激しく消えました。

(つづく)



カ ッ ト ・ 辻 梶 太 郎

無 声 映 画 に 想 う ・ ・ ・

柴 利 好

『砂 絵 呪 縛』

(1)

小説「砂絵呪縛」は土師清二氏の代表作として名高いが、不勉強の故で未だに拝読していない。

しかし、この題名から推察すると、さぞかし緊縛場面が随所に現われ、被縛美が存分に

描かれているのではないかという感じを受ける。以前から幾度も映画化されたと聞いているけれども、これまた接する機会がない俟今日に及んでいた。

そこへ、先達て深夜TV映画で、水戸光子・黒川弥太郎主演の放送があるという予告。どんな縛りがあるのかと勝手な期待を持って

拝見に及んだのであったのであった。が、期待はみごとに裏ざられて唯の一方所も緊縛場面はなく、娘が誘拐されるにしても、単なる手取り足取りだけで済まされているのには、全く失望させられた。或いは時間制限の必要上、そうしたシーンが削除されたからなのかも知れない、と今でも思っている。

扱て、この三月八日に新宿紀伊国屋ホールで「妖艶腕くらべグラマー大会」と銘打った懐しの無声映画鑑賞会が催された。当夜の出し物は

お伝地獄（鈴木澄子、戸波謹之助）

野 情（原 駒子、団 徳磨）

切られお富（木下双葉、松山宗三郎）

砂絵呪縛（酒井米子、河部五郎）

という盛沢山の番組で、夕刻六時から九時過ぎまで、知る人には懐かしいであろう活弁と、生伴奏の醍醐味を満喫することができたのであった。

これらの作品は全て、若輩の筆者にとっては初見のものであるばかりでなく、その演技者についても、盛名こそは承知しているけれども、すべて未知の人達ばかりだったので、興味もまた一入であった。

とりわけ「砂絵呪縛」は昭和二年の日活作

品で、当夜の上映作品中でも最も古く、しかも前、中・後篇全十七巻一挙上映という貴重なもの、正しく量、質ともに当夜の圧巻であった。

(2)

処で、この「砂絵呪縛」では、先日TVで見た戦後の新作物とは異り、かねての期待の通り、緊縛場面がほどよく挿入されているのが特徴的である。

それも、一人の娘、正義派党主の娘露路に扮した伊藤みはるという女優が、縛られ役を一手に引受けて、もっぱら反対党のために捕われ、前後四回も、縄目を受けているのである。

物語の筋は一切省略することとして、この緊縛シーンについて記そう。

第一回目、正座の俤、後ろ手にして柱に縛りつけられている。胸から両腕に掛けて柱もろとも中細の麻縄で五巻か六巻。厳重に巻き締められた緊縛感、頗る見てたえがあった。

第二回目、両手首前手縛りの宙吊りで、天窓から屋上に運び出される。比較的短いシーン。

第三回目、屋外で後ろ手高手小手に縛られて責められる。中細縄で胸元に二筋の高手縄が走った縄掛けで、縛りとしては別段、特徴はない。

第四回目、川上弥生扮する同派の娘千浪と一緒に、二人とも菱縄を受けて、折檻に喘ぐ。この菱縄縛りの場面は、かつて筈見恒夫著「日本映画史」中にも掲載されていたのを見たことがあった。美女が二人、お揃いでキリキリと菱縄を掛けられて悶え苦しむこのスチール写真一つだけでも、敢えて早木大兄ならずとも、この一本を購う価値があると思われる光景であった。

これらの縛りが、全て着物の上から縄打たれているのも時代的で、やたらに裸に剥いての当節の縛りよりも、緊縛そのものを重視する立場からすれば、むしろそのほうが好ましかった。一つ残念なことは、後ろ手首に掛けられている筈の縄目が一つも写されていないかったことである。

面白く感じたのは、四回の緊縛に際して各々の縛りが、それぞれ別箇の方法がとられていることである。普通なら、後ろ手高手小手という一般的方法が繰返されるべきものを、

菱縄縛りまで使って変化を見せたのは、演出者が、これらの緊縛シーンを充分計算に入れて、この作品を製作したものではなからうかと考えられる。

(3)

縛られ役を演じた伊藤みはるは単に若くて美しいという理由で露路役に扮したのではなく、恐らくは虐められ役に相応しい故に、お眼鏡に叶ったのに相違ない。

彼女は当時としては割に大柄な肉体美人なのだが、その容貌は如何にもメラニコリックであった。鼻筋が極めて高く通り、眉と眼の間が迫ったモダンな顔立ちの彼女は、いつも憂わし気に眉根を寄せ、口唇をオチヨボに結んで肩をすぼめ、項垂れていた。その姿は、「雨に打たれる海棠」の風情のたとえがピッタリ当て嵌る人であった。

この映画が製作された頃は、女性の地位は現代より低く、映画も、女性裏話を売り物にしたものが多かったようだ。従って悲劇女優が常に人気の対象であり、多くの女性ファン達は虐げられる同性の姿に紅涙を搾り、またそれを楽しみにして、見物に出掛けたのだらう。高尾光子とか、森静子とかいった、まる



で悲劇を背負って生まれて来た様な虐められ女優が専ら喝采を拍していた時代であった。森静子などは、時代劇のせいか演ずる役の殆どが、縛られ役であったと見える。「お母さん！ 私また縛られるのよ！」という彼女と母との対話を何かで読んだ淡い記憶がある。伊藤みはるは、そうした虐められ役に打ってつけの女優らしく思われた。気立ても優し

い女に相違ない。当今では悲劇女優と名付けられる様な人は見当たらないのではないか。殊に虐められ役を指名することは、難事である。強いていえば、東映の橘ますみ君ぐらいであろう。

(4)

主演の酒井・河部両優は、当時人気絶頂の

頃であったと伝えられているが、如何にもその名声に違わぬ好演であり、立派な活躍振りであった。

酒井米子はこの映画では一度も縄目を受けることもなく、終始、男を操る姐御振りを発揮していた。評判通りの細面の美人で、特に流し眼と、笑顔の口元の綺麗な人であった。キャシャな身体つきだが、その全身からこぼれるような妖しいエロチシズムは、今の女優には到底及びもない艶やかさである。広帯の締め方一つにしても、胸元から巾広く嚴重に巻き絞った帯つきの美しさなど、流石一流女優の名に叛かない仇姿を見せてくれた。

河部五郎といえば当時、百々之助、阪妻と鼎立した時代劇の雄であることは、先刻承知通りの、重厚、沈着な偉丈夫役として一世を風靡した面影をこの映画で初めて偲ぶことができたのは楽しい限りである。

上記した映画の出演者達は、今何処でどうしておられるであろうか。物故された方も多いことであろう。松山宗三郎氏は現在演出家小崎政房氏として益々健在であり、河部五郎氏は京都に居られ、当夜の無声映画会に出来れば出席したいご意向を伝達して来られた由で、嬉しかった。

(完)

「何だよ、その顔は。こっちが新しい手を教えてやろうと云ってるのに不平面すんねえ」
鬼源は、高貴な感じの夫人の鼻筋を指ではじいた。

「さ、このパイを稽古台にして、上手に舌を使ってみな。今の奥さんなら、こっちがうるさく口を出さなくたって、これ位の事は出来る筈だよ」

川田も、あぐら縛りにされている夫人の横へにじり寄って、パイの皿を夫人の鼻先へ突き出すのだった。

「川田さん——」

静子夫人は、名状の出来ない悲しげな色を表情に浮かべ、綺麗な睫毛をフルフルと慄わせながら、興奮気味に云った。

「こんな事まで、しなければならぬという理由がわかりませんわ。貴方達は、静子をおのように犬猫よりも下等な人間に作り変え、完全な性の奴隷にしてしまったのに、それでも、それでも、まだ、この静子が憎いとおっしゃるの——」

麻痺した神経が、ふと高ぶって、思わず激しく口走ってしまった静子夫人であったが、「云いたいのは、それだけかい」

と、鬼源や川田が、邪惡な色を眼に浮かべ

てニヤニヤ笑っているのに気づくと、夫人はがつくり首を落とし、優美な肩を慄わせて、シクシク泣きながら、

「——ごめんなさい。今日の静子は、どうかしているわ。疲れているせいか、近頃、自分が奴隷である事を忘れて、興奮してしまうのです」

と、卒直に謝るのだ。

「一生懸命稽古に励めば、早い時間に解放して貰えるんだ。わかったな、奥さん」

川田は、夫人の乳色の肩に手をかけながらすすり上げている夫人の顔をのぞきこむようにして云う。

夫人は、小さくうなずいて見せるのだ。

「さ、それじゃ、稽古に入ろうぜ。コツが呑みこめりゃ、俺達が実験台になってやるからな」

鬼源は、夫人が次第にその体内にマゾヒズムの血を発生させて来た事に気づいて、喜びながら、調教を開始したのだ。

静子夫人は、鼻先に押しつけられたパイをしばらくは、白蛾のような美しい頬を固く凍りつかせて見つめていたが、やがて、そっと眼を閉ざし、静かに紅唇をのぞかせ始める。

「くすぐるようなつもりで、そのパイに高い

鼻先を滑らせてみな」

静子夫人は、鬼源に命じられるまま、従順に高貴な匂いに包まれた鼻先を、パイの上に滑らせた。

「次は、舌だ」

花びらのような美しい唇を押しつけていた静子夫人は、はっきりと舌をのぞかせ、かすかに鼻息を立てながら、鬼源に指示されて、パイの下から上へ上から下へと移動させる。「次は、真ん中だ。こういう風に舌を丸めてな」

鬼源は、舌を丸めて見せ、夫人に集中攻撃を命じた。

夫人は、次第に凄艶な表情になった。

「ここだけ見ると、まるで、男になった女が女になった男を責めているようなもんだな」
激しく首を前後に振り動かして、我を忘れたように舌の練習を続けている夫人を凝視していた川田は、何を想像したのか、そんな事を云って笑い出す。

夫人の細く丸めた舌の先端からは、自然に唾液が流れ出て、パイの上を濡らし続ける。「そういう風にしてやりゃ、ニグロのジョーも御満悦だぜ」

川田と鬼源は、顔を見合わせて、笑い合っ

た。

なおも、執拗にそうした稽古を夫人にほどこした鬼源は、

「よし、その要領を忘れるんじゃないぞ。そういう風にしてやりや、相手はモリモリ喜んで、大いにハッスルするに違えねえ」

じゃ、次に、約束の朝食を始めるか、と鬼源は、ようやくパイから顔を上げる事を許され、濡れ濡れとした美しい瞳をぼんやり前に向ける静子夫人に云った。

「川田兄貴、お前さんが先に御馳走してやんなよ。俺は、一寸、折原夫人の様子を見て来るからな」

鬼源は、今朝、大塚順子の前で、宣誓させ剃毛する事になっている珠江夫人の事が気ばかりになり出して、部屋を出て行くのだ。

そのあと、川田は、鏡台の上から口紅を取出して、横に伏せている夫人の顎に手をかけて、正面に向けさせると、

「御馳走になる前の、身だしなみてやつだな」

と、丹念に口紅を引き始める。

夫人は、うっとり眼を閉ざし、川田の手に顔をゆだね、もうされるがままであったがそこには、被虐の生活になれた女としての天

性の美貌に、プラスされた或る美しさが滲み出ているようで、川田は、楽しい気分になるのだった。

「こうして、二人きりになれたのは、久しぶりじゃないか。え、奥さん」

夫人に口紅を引き終った川田は、煙草を口にして火をつけると、深い憂愁の色を湛えた夫人の美しい横顔にふーと煙を吐きかけた。

「女奴隷と調教師という、今は奥さんと俺との関係だが、何カ月ばかり前は、俺は、遠山家のしがたない運転手、奥さんの影さえ踏めねえ程だった」

「——お願い、川田さん。昔の事だけは、もうおっしゃらないで。それが今の静子には、一番辛い事だわ」

静子夫人は、悲しげに眼を閉ざし、気弱に顔を振って見せた。

「今でも、縞お召に黒紋付を重ねて着た気高いばかりに美しい奥さんの姿が、俺の眼に浮かぶぜ。そんな奥さんを車に乗せて銀座のデパートなんかへよく俺は送り迎えしたものだ」

川田は、滑らかで艶々した光沢を持つ夫人の素肌と、数本の麻縄で上下を締め上げられた柔らかい豊かな胸のふくらみを凝視しながら、

ら、そんな事を云い、薄く眼を閉ざして、顔を伏せる夫人の顎に手をかけるのだ。

「それがどうだい。今は、生まれたまんまの素っ裸を俺の眼の前に奥さんは晒して、どう料理されようと、こっちの思いのままだ」

「そうよ。静子は貴方達の奴隷ですわ。どうしようと川田さんの自由なのよ。ですから、お願い、遠山家にいた当時の事は、もうおっしゃらないで——」

静子夫人は、閉ざした眼尻から、細い涙をしたたらせ、かすれたような声で云うのだ。

「よし、奴隷らしく扱ってやる」

川田は、急についと立上ると、身につけているものを一切脱ぎ捨て、いきなり、足をあげて、夫人の鼻先へ足首を突きつけた。

「奴隷らしく御主人様の足の裏をなめろ」

川田は、足の指で、気品のある夫人の鼻先をつまみ上げたりし、次にぴたりと足裏を夫人の頬へ当てがって、

「どうした。早く嘗めないか」

夫人は、綺麗な細い眉根を八の字にしかめて、美しい頬を歪めたが、

「云う事を聞かないと、こっちにも考えがあるのだぞ」

と川田は、凄んで遮二無二、足首を夫人の

鼻や頬へ押しつけるのだ。

夫人は、肩を小刻みに慄かせながら、遂に川田の足裏へ紅唇を当てる。その瞬間、夫人の眼から屈辱の涙がどつとあふれ出、しかし川田に叱咤されつつ、夫人は、そつと舌をのぞかせて、柔らかく嘗め始めるのだ。

「もっと熱をこめて、出来ないのかっ」

川田は、かつての女主人を虐げ抜いているという快感に気もそぞろになって、再び、大声を上げる。

やがて、静子夫人は、川田に足の指を口の中に押しこまれ、傷ついた獣のようなうめきを上げていた。

「わかったな。何時でも俺には、そういう風に従順になるんだ」

川田は、ようやく夫人の口中から足を抜き、苦しげに大きく息づいていいる夫人の肩を両手で押さえるようにして前に立つ。

「さ、御褒美を上げるよ」

静子夫人のしっとり潤んだ視線は、しばらく川田に悲しげに注がれていたが、やがて、静かに瞑目するように瞼を閉ざすと、そつと唇を寄せる。

再三、鬼源達に調教された夫人は、くなくと摩るように唇と舌を注ぎかけ、熱い吐息

と涎を流して、しっとり愛……ていたが、その内、柔らかく唇を押し開き、あぐら縛りにされた太腿の筋肉をブルブル慄かせながら口……えこむのだ。

川田は、肉も心も溶けるような甘美さに全身を波打たせつつ、夫人の艶やかな黒髪に頬をすりつけるのだった。

夫人は、ますます火のような熱い息を吐き、黒髪を左右へゆさゆさ揺らせながら、強……い始めるのだ。

——これが、あの時、あれ程まで、俺の胸を切なくうずかせた絶世の美女なのか——

川田は、美しい象牙色の頬をふくらませ、うっとり眼を閉ざすようにして……撫をくり返している静子夫人を、陶然とした面持で見下している。

そこには、先程、チラと見せた反抗の意志などは爪の垢ほどもなく、次第に被虐の悦びに息づき始めたように夫人の顔の動……しさが加わり始めた。

「嫌、嫌、川田さん。そんなにじろじろ御覧にならないで——」

静子夫人は、ふと、上から凝視している川田へ潤みを帯びて妖しいばかりに美しく濡れ光った眼を向ける。

「大財閥の美しい若奥様と、かつての運転手が、こんな妙な立場になったと思うと、何だかおかしくってね」

川田が片頬を歪めて見せると、静子夫人は艶っぱさを含んで、すねるように、

「意地の悪い方。静子をこんな女になさったのは、川田さんのよ」

そして、夫人は、再び、大きく舌をのぞかせて、

「——それよりも、ねえ、川田さん。早く静子に御馳走して、ねえ」

柔らかく歯を見せたり、急に激しく……上げたりする静子夫人に川田が敗れたのは、それから間もなくだったが、夫人は、そのまま固く白い頬をふくらませ微動もなかった。

夫人の髪のはつれが、美しい富士額のねつとり汗に光った皮膚にねばりつき、夫人の唇からは糸を引くような涎が、練絹のような柔らかい夫人の太腿を濡らしている。

時々、慄える夫人の白い横顔は、見ようによつては生血を吸った毒婦のような凄惨な美しさが滲んでいた。

そんな静子夫人が、川田は、無性に可愛くなり、疲労した夫人の肉体を笠にかかって責めている事にふと後悔めいたものを感じるの

である。

もう拒否も抵抗もなく、こうした従順さがかつての使用人であった川田に対してみせる静子夫人に対して、別の愛着がわいて来たのかも知れない。

よし、今日は、この辺で解放してやろうと夫人の従順さに対する褒美の意味で、川田が身を引こうとすると、夫人は、

「待って、まだ、動いちゃ駄目——」

と、離れた唇をまた元にもどして、

「きれいにしておかないと、また、鬼源さんに静子は叱られるわ」

静子夫人は、ふと淋しげな表情を見せて、眼だけで微笑して見せ、柔らかな睫毛を、うっとり閉ざしながら、唇と舌……い始めるのだ。

川田は、そうした夫人の大胆な行動を見て驚くと共に甘く妖しくうずくようなものが胸にこみ上がって、思わず、夫人の後頭部に両手をかけ、遮二無二、狂ったように揺さぶり始めた。

「——そ、そんな、ひ、ひどいわ」

夫人は、急に狂暴になった川田に驚き、唇を離したが、川田は、許さず強引……えさせた。

再び川田を悦ばせた静子夫人は、くたくたになりながらも、鬼源に命じられていることをすませ、さすがに、がっくり疲れて、線の綺麗な横顔を見せて、眼を伏せた。

「ひどい方——」

静子夫人は、感激した川田がびったりと横へにじり寄ると、わずかに微笑を口元に浮かべ、羞らいを帯びた甘ったるい声でささやくように云った。

「でも、静子、嬉しいわ。御満足して下さったようだから——」

「奥さんが、こんなにまで成長してくれたとは思わなかったよ。完全にしびれたねえ」

川田は、ホクホクした気分で、つい今しがたまで醜悪な行為を演じたとは思われない夫人の香気がただようような乳色の光沢ある頬や首筋に見惚れながら云うのである。

「今のすばらしい演技に免じて、今朝は、これで無罪放免という事にしてやろう。鬼源には、俺から話してやるさ」

川田は、あぐらに縛った夫人の縄を解き出した。

「——ほんと、川田さん。今日はもうこれで勘忍して下さるというの」

静子夫人は、ふと、顔に生気を浮かべて、

縄を解き始める川田に声をかけた。

「そのかわり明日はイタリヤ式ってやつを俺相手に勉強するんだぜ。いいな」

川田は、両手を縛った夫人の縄も解く。

静子夫人は、ほっとしたように息を吐き、白い両手を前に交錯させるようにして胸を覆い、片膝を立てるのだ。

「さ、早く地下室へ行きな。鬼源が戻って来ると、どうしても調教をやると云い出すかも知れねえぜ」

「恩に着ますわ、川田さん」

静子夫人は、情緒的にねっとり潤んだ瞳を気弱にしばたきながら川田を見て、そのままフラフラと立上る。

今日の調教から、これで解放されたという救われた気分で、静子夫人は、川田に感謝しながら、ドアの方へ眼を向けたのだが、その時、外からドアが開いて、千代がひょっこり顔を見せた。

「あら、朝のお食事は、もう終わったの」

千代は、おろおろしている静子夫人に意地の悪い微笑を見せて、

「残念だったわ。写真を撮らせてもらおうと思っただのに——」

千代のうしろから、春太郎と夏次郎が妻揚

子で齒をせせりながら顔を見せる。

「じゃ、今度は、私達の部屋へ奥様にお越し願ひましょうよ」

千代は、春太郎を見て云った。

夫人は顔色を変え、救いを求めるように川田の方へ哀しげな視線を走らせた。

「大分、疲れているようなんだ。今日は一日休養させてやろうと思うんだが」

と、一応、川田は、夫人を庇ったが、千代は聞かず

「何を云ってんのよ。伊沢先生が調教を受ける奥様をぜひ見物したいとおっしゃってるのじゃない。さ、早く連れて行って頂戴」

春太郎と夏次郎は、床に落ちてゐる麻縄を拾い上げると、おびえて、美しい眼を大きく見開いている静子夫人に近づく。

「さ、奥様」

春太郎は、夫人の乳色の艶々しい肩を指で突く。

救われたと思った途端、再び、地獄の調教を受ける破目になった夫人は、進退極まったように俯向き、肩をすくめたのだが、やがて自分の運命を悟ったように顔色をとり戻し、静かに両手を胸から解いて、背後へ回すのだった。

キリキリと二人のシスターボーイに縄がけ

されながら静子夫人は、凍えるような冷たい微笑を口元に浮かべて、

「——これから、どういう調教をなさるおつもりなの、春太郎さん」

と、小さく唇を開くのだ。

「今朝はね。伊沢先生の御覧になっている前で、仕上げにかかるのよ」

春太郎は、夫人の妖しいばかりに色白の量感のある双臀を軽く平手打ちして千代の方を向き、笑って見せる。

きびしく後手に縛り上げられた静子夫人を見ると川田は苦笑して

「今日は、これで勘弁してやろうと思ったが千代夫人の命令とありや仕方がねえよ。ま、気を悪くしねえでくれよな。奥さん」

と、声をかけたが、夫人は、うすら冷たい微笑をひっそり口元に浮かべて柔らかく首を振って見せた。

「——いいのよ、川田さん。お稽古を休ませて頂こうと思った静子が悪かったわ。でも、思いやりをかけて下さった川田さんに感謝致します」

そう云って、ちらと川田の方へ向けた夫人の濡れた瞳は、ふるいつきたい程、美しかった。

た。

「じゃ、そろそろ参りましょうか、若奥様」
春太郎と夏次郎は、含み笑いしながら、縄尻を取った。

夫人は、翳の深い眼を前方に向け、冷たい彫像のような表情を作って、静かに歩き出したのである。

肉の仕上げ

「ここで商売もののフィルムを撮影するわけですよ」

田代は、十帖の広間の中央に敷かれた白いシートを指さして伊沢に説明している。

舞台に使われる夜具の周囲には、撮影用のライトが配置されて、森田組のチンピラ達が電球を点滅させながら機械の調子を調べているのだ。

こうした仕事の撮影技士になっている幹部やくざの井上は、小型撮影機を点検しながら近くで焼酎を飲んでゐる捨太郎の方を顔をしかめて見て

「やい。そう飲むと、手前、役に立たなくなるぜ。いい加減にしねえか」
と、どなりつけてゐる。

「そら、大スターの御登場だ」

襖が開いて、千代や春太郎達に取囲まれた静子夫人が、その艶麗な裸身を見せたので、

田代は、楽しそうに井沢の肩をたたいた。

捨太郎は、涎を流しながらのっそりと立上り、黄色い歯をむき出して奇妙な笑い声を立てる。

「ね、社長。ちょっと、二時間ばかりこの奥様をお借りするわ。春太郎さん達にあともう少し、磨きをかけさせれば、完全なものになると思うのよ。それがすめば、すぐに撮影にかかって頂くわ。いいでしょ」

千代は、悲しげに顔を伏せている静子夫人の肩に手をかけながら、田代に云った。

「調教が終れば、一度、これを捨太郎に実験させてみて、うまくいけば、映画に使えるかも知れないじゃないの」

「成程、そうすりゃ、ますます面白い映画が制作出来るってわけだ」

森田が、顔をくずして笑った。

「よし、そりゃ面白い。じゃ、徹底的に磨きをかけてくれ給え。うまくいけば、映画に使う」

田代も乗気になって、8ミリ映画の撮影は少し時間をのばす事になった。

「そうと話が決まれば急がなきゃあね。さ、奥様、行きましょう」

千代は、夫人の背を押し、伊沢へついて来るよう眼くばせした。

二間つづきの千代の部屋へ引き立てられた静子夫人は、完全に意志を喪失した人間のようになり、ただ美しく濡れ光る二つの瞳をしばたかせているだけである。

「いいわね、奥様。伊沢先生は、貴女の財産を全部私のものにするため、色々と骨を折って下さった人なのよ。だから、うんと楽しい思いにしてあげて欲しいの。わかるわね」

千代は、夫人が伊沢に対し、色々と媚態を示しながら、春太郎達の調教を受けるよう強制するのである。

「——わかりましたわ。千代さんのおっしゃる通りに致します」

すでに天井から吊り下げられてある二本のロープに静子夫人は縄尻をつながれ、更に腰縄もつながれて、伸びきったようにしてその場へ立たされたが、千代の命じる事を、一つ一つ柔順にうなずいて承諾している。

「ね、先生、こちらへ行らしてよ」

千代は、何となく照れたような顔つきで、次の間で煙草をくゆらしている伊沢の方を向

き、手招きして呼んだ。

「これから、昨夜、一寸お話しした面白い調教が始まるのよ。ゆっくり御見物になってね」

千代は伊沢を、立ち縛りにされている夫人の正面に坐らせ、

「調教のお道具を揃えて来る間、しばらく奥様のお守りを頼みますわね、先生」

千代は悪戯っぽく笑って、伊沢の肩をポンとたたくと、春太郎、夏次郎を連れて部屋から出て行った。

晒しものになっている静子夫人と二人きりになった伊沢は、縁なし眼鏡をかけ直し、夫人の傍へにじり寄る。

夫人は、白い頬を固く硬張らせたまま、如何にも好色そうなニヤついた伊沢の眼より顔をそらせている。

「今夜、久しぶりで奥様が抱けるのだと思うと、今から胸がわくわくとして落着かないんですよ」

伊沢は、静子夫人の柔らかい心も吸いこまれるような色白の肌に眼をこらし、それからぴったりと閉じ合わせている程よく脂肪をのせた優美な太腿を舌なめずりをするようにして見つめるのだ。やがて、井沢の眼は、柔らかそうな純黒……注がれて、次第に血走った

表情になっていく。

今夜は、この男の玩具にもならねばならぬのか、と夫人はそうした約束を千代と取り交した事を想い出し、みじめな思いに落ちこんでいく。

「聞けば奥様はフランス式とかいう愛情表現が実に上達されたというじゃありませんか。ひどい人だ。以前、僕に抱かれた時、いくら僕が欲求しても、あれだけは絶対に嫌がった奥様だったのに——」

と、伊沢は恨みがましい調子で夫人を見上げてそんな事を云い、

「今夜は嫌とは云わせないよ、奥様。何しろ僕もその道は一応極めたつもりでいる男なんだ。あの方法で奥様を有頂天にさせる自信はありますね」

伊沢は、酔い痺れたような気分になって、今夜の獲物にしげしげ眼を注ぎながら、ペラペラとしゃべりまくっている。

「——あの時は、ごめんなさい。だって、静子は鬼源さんに、あの方法を教わったのですもの」

静子夫人は、精一杯の媚びを見せるつもりで伊沢の視線に潤んだ美しい眼を合わせた。「じゃ、いいですね。今夜は僕を堪能させて

くれますね」

伊沢は、夫人の甘い言葉に浮足立ったようにそわそわとして立上ると、乳色の柔らかな夫人の肩を両手で抱きしめるのだ。

「どのような羞かしい事だって今の静子は、いといませんわ。どうとも、お好きなようになさって——」

甘えかかるようにハスキーな声でそう云った静子夫人は、伊沢に求められるまま、びったり紅唇を伊沢の唇へ合わせ、優しく伊沢の舌に舌をからませる。

伊沢から静かに唇を離れた静子夫人は、先程、川田に演じてみせたあの屈辱行為を、再びこのキザな男に演じてみせなければならぬのかと救われぬ思いになった。

鬼源に幾度も教育され、性の妖気に酔い痺れて、ふと忘我状態になって演じてしまう夫人も、一時の興奮が覚めれば、残るものは自分に対する嘲りだけである。

腐敗した果物の匂いと生臭く甘酸っぱい、激しく鼻をつく異様な臭気。演じた直後は、眼がくらみ、耳がつんざくような狂おしい気分になる静子夫人であった。

しかし、今更、どうなるものでもない。すでに、捨太郎、鬼源、川田、更に二人のシス

ターボーイとまで、そうした醜惡な行為を演じてしまった自分ではないか、と、自嘲的にもなつて、静子夫人は、

「いいわ。静子、伊沢先生を充分楽しませるつもりですよ」

と、太腿あたりに熱い接吻を注ぎかける伊沢に、甘い吐息を吐きかけるように口に出して云うのだ。

伊沢が荒い息づかいと一緒にそ………吻を注ぎかけようとすると、夫人は甘い拒否を示して、なよなよと柔らかな体を揺さぶった。

「——ね、駄目、先生。それは、夜まで、おあずけよ。ね、嫌、嫌——」

夫人が、もじもじと体を揺さぶって、伊沢をさけていた時、襖が開いて、千代が春太郎達と色々な小道具を持って入って来た。

伊沢は、あわてて夫人から身を引き、何事もなかったようなケロリとした表情にもどつて、煙草を口に咥えるのである。

そんな伊沢に静子夫人は、情感的な瞳を向け、自嘲的な微笑を口元に浮かべて

「これから静子は、とても羞かしい調教を受けるのです。お笑いにならないでね、先生」

そう云った静子夫人は、すでに覚悟は出来ているらしく、春太郎達が無気味な小道具を

ぴったり合わせた華奢な足首の前に並べ出しても、何ら狼狽の色を示さなかった。そしてまるで水のように澄んだ冷たい表情に戻り、抒情的な美しい瞳をぼんやりと前方に向けて調教開始を静かに待っている風情であった。「それじゃ奥様、始めましょうか」

春太郎は、手にしていた紙袋の中から幾つかのピンポン玉を取出して、それを夫人の眼前に近づけた。



再刊を望む・・・ M小説と作家たち

麻曾比須人

「これが二つか三つ、受けられるようになれば、もう大丈夫というわけよ。こちらも一生懸命、調教するから奥様も自分の体を作り変えるつもりで、がんばって頂戴ね」

春太郎は、静子夫人の形のいい白い頬に軽く接吻すると、ぼんやり突っ立っている伊沢の方に笑いかける。

「じゃ、今日は伊沢先生にも色々お手伝って頂こうかしら」

すると、伊沢も、あわてて煙草を灰皿に押しこんで

「ああ、何なりと手伝わせてくれたまえ」と、妙に腰が落ちつかず、二本のロープにその優美な緊縛裸身を、つなぎ止められている静子夫人の周りを、グルグル歩き廻るのだった。

——(未完)——

奇クを読んで、M小説なるものを、はじめて知ったのは、もう十五、六年も前のことである。その間、私と奇クとの「つきあい」は

時に、一、二年、五、六カ月のブランクはあったけれど、連綿として、いまに至るまで続いている。この間に、何十冊もたまってしまう、処置に困り、好きな作品や、写真だけ、切り抜いて、あとは焼いてしまったり、夜、

こっそりと、川の中へ投げ捨てたりしたこともあった。

いま、揃えておけば、貴重な財産になるものをと惜しまれてならない。おそらく、読者の中にも私と同じ経験をした方が多いと思うが、如何ですか。

私の切り抜いて保存している作品は、ほとんどM作品ばかりである。時々、取り出し

て、読み返してみるが、このまま埋もれさせてしまうのが惜しいような作品が多い。幸い沼正三氏の傑作「家畜人ヤプー」が単行本として発刊されたことは、M小説を愛好する人たちにあって大きな喜びである。おくれればせながら、私もこの「家畜人ヤプー」を買い求め、最初から一気に読了し、あらためて、沼氏のすばらしい想像力と、科学面全般にわたる広い知識と独創力に、感嘆しました。作家山田風太郎氏の忍法ものに一脈通じるものを感じました。

この「家畜人ヤプー」が物語として書き下されているのに対し、同じ作者による「あるマゾヒストの手帖から」及び「ある夢想家の手帖から」はエッセイ風な読み物として、同氏の高い知性と、博学多才ぶりを示すものと

して、私の好きな作品である。これが一冊の単行本にまとめて発刊することが出来たら、「ヤプー」以上の好評を得ることが出来るのではないだろうか。その発刊を心から期待するのは私一人ではないと思うのである。

沼氏のエッセイとならんで、十年ほど前の奇ク誌上を飾ったM小説作家に、田沼醜男氏がいたことを知る読者は多いと思う。奇クには「マゾヒズム天国」が連載されたが、他誌には三、四年前、「赤い暴力」「赤い恐喝」など一連のM小説を発表している。(同系統のM小説を「大和勇」という名前で発表されているものもあるが、田沼氏と同一人ではないかと思う)私は、「沼」という字の連想から沼正三氏と、田沼醜男氏は同一人ではないかと思うのだが……。その作品も白色高級人種崇拜で貫かれており、日本人を「毛深く背の低い日本人」というふうな表現を用いており、その知性の高い作品といい、沼氏の作品に通ずるものを感じるのである。田沼氏のエッセイの方が、よりスムーズに、容易に理解され、共感を呼ぶことが出来るし、作品として大衆性?があるように思えるのである。奇クで、田沼氏作品集というような別冊を発行する考えはないものだろうか。

別冊といえば、昭和三十五年十一月にマゾヒズム特集という別冊が発行され、私もこれを購入し、現在も持っている。この中には、

五月号から連載がはじまった「壺中の園」の作者、真砂十四郎氏の「二百字讃歌」「ヴィナスの重石」の二編、さらに男性虐待快樂術などで、いまの読者にもなじみ深い、馬族保氏の「美しい暴君」「祭壇に君臨する脚」など三編がおさめられている。さらに真木不二夫氏の「美しき悪魔の哄笑」など全部で十四編のM小説ばかりが収容されている。しかし、なにかもう一つもの足りない思いがするのである。その原因は、読まれた読者には直ちにわかると思うが、当時はかなり検閲がやかましかったのか、大事な部分が相当にカットされているようなのである。ほかの作品にもそれが窺える。折角、盛りあがり、クライマックスに達しようとする、場面が変わったりするのは、興味半減ということになってしまふのだが……。

さて、別冊はそれくらいにして、当時、奇クが発売されると真っ先に読んだ作品に「らぶ・すれいぶ」がある。これは、「M派交友録」で、いまなお健在な鬼山紉策氏の作品で私好みの場面があり、毎回、ゾクゾクしながら、何回も読んだものである。さらに、このあと、同じ作者による「痴迷」が連載され、この作品も、前の「らぶ・すれいぶ」と同様奇ク発売が待ち遠しい思いで、読ませてもらった作品である。

私の切り抜き帳も、脱落が多く、連載もの

などは、あちこち欠けているので、こうしたなつかしい作品を読み返してみると、これが一冊にまとめられていたら、と思う気持ちが強く、あえて編集者に、再度、昔の好評を博した作品をノーカットでまとめ、別冊M小説特集号を発売してもらいたいと思うのである。

このほかにも、山本節夫氏の「ファンタジヤ・マゾヒスティカ」、とやま・かずひこ氏の「愛好者の記録」恒川文彦氏の「おまじない」など、いま読み返して見ても、当時のことを思い出す作品が多い。

現在毎号、魅力的な作品を発表している芳野眉美氏の作品は、あまり私の切抜き帳の中に見当たらない。その中でも「硝子便所」「続・硝子便所」などという作品があり、詩のよきな文章で、十何年前の作品とは思われないみずみずしい新鮮さである。こうした作品を何らかの方法でもう一度、昔の作品を知らない、現在の読者に、また、昔読んだまま、当時の雑誌をなくしてしまった読者に対し、あらためて、M小説や、Mエッセイの真随を知らせてやるためにも、編集部としては、これら価値ある作品を、取捨選択し、一冊にまとめて発行する労をとられたと思うものである。これはM小説、M作品愛好家として、誰もが願っている願いではないだろうか。

(終)

女王さまと二ひきの犬

餌

の

味

浅羽 や す し

(1)

見なれない若い男の右の耳たぶを、引きちぎりそうに力をこめてつまみ、サダ子に住んでいるマンションスタイルのアパート片桐荘へ帰ってきたのは、まだ戸外の明かるい五時ちょっとすぎ、通りは夕食の支度に追われる主婦で賑わう時刻であった。

「あがるんだよ、おい！」

サダ子は重たいドアを足で押しあげ、男の耳は相変わらずつかんだまま大声をあげた。「イタタ。ボクが悪かった。カンペンしてく

ださいよ」

男は半ベソであった。

「おねえさん。どうしたんだね」

「あ、管理人のオジさんか。痴漢だよ、このやろう」

「痴漢たあ、おだやかでないねえ。ねえさんのシリでも、さすったんかい」

「そのくらいなら、横ツラの二つや三つでカンペンしてやるさ。この助平やろう、あたいが、公園のトイレへ入ったら、戸のスキマから、のぞきやがったんだ」
「へえ、なんだってまた」



「うん、だから、これから部屋へひっぱりこんで、ドロを吐かすのさ」

サダ子は、手短かにわけを話すと、

「とにかく、くるんだよ」

トントントントと、二階へあがる階段を踏んだ。

サダ子の職業は水商売らしいが、管理人の佐伯でさえ、くわしくは知っていない。

午前中は、たいてい部屋で横になっており午後になると、きれいに化粧をし、キモノを上手に着て、出ていく。

顔立ちは上品だし、好みはイキで、すれち

がう男たちは振り返る。

景気は、かなりよさそうで、六、三の二室にDR、フロツきの二階を、一万八千円で借りており、室代をためたことは一回もない。

カラーテレビ、ステレオ、冷蔵庫、洗濯機と、電気製品がズラリと並び「近く電子レンジを買うけど、アンペアはだいじょうぶかしら」と、わざわざ佐伯管理人に念を押している。ひるめしは、近所のレストランと契約して、ツケでとっている。

大型のボードには、高価な洋酒がズラリと並び、毎夜のように遊びにくる、これもイキな和服の女性たちと、にぎやかに酒もりをやっているようだ。

三度に一度は、五十すぎた独身の佐伯管理人も、パーティによんでもらえ、たっぷり洋酒をのまされたり、てんやものの、うなどんや天どんをあてがわれたり、ときには、やってきている女性たちと、適当にふざけさせてもらったり、十四室、十八人の住人のなかでは、とびきりの上客で、ガンコ者で通っている佐伯管理人も、サダ子だけは、特別あつかいで、たいていのムリは、きくのであった。

(2)

「おい、この部屋へ入ったら、おまえはマナイタのコイだよ。どうして、あんなマネをしたのか、正直に吐くんだぜ」

柔道と、空手には自信がある。どんな淋しい夜道でも、へいきさと、得意げに言うサダ子につかまったのは、痴漢——井深重夫にとっては不運なことであった。

そのとき、サダ子は、おなかをこわして、ふと通りかかった公園のトイレへかけこんだのである。

おなかはグルグル鳴るし、いまにももれそうで、むちゅうでしゃがんだため、ついトビラをしめ忘れた。

うしろに視線を感じて、振りむいたら、痴漢、井深重夫の、灼きつくような眼があったのだ。

でも、まだ全部、出しきったわけではなく、かすかな痛みが、腸のあたりに残っていた。みられていることはわかっていても、どうにも立ち上がることはできない。

片手でおさえたトビラの、三センチほどのスキマのむこうに、カッと開いた目玉と、はげしい息づかいを聞いて、サダ子は、ムラムラと腹が立ったのだった。

やっと用をたし終えて、バッグをあけたが

あいにく、落とし紙が切れていた。

困った、と思ったが、よい思案がうかばず仕方なく、ハンカチをとりだした。

トビラのむこうには、相変わらず、目玉とはげしい息づかいがあった。

人が困ってるのに、のぞいたりしやがってという怒りが、サダ子の心のなかに、火の玉になったのである。

ガタン！

思いきり力一杯、トビラを押しあげたら、案の定、痴漢は、トビラで顔面にパンチをくらひ、すってんと引っくり返った。

妙令の美人とはいえ、柔道と空手の心得のあるサダ子につかまったのは、井深重夫にとって不運だったかもしれなかった。

「待て、このやろう」

二十四歳の若い女性のセリフではない。

でも、サダ子は、気のつよい女性であったから、そんなことばが自然に出たのである。

サダ子は、草履ばきの足を高々とあげて井深重夫の胃のあたりを、力一杯、蹴りつけたからたまらない。清掃したあとの、タイルは水びたしであった。そこへ、スッテーンと、ころがったひょうしに、床にしたたかに頭をぶつけ、とたんに、目のさきに火花が散って

のびてしまった。

失神しているところを、もういちど、肩のあたりをグイと踏まれ、やっと気をとりもどしたら、耳を手荒くつかまれていた。

それから、大変だった。

「立て！ ついてくるんだ」

耳は、ちぎれそうに痛い。

だが、その女の、なんともいえないよい香りのする体臭と香料をミックスした複雑な香りを嗅ぐと、気が遠くなるみたいで、催眠術をかけられたように、さからえなかった。

(3)

井深重夫は、百科辞典のかけだしセールスマンであった。年令は二十三歳。九州出身。学歴はなく、会社の合宿にいた。

ワンセット三万円の百科辞典を販売するのが、彼の仕事で、ノルマは月五セット。

ノルマは完全に達成できなくても、合宿と朝夕の二食だけは保証されている。

だが、ノルマに足りないぶんは、翌月に回される。つまり、今月三セットしか売れないと、残る二セットは来月に回され、来月は七セットを売る責任を、しよわされる。

来月に回すぶんを、社内では「前科」と、

よんでいた。つまり、二セットを売り残すと

「前科二犯」となる。

彼は、前科がつもりもって十七犯。とても、つぐないきれない気の遠くなる「前科」であった。

「おい、前科が二十犯になったらクビだぞ。

合宿は追んだされるからな」

班長は、けさも、重い足を引きずりながらあてもないセールスに出ようとする井深重夫の背後から、そう浴びせた。

ノルマを完全に果たせば、手当てが手取り二万円になり、どうやらひるめしと、タバコ代にはなる。「そのうち慣れてくれば、十セ

ットは軽い。そうなりや手当てが四万円になるから」と、彼より二カ月先輩の、木戸という男に力をつけられている。

だが、ノルマの達成を、「満期」という、

社内の、感じのわるい、まるで刑務所みたいな隠語は、彼の手のとどかない彼方にあり、まず、十セットはおろか、五セットのノルマも高嶺の花であった。

いまの井深重夫には、ひるめし代わりの立喰いの五十円のソバ代もない。

埋め合わせに、朝、夕の合宿の飯をたっぷり食ってやろうと身構えるのだが、二十人の

班では最下位の井深重夫には、どんぶりに八分目の分量しか与えられない。

「働かざるもの食うべからず。食いたかったら、前科をつくるな」

第二班長、とかげ口をたたかれる浅井班長は怒号する。浅井の命令で前科の多いヤツには、おかずも充分与えられないかわりに、すぐ売りまくって、二十セットはコンスタントにだす、西村俊夫というセールスマンなどは、特別に、朝から班長と同一の、トンカツオムレツに、山もりのめしという差別待遇でみんなをうらやましがらせていた。

「おまえら、よく聞け。西村は、まだ二十一になったばかりなんだぞ。それなのに、この成績はどうだ。いい年して、前科ばかりつくる意気地なしは、柱にあたたまをぶつけて死んでしまえ」

いくらなのしられても、その通りなのだから仕方がない。

「くやしかったら、西村を追いつけ」

班長には、班員が売るワン・セットについて千円の手当てが会社からだされる。西村は毎月、浅井に二万円もうけさせているリクツになる。

生意気にも西村は、どんぶりのめしを半分

ものこし、その上へ、これみよがしに、タバコのスイガラをつつ込むと、

「班長、きょうは二セット納品です」

ホウと、声にならない一同の声をあとに立ちあがる。胸を張る、勝者のポーズだ。

「なにをグズグズしとる。シュッパッ！」

班長は気合いをかけるのといっしょに、

「井深！」

と呼び、「合宿を追んだされるからな」と追いうちをかけたのであった。

いくらハッパをかけられても、東京の地理もわからず見込客もたない井深重夫にとっては、きょうも、まったく訪問先がない。

朝めしは軽かったし、ヒルはぬいたし、仕方なく、通りかかった公園の水のみ場で、せめて水でも呑むか、とフラフラ入ったが、なぜか水のみ場は断水であった。

そのとき、若い女性が、トイレへ入るのが目にとまった。あたりに人影はなかった。

女性はトイレに入ると、つい気がゆるみ、化粧直しに気をとられて、ハンドバッグなどから目を離すという。

それは出来心であった。

あまりの空腹が、井深重夫を、ハンドバッグをねらう、カッ払いに追いやったという結

果を生んだといえるかも知れない。そして、その出来心が、井深重夫の運命を大きく狂わすことになるのである。――。

(4)

「あんたが、痴漢でないことはわかったよ」

重夫の告白をきくと、サダ子は言った。

「でも、あんたが、ハンドバッグを、かっぱらおうとした罪は消えないよ」

サダ子は、自由にコキ使える雇い人を探していた。食わせて小遣いの一万円くらいは出してやれる。というのは、サダ子の現在の稼ぎは月に二十万円を越しているからである。

ダンナが三人。カラダは安売りしない。

これが、サダ子の自慢であった。

日本橋馬喰町の、洋品問屋の会長、といいつても、デッチから叩きあげて、鉄骨六階のビルをつくりあげるまでに成功した、ワイシヤツ専門卸の「数正」の創業者、近江栄介が社長の職をセガレにゆずり、名前だけの会長に就任して、もてあますヒマを女に求めたときに、女店員のサダ子に、眼がいった。

店をやめさせ、アパートに住ませ、月の手当て十萬円で、サダ子に二号をOKさせたのは、いまから三年前。サダ子二十一歳、栄

介七十四歳の春であった。

二号だから、拘束はうけてない。

週に二回、浜町のホテルに行き、半日を栄介とすごせばよいのである。

あとの週四日を、サダ子は別に、二人のダンナに提供している。一人は深川木場の材木屋の大将で、五十九歳。もう一人は、寿町の大きなクツ問屋の社長で、六十一歳。この二人からは、五万円ずつ、もらっている。

でも、その二人に会ってやるのは、週一回と、きめている。五万円なら、それが相場なのである。

三人とも、すごい年よりなのには理由がある。老人だから、そのほうの用はないのである。サダ子のからだを、若返りのクスリくらいにしか思わず、会えば、人形いじるみたいに、しつこい愛撫をくり返すだけ。

しかしサダ子は、からだがかきれいでいられるのなら、そんなとしよりで結構だと思っている。

おもしろいことに、近江栄介も、材木屋の大将の大川平三にしても、クツ屋の新山虎治郎にしても、好みはだいたい同じであった。

いっしょにフロに入り、丹念にサダ子のカラダのすみずみまで清めるのも、三人共通だ

ったし、サダ子がトイレに入るのを待ちかねて、せまい内部までついてくる。洋式便器に腰をおろし、平然と目をとじているサダ子のまわりを、イヌのように廻りながら、ハナを鳴らしたり、熱心にのぞいてみたり。あげくには、先回りして、トイレトペーパーを丸めて待機する。ここへ入れば、サダ子自身はそれこそ人形のように、なにもしなくても用がたせた。

「ねえ、ペーパーなんか使うの、いやよ。ミズくさいじゃない」

からかい半分に、そう言ったとたん、栄介も平三も虎治郎も、喜々としてサダ子の命令に屈伏し、うやうやしく顔を寄せてきた。それくらい、ここではペーパーを使うことは、いっさいなくなっている。

そんな世話を強要されることに、老人は生甲斐を感じ、そのときばかりは、社会的な地位を忘れて、一ぴきのイヌかブタか、忠実なドレイと化するのである。

三人が三人ともサダ子のかたがたを崇拜する態度であった。こんなとしよりが手なんかだすのは、冒瀆だとも思ってるのだろうか、せいぜいフロで、おずおずとせなかを撫ぜたり、こわごわトイレへついてくるのがオチで

ある。ふざけて、血管のうき出た手をださせそれをねらって、ひっかけてでもやろうものなら大感激なのだ。としよりとは、そうしたものののだろうか。でも、べつにホネが折れるわけではなく、こちらは大助かりなのだ。

サダ子は、そのうち、三人のなかの一人といっしょのときは、トイレへいくことなんかやめようと思っている。デラックスなホテルのルームで、これらのダンナを、思いのままに追い使い、文字通り、器物に使えたら、さぞスカッとするだろう。

老人たちは家の老妻に気がねして、ホテルにいるのは、せいぜい三、四時間であった。でも、満足した表情で帰ってゆくのは、やはりサダ子の、つめたく手ひどい扱いが、かえって喜びを大きくするのだろうか。

でもサダ子は、いつも心を満たされなかった。としよりとつき合うばかりでは、こちらも、必要以上に老けこむおそれがある。

つめたい、ヒヤリとする氷のような手を、しつこく肌に這わされたり、シワだらけの顔を腰掛代りにするのは、嫌悪であった。だから、ついトイレのお供を命じたり、口をあけさせて、ペット、ためたつばきを落とすくらい、床に這わせて、そのせなかを、ハイヒールで踏みにじったりしてやるのだけれど、ダンナたちは、そう冷酷にすればするほど、よけい喜びを深くするのだから、逆効果というしかない。

だから、サダ子は、ヒマさえあれば、町へ出て、できるだけ、若さを吸収することにとめていた。

ホストクラブで、ばかなカネを使ってみたり、深夜バーのバーテンをホテルへさそってみたり、家出した高校生の男の子を、アパートにさそってみたりしたが、それらの連中はけっきょくカネでサダ子に買われているという思いがあるらしく、なにか一本、足りないのである。それなら、いっそイヌを飼う気持で、雇い人と割りきった男性を使ってみよう――。

そう考えたやさきに、目の前に、まるで、張りめぐらせたアミにひっかかるみたいに、むこうから飛びこんできた井深重夫であったのだ。

「二一〇番、呼ぼうか」

サダ子は、首うなだれる重夫に、追いうちをかけた。

「それとも、あたしの命令を聞くかい」

「……」

「あたしは、どっちでもいいのさ。かっぱらいの現行犯で、あたしが証人、逃げようたつてあたしの、このうでが、だまっていな」
「なんでも、ききます。一一〇番だけはかべんして」

重夫が決心して、そう答えた瞬間から、ふたりは、主、従の間柄になった。もちろん、サダ子が女王であり、重夫は、忠実な下僕である。

(5)

「でも、まだ完全に信用できないから、シゲが、ほんとうに痴漢でないかどうか調べてやろう」

サダ子が、大胆なポーズで、立てひざをした。下ばきをいっさいつけないのは、彼女の三年來の習慣である。

サダ子は、手をのばして、卓上のコンポートに盛ったフランスパンをとり、そのからだの下に敷きつぶした。

「待ってるのよ、これからテスト」

楽しそうな、しかしゾツとするような残忍なわらいをうかべ、胸を思いきりはだけた汗ばんだ肌の、甘ずっぱい香りに、重夫は呆然

となった。

「さ、おまちどう。パンは焼けたようだ」
からだの下に敷いたパンをとりだす。

丸かったフランスパンは、ぺたっとつぶれ
気のせいか温かみを帯びているようだ。

「シゲ、おなか空いてるんだろ。食べな」

つきつけられたが、眼の前でみているだけに手をだすのが、ためらわれる。

「食えといったら食うんだ！」

サダ子は、表情をこわばらせ、パンをちぎって、重夫の口につっこんだ。

気のせいばかりでなく、たしかに塩味をおびた異様な味のするパンを押しこまれ、重夫は目を白黒させるばかりである。

でも、のみこまなければ、許してもらえないだろう。目をとじ、必死に噛んだが、口中

がカラカラに乾いて、パンがへばりつき、どうしても、のどを通らないのだ。

「レモンティ、のむかい、濃いやつ」

耳もとで、そうささやかされたまでは、どうやら記憶があった。そしてサダ子のいう濃いレモンティ……それは、常識を越えた、たいへんなしろもの。いままで考えたこともない「飲み物」であった。サダ子は、それを、胃のなかに流しこんでやるという。もしも、

いやといったら、そうかいと許す相手でなさ
そうなことは、わかりはじめている。

許されたい一心で、いやいやながら、うけ
いれたそれは、世にもふしぎな味であり、香
りであった。でも、逃げられない。重夫は絶
対絶命の、きもちだった。わらいながら立ち
あがったサダ子に、それを一気に流しこまれ
たのは、もちろん、生まれてはじめての経験
である。不快だった。

だが万一、吐きだしでもしようものなら、
タタミを濡らしてしまうだろう。まったく死
ぬ思いで、のみくだすあとからあとから、天
上から、レモンいろの雨が降り、避けようが
ない。でも、かっ払いで、つきだされるより
はマシだと、観念した。

観念したら、不潔感がなくなったのは、わ
れながらふしぎであった。眼前がまっくらで
重夫は、ただ金魚のように、口をパクパクさ
せてあえぎ、やっとの思いで、雨のめぐみを
受けとめたのであった。

——それから十日はユメのように過ぎた。
パンとレモンティの、ふしぎな洗礼をうけ
クリスチャンネームさながらに、サダ子から
「シゲ」と呼ばれ、強制的に雇い人にされて
しかし重夫は、ほっと心が休まるのである。

サダ子の足もとにひれ伏して、用事さえ聞いていれば、三度のメシはハラ一杯、食わせてもらえる。たとえそのメシが、サダ子の食べのこしの、齒形のついたテキヤ、つばきにまみれたメシや、噛みだした、焼魚の皮であっても、合宿のオニ班長、浅井にどなられどなられながら、かつ込んだ、冷めしより、はるかに、おいしかった。しかし、気まぐれなサダ子が、せっかくとってくれた五月ソバのおいしいシルを惜しげもなく流しに捨て、代りに、れいのレモンティを、たっぷり注いで「おまえは、このほうがいいんだろ」

残忍な目で、その汁を、すすれと命ずる。イヌだって、こんな苛酷なエサを与えられることはないだろう。だが、どうあっても、どんぶりをカラにするしかないのだ。

これがサダ子の気まぐれと思うが、実は気まぐれだけではないのだ。サダ子は、まだ重夫には打ちあけてないが、ある目的のための特訓であるのだ。こんなドンブリの五目そばを、平気で、一滴の汁もあまさずにたいらげられる人間に飼育する必要を、サダ子は感じていたのである。

はじめのころは、どうにもできなかったその五月ラーメンが、いまでは、ふつうに食べ

られるようになっていた。いやといっても許されるわけもなく、首を振ったら、

「そんなら、なんにも食べさせない」

まる一日、絶食させられたものだ。

「ご主人さまの命令は絶対なんだ。命令にそむくなら、もうひとつ味つけしてやろう」

その味つけは、とてつもなく不快な香りを放ち、目をそむけさせられる。

そばの汁なら、まだガマンもできた。

それが、そばにまざって浮いているのをみたときは気が遠くなりそうに不快であった。

たしかに、ハンドバッグはねらったが、そのために、人質みたいに住込みの雇い人になり、奉仕を強要されている。なのに、さらにそんなものまで食えという、サダ子という女は、狂人なのではないだろうか――。

こんなものが、いったい、のどを通るだろうか――。病気になるにはしないだろうか――

でも、どうしても、どんぶりをカラにせねば許してもらえないことができない。

目をつぶり、ハナをつまみ、一気にほおばったが、もどしてしまった。でも、度々そんなものをつきつけられるうち、いまでは、それが当りまえの、たべものとなった感じであった。

(6)

寝るときは、手足をギリギリに縛りあげられて、冷めたいダイニングの床にころがされる。からだの自由は完全にうばわれていた。たった一カ所だけ、どうやら自由を与えられたところがある。それは、口と、のどであった。

息ができないから、口だけは解放されたのだろうと、ご主人さまの、ことはきついがやさしい心づかいがうれしかった。だが、とんでもない、その、自由に動かせる口は、重夫のためのものでなく、ご主人さまの、ある用を足すために、そうしてあることが、たちまち、わかった。

サダ子は、物ぐさであった。

いったんベッドに入ったら、どんな用があっても、ベッドから出ようとはしない。

「シゲ！」

呼ぶのは、たいてい真夜中か、明け方なのである。

イモムシみたいに、ゴロゴロと床を這い、ご主人さまの足もとに跪く。

重夫は、そこで再び、器物にされてしまうのだった。

午前中、たっぷりねむったサダ子、目をさますのは、正午の時報の直後ときまっていた。起きるとスグに、入浴をする。

流すのは、もちろん重夫の役目である。

サダ子は、ダラリと両手を下げ、なにもしない。その足もとにひざまずいて、せっせとからだに石けんをぬりたくり、上等なスポンジで、せっせと洗ってさしあげる。

風呂と、トイレをいっぺんにすませると、スケジュール通りに、ある日は近江と、ある日は材木屋の大将の大川と、また、ある日はクツ問屋の老社長とデートのために、サダ子は盛装をこらして出かける。

あとは、重夫一人の天下であった。

たっぷりサダ子の、汗のとけこんだ浴槽に首をさかさまにドボンと浸けて、石けんと香料のミックスされた湯を、満足するまでのんだり、トイレの掃除をやったり、汚れた下着をせんたくしたり、そうしたサダ子の身のまわりの雑事をやらせてもらえるのは、たのしいことであった。

その従属の心は、五目ラーメンに、「汗」をたっぷりかけられたり、さらに「味つけ」をおとされ、食べることを強制された日から重夫の心に芽生えた——といえるだろう。

サダ子の『ドレイ飼育』は、こうして着々と、進められていったのだ。

いまの重夫は、まったくサダ子の、からだの一部であった。手は彼女の手、足は彼女の足に、自己を捨てた、一個の木偶（デク）——これが、重夫のいまのすがたであった。日は流れていった。

もう、百科辞典のセールの仕事なんか、コロリと忘れていた。サダ子の手足となり、文字通り器物となってコキつかわれることは底しれない楽しさであった。気の遠くなるような、やわらかいサダ子のベッドのぬけがらに、足のほうからもぐっていき、まだ体温のぬくもりが残ってるみたい、ほの暖かい空気を吸ったり、得体のしれないシミに顔を押しつけたり、すみっこに丸められてある下着をみつめて、それをすっぽりかぶって深く息を吸ったり、サダ子の留守はそんなことに熱中して、時のたつのを忘れるのである。

いつしか、井深重夫という人間はこの世から消え去り、ここに、いまいるのは、サダ子の身体の一部、この手は、この足は、この顔は、この背中、サダ子そのもの、と自分に言いしかせる。サダ子の命令なら、どんな醜悪なものでも、いまでは平気で口にすること

ができる。（オレは、女王さまに飼われているイヌなんだ）という思いに、胸を熱くする重夫であった。

夕めしは、一人で食べる。ちょうどその頃サダ子は、三人のダンナのうちの誰かとレストランで豪華な食事を楽しんでいるはずだった。

トイレの片すみに、ちいさな、保温式のポットがおかれてある。フタを開けば、重夫の『食事』が入っている。サダ子が、重夫のためにつくって残してくれたものである。

本来なら、水洗のコックをひねって、ヤミに流される運命のそれが、いまでは重夫の食事になっている。夕めしは、五時ときめられていた。その時刻を待ちかねて、イソイソとフタをとる。これが、尊いご主人さまのつくってくれた、得がたい食べ物なんだ、と思うと、それに向かって、深々と、あたまが下げたくなる。

——そのような、食べ物でない食べ物を毎日与えることによって、重夫は、ますますサダ子の足下にひざまずく気持を深くするだろうとサダ子は計算していた。だからこそ、面倒もいとわずポットのなかに与えたのである。そして、どうやらサダ子のネライは当たっ

たようだ。

いまでは、蹴ろうが、つねろうが、顔色も変えず、足の下にすりよってくる、忠犬のような重夫。

——あたしは、こんな人間をさがしていたのだ。寝るところもいなくなれば、食物にもカネのいらぬイヌ以下の人間。重夫は、どうやらサダ子の私有物と化してしまっただけだ。

(7)

(あの男が、またいる！)

サダ子は、ロビーの片すみで、反対側の、赤電話台の前に、人待ち顔にたたずむ若い男をみつめた。さすがに、ドキンとした。

二週間ほど前、彼女は、おなじくこのロビーで、ダンナの近江栄介を待つときに、ちょっとしたサギにあったのである。

いま、赤電話の前に立つその男が、そのときの犯人であった。あのとき、さりげなく近より、ウィンクしてみせ、

「すばらしいモノがあるんですが」

大型の書類袋を片手に話しかけた。

サンプルを、と、あたりに目をくばりながら、内ポケットから取り出した三枚の写真は

外人の男女が、あられもないすがたで、ベッドでからみ合う、妖しい写真で、鮮明な、美しいカラーだった。モデルは男女ともに美しかった。室内の調度もデラックスで、複製ではなさそうである。サイズもキャビネで、見ごたえがあった。

「二十枚あるんです。一枚千円、みんな買ってくれたら一万五千元でいいです」

ダンナの近江は、こうした写真や、8ミリや、ブルーテープに目のないほうであった。買ってもよいと思った。さいふから一万五千元引きぬいたところで、ロビーの入口に、近江の姿をみつめた。

近江は、短気であった。いつも、顔をみたら、スグ寄ってゆかないと、きげんを悪くする。おまけに、立ち話とはいへ、リユウとしたスタイルの若い男と、なにやらやっているのとられたら、嫉妬ぶかい近江に、また、すぐくお目玉を食うだろう。

書類袋の口は、嚴重に封じられ、破るものもないへんようであった。

あわてて、その袋を引ったくり、近江のあとを追う。

ルームへ入り、

「いいモノ買ったわ」

とくいになってテーブルにおいた。たしかに、一万五千元は安い買い物だと思う。キャビネで、ナマの焼付なら一枚千円はとられるだろう。だから彼女は、これを、近江に二万五千元で売りつけるつもりだった。

「なんだ、これは！」

バリバリと袋の封をきった近江は、腹立たしそうに叫んだ。

テーブルにはうりだしたカラーの写真は、平凡な日本女性のセミヌードの絵はがきで、場末のストリップ小屋が、アルバイトに、売店で一組二〇〇円で売っている、しろもの。

あのとき、なかみをたしかめなかったのが手落ちと、さんざん近江に叱られ、おまけに二万五千元で買ってもらったところか、一万五千元は丸損にしまった。

そのサギ男が、図々しくも、また、ロビーで客を、いやカモを物色している。

手にもった封筒まで同じであった。

暴力団が資金かせぎに、こんなインチキをやっていることは知っていた。でも、まさか自分が引っかかるうとは思ってもみなかったことである。しかし、こんな男は、つかまえてサギ呼ばわりしてもムダだろう。素直に返金するわけがない。そんなもの知らねえよ。

オレは、ストリップのプロマイドなら売っている。それにしてもお前さん。そんな発売禁止ものを集めたがるところをみると、ははあプロだな。ハナシがあるなら、サツへでも、どこへでもゆこうじゃねえか、とあべこべにハッパかけられ、オトシマエを巻きあげられ泣き寝入りするしかないだろう。

だがサダ子は、泣き寝入りなんかしなかった。近江とは別れて、これからどこかでひと遊びして帰るばかり、という身軽さも、幸いした。

よし、一丁と、サダ子は手にツバぬって男に近より、

「ハナシがあるの、おいで」

声をかけ、あのとときと同じ見おぼえのある書類袋もつ右の手首を、ひょいとつまんだ。

こちらは、ひょいとつまんだつもりだったが、カラ手のわざでつまんだのだから、痛いなんてものじゃない。その男は、悲鳴をあげた。

だまっつかまわず手首をつまんだまま、ロビーを横切り、フロントやドアボーイが、あつけにとられるのを尻目にタクシーを止め、

「お乗り」

座席に押しこんで、

「運転手さん、新宿の柏木」

行先を告げ、

「さわぐと、痛い目をみるよ」

ドスのきいた小声で、手首をつかむ手に力をいれた。男は痛そうにマユをしかめた。

(8)

クルマの中で、運転手にさとられないように、もうひとひねり手首をねじって、肩から脱臼させてあるから、男は逃げられない。逃げないどころか、ひどい痛みと、右手がブラブラで、男は息をするのが、やっとであった。タクシーを降り、

「脱臼を、元通りにしてほしかったら、おとなしくついで」

アパートに通じる横丁の角で、すごんだら男は観念したらしく、ついてきた。

ドアが開き、ご主人さまが帰られた。

重夫は、それまで、サダ子の下着を一生けんめいに洗った手を休めて、あわてて玄関にとびだした。

いつもより、お帰りが早かったし、めずらしいことに、客らしい男性を連れてくる。

ふと、その客の顔を眺めた重夫は、アッと

思わず声をあげた。

(9)

サダ子のうしろに、小さくなっているのはかつての百科辞典セールス当時の重夫の上司浅井第二班長であった。

重夫が、サダ子につかまった直後、浅井は五十万円を越す会社の売上げ金を使い込んだのがバレて、クビになっていたのを、重夫は知らないのだった。

「深井。きみは、なぜ無断で会社を辞めたんだ。これからというときに」

「なにグダグダ言ってるのさ。おい、サギやろう。あがりな」

サダ子の声が飛んだ。でも浅井は、サダ子がおそろしくて、たまらないのである。ちょっと手首をつままれたら、肩を脱臼させられてしまい、まだブラブラである。おまけに、まったく思いがけない深井が、こんなところに居ようとは！

「肩、そのままにしておくと、ホネが固まっちゃって、もとにもどらなくなるぞ。丹下左膳になりたくなかったら、そこへ横になれ」

サダ子は、もどかしそうに、足もとの、赤いジュータンを示した。

おずおずと、浅井は横になる。もう、百科辞典のセールスマンを二十人も追い廻したころのいきおいは、どこにもなかった。

サダ子は、クツのままの足を持ち上げて、浅井の顔を踏みつけ、じゃけんに、彼の右うでをつかみあげた。

「エイ！」

するどい気合いが飛んだ。

あまりの苦痛に、浅井はうめいた。だが、どうやら肩の脱臼は、もとに戻ったらしい。

「シゲ、イスもってこい」

サダ子は、片足を、まだ浅井の顔にのせたまま命令した。

重夫が、ドーナツ型に、まん中のところをくりぬいた、円形のビニール貼りのイスを運んでくる。

これは、ふだんは、サダ子がトイレの必要を感じ、でもめんどろでも、いちいち行きたくないときに使うもので、いつだったか、その穴の下に顔をさしのべるのは、もちろん重夫の役ときまっていたものである。

だが、サダ子は、そのイスを、浅井の顔面のちょうど真上に据えた。

「オイ、目を開け」

サダ子は、イスの下をのぞきこんで言うの

である。ミニスカートはまくれあがり、白い腿の肉の色が目まぶしい。

「てめえは、サギをやった。おかげでこっちは恥のかきっぱなしさ。いまからそのお礼をしてやるから」

サダ子は、計算の早い、おんなであった。

このおとこが、案外モロク、容易に足の下に屈伏しように思えるのである。

生活に重夫一人では、ものたりない。若い男を複数で、足の下におきたいというのが、彼女のユメであったが、それだけではない。

それらの男を、イヌかブタかウマに仕立て上げ、飼いならして、女性のためのヨーロッパスタイルの徹底したホストクラブをつくろうという下心もあったのである。

第一号は重夫。第二号は、この浅井という男。第三号は？ 四号は？ と、ゆくゆくはサダ子の命令なら、どんな恥ずかしい不潔な苦痛のつきまとうことにも喜々として服従する若い男を、十人はこしらえあげようというのが、彼女の計画であった。

女性のために男性が奉仕するホストクラブは、男性、つまりホストが商品である。

ここでは、ホストは人間であってはいけな

い。シンから女性を崇拜し、心から神として信仰でき、たとえば女性の命令とあれば手や足を斬られても、はなはだしきは毒薬を与えられても、それが崇拜する女神の意にそうものなら、即座にのんで、一命を失っても悔い

ない、といった、人間以下の人間につくり直さねばいけないのだ。

いま、ドーナツ・イスに腰をおろし、浅井の顔面に、恥辱と、めぐみの雨を浴びせようとするのも、この浅井という男が、ホストとしての、適格性をもっているかどうかをためすためであった。

サダ子は、体の緊張を解いた。

浅井は、悪びれるふうもなく、めぐみに立ち向かった。顔面を叩く雨にも、身じろぎもしない。

「ヨシ、合格。おまえも、きょうから、あたしの雇い人だ」

サダ子は、うって変わって、きげんよく、イスにかけたまま下をのぞきこんで言った。この日から、元百科辞典のセールスマンの班長の浅井が、ガセネタ（インチキ写真）の販売から一転し、重夫のときと同じように運命が大きく変わるのである――。

それは、なんとも異様なシヨウであつた。カーペットの上に、若い男が二人、向かい合つて正座している。身には、巾の極端にせまい布を腰にまいただけであつた。

「しっかりやるんだ。勝つたほうが、今夜の私の『当番』になれるんだから」

ウイスキーをゴボゴボと注いだコップを手に、サダ子は、きげんがよい。

ついで彼女がゴング代りの口笛を、ヒュー！と吹くと、プロレスさながらのゲームがはじまる。

二人とも立ち上がったは、いけない。尻を一センチでも浮かしたら失格である。

いわゆる「坐りズモウ」の要領で、二人はガッキと、からだをぶつけ合う。まったくのいのちがけの真剣勝負で、互いの急所をねらうのである。手をだして相手をねらいながら自身のほうは自らの手で、急所を守るのだから油断は禁物である。キックボクシングさながらに、蹴り、なぐり、絞め、叩く。肌には玉の汗が噴き、顔には血がにじむ。

サダ子は、わらいながら、それを眺めているが、死斗をくりひろげる両者は、齒をかみ眼をむき、すさまじい形相であつた。

こうしていま、深井重夫と、かつての上司

浅井は、勝てば女王さまのベッドの下に一晚中、ひそみ、女王さまのくだされるあらゆる、ご命令を一人じめできるという、めぐまれた特権をかけて、争うのである。

場合によつたら、攻撃を受けて悶絶するかもしれないのだが、女王さまが、そのような殺し合いを好まれるのなら、それもまたよいではないか。

二人は、当直を相あらそうということよりも、自分たちの、いのちをかけての争いが、女王さまを楽しませるのなら、それは何よりの光栄と思ひ込んでいた。

ついに、たった一枚、腰にまとった布きれまで、互いの力ではぎとり合い、二人は生まれたままのすがたで、果てしなき、つぶし合いを続けるのであつた。

力は、まったく五分と五分。三十分の血みどろの果たし合いの結果は、どうであつたろうか。

重夫は浅井の、浅井は重夫のからだをきつく握りしめ、死んでも離すまいとして、仲よく悶絶したのであつた。

でもサダ子は、満足そうにウイスキーをあおっていた。

(11)

サダ子にとって、快適な日が続いている。もう近江と大川からは、出資金が手渡され、とりあえず銀行に預金してある。

浅井は、かつての百科辞典セールス当時の部下に手をのばして、ホストとして使えそうな連中を抜く工作に熱中している。三人ばかりは、参加しそうであつた。五人では、いささか物たりないが、でも、はじめは手がたく少人数ではじめるのが、よいかもしれない。

一方、固定客づくりは順調に進んでいる。バー、美容院、洋裁店のママなど、知り合いの有閑女性たちに、こっそりと話をもっていったら、

「おもしろそうね。早くやんなさいよ」

一口、十万円の会員口座は、もう二十口も予約がきている。とりあえずのホストが五人では、とてもこなしきれそうになく、これ以上は、しばらく入会を待ってもらうしかないさうであつた。

たったいまも、右足は重夫に、左足は浅井に預け、ベッドに横たわって、天井をみつめながら、開店の段取りを考える。

うとうと、と、ねむくなる。二人のドレイ

も、いいかげん、口がくたびれているはずであつた。だが、女王さまの權威を保つためにいかなるときにも、命令なしに、与えられた仕事から離れることは許していない。

もしも、命令に反して、役目を放棄したら痛いムチが待っている。それでも聞かなければ、いつか浅井がやられたように、手でも足でも、まるで虫の脚でも折るように、柔道の手で、あっさり脱臼されてしまうのだ。

もちろん、柔道の手はよくマスターしているサダ子だから、心配はいらない。

エイ！ と気合いをかければ脱臼は元通りになる。首をしめられ、失神しても、カッをいれれば、忽ち息を吹きかえす。

しかも、痛苦を伴う筈の、サダ子の柔道の手にかかる、その膝の下にふまえられ、カッを入れられる瞬間、痛みのなかに、身を灼くような恍惚感があるのは、ふしぎなことであつた。

だから、重夫も浅井も、むしろ首を絞められ、いったんは息を止めるものの、カッを入れてもらいたさに、わざと失敗をしでかしてサダ子をおこらせ、その手にかかるうと、機会をねらうのである。

サダ子は、このごろ、ほとんどトイレを使

うことがない。すべては重夫に任せれば、用はたりるからだ。だが、人間の容量には限度がある。これに浅井という処理係を加え、二人をペアにして使うとき、目的は完全に果たせるだろう。

もう重夫は、完全に飼育してある。

あとは、浅井を一刻も早く屈伏させ、そうした味覚に慣れさせ、喜々として、受け入れられるような服従心を、心のなかに植えつけたなら、サダ子の日常は、ますます快適なものになるだろう。

浅井を片桐荘に引きずりこんだ日から、絶対に、この部屋から出ることを許さなかったのも、そのためであつた。

しかし、理由もなしに重夫に命じて、浅井を、イヌのクサリでグルグルに縛り上げさせ自身、ムチを握って、七つ、八つと、力任せに叩いてみたが、浅井は、怒るところか歓喜の表情をみせるのだ。

本来なら、重夫に処理させるべき、ポットのなかのものを、ために与えたら、浅井はためらいもみせず、おぞましいその香りを放つものに向かつて、あたまをさげた。

ダンナの近江といい、セミパトロンの大川新山の二人といい、下僕の重夫といい、あた

らしく加わった浅井といい、五人が五人とも立場こそちがいがながら、サダ子を女神とあがめ、強要すれば、彼女の自然につくる、こよなく醜悪なものを喜んで口にしたり、力一杯ふりおろす容赦ないムチの雨の下に、身を投げたり、これも命令一下、彼女の穿くハイヒールの底皮を喜んで、口で清めるのが、おもしろかった。

ましてや、トイレへの供を命じたり、ペーパーの代用をさせるときの、彼らの表情はみものであつた。

（おとこって、みんなあんなものなんだわ。あたしたちは、女神になって、男という男を足の下に踏みにじってやるんだ。そして、それを事業とするホストクラブは、きっと成功するにちがいない——）

彼女の心のなかに芽生えた事業計画は、着々と具体化していく。

すでに、近江が三百万円、大川、新山が百五十万円ずつ、合計六百万円の資金のメドはついている。

あとは、最小限度、重夫や浅井のような下僕志願者をつかまえば、この事業は、まちがいなくスタートできるだろう——。

いまも、そうだ。

浅井は、左足への手入れという、たいせつな任務を、つい忘れ、しどけない恰好でねそべるサダ子の肢体に、つい注意をうばわれたらしい。いや、ほんとうにうばわれたのやらわざとそんなポーズをとったのやらは、本人以外に知るよしもないが、手を休めたのは事実である。

「浅井！」

たちまち浅井の頭上に怒声が飛び、サダ子が寝たまま、はねあげた足が、したたかに彼の顔面に激突した。ハナ血が飛んでサダ子の足を赤く染めた。

でも、その痛さが、かえって浅井の歓喜を呼んだのである――。

「こんやの当番は浅井だ！ 浅井、よく口をすすいでこい！」

サダ子の華やいだ声に、浅井は躍る足どりで浴室へ消えた。一と晩中の奉仕の用意をするためである。重夫は、役目を外されて、しよげている。

「シゲ。おまえは、このハナ血のあとをキレイにするんだ」

たったいま、浅井が流した血のあとを、清めると、形のよい足をつきつけられる。

でも、それが浅井のものとわかつている以

上、素直に、顔をさしのべるのが、ためらわれた。だが女王さまの命令は絶対であった。重夫は、口のまわりを赤く染めながら、それこそ死ぬ思いで、その血のあとと、取り組まねばならないのであった。

(12)

こよい、片桐荘の二階、サダ子の室は、十人を越す客を集めて、にぎやかであった。

近江の顔もあれば、大井、新山の二老人も神妙な顔を並べている。

浅井がスカウトに成功した、五人の旧部下もかしこまり、佐伯管理人も招かれて、かしこまっていた。

「みんなそろったね。では、カンパイ！」

サダ子が浮々と、音頭をとる。

待望のホストクラブは、ビル地下に権利を買い、室内装飾から、調度まで、インテリアの用意は完了し、あとはオープン、あしたの晩を待つばかりであった。

二百人の見込み客に送った案内カードも、たいへんな反響で、あしたは、テレビ局から取材の申込みも来ている。

乾杯！

と、みんながあげるコップのなかの、黄金

色に澄んだ「美酒」の正体を知っているのはいまのところ、サダ子と浅井と重夫の三人だけ。世界ではじめての「美酒」が、いま乾杯に使われるのだ。招かれた客たちは乾杯してそのサケの味を、どううけとめるだろうか。そう思うと、浅井はドキドキしてしまうのだが、わけを知らない客たちは浮々と、サダ子のナゾを秘めた、微笑の口もとを、みつめている。

せつかくの祝いの席に、重夫がいないのはおかしいことであった。

だが重夫は、ちゃんといるのである。

みんなの目にふれないテーブルの下のくらがりに身をひそめ、サダ子の命ずる奉仕をつづけるのに余念のない重夫には、このはなやいだ乾杯に加われないのは、さびしいことだろうか。いや、彼こそは、今夜いちばんの、幸福者なのかもしれないのだ。

というのは、いまでもこそ苦しいポーズを強いられているが、ひとときの辛抱で、やがてパーティが終われば、ベッドの足もとにうすぐまらせられ、ご主人さまの気がむけば、お許しが出て、その足もとから顔を出せる。そして、ケタ外れの楽しさが、待ち構えているからであった――。



プレイ・レポ

SMフोटオ思いつくまま

二

条

剛

この世に、よくぞ男に生まれたものと感心したくなる、今日この頃ではある。

長かった冬も、桜だよりを耳にしたかと思う間もなく、一気に初夏を思わせる陽光に、街行く女性の服装も日々に華やかになり、我等男性一族の目の保養期到来の感、しきりである。

手元に届いた奇クを、繰返し読むにつけ、見るにつけ、本当の意味で奇クにも春が来て夏を迎えるかのような豪華な盛沢山の内容に感嘆するばかりである。よくぞ奇クの編集部が重い腰を上げたものよ、と喝采の拍手を送りたい衝動を禁じ難いのである。

奇クに寄せられる投稿量が増大しているのかも知れぬが、読む雑誌としての充実とともに、資料としてのフोटオ重視の意向を感じられるにつけ、我々読者の上にも文字通り夏がやって来た思いである。二重の喜びがやって来たのである。

しかしながら、この上は、あくまでも堅実な中に、既成事実の積み重ねの上で、歩一歩前進して頂きたいことを願うや大である。

私のSMP活動も、ここしばらくは公務私務共に多忙をきわめ、ろくにパートナーの面倒も見やれない有様であった。

彼女も職業名を記せば、掲載誌は発禁版に

なってしまうんじゃないかとさえ思える種の堅職で、特に三月、四月は忙しく、ようやくこの六月号を手に入れる一週間程前に一度、SMPの機会を持てたばかりである。

長らく遠ざかっていただけに、その日は激しく燃え上がり、とどまる所を知らぬかのよういきり立ち、かつてない感興を覚えたものであった。

とくに今回は同輩で、かつ友人であるK君同席のSMPであったためか、大変なスリルをはらみ、エキサイトしたものであった。

フोटオも拙劣ではあるが、これはと思うものを撮ることに成功した。

しかし残念なことに、いつもの如くパートナーへの剃毛こそしてあるが、アングルの関係から正面ポーズが多く、そのフォートのほとんどが、プライベートゾーンが描写されていることより、奇クへの提出を見合わせるものも多く、同封したフォートのような平凡なもののみとなったことである。

初めての三人SMPであることより、パートナーの異常とも思える程の高ぶりに、私自身も数年前、初めて彼女に出合った時の、あの身振いしたくなる程の感興を呼び起こされ血潮の躍るのを肌で感じたものである。

同席したK君には、前もって事情こそ話してあったが、この種の世界には未知で、かつ純情壮年であるためか、全く言葉をのみ込んでしまったかのように絶句し、プレイ継続中ずっとほてった赤ら顔に、油汗さえ浮かべ、呆然と立ち竦んでいたのが印象的でさえあった。

プレイ開始前に、パートナーの入浴を済ませ、剃毛も完了したところで、全裸のまま両腕を後手に回させて、二筋の縄掛けを施した後、手錠を掛け、部屋の片すみまで引いて来て、そこで黙って正座させた。

その上から一枚のシーツを被せた所へ、K

君を迎え入れたのであるが、彼にはともかく彼女には内緒にしておいたため、シーツを抜き取った時の彼女の驚きと言ったらなかったようである。

「あっ！」

と言ったきり絶句した。

とっさに踵を返して背を向けたかと思うと自由の効かない後手錠のままの手でお尻を覆い包むようにし、丸く伏せて額を畳にこすりつける。声こそなかったが、心なしか首が、「いやいや」を、訴えるように左右に振られる。小刻みに震える細い背筋を見ていると、無精に哀れを思えてならなかった。

瞬間、——俺は、大変な事をしでかしてるんじゃないか——と後悔の臍を噛んだ。しかし事ここに至っては今更、後ろには引けん。——ええい、ままよ、なるようになるさ——

と、かなり居直った形で、彼女への一言の



説明もないまま、プレイに突入してしまい、ものの五、六分と経たぬ内に彼女の口元から熱い吐息が漏れ聞こえた時、ホッとした安堵にも似た気持ちに駆り立てられたものだった。

例によって私のプレイは美的な物への憧憬から始まっているため、ポーズは常にパートナーの最善の姿が抽出出来るように決め、ライトは二の次になる訳である。

フォートの(2)は、シーツを抜き取った後、後手錠のまま立ち上がらせ、恥ずかしさに身を縮めている彼女を、背面からスナップしたものである。

縄掛けは例によって単純に胸を二廻りさせた後、後手に結んだものである。

手錠を使用したのは、緩い縄掛けに緊縛感を持たせるためにアクセサリ的に用いたものだが、この場合、若干の効果が出ているように思うのだが、如何なものであろうか。

足首を結んでいるのはパートナーの日頃、身に着けている腰紐を利用したものである。両足を拘束することは、SMPに欠かせない要素の一つであると私は思っている。

但し、立ち縛りにおいてのことであるが。フォト(3)は同一場所で坐らせ、顔をこちらに向けさせたものである。

私は、SMPフォトの中でも背面ポーズが、普通の状態なら、一番好きである。

しかも、背面ポーズは私のSMPの導入時には欠かせないものとなっている。

ここで、お互いの気持をうまく通じ合えるように努力し、このポーズでムードを出すことに成功すれば、後は極めてスムーズに進行するはずなのである。

正面ポーズは、女性の肉体的な欠陥を余りカバー出来ない上、露骨過ぎて情緒的なものが吹き飛んでしまう恐れが多分にあり、あまりカメラアイを向けないのだが、今回は珍しく、いつもの倍以上も撮りまくった。

やはり第三者が介在しているのを意識した

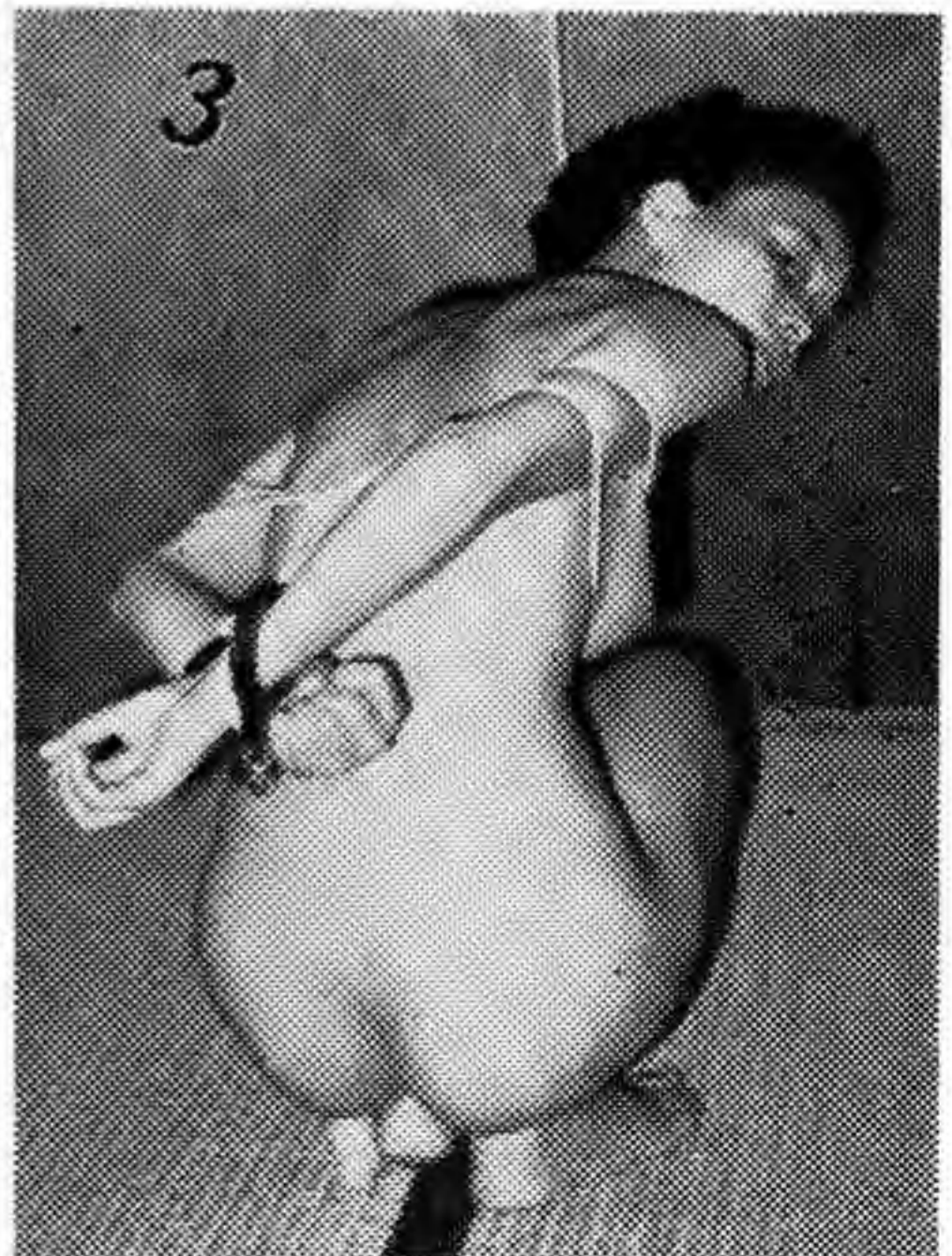
ことと、プライベートゾーンへの好奇心は断ち切り難いものと思われる。

フォト(4)は、しばらく時間が流れ、パートナーも幾分、緊張のほぐれた頃、K君と一杯やろうと云うことになり、予め用意させてあったので部屋を変え、そこまですべてパートナーを引き廻して来て、柱に立ち縛りを試みた。勿論、全裸体のままである。

彼女がK君同席の酒席に来るには、それだけの時間が費やされたが、しかしこの初めての三人プレイ(とは言ってもK君は全然、手出しはせず、「大変だなあ。良いのかな!」等と彼女の身を心配する言葉だけで、ほとんど棒立ちの状態だったので、事実は私の一人相撲ではあったが)に、パートナーの暗黙の承諾が、あったからに他ならない。

ここで面白いことに気付いたのである。

女性というのは、ある程度の時間を費やしヌードであることに慣れが出て来ても、ほんのちょっとしたベールを被せておくことで安息し、それを引きはぐたびに、新たな羞恥心

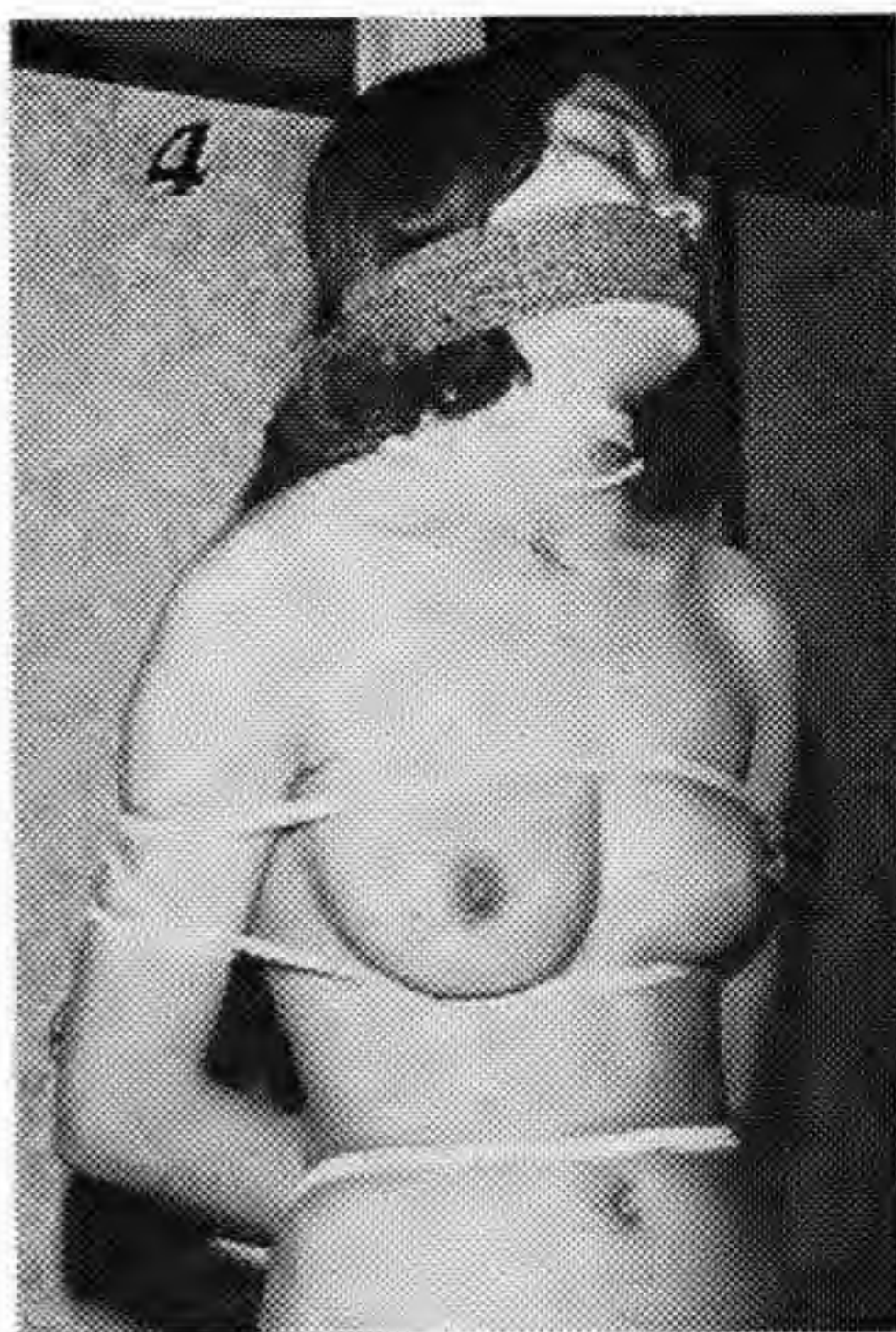


をかき立てられるようである。

そのベールが精神的な支えになるらしく、物理的に見たらなんでもないように思えることでも一喜一憂している様子に、今更ながら女性のデリカシーを思い知らされたようであり、ほとほと感じ入った次第である。

例えば、彼女のプライベートゾーンに、ほんの少し布切れを与えろと言っただけで、紅く身を振り、戯れに「剥ぎ取るよ、その方が嬉しいかい」と尋ねると、それで又、いやいやをする。

そんな単純な言葉の遊びで、こんなにも簡単に反応するものとは正直云って思わなかつ



た。パートナーが第三者の目を意識してのことであろうと思うが……。

フォート(5)は、我々が坐って席に着いているのに、向かい側でパートナーに立っていられては目ざわりで仕方がないので、一旦縄を解き柱の下に正座させ、縛り方を変えてみた。ヘアスタイルもアップから無難作に崩したまま両腕を頭上で交差させて、そのまま柱に縛りつけたものである。

この方が又、パートナーの羞恥心を高め、特に腋毛を処理していなかったために、相当激しい抵抗を受けたものである。

猿轡の方は格別、声を立てる訳でもないの

で必要性は全然ないのであるが、何となくアクセサリ的に試みた。

フォート(4)の猿轡とは違い、布を使用して口にかませてみた所、結構うまくいったと思う。何となく哀しげな目の表情が心を打つので私としては好きなポーズの一つである。

猿轡について言うと、外国雑誌の直輸入版を手に入れた、時々こうしたSMシーンのフォートグラビアが挿入されているのを見ることがあるが概して向こうの方は猿轡の使用が多いようである。手足の緊縛がないものでも口にだけは拘束具を使用している。

これは、女性にとって最大の武器が手足の肉体的な強さではなくて悲鳴や泣き声であることを単的に物語っているようである。従って猿轡の使用法は専ら効果的なものである。皮製の拘束具(球つき)か、又は布である場合は、完全に口を割った型でしめ上げられている。つまり、実用的であるものが多いのである。

その意味では、日本のものは形式的に口を被い隠すスタイルが多く、あれでは緊縛シーンのアクセサリに過ぎないようである。

さてフォート(5)に話を戻すと、ズバリ正面ポーズであります。

剃毛が完全に行なわれていることであり、又、正座型ならば誌上公開も可能ではないかと思ひ同封したのだが、如何なものであろうか。私は白線処理がいやなので、焼き付けの際、便利であるようなアングル又は、ポーズを考えて撮っているのであるが、修正が必要であれば御随意に処理されて結構です。

常にフォートを先ず第一に考える性質なので、迫力が乏しいのが難である。しかし自分で納得出来ない写真は絶対、撮らないのが私の主義で、いわゆるエログロの、街で立ち売りにされるフォートの如き、そのものズバリには手が出ないのである。

正面ポーズでプライベートゾーンの描写があるものは、極力、暗室処理で済ませてしまふのが私流のやり方である。しかし別段これは公開時の事を考えて行なっているのではなくて、あくまで自分のアルバムには美的である物だけをコレクションしたいからに他ならない。



フォート(6)は、酔いが大分身体を温めた頃、目を開けるでもなく、閉じるでもなくしている彼女に気づき、

「ちゃんとこっちを見てろ」

と言うと、顔を背けて目をつむったので、そんな位なら、いっそ目隠ししてやれ——っていう気になり、猿轡をしていた布を解き唾液で濡れたままの状態を目隠しをしたものの一枚である。

その際、大変強い調子で拒否の意を示したので、かなり縫れ合ったため、彼女の胸に巻いた二重の縄と、ヘソ下に巻いた三重の縄が擦れてしまつて、少々縮まらない形になったが、その時は、もう動くのも面倒になってしまひ、そのまま撮ってしまった。何となく垂れ下った縄尻が目ざわりで気になる。

正座が崩れて、膝立ての形になっているの

かった様である。

胸に廻した縄の締付けこそ緩いが、頭上に交差した縄は、かなり堅い締付けであつたためこの時は、すでに指先に血の気がなく、大いに慌てたものである。

△ △ △

M派女性の心理とはおかしなもので、一旦縄で緊縛してしまつと、もう完全に自由を奪われているはずなのに、何かと抵抗しようと試みる。それがプレイのプレイたる所以なのかも知れないが、このちょっとした反抗というものが、また、S派紳士を随分と楽しませて呉れるものの一つである。

厳しく縛られた身をじっと横たえているとか、立ち縛り

は、全くフォートになるまで気がつかなかったことを思い返すに、その頃、もうすでに大変、調子良く酔っていたことが分かる。

新しい試みに胸がはずみ、いつもと勝手が違ってか、今回ののは随分とハプニングが多

のまま、じっと辛抱しているのも良いものだが、反面、僅かばかり身を振ってもどうにもならないと知っていても、楽なポーズに戻そうとする試みが、S派紳士の目を盗んで行なわれる。身をずらし、あるいは顔を背け、足の指をくの字に曲げる。肩の力を抜き、首をうなだれる。

そうした事が積み重なって、S派紳士の官能を巧まずしてくすぐり続けるのである。

△ △ △

古来、女体の美は、他のいかなる造形物にも優れるものとされている。

この女体こそ神秘的なプライベートゾーンを含めて、量感を持って我々に圧し迫ってくる両の乳房、豊かな曲線を描くヒップの丸み柔らかそうな肩。そのどれ一つを取り上げても愛おしく、こんなに可愛らしいものは他に



類を見ないものである。

この女体に数丈の縛しめの縄掛けを行ない飽くなき美への追求と、官能の疼きを高める智的遊戯である。

SMPこそ、この世で最も素晴らしく、最も楽しく我々に微笑を投げかけて呉れる、唯一無二の宝である。

△ △ △

SMPとは、縄や手錠の伴う束縛状態の遊びと、狭義に解する。私には相撲や浣腸や神酒等のプレイが一向に分からない。これでも

この種の世界を実施見聞してすでに十数年にも及ぶのであるが、立場が違うとはいえ、まだまだ分からない事ばかりであるが、お互いの立場を尊重し、仲良く奇クを見つめて行きたいものである。

私自身は、久しく耽美的S派を以て自認している。

すでに数年前に故人となられた、宝塚二三夫氏（足に異常な関心を寄せられていた）の持つムードに、私の耽美も近いものがあると思得ている。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思っておりますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

彼は、大変な少女趣味で、可愛子ちゃんのタイプのプチプチした、娘さんの足の縛りに終始していたと記憶しているが、後手に回した縄も、全くアクセサリ的な要しか価値がなく、専らSM的ムードをこよなく愛していた方でもある。

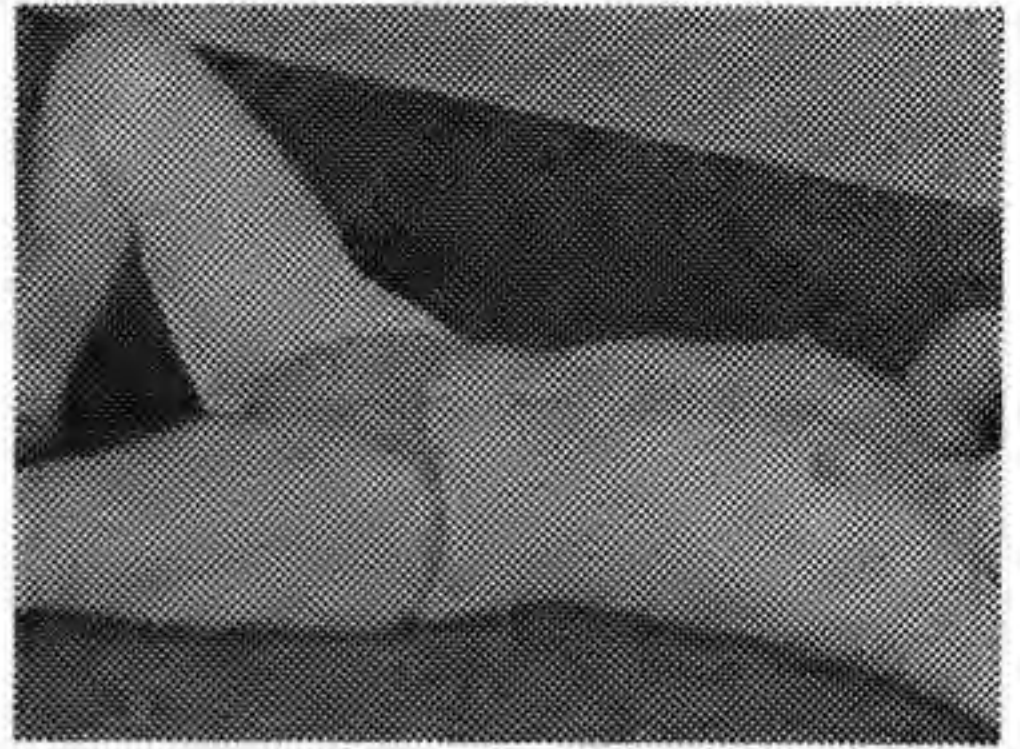
又、文称節が大好きだといっておられたようにも記憶している。

私はそのような彼のプレイ振りが、その頃羨しくてたまらなかった思い出があり、一度で良いから素敵な女性に眼前で、文称節を言わせてみたいと思っていたものである。しかしその夢は意外と早い時期に訪れてくれ、実現してくれた。

女の口から漏れる、言葉にならない言葉はS派紳士を以て任じる私の耳には、快い鈴音にも似た趣さえ与えて呉れる。大切にしたいものである。

こうした幸福を、いつまでも続けたいものであると望む、今日この頃である。

最後に、六月号の読者通信欄で、拙ない私の雑文に、讃辞を頂いた大西弘明氏に感謝致します。貴君の流麗なる筆力を知るにつけ、大いに御健筆を期待するものです。



告白 嗜好

ふんどしに魅せられて

福士道子

める頃、お風呂などで、いつまでも鏡にわが身を写して見とれていたものです。

肌着に気を使い始めたのもその頃でした。

特にパンティはいろいろの形や変わったデザインのもの、そっと買って来て身につけてみました。鏡の前で新しく買い求めたパンティをはいて見る瞬間は、何とも言えない感動に胸が打ち震えました。

メンス用の下着もいろいろ違った形のものを買集めてみました。その中にふんどし式のものがありました。わたくしがふんどしに始めてお目にかかったのはその時でした。それが、こんなにもわたくしをとらえてしまおうとは、思いもかけないことでしたが、そのふんどし式のバンドを身につけて鏡に写して見た時、新鮮な若い肉体の魅力が今までにな

く感じられました。丸裸ではいやな感じがするとところもたくみにカバーされ、しかも思い切り体の線を見せた点が、新しい美しさを現わしたのです。それからというものは、もっぱらそれを用いるようになりました。

当時はまだふんどしというものは、相撲のまわし以外は知りませんでした。そのうちにふだんでも下着として用いられるようになると、そのバンドをいろいろと改造した結果、結局鈴木さんの言われる三角の水泳ふんどしに型が落ちつきました。それから普通のパンティの下に、その水泳ふんどしをいつもしめていました。

布地もいろいろと変え、色もとりどりの数えきれない程の沢山の水泳ふんどしを作り、家に誰もいないときには、その水泳ふんどし

以前、鈴木ゆり子さんの発表された「ふんどし物語」は、大変感激して拝見しました。

ふんどしを愛好するわたくしも、ちょっと恥ずかしいのですが、鈴木さんに負けずに思い切って、それこそ本当にふんどし一つの丸はだかになって、わたくしにとっての、ふんどしにまつわる楽しい思い出——思い出というよりも現在進行中なので、ふんどしで結ばれているわたくしたちの、生活を綴ってみました。

○

誰にでもあることでしょうが、年頃になって胸がふくらみ始め、体の線が丸味を帯び始

一つになって、何も束縛されない自由な体の動きを満喫しました。次第に女らしさを増すにつれて、益々わが身がいとおしく、鏡の前でふんどし一つでありとあらゆるポーズをとって写し、何時間も時のたつのを忘れました前に書いたように、一糸まとわぬ全裸よりもふんどし一つをしめたスタイルの方が、キリッとしたアクセントもついて、美しいとわたくしは思います。

高校を卒業してお勤めをするようになり、お小遣いに余裕ができてくると、更に新しい三角ふんどしを考案しました。スキヤンティやビキニでは、ふんどし独特の感触がほとんどありませんので、形はちょっと似ていてもその魅力は月とすっぽんほどに違うと思います。その頃、新しく作ったものとしては、レースのもの、ニットのもの、サテンを使ったものなどです。

いろいろの形に、いろいろの種類の材料で作ると、無限に近い種々雑多のふんどしが出来、みなそれぞれしめた感じが違うので、その興味は尽きるところがありませんでした。そのほかデニムや帯芯を利用して相撲のまわしも、見よう見真似でしめて見ました。割合にやせているわたくしには、相撲のまわし

は少し荷が重すぎるようですが、でも少し薄い布地でしめた感じは、またそれなりの魅力がありました。

家にいる時は機会さえあればふんどし一つの裸でいますし、夏は外出をする時も、素肌にふんどし一つきりで、何も下着を着ないで肌にかくに洋服だけを着て出かけます。今はやりのシースルーでは中がスケて見えて恥ずかしいので、少し厚手の生地服にしましたが、大変に爽快で、ノーブラジャー、下着なしの時代が来るのも当然だと思います。

そんなある時、六尺ふんどしのことを知りました。それまで、三角の水泳ふんどしや、パタフライや、まわしをいろいろとしめていたわたくしは、早速、新しく知った六尺ふんどしをしめてみよう、と、布地を六尺、つまり一八〇センチ買って来てしめてみました。しかし長さが足りません。いろいろ工夫した末相撲のまわしのやり方を応用してしめてみると、水泳ふんどしよりもよくしまり、きつくもゆるくも深くも浅くも思い通りにしめることができて、一度ですっかり気に入りました。

後で知ったのですが、六尺というのは昔の物差での寸法で、実際は二三〇センチ位にな

るのだそうです。わたくしが間違えて買ってきたのは五尺弱にしかありませんので、わたくしはこの新方式を五尺ふんどしと命名しました。これに鈴木さんのように前だれを縫いつけたのも作りました。

あらためて二三〇センチの本当の六尺ふんどしを買ったのは申すまでもありませんが、巾は五センチから三〇センチ位まで布地もいろいろと変えて研究？を始めました。その頃、すっかりふんどしの魅力にとりつかれたわたくしは、下着にはいつもふんどしをしめていましたが、六尺ふんどしはそのわたくしを、さらに夢中にさせました。ふんどしの魅力は、ぐいっと締め込む味につきますが、その感じが六尺ふんどしが最高に思えたからです。そして、それに工夫して、八尺のものも試してみましたが、独特のしめ味のふんどしとなりました。

ようやく丸味を増してきたわが身を、例によって鏡に写しながら、六尺ふんどしをしめて見ると、巾のせまい薄手の布では細くまるまって、ほかのふんどしでは得られない強烈な緊迫感、痛さの中にしびれるような感覚があり、半ば気も遠くなるような夢心地になれるのです。われを忘れた一時の時に解いてみ

ると、ふんどしはしっとりと汗を含み、桃色に上気した肌には、くっきりと赤くふんどしのあとが残っていました。それは痛々しくもまたいとほしい美しさでした。

巾の広い太目のふんどしをしめた時はまた感じが違います。力強い圧迫感は身も心もひきしまるような感じです。

このようにして、わたくしはふんどしをしまえていないと何となく頼りなくて落ちつかずいつの間にか、ふんどしは片時も手ばなせなくなっていました。水泳にいくときも、水着の下には普通の水着用のショーツの代わりにいつもふんどしをしまっていました。

ボーイフレンドであった彼と一緒に、海へ泳ぎにいった時のことです。ビキニの水着の下にわたくしはいつものように水泳ふんどしをしまっていました。いつも習慣になっていたもので、そのことは、ことさら意識していませんでした。彼がふとしたはずみに、わたくしの腰に手がふれたとき、訊きました。

「下に何かはいてるの？」

わたくしは、水着の下にはくショーツの話を、そのときにしました。彼は、

「男と同じだね」

といって、男が水泳パンツの下にはくサポ

ーターのことを話してくれました。なおも彼が手で腰をなでまわすようにするので、人の手前もあり、彼の手をはらいのけましたけれど、わたくしは彼が好きでしたので、本当は彼になれば、下にしまっているふんどしを見せてもよい、いや、むしろ見てもらいたい気持ちが強かったのです。

自分でいうのも変ですが、わたくしはすこしも美人ではありませんが、お尻の形はまんざらでもないと思っていますし、友人からもお尻がカッコいいとよく言われますので、ちょっと自信があったのです。

しばらくたって彼をさそってボートに乗りました。人が泳いでいない所までこいでくると、彼にささやきました。

「水着の下が見たい？」

「もちろん」

わたくしは水の中に身を躍らせました。彼も続いて飛びこみます。わたくしはちょっと逃げかけましたが、たちまちつかまってしまいました。すかさず水中にもぐった彼が、私のキリリと小さくしめこんだ三角の水泳ふんどしを見つけたのでしょう。水面に飛び上がらんばかりにして、

「ワーッ！ カッコいいっ!!」

と大声で叫びました。わたくしは恥ずかしいのと嬉しいのとで複雑な気持ちでした。

「そのまま泳げよ」

という彼はわたくしのパンツをとりあげてしまったのです。疲れるとその姿のままのわたくしをボートに引っぱり上げてしまいました。恥ずかしさと寒さでぶるぶるふるえているわたくしに、彼はやさしくキスをしてくれました。

家に帰って風呂に入ったあと、例によって鏡に写してみると、白くやけ残ったビキニの水着のあとの中に、わずかにふんどしのあとが焼けているではありませんか。しまったと思いました。しかし、これもあの時の愛のしるしかと思うといとおしく、長い時間をかけてためつすがめつ、あらゆる方向からその辺をうつしてみました。

そのことがあってから、彼の気持はぐっとわたくしに向いてきました。それで自分だけでは物足りなくなつて、彼にもふんどしをしませたくなくなってきました。また彼をさそって海へ行きました。もちろんビキニの下に、その時は六尺ふんどしをしめて行きました。彼用には水泳ふんどしと六尺ふんどしの両方を念入りに作って持って行きました。巾は

男性用にはちょっとせまいかなと思いましたが、思い切って二十センチにしました。ボートを借りて人のいない岬へ漕ぎ出し、岩陰にボートをつけると、岩へ上がって彼にふんどしをプレゼントしました。

彼はふんどしについては、わたくしが始めに持っていた知識、つまり相撲のまわし程度しか持っていませんでした。水着の上からわたくしは自分の体にしめて見せて、ふんどしのしめ方を彼に教えた後に、それを彼に渡しました。彼がしめる間後を向いていました。初めてのことで彼はつい分長い時間をかけていろいろやっていました。実際は短い時間だったかも知れませんが、わたくしにはずい分長く感じました。

彼の声でふり向いた時、わたくしは感激で胸が震えました。赤銅色に陽やけたたくましい体に、黒い色の六尺ふんどしがキリッとしめられ、快いくびれを見せています。いかにも男らしいリリしい姿です。わたくしがきつくしめるようにと言ったのを、彼はその通り実行したでしょう。「とてもかっこいいわ。ふるいつきたいくらい。どおお？ しめた感じは？」

「なかなかいかすよ。君が好きかわけがわか

る気がする。君もそれを脱げよ、下にしめてるんだろ？」

「うん」

とわたくしもビキニのパンツを脱ぐと彼の胸に飛びこみました。

その後、彼との間の話は急に進み間もなく結婚しました。晴れの結婚式には、二人で相談して、ウェディング・ドレスの下に白のサテンのふんどしをしめて行きました。彼も礼服の下に同じものをしめて来ました。新婚旅行には何色か違ったものをもって行き、その日その日で、色を変えてしめました。結婚前はふんどしについては先輩であったわたくしでしたが、その頃は、わたくしの知識は全部彼に伝授したので、彼はわたくしに優るとも劣らぬふんどし愛好家になっていました。

新家庭を持ち、誰も邪魔者がいなくなったわたくし達は、夏になると二人ともふんどし一本になって大いに肌を焼きました。真っ黒く健康的に陽焼けした体に、くっきりと白いふんどしのあとが見事です。泳ぎに行く時は二人お揃いのふんどしをしめて、その上に、ごく短いスカートを付けて行くのです。誰もいない所へ来ると、そのスカートをはずしてふんどし一本きりの姿になるわけです。

ふんどしの形だけを残してこんがり焼けたわたくし達は、全裸の時もちょっと見ると、白いふんどしをしめているようにさえ見えます。そして茶色のふんどしをしめると、まるで裸のように見えます。

水泳ばかりでなく、ふんどし一本の裸体での乗馬や、サイクリングなど出来たら、さぞ素晴らしいだろうと考えて、いつか実行して見たいと機会をねらっています。

家に彼と二人でいる時は、室内を暖かくして、ほとんどふんどし一本の裸体でいます。時にはその上に膝上約三十センチというよりも、長さ股下ぎりぎり位のシャツかセーターの類や、はんでんかちゃんちゃんこを着物などを着たり、エプロンだけを着けたりすることもあります。つまり、わたくしたちにとつて衣裳は、ふんどしをしめた裸体の美しさを強調するため以外の何物でもないのです。

彼が勤めから帰宅する頃になると、ふんどし一本きりの素肌に特製のドレスを着ます。両脇をスナップで止めてあったり、肩をリボンで結んであったりして、ちょっとさわればすぐ脱げるようにしたものです。わたくしが始めてそれを作った時、彼の喜びは大変なものでした。わたくしは次々といろいろの形を

工夫しています。冬でももちろん実行しています。彼がそれを望んでいるからです。下にしめるふんどしのデザインに苦心するのは、言うまでもありません。

ふんどしの魅力を発見した彼は、その後次第に進歩して行きました。あの日、例によって互いにふんどし一本きりでプレーをしているうちに、ロープでしばると言い出し、いつものまに用意したのか、細いロープでたちまちわたくしの体をしばり上げてしまいました。肉体にぐいぐい喰い込むロープの感覚は、初めてしめたふんどしと似たような快さを覚えましたが、時間が経つに従い、ふんどしとは比べものないような強烈な感覚に変わり、思わず声を上げて身をよじらせました。

でも、嬉しそうに、しかし深い愛情のこもった彼の眼を見た時、ロープの痛さの中に、それまでには感じたことのない新しい感覚が湧いてきて全身がしびれました。

彼はその後いろいろのしばり方を考えてはわたくしをしばり上げました。かくて、わたくしはふんどしのほかに、ロープの欲びを彼によって教えられたのです。そしてある時、彼は

「今日はおれがしめてやる」

と言って、六尺ふんどしの細目のものを手にすると、細くまるめて一まきしめたのち、折りかえす時にぐっとひき上げました。ほそくねじれたふんどしにわたくしが痛がるのを見むきもせず、十分に引き上げておいてから布を巾一ぱいにひろげて折りかえして前袋をつくり、後に、通してしめ上げてしまいました。

これはしめ上がった外観は普通の六尺ふんどしとほとんど変わっていませんが締め具合は格段の違いで、わたくしは悲鳴をあげてしまいました。そのほか彼の発明？ は数えきれないほどです。

ふんどしに前垂れをつけるのを工夫したのはわたくしでしたが、後垂れを考え出したのは彼でした。短い布を前垂れと同じように後に下げるのです。ちよつとめくり上げてみると、キュッと締ったタテミツがあらわれるところが、とてもチャームینگなのだそうです。し、ロープのふんどしの前後に、前垂れと後垂れをつけさせたのも彼です。

ある時、細いロープでふんどし式にしばり上げると、左手首を左足首に、右手首を右足首にそれぞれ結びつけてしばり上げ、頭を下に、足を上に仰向けの形に、机の足にしばり

つけてしまいました。わたくしは恥かしさが一杯で胸は早鐘をつくように高鳴り、首を横に向け、眼を閉じていましたが、ふと眼をあけてみると、上気した彼の顔がありました。彼も、いつものようにふんどし一本きりで、

「ごめんね」

と、ささやきます。

「君が好きで好きでたまらないんだ」

それを聞くと、わたしの心は静まってきました。彼のためなら、どんなにされてもよいと思いました。恥かしさの中に嬉しさが全身にみなぎって来ました。

「好きなようにやって」

「ありがとう。痛かったらすぐやめるから」
彼は毛抜きを持ち出してきました。わたくしは、すぐに彼の希望がわかり、覚悟したのですが、やはりチクリとする度に思わず体をピクンとふるわせ、吐息と共に声が出ます。彼は心配して、

「大丈夫？」

「うん、なんともないわ。声を出してもかまわずやって」
わたくしは息を詰め、声を出すまいと歯を喰いしばります。チクリとする痛さが何十回

か続いた頃、

「今日は、これだけにしよう。痛かったらうよく頑張ったね」

彼はロープを解くと、やさしくいたわってくれましたが、そうされるとわたくしは、もっと続けてほしい気持ちになるのです。

ロープの味を覚えてくれた彼は、しばらく上げた上でのバイブレーター責め、ローソク責め、シャワー責めといろいろなプレーを次々とあみ出してくれましたし、ロープのふんどしや、鎖のふんどしも、彼が作ってくれました。

ふとした機会に注射針の痛みに、痛さ以上のものを感じました。今それを実行中です。

ロープで嚴重にしばらく上げ、ふんどしをするのは言うまでもありませんが、その上で注射針でチクチク刺すのです。本当はいれずみをやってみたいのですが、体に色がつくのがいやなので針で刺すだけにしているのです。

時代小説を読むと白粉彫という色のつかないいれずみがあるそうで、風呂に入った時だけ絵が浮かび出るといのですが、そんないれずみなら彫ってみたいのですが、その方法を知りませんので針だけです。

彼は、ピクピクと全身を震わせ、手を堅く握って、針の痛さに耐えているわたくしを見

ると、たまらなく可愛いのだそうです。わたくしはふんどしをしていればどんなことにも耐えられる気がします。

そうしたプレーをする時、彼ももちろんふんどし一本きりですが、わたくしが息を切らせると、彼も一緒に息を切らせて感激しているようです。

今や彼は、完全にわたくしをリードする立場になってしまいました。今後の彼が何を考えてくれるのか、毎日が楽しい幸福な今日この頃です。

先日、久しぶりにミュージックホールに岡ハツエを見に行きました。彼女のふんどし型のコスチュームは、わたくしの心を早くからとらえていたものなのです。カムバックした彼女のコスチュームは、予想にたがわぬ見事なふんどしスタイルで、彼女の魅力は踊りのうまさといひまって、他を完全に圧倒していました。

水の精では金色に輝き、フィナーレではラベンダー色にきらめき、いずれも前後ともにY字型に細くピチツとしめこんだふんどしはスレンダーにひきしまった彼女の小柄な肉体によくマッチし、精力的な激しい動きによって、ふんどしの魅力をいかに発揮してく

れましたし、牝豹となつては毛皮のふんどしに変わり、大胆奔放な踊りは、彼女のエキゾチックなマスクと共に野性美を満喫させてくれました。

六尺ふんどしの前袋の形のことですが、映画「憂国」の三島由紀夫の六尺ふんどしの前袋が長くてだらしない、という記事を読んだことがあります。前袋が臍がかくれる程長いのはたしかにしまりがなく、だらしない見えます。

しかし、三島氏のふんどし姿の別の雑誌の写真では、キュッと小さな三角形にきっちりまとめたのもありました。

わたくしの経験からすれば、女性ならば前袋は、どんなにでも短く小さくすることができますが、男性にはおのずから限度があります。巾は二十センチが最小限でしょう。

前袋の長さをとやかく言うよりも、しめ方がゆるいのが一番みっともないと思います。後姿はT字型だと、男女ともにどんなにきつくしめても、しまりが悪いように見えてしまいます。後はY字型になるのがわたくしは好きです。



盲

(め し い)

夫忠草千

「ばかにおそいな。清次のやつ、何をもたもたしていやがるんだ」
盲の気短かさで、権造はプリプリ毒づきな

がら、手にした猪口を、火鉢の向い側に居るお妙の方に突き出した。

お妙は黙ったまま銚子を傾けて猪口を満たすと、それが合図の銚子の口を猪口の縁にチンと鳴らす。それに口を寄せると、権造はたんだ咽喉の肉を波打たすようにして、ひと

息に干した。
「たかが青くさい小娘ひとりになにをもたもた。ドジな奴め」

カタリと猪口を猫板に置くと、ぽってりたるんだ腐肉のような唇を鳴らして、白濁した眼をギョロリと剥いた。たかが青くさい小娘と言っていないながら、権造自身が、その小娘が連れられて来るのを待ちかねていることは、その大あぐらの膝を絶えずゆさぶっているところや、前に居るお妙に何かと当り散らしているところにははっきりあらわれている。

しばらくの間、酒光りする赭ら顔をなでまわしたり、鼻くそをほじくったり、果てはふところ手を禪のあたりにまでもぐりこませてモソモソやったりしていたが、たまりかねたように、猪口を引っさらうようにして突き出しかけたが、それも途中で止めて、割れんばかりに猫板に伏せた。

もうかなり酒が入っている。酔っぱらうというには程遠いのだが、これ以上過ぐすと体が言うことをきかなくなる恐れがある。いくら待ちかねたとはいえ、そこらあたりの限度は権造も心得ている。この大事な時に唯一の頼りの息子に寝込まれでもしたら、それこそ見えぬ眼を掻きくじっても追いつくことじゃ

ない。

「やけに待たしゃあがる。もう、一刻にもなるんじゃないか」

「いえ、まだ半刻ほどでしょう」

物音もたてず坐ったお妙の答が、ひっそりと返ってくる。

「清治の奴、捨て児の時からこの道に仕込んでやったというのに、二十面さげてまだ気の利いた用ひとつ、なしくさらん」

こんな時は放っておくに限る、と見てか、お妙は黙っている。

「お慶はどうしている」

「先刻、お稽古とかで出て行きました」

「ふん、それなら都合がいい。塗籠ぬりこめの用意はできているな」

「はい」

「久しぶりだぞ」

不意に権造の頬が卑しく笑み崩れた。一度崩れた顔は自己増殖するかのように次第に拡がって、果てはクククと声にまで出る笑いになった。

「どうでい、お前も塗籠といえ、思い出が深かろうが」

クククとのどをふるわせながら、白い眼を斜にしてお妙の方にあごをしゃくる。

お妙は、シンと頬を凍らせて、白濁した眼まで血走らさんばかりに悦に入っている権造の様子を、眺めている。その屈辱の塊を呑み込んだような表情が見えないのは盲人の得だが、権造のことだから、たとえお妙の表情が読めたにしても、蛙の面に小便だったかもしれない。

「あの頃は、わしも眼が達者だったから、今頃みたいに物音頼り、泣き声頼りというもんじゃなかった。フフ、今でもはっきり覚えてるぞ。まだほんのおぼこだったお前が縛り上げられて、塗籠に放り込まれているところへ、このわしが入って行った時のお前の顔を。こう、つやつやと結い上げた髪が乱れかかって、赤い手絡が白いうなじに揺れておった。その赤い色と蒼白い顔に眼尻を吊り上げてわしを睨みおったあの顔が、今でも眼の前にちらつくわい」

お妙の頬から更に血が引いて、膝の上に銚子を持った手がふえている。

「だが、それはほんの序の口。質屋に持って行ったところで一文にもなりそうにない、つぎはぎだらけの単衣ひとえを剥いでいって、後は洗いざらしの赤い湯文字一枚という段になったところが、本当の金目だったな。縄に上下を

くびられて、こう、プックリ盛り上がった手入らずの乳の白さ……梅の花のような乳首の色……赤い湯文字もはち切れそうな腰のまるみ……赤い陰からこぼれる脛の白さ……フフ、眼の法楽だったな、あれは。今のお妙もそうだが、女中奉公のなんのといっても、あの法楽がなかったら、貸金の利息にもならんて」

首を斜めに据え、見えない眼をチロリチロリとお妙の方に動かしながら、いったん呼び起こされた権造の思い出は、とどまるところを知らない。昔味わった楽しみを、これから味わおうとしている楽しみの薬味に加えて、一文いらすの酒の肴にしているのだ。

「おい、聞いているのか、お妙」

お妙はシンと頬の色を沈ませて黙したままである。

「酒がさめた。一杯つげ」

権造は反応のないお妙に興ざめた面持ちになつて、一度は伏せた猪口を手を取った。グビリとひとすすり咽喉をうるおしておいて、残りの盃を大事そうに下に置くと、



「しかしまあ、お前も冷たい女になったもんなさなあ」

再び、お妙をいびり始める。

「わしの手で女にされ、その上に女の悦びの初手から奥儀まで、このわしの手ほどきで教えられていながら、何かといやすぐだんまりと来やがる。わしが盲だとなめやがって。清次にしてもそうだ。子飼いといつても、ちつとも当てにやならねえ。これでシャッキリ者のお慶が居ないでみる、この店は明日にでもブツ潰れてしまう」

債務者からは鬼のように怖れられている高利貸の権造も、死んだ女房の残した一粒種のお慶の事ともなると、こんな際でも手前味噌になってしまふ。しかしこれは親の欲目とばかりは言い切れないので、事実お慶がはたちの今日まで、父親代りに男でもむずかしい高利貸しの商売を何とかやって来ている。十人並みの器量でいながら婚期を過ぎた今日までまだ縁遠いのは、あながち父親の強欲さばかりによるのではなく、鬼小町とまで陰で噂されているその冷酷なまでの気性の強さのせいでもあった。

「お妙」

突然、馬鹿でかい声で、権造がどなった。

「は、はい」

あごを襟にうずめて、ひとり物思いにふけていたお妙は衝かれたように蒼い頬をあげた。

「お前の親父が死んだからといって、お前の女中奉公の期限が切れたわけじゃねえ。わかっているな」

「はい、よくわかっています」

白い眼を宙に放って怒鳴り散らす権造を冷たく見ながら、お妙は言う。

「なんだ、その言いようは。昔は侍の娘だったか知らんが、今はこの権造の家の下女なんだぞ。おい。それも借金のカタに、年期の証文まで、入っている身だということを忘れるな。それにだ」

権造は猫板の上をまさぐって猪口を指にはさむと、冷えた酒を咽喉に放り込んだ。

「わしの躰から離れられん身だということを忘れるなよ。え？ あの時だ、素っ裸に剥き上げられた躰を布団の上に大の字なりに縛りつけられて、ヒイヒイ泣きながら女にされたんだ。いいか。侍の家じゃ、娘はどんな時でも、眠っている時でも膝と膝を離すようなふしだらな恰好はしてはならんときつく躰けられるというじゃねえか。その侍の娘が生ま

れたまんまの真っ裸に剥かれた上に大の字なりに縛られて、このわしに肌のすみからすみまで罵られたんだ。侍の娘もなにもあったものでねえ。え？ それでも始めは齒を喰いしばったりなんかして我慢しておったようだがしまいにヒイヒイ声をあげて泣き出しよったわ。生娘の男知らずがな、はずかしげもなく体をこうくねりおってよ。躰の敵しい侍の娘にしちゃ、女の悦びを知るには早過ぎるようだったぜ」

権造は猪口を突き出した。しかし、ちょっとの間だったけれど、呆然と我を失ったように宙を見つめていた風のお妙は、それに気付かなかった。

「早く注がんか」

盃を突きつけられて、お妙はあわてて銚子を取り上げた。権造は新しい獲物を待つ間の無駄話から、つい脱線して高ぶってしまい、酒の自制も忘れたようだ。

「それからのお前はだ、わしに責められんと悦べん女になったんだ。素っ裸の身を縛り上げられて布団の上に転がされ、さんざんに舐めまわされ、いじくりまわされないと、満足せん女になったんだ。自分の身に聞いてみい。毎晩毎晩、あたりもはばからずいい声を

あげて泣き叫んだ覚えがあるだろうが。わしがめくらになってからは……」

だし抜けに奥の方でドタンと何かが板戸に当たる音がし、続いて荒い、足が廊下を踏みしだく音がした。

「何だ、あれは」

権造は首をかしげるようにして耳を音の方に向けた。

「清次さんが帰ったようです。裏口から入るように言っておきましたから、きっとそうでしょう」

「やっと来よったか。うむ、そうかい。とうとう来たか」

現金に頬の筋肉をゆるめて、権造はあらためて、ゆったり坐り直した。さすがに盃は伏せた。

「ちくしょうめ。この眼さえ見えれば、着物を剥ぐ楽しみを清次のような奴にまかしてはおかんのだが……」

坐り直しはしたものの、しきりに奥の方が気になるらしく、首をさしのべるようにして物音に耳をすましている。

そのうち我慢しきれなくなったのか、膝を立てようとする。

「清次の奴、ひとりで先に楽しんでいるんじ

やねえか？」

物の見えぬ頭を振りたてて、じれったそうに毒づく。

「およしなさいまし」

鋭い声でお妙がたしなめた。それまで沈黙を守っていたお妙の胸の内が噴出したような感じだった。

それに対して権造が何か言おうと口を開く間もなく、廊下を足早やに来る足音が聞こえ、障子の外にヒタと止まった。

「清次か」

「はい。ただいま、もどりました」

障子がサラリと開いた。いかつい、醜男と言ってもいい程の若い男が前だれの膝を四角に折っている。

「なにをグズグズしていたんだ」

「申しわけもございません。娘が、なかなか言うことを聞かず……」

「もういい。それで、用意はできているんだろうな？」

「はい、おっしゃられた通りに……」

「湯文字だけは残しておいたろうな？」

「はい」

「どんな色の湯文字だ」

「赤でございました」

「ふむ……」

ひとりうなずいて、権造はあぶらの浮いたあごをなでる。

「鈴はつけたのだな？」

「はい、それはもう……」

「どっちだ？」

「左の足首でございます」

「よし。いくぞ」

腰を浮かしかけたのに、

「あッ、あのう、ひとつだけ申し上げておきたいことが……」

清次に言われて権造は中腰のまま、

「なんだ、早く言え」

不機嫌に、せかした。

「あの、実は思っていましたたより強情な娘でして、これこの通り縛り上げるまでに方々を引っ掻かれたり噛みつかれたり、さんざんでございました。眼の不自由な旦那様に、もしもの事があってはと、猿轡を噛ましておきましたので、おはずしになりませんよう」

「しかたもない。しかし、どんなジャジャ馬でも無理やり女にされてしまえばおとなしくなるものだ。なあ、お妙」

喜色を満面に取りもどしながら、権造は立ち上がる。寄りそうようにその手を取って案

内に立ったのは、お妙ではなくて清次であつた。

三

塗籠の重い戸が背後にピタリと閉じられた瞬間から、権造の眼の前に新しい別世界が展開しはじめる。その世界は、お妙を前に置いて過ぎ去った凌辱の想い出を反すうしていた時の世界とも違うし、昨夜床の中にひとり眼ざめて、今日のこの時のことをさまざまに想い描いていた時の世界とも違う。過去の想い出は事実確実に存在した事として、どう変えようもなく手垢がにじみ過ぎている。未来の夢想は新鮮ではあったが、確実さに欠けている。それは手を伸ばして触れようとすればするほど遠のいてゆく。

盲目の権造にとって、現実には常に夢想の領域に隣り合っているのだが、それでもなおそれは単なる夢想とは違った世界であった。何よりもその手で確実に掴むことができる世界である。触覚は夢想を確固としたものにしてくれる。暗黒の視野の上に明確に焦点を結ばせてくれる。この世界にあっては、権造の指は眼になる。そして耳もまた。この部屋の中

に入った瞬間から権造は、いわば複眼を持った動物に変貌するのだ。

権造は失明する前に一度、今日の犠牲であるお絹に会ったことがあった。師走の寒空に継ぎの当たった洗い晒しの単衣物一枚の姿で肩と膝を固く縮こめて、権造の前に坐っていた。うなだれた鬚は油気もなく赤茶けてそそけ立ち、膝に固めている両の手は赤黒くひび割れていたけれど、権造の長い女蕩しの経験は、お絹のかたむいた髭の陰からうなじへ背中へと消えてゆく素肌の統のようになめらかな白さと、着物が薄いためにかえってあらわな胸や腰まわりの肉の厚さなどを見逃がさなかったのだ。それに頬を霜焼けに紫色にしているが、その器量は十人並み以上であった。

権造は、お絹がよれよれの袂を顔に押し当てながら語るお定まりの貧窮談も上の空に、何の手入れもされない汚れた外貌の下から、玉のような輝きが剥き出されてゆく時の、めくるめく様な欲情の高ぶりを夢想していた。美しい女を美しく着飾ったなりに転ばすのも悪くはない。しかし、みずみずしい果物にサクリと歯を当てる様な感覚の悦びは、こんなお絹のような隠れた玉からしか得られるものではない。五両という大枚の金を、ほとんど

返す当てもないお絹に貸し与える決心をつけたのは、一にも二にも権造が、後にも先にもただ一度だけ眼にしたお絹のこのような印象に引かされたがためであった。

あの時からまだ半年しかたっていない。そしてその短い月日の間に、権造は、かつて夢にも考えた事のない失明という災厄に見舞われたのである。

今思い返して見ると、お絹に会った当時にもう失明の前兆はあった。そのちょっと前から権造は眼の前を無数のかげろうが飛び交っているような状態におちいつていた。それが何か見定めようと瞳を凝らすと、かげろうは視野の片隅に退いてしまう。かげろうは、やがて蚊に変わった。四十六時中、蚊の群れは権造の視界にむらがり、うるさい羽音をたて続けるようになった。

その頃、権造は、その捕えようとして捕えようのない蚊の群れを追って、ちょうど猫が前肢で蠅を取ろうとする時のような素振りをよくした。両眼を一点に据え、右手を浮かし気味にしていたかと思うと、つと、その手で眼の前を払う。算盤を弾いていたかと思うと狂ったように両手で眼の前、一尺あまりの空を掻きむしる。

「見ろよ、鬼の権造も、とうとう猫に取り憑かれちまいやがった」

権造が、いつも背にしている簞笥の上の、すす光りする大きな今戸焼の招き猫と思いあわせて、街の噂が高くなってくるころには、蚊の群れは蠅の群れに変わり、権造はすでに半ば失明していた。

霊験あらたかなお水も賽銭おしさに受けつけず、名医の治療も薬代をおしんで断わり続けていた権造も、事ここにいたって始めてあわてた。しかし、すでにおそかった。

「白そこいすな。もはや手だてはありません」

医者は権造の眼をひと眼、見るなり、くわしい診察もせずと言った。権造の背中には、その主人の白濁した眼とは対照的に、大きな眼をまるまると見開いた今戸焼の招き猫が、相変わらず右前肢を上げていた。

塗籠には窓はなく、燭もとぼしてない筈であった。しかし、盲の権造には、すべてが、こうこうたる灯明の元にでもあるように、明らかに見て取れる。

平素は証文の類を収めた小簞笥などを置いてあるこの塗籠も、今はこの用のために道具類は一切、外に持ち出してある筈だ。そして

その何もない部屋の中に、あの日、垣間見たうなじから背中に消えてゆく純の肌が、すっかりあらわにされてうずくまっている筈だ。両腕は背中にくくし上げられ、単衣の胸をむっちりと盛り上げていた乳房は縄にくびられて小さな乳首を恐怖にしらせているに違いない。そして、あの肉置き豊かな腰は、清次の話では赤い湯文字に包まれている筈だ。乱れたその裾から、ほのめくふくらはぎの白さが眼に見える。

それは、かつて確かな視力のもとで見たお妙の無惨にも艶めかしい姿の首だけをお絹のそれにすげ変えた像であったかもしれない。しかし、それがお妙ではなくてお絹であることは、今すぐに、複眼と化した十本の指が確かめることであろう。

「お絹、どれ、どこに居る」

権造は両腕を前に突き出して闇をまさぐり首をかしげて闇の音に耳をすましながら、そろりと足を踏み出した。

闇の奥のどこかで、チロリとかすかに鈴が鳴った。

四

鈴の音は、暗闇の中をまさぐり進む権造にとって、悦楽の世界へといざなう灯台であった。その優しい音色は白熱の輝きとなって、快楽の世界を照らし出した。

音につれて、そこに居る女のイメージが塗籠に充満し、権造はそれにくるまれる。それは外の世界では絶対に味わうことのない充実した安らぎを与える世界であった。外の世界では大なり小なり感じねばならない不安感はこちらにはない。権造はすべての完全な支配者となつて、存分に官能の楽しみに身をゆだねることができるようだ。

権造は光を求めて闇の中を泳ぐようにまさぐり求める。十の眼は火のように燃え、かすかな衣ずれ、畳をこする物音にも針のような神経をとがらして、ひたすら求めるものをまさぐり蠢く。

鈴の金の色とそれに続く朱色の組紐が、真っ白な足首につながり、更に柔らかなふくらはぎのまるやかな肉の盛り上がりへと続く。膝をくの字なりに曲げて崩し、素足についた十の小さな足指を海老のように屈曲させて、その膝と十の指で畳の上をじりじりと後ずさってゆく姿。緋色の湯文字がにじるたびに乱れに乱れて、今は膝小僧まであらわになった

か、それとも、はや太股のあたりまでめくれあがって、ゆるみ波立った裾のあたりが足首にまつわりついて、みだら絵を描き出しているか。

「お絹、お絹、どこだい。これ、鈴を鳴らして、わしを呼ばんか」

楽しさに、権造は子供のよう甘い声を出す。久しく忘れていた、あの鬼ごっここの楽しさ。追うスリルをないまぜにして、権造をたわむれ心に駆りたてる。

畳の上を引きずられる音を鈴が発した。

「フフ、そこに居るのかい。どれ、すぐ行くぞ、フフフ」

どてらの裾を大きく割って、権造は四つんばいに這う。手はもとより、耳も、あごさえも触角にするかのように押し立て、前へ突き出し、しまりのない禪の端を畳に引きながら権造は、いざる。

続けさまに鈴が権造を招いた。真っ白な足の裏が、闇の中に奇妙な生きもののようひらめくのが権造には見えた。十本の指を小さく折りたたみ、土ふまずに刻まれた皺のひとつひとつとすじが、深く切れ込むまでに足の裏をゆがめて、ほんの、そばまで近づいた触角をかるうじてかわす姿を、権造の見えぬまな

こが、たしかに見た。

そして次の瞬間、重い量塊が壁に突き当たる音。

「そら、もう後ろへは逃げられないだろう。

今度は右へ逃げるかい、それとも左か」

鈴が激しく悲鳴を上げる。

追いつめられ、後ろ手の背中を壁に密着させ、腰を、赤い腰巻に包まれたむっちりした腰を精いっぱい引き退り、膝を小さく縮こめて、闇の中を這い寄る触手に恐怖の眼を見開いて慄えている裸身。

呻き声が始めて権造の耳に伝わって来た。

猿轡を固く固く噛まされているせいだろう、ほとんど口からもれることなく白いのどの奥でぐもった音をたてるだけのその悲鳴は、切迫した状況に味付けする。

ドサリと重い体が横倒しになり、ズズッと肉塊が畳の上をいざる物音。鈴は絶えず危急を告げて鳴り、ぐもった悲鳴と鼻孔をもれる激しい息づかいが聞こえる。温かく湿った体臭がそれに加わる。権造は大きく鼻を鳴らして更に迫る。

「いい匂いをさしているな、お絹」

喘ぎにのどをつまらせながら、権造は一層拡大された世界へと、のめってゆく。そして

まさぐり求めていた右手の人差指が、ふとした動きの偶然に、畳の表と違った、きめの細かな肌ざわりをつまみ取った。

「は、つかまえたぞ、つかまえたぞ」

たちまち他の九本の指がその感触の一点に集中して、しっかりと掴みしめる。それは湯文字の端であった。

左手で、しっかり掴みながら、右手の指はそのすべすべした感触をなぞって、上へと伸びる。見えぬ眼の網膜に真紅が拡がり、素肌に温められて燃え上がる。

重い体がのどを哀しげに鳴らしながら、ズズッと逃げる。その動きの中に柔らかな素肌が網を張って待ち構える触手に触れた。触手はたちまちいそぎんちゃくのように収縮して獲物を掴む。それでも、一度二度空を掴まされ、鈴のいらだたしげな音と、ぜいぜいというのどの音の交錯する渦に巻き込まれて、権造は四つん這いの姿勢から膝をはねて、ここぞと思う方向に飛んだ。

空の感覚が、一挙に確かな実体となって権造の腕の中、体の下にあった。うごめき、のたうち、汗と体臭の入りまじったえもいえぬ匂いを発散させながら、それはほとんど権造を、めくるめくような恍惚の渦の中に巻き込

んだ。

「ヒヒ、つかまえたぞ。とうとう、つかまえたぞ」

よだれをすすり上げながら、権造はしばらくの間は母の乳房を探り当てた乳香児さながらに、おのが体重に押し伏せられた温かいうごめき呻くものに顔を押し当てていた。

なつかしい、どこか遠い記憶をゆさぶる匂いが、今の権造の世界のすべてであった。

五

めしいた鬼にも母はあった。若い頃には人並みに惚れた女も居た。しかし、権造の愛した女は、すべて彼の手から逃げ去ってしまった。母は権造を棄てて若い男と駆け落ちし、惚れて女房にした女もまた、権造が幼な心に受けた傷をあばきたてるかのように、男をつくって権造を置き去りにした。

権造の金と女に対する異常な執着は、このような苦い経験から身についたものかも知れない。金は自分の意志で逃げて行くことは絶対にならない。吝嗇を固守しさえすれば、金は増えこそすれ、持ち主を見棄てることはないのだ。そして女は——この御しがたい動物を手

元に引き留めておくには金が最も力を持っていることを、権造は知りつくしている。しかし、金で女を購う愚を権造はやらなかった。

彼は購わずに釣った。貸金のカタに女をいたぶる。金の力でねじ伏せられた女を、猫が鼠をもてあそぶように時間をかけてなぶり抜きしゃぶりつくす。そしてこの悦楽は必然的に耽溺を呼んだ。女を縛り上げて無抵抗にしたうえで、言語につくせない羞恥と屈辱を強制し、涙と悲鳴と哀願を絞り出すことに、無上の快楽を感じるようになっていったのだ。

一人娘のお慶に対する愛情の強さも、惚れた女房の忘れ形見としてというよりも、権造に唯ひとつ残された自分の女、かたむけた愛を裏切らぬ女として考えているからに外ならなかった。

このように異常な、女に対する執着も権造にとって、暖かな母の膝にまどろんだ思い出に通ずる瞬間がある。たとえその行為が、当の女にとってどれ程いやらしく感じられようと、その瞬間には権造は無垢な幼な児の心に帰っているのだった。そのまどろみは、瞬時にただけしい欲情に取って変わられるものではあったけれど……。

お絹が捕えたのは、そんな権造の短い、ま

どろみの瞬間であったに違いない。権造の体重の下に小さく丸くなって慄えていた肉塊が恐ろしいほどの緊張を見せて権造を振りもぎり、蛇のように身を逃がれたのである。

「ち、くそ、このアマあ……」

壁に、したたか腰をブチ当てられて悪態をつきながらも、権造は猿臂を伸ばして追いつがった。

再び、ほとんど天井から垂れた一本の蜘蛛の糸のように、あざとい感触が指に伝わり、権造は、それにすがりついた。

「つ、つかまえたぞっ」

権造は我になく大声をあげていた。鈴があわただしく鳴り続ける中に、足の爪が畳を掻き、苦しげな呻きを猿轡の奥に鳴らしながら、女は引きもどそうとする力に必死にあらがう。薄い布が裂け、縫い目のほころびる鋭い音が、まがまがしい息づかいにまじる。

権造は何かを念ずるように湯文字の端に取りすがりながら、自分の指に腕に肩に伝わってくる抵抗力を計っている。

「フフ、逃がさんぞ。もう二度と離さんぞ」喘ぎ、よだれをすすりながら、権造は腕の力をそのままに、ゆっくりと膝を立て直しに

かかる。が、そのわずかな力のバランスの崩れを鋭感に感じ取ってお絹は腰をひねった。

権造の手に加わっていた張力が、不意に脱け落ちた。よろめきから体勢を立て直し、手の握りに更に力を加えた時、それはすでに何の力も持たない空の感覚にもどっていた。湯文字がお絹の腰を離れてしまったのだ。

しかし、権造はこの空の感覚からすばやく立ち直った。

「ヒヒ、お絹。見えるぞ、見えるぞ。まる見えだぞ……」

みだらな言葉を口走りながら、権造は湯文字を両手にひしと握りしめ、まるめこみ、鼻に当てがって、まだぬくみの残る匂いを吸い込む。

「貧乏人にしては、いい腰巻きをしてるな。女の身だしなみというやつかい。フフ、肌の匂いとなにやらの匂いが染みついて。フフ、眼に見えるようだぜ」

それは、たしかになつかしい匂いではあった。独り者が女部屋に足を踏み込んだ時、ふと戸惑いさえ感じる、あのどうしようもなく身を押し包んでくる、甘えたくなるような匂いであった。

しかし今度は権造も長くはその匂いにかま

けてはいなかった。匂いと色の渦を、素早く投げ捨てさせる新たなイメージが、彼を捕えはじめていたのだ。一糸まとわぬ女の、真白な素肌が、腰をくの字なりに折り曲げて闇の中に光り輝いている。

権造はぬつくと立ち上がると、はだけきつたどてらを脱ぎ捨てた。欲情の高まりは感覚を鈍磨させ、もはや手さぐりは用をなさなくなっていた。体全体が鈍磨した感覚の中で確かな接触を求めてざわめきだっているのだ。

彼は仁王立ちになって両腕を拡げ、ズカズカと大腿に踏み出した。手は壁に突き当たるのを防ぎ、すり足に進む足は畳の上のわずかな異常をも逃がすまいと、十本の足指を神経質に折り曲げている。

鈴が鳴る。その鈴の音も、今は朱の紐から一直線に雪のような全裸像を浮かび上がらせる。崩れた黒髪に垂れる赤い手絡。真っ白な素肌のくぼみくぼみの翳り。ひたと閉じ合わせた脚にからみついた朱と金の色。

鈴が、また鳴った。はやり立った権造は畳を蹴って、その涼しげな音のあたりに体ごとぶつかって行った。そして、激しい苦痛の呻きと共に、柔かく温らかくぬめぬめと濡れた量塊が再び権造の膝下にあった。

六

全身をやもりのようにへばりつかせて、権造はあらがいがく温かくて柔らかな肌を、じょじょにおのが支配下に組み敷いてゆく。十指がせわしく動きまわっている女の体の位置を確かめ姿を確かめ、それに応じておのが身をずらしてゆき、やがて権造は女の首を左の腕にかい込み、毛脛に圧力をかけて、しっかりとおさえつける事に成功する。

鈴は絶えず鳴り続けていた。男の腕と脚の力にあらがって身を弓なりにのけぞらせ、あるいはのしかかってくる重みをいなそうと右に左に身をよじらせるたびに、鈴はそれを付けられた身の動きに忠実に、あるいは哀しげに、あるいは苦しげに、音を響かせた。

「どうだ、お絹、もう逃げられまい。これこうしてここに力を入れれば、どうだ、息もできまいが」

権造は左腕にかい込んだ首すじのあたりに荒い息づかいを吐きかけながら、せわしなげに問いかける。

その間にも残りの右手はおのが抱きしめ捻じ伏せたもののかたちをまさぐり求めて、休

みなく動きまわっている。

「フフ、柔らかなからだをしているなあ。それにいい匂いをさせおって。フフ、こんなに汗をかいているぞ」

今やお絹のあげる呻き声は、権造のすぐ耳元にある。鼻孔をもれる息がヒューヒューと音をたて、それでも不足で固い猿轡のわずかな間からさえ吹き出される息がシューシューという音をまじえ、のどの奥の呻きは声帯の慄えを、じかに伝えてくるのだ。

左腕の内側にはピクリピクリと首すじの緊張が伝わってくる。押しつぶしたふたつの柔らかな乳房の甘い感触が慄える。喘ぎに波打つ腹、苦悶もあらわに屈曲する下肢は緊張と弛緩のうごめきを伝える。

右手は寸時も動きを止めずに、今や全身をもって感じ取っている確かな感覚に、形を与えようと動きまわっている。それはめししいの闇の画布の上に獲物のかたちを描き出してゆく絵筆であった。そしてその絵筆がなぞる曲線のかたちを感覚と結びつけて、権造はそこにはじめて「お絹」の裸身を見た実感するのだ。

乱れもつれた髪をかいなで、額から眉、眉から固い鼻すじ、更に横にきつく結ばれた猿

轡へ、固い緊張を見せているあごの線へ、柔らかな耳朶へ、ほっそりとした首すじへ、なでまわしさすりまわし、かつて見たお絹の容貌の思い出を指で確かめながら権造はひとり満悦のうなずきを繰り返す。

まるでくすぐめた丸い肩から腕を伝わってゆけば、それはやがてくの字なりに折れまがり荒々しい縄の巻きついた手首からしっかと握りしめられた指先へ達して、そこから深くぼみを見せてたわんでいる肩すじまでは、ほんのひと飛びだ。ひとときわなめらかな肌ざわりがやがて豊かな張りを増し、掌に吸いつくようなまるみに達する。そのまるみも今はたえず緊張しうごめき、時にさざ波が立つように鳥肌立っている。

再び、全身が重圧を弾き返さんばかりにのけぞり、仰向けに転がる。そうはさせじとしがみつく権造は、いつしか馬乗りの態になっている。それを振り落とそうと激しくゆさぶる動きを楽しみながら権造は体勢を整える。

両の手は腰のまろみから胴のくびれへと、じわじわ圧力を加えながらせり上ってゆき、横一文字に区切る縄の堰を乗り越え、そこから急に高みを加える柔らかな二つの盛り上がりへと一挙に進む。それはまだ固く武骨な権

造の掌にすっぽり包まれている程の大きさしかなかった。青い匂いがほのかに、拡がった鼻孔の奥をくすぐりさえした。そして麓の張りのある柔らかさと対照的に、小さく固いものが慄えを伝えたかと思うと鋭い悲鳴があがり、台座が弓なりにのけぞった。

権造は、荒馬を御するように全身に力を加えてしがみついた。権造は次に打つ手を考える。触覚は飽満して鈍っていた。お絹を追いまわしていた時のような、鋭くヒリつく官能の高揚は消え、重い欲情だけが、がむしゃらに肉体を引きずっている。

はじめから清次に命じて、お絹の体を身動きできぬように縛らせておいた方が良かったか、とも思う。しかし、真っ赤な湯文字一枚に剥がれた裸身を後ろ手にいましめられて、畳の上を這いずり逃げるお絹のイメージが、権造にとって、絶対的だったことも事実なのだ。そして、そのイメージが新鮮さを失い、盲目の不自由さだけが身に迫ってくる状態では、相手の抵抗を絶対的に奪い取って、自分の感覚を自由に遊ばせたいという欲求が頭をもたげてくるのは、当然のことであった。欲求が新たなイメージを描き出し、感覚がそのイメージに舌なめずりしはじめた。

七

うごめき這う両の手がいつしか動きを止め唇がしまりなく垂れ下がった。新たなイメージが感覚におそいかかる瞬間の、あの鮮烈な陶酔にひたされて、権造の想念は今、自分が膝下にひしんでいる実体を離れ、イメージの中のお絹をねぶる。

大の字なりに引き絞られた、うら若い女。うねりに乗せられた、ししむらのうごめきにつれて、灼くような息を吐き出す。

権造は、一瞬の後には虚無に消え去るに違いないこのイメージの凌辱に、全身を硬直させて、ふけている。一度、二度、彼は眼の前のイメージに触れようと、手を伸ばしかけさえした。しかし、権造が膝下に敷いている現実のうごめきに、そのイメージは瞬時のうちに腐蝕され、変質し、そして消え去ってしまった。

権造は立ち上がった。彼の脳裏には今やイメージに見た白い大の字が固着し、そのかすかなうごめき、それに陶然となる自分の姿ま

でが、ありありと感覚されている。

と、鈴のあわただしい音に気も止めずに、両手を拡げて壁を求め、そのザラザラした感触に導かれて、入口の戸へと進んだ。

戸の傍には心張り棒がある筈であった。いつもこの塗籠にこもって金箱の銭の感触を楽しむ時に、内からかつておくあの心張り棒である。しかしそれらしいものは、いくらそこらあたりをまさぐり求めても手に触れてはこなかった。

「清次のやつ、どこへやりやがったのかな」小刻みに両手を動かしながら、権造は次第に強烈になるばかりのイメージの輝きに、いら立った。

戸を開けてひと言呼びさえすれば、清次なりお妙なりが駆けつけてくることはわかってゐるのだが、今この世界にそのような闖入者を迎える事を権造は好まなかった。それに権造の姿は、たとえ慣れきった男女に対するとはいえ、とても正視されて平気でおられる性質のものではない。

そこにむき出しの尻をついて、いらいらと心張り棒のありかを考えあぐねている間も、背後では鈴が絶えず音をたて続けている。鈴の音が白い足首に結びつき、足首がふくらはぎへ太腿へ伸び、大きく裂かれた想念が権造

の脳裏いっぱいに繰り上げられている。それを固定するには、どうしても心張り棒が必要なのだ。

チツと舌打ちして戸の棧に手をかけた時、やっと、ある考えが頭に浮かんだ。
(ここから道具を出した時、いっしょに運び出したんだな)

それが、心張り棒のような凶器になりかねないものを部屋に残すまいとした、清次の気のきかせぶりだとわかりながら、権造には下手な気のきかせぶりに思えた。

金と証文を入れた小簞笥は隣の床の間に出してある筈である。とすれば心張りもそこにあるに違いない。権造は重い戸を押し開けて廊下に出た。冷々といく空気が素肌を包み、めしいの眼にも闇が白くなった。

廊下を伝って、隣の部屋の襖をまさぐり当て、中に入った。冷たい畳を踏んで床の方に寄ってゆく。予想通り小簞笥は床の前に置いてあった。そして求めていた心張りは、そこに立てかけてあり、権造の手に触れて小さな音をたてて畳に倒れた。すばやくそれを掴み取りながら、権造はニヤリと頬をゆるめた。

めくらの習性で、その心張り棒を杖がわりに部屋を出かった時、権造はピクと足の動

きを止めて首をかしげた。

(はてな……?)

今降ろしたばかりの右足をそっと畳の表からはなして、そこいらを探るように足を動かして見る。まさぐる足の裏に、他の場所とは違う温もりがかすかに伝わってくるのだ。

(はて……わしが坐った場所ではないとする
と……)

つい今までここに誰か別の人間が居たのではないか、いう疑惑がむらむらと権造の思考を覆いつくした。あごをつき出すように首をかたむけ、全神経を足の裏に集めて、再び探り足を試みる。しかし最初に感じたあの鋭い反応はもう得られなかった。

(気のせいかもしれんて)

自分の心の迷いを鼻に笑って歩み始めようとした時、今度は爪先などという遠い所からではなく、すぐ近くの耳から訴えかけてくるものがあつた。いや、それは耳でさえなくて第六感という盲人には特に発達しているあの感覚だったかもしれない。それは空気のかすかなそよぎのように、あるかなきかの異和感を伝えて来たのだ。

「おい、誰かそこに居るのか」

権造は氣の後れを強い声に隠して、見えぬ

四囲に呼びかけた。

返事は返ってこず、押し殺したような沈黙がかえって、そこに息をこらして自分を凝視しているかも知れない人間の存在を強調するかに思えた。

「お妙か? 清次か? 居るんなら返事をしろ」

ジリジリと爪先で体をまわし耳をまわしてゆきながら、権造はお妙の嗅ぎなれた脂粉の匂いと清次の脂臭い体臭が嗅覚をやりわり刺戟してくるのを感じ取ったように思った。がそれもさっきの足の裏同様、強く鼻を鳴らせばたちまち消え去ってしまう。それに権造の嗅覚は先刻までのお絹との格闘で、あまりにも鈍磨しすぎていた。

「フン、気の迷いか」

まだはつきりとは消えやらぬ疑惑を声に出して振り捨てた権造は、それでも念のために今一度小簞笥の所に足をかえして、抽出に鍵がかかっているかどうかを確かめた。それはしっかりと施錠されていて、権造をひと安心させた。

「フフ、案ずることはないて」

が、権造の踏み出した足の裏に、今度こそはまがうかたのない物体が、からみついて来

たのだ。

「な、なんだい、これは」

驚きに心臓が冷たくなるのを、声でゆすり上げておいて、権造は素早く身をかがめるとそれを捨て上げた。足の裏の感触で予想した通り、それは女の腰紐であつた。

(こんな所に腰紐とは妙だな……)

再び高まりかけた疑惑は、しかしすぐ消えた。

「清次のやつ、ここでお絹を裸にしやがったな」

張りつめた神経がゆるんで、唇がみだらにゆがんだ。と同時に白い大の字のイメージが再び襲いかかって来た。

「ちようどいい都合だ。これで縛ってやれ」

権造は腰紐を左手に、心張り棒を杖にして塗籠へと歩を返した。

戸を開けると闇の奥で鈴が鳴った。重い戸を背中に閉めて、権造は再びおのが世界の支配者にもどる。

八

「どうだ、お絹。待ちどおしかったか」

鈴の音の方に声をかけておいて、権造はす

ぐには音の方に寄って行かない。杖をたよりに壁をめくり、すり足を続けて脱ぎ捨てた自分のどてらを探り当て、そこに一緒にとぐろを巻いている帯を拾い取る。大の字にはどうしても縛るものが二本いるのだ。もっとも、この場合は棒は一本だから、手の方は間にあわず、せいぜい火の字ぐらいで我慢しなくてはならないだろうが。

二本の紐を手にした権造は、右手にした棒を大きく突き出して、あたりを払いながら前に進む。

「いいか、そら、どこだ。ほれ、ほれ、棒に当たるぞ」

前にも増したゆとり遊びながら、権造はおびえた鈴の音を追う。弓なりに曲げた背が腰が膝が白く畳をのたくるさまが、鈴の音につれて、さまざまに描き出される。そして遂に固い棒の先端が柔らかな肉置きに弾き返された。

「フフ、いたな、つかまえてやるぞ」

棒の先から逃げようとする肉塊をたどって権造は次第に身をかがめてゆき、あるところでツと猿臂をさしのべる。感は狂わず、大きく広げた五指が温かなまろみを掴んだ。そのまま体ごと圧しつけてゆくと腰と肩のかたち

が感じ取れた。猿轡にひしゃげた呻きが耳に入ってきた。

今の権造は、再び我がものにした肌を楽しむことは後まわしにして、しゃにむに焦げつくようにせきたてるイメージを造り上げることに心を奪われている。両掌の感覚でお絹の体を仰向けに押さえつけ終ると、必死に逃れようとする膝へ尻を移動させて、しきりにはね返そうと蠢動する足首をしっかり掴む。手早く一本の紐を、そこに幾重かに巻きつけて結び終ると、今度は別の一本をもう一方の足首に巻きつける。足首の鈴が、新しく加わった紐にさまたげられて、鳴りをややひそめたけれど、そんなことにかまっている余裕はなかった。

権造はいったん離れた心張り棒を手に取り、その端をお絹の左足首の所に当てがい、さっきの紐のあまりをそれに巻きつけた。ゆるんだり棒がすべったりしないように、幾重にも念を入れて、巻きつけ、そして固く結んだ。

「さあ、お次はどんなことになるかな。おとなしくしていなよ」

尻の下のかなめいたうごめきと、近づきつつあるイメージの完成に、気もそぞろになっ

て、権造はお絹に聞かせるというより、自分で楽しんでる。

お絹の身悶えが一段と激しさを加え、肌が畳にこすれる音と荒々しい喘ぎがまざりあって、権造をいやおうなしに狂ったような欲情へとさらってゆくのだ。

権造は棒の縛ってない方の端を右手に握ると、左手にお絹の自由な方の足首を掴んで、そのふたつの箇所をひと所に合わせようと、腰を持ち上げて力をふりしぼった。

激しいあらがいと悲鳴が、権造のこめた力と耳朶にはね返って来た。白い肉塊が、じょじょにあらがいの悶えながら、脳裏の妖画に近づいてゆく。ひととき高い呻きと身のひねりが、権造の両腕を引きちぎらんばかりに圧力を加えてくる。が、欲情にたけりたった男の力は女の固守を引き裂くのに弱過ぎる筈もなく、足首を掴んだ手と、棒の端を握った手とは、強い力にあらがいがながらも、一点に集まった。そしてその後は権造の足の力も加勢して、その一点がふたたびはなればなれになることがないようにする作業を、素早く仕とげたのである。

縛り終えた箇所をバタリと畳の上に投げ出した時、権造は禿げ上った額に玉の汗を浮か

べ、息を吐いていた。そして、今や不満足な
がらイメージに近い形に仕上げた餌物の猿轡
の奥の泣きむせびを、わずかなうごめきとも
感じとった。

「ヒヒヒ、これでもう何をされても逆らうこ
ともできめえ」

権造は両手の十本の指を百足ののように細か
くうごめかせて、ガッシリした直線の頼もし
げな心張りを伝い、その両端にくくりつけら
れている、心張りとは全く異質な蠢動する曲
線へと伸ばして行って、両手で同時に両端の
足首を掴む。自分の腕の抜け具合が、女の強
いられた肢体の具合を確実に教えてくれる。

それは、かつて見た北斎の富士の裾野の拡が
りを思わせた。しばらくの間、権造は裾野か
ら頂上を仰いで、そこに到った時の楽しみに
心を遊ばせながら、固く筋張った足の甲から
いやがって悶える小さな足指、奇妙ななめら
かさと柔らかさがヒクヒクする土踏まずの感
触を撫でまわしている。

権造は、なまの感触に駆りたてられて、が
むしやらかな欲情のとりこになることを、今度
は慎重に戒めている。女の姿と、それに触れ
ている自分の姿を脳裏に描き出すという、い
たぶる者とそれを覗き見る者の二重の楽し

みを味わっているのだ。それに富士の絵の連
想は、次々と枕絵のさまざまなポーズを引き
出し、それらの絵に描き出されていた女の姿
態の妖しい曲線が脳裏のイメージに更にふく
らみを与えた。

今も両の手に片方の足首を抱え込むように
してもてあそびながら、その小さく折りたた
まれた足指や、ピンと張りつめている足の裏
に、権造はまざまざと、歌麿の女が快楽の極
致に空を蹴る、あのあからさまな足の裏を思
い描いている。権造の抱いた足は、固く引き
結んだ指と指とのあわいに、じっとりと汗を
にじませていた。

やがて権造はそこに飽きた。体を畳の上に
いざらせて裾野の拡がりを巡り、頂上の傍の
くびれのあたりに膝を据える。そこからの眺
めはさぞかし、と思うのだが、このような眺
めは、さすがの歌麿さえも絵にしていなかつ
たが、かすかな呻き声をあげ続けている女の
表情だけは、いくらでも後から後から好みの
ものを呼び出すことができるのだ。

権造はそろりと掌を伸ばした。確かな感覚
で掌は正確に女の柔らかに上下する腹をまさ
ぐり当てた。同時にそれはヒクツと縮まる。
白い波のたゆたいが権造を乗せて、大海原へ

と誘い出してゆく。いたずら心に指を二本そ
ろえて、広い海原に突き立ててみる。激しい
弾力がはね返って、押し殺した悲鳴が白くな
だらかな海原を波立たせる。

「フフ、お絹よ、いい肌をしているなあ。こ
う、すべっこくて、あったかくて、ポチャポ
チャして……ほおれ、どうしてどうして搗き
たての餅なんてもんじゃねえ」

権造は下りたがってムズつく指を、強いて
逆に這わせると、いましめの堰を乗り越えて
双丘を掌に納めていた。

権造の掌の中で、それは円い小餅をこね上
げられるように揺れ動いていた。固い芯の上
にふうわりと弾力のあるものがかぶせられて
いて、その芯から放散される熱がまんべん
なく円丘の全体にゆきわたり、丘全体をプリプ
リした吸いついてくるような感触に焼き上げ
られる——そんな味を権造は、めし目の目を
細くして味わっている。

時折、内奥の芯が一点に噴出して凝ったよ
うな感触が掌の内側に、こそばゆく伝わる。
二本の指先のひねりにつれ、円丘を乗せた体
全体がピクンと跳ね、歌麿の絵が苦しげな声
をあげる。権造は次第に、遊び心を失って来
た。その小さなしこりに引き寄せられたのも

ほとんど意識していない。

頬の下には、絶えず波立つ温かな肌があった。汗にぬめり始めた柔肌は、拒むともいざなうとも知らぬはずみと温かみをたくわえて揺れ動いている。

権造は赤児に返って無心にひたすらに、唇のあわいからよだれを垂れ流しながら、そのなつかしい双丘に溺れている。それはこの上なくしたわしく甘い玩具であった。吸っても吸っても吸いつくすことのできない広い広い白い海がその背後にある筈であった。そして求めるにつれて、彼みずからは次第にその白い海のたゆたいの中に吸い込まれ、ぼってりと重く白い波間に沈み込んでゆく。

が、そのおだやかな陶酔も、束の間であった。かすかな記憶の底に残った母の乳首の大きさと豊かさに程遠い口当たりと、何も与えてくれないいらだたしさが、赤児に焦げつくような泣き声をあげさせた。そしてこの赤児は自分に陶酔の蜜を与えてくれる箇所を知っていた。

めししいの赤児が養いの乳を求めて鼻をひくつかせながら、白くたゆたい揺れる温かな海の上をさまよってゆく間にも、鋭角を描く裾野の彼方からは、巡礼を導く哀しげな鈴の音

が、ひび割れたような音をたて続けている。

うねりの数々を乗り越え、高い波濤に舵を取られながら、権造は、次第に強くねばりつきまつわりついてくる香にむせびながら、むしろようになつかしい陶酔の境地を求めて漕ぎ出す。

すでに盲目という条件はもののかずではない。十本の指と唇と舌と鼻と、それらが幾千幾万の眼となって、ひとつの巨大な、自分のすべてを吞みつくすイメージを構築しているのだ。その眼開きでさえ眼をつぶる境界に、権造は達しているのであった。あたり一帯の海は深淵が作り出す渦の余波を受けて、たえず激しいうねりを盛り上げ、しっかとしがみつこうとする小舟を弾き返そうとする。しかし、その力にも限度があった。

権造は物見えぬ眼を更にヒタと閉ざして、赤児のように身を小さくまるめていた。周囲にねっとり渦巻く温かな波のうねりに恍惚と身を委せる。時折、のどのかわきをいやすために舌をさしのべる。甘露は口に含むその瞬間に、黄金色に輝くように思える。そしてその輝きは次第に身を取り巻く渦全体に拡がってゆき、権造は燦然たる阿弥陀如来さながらに黄金に輝き渡るものの中に身を据えてい

る。

権造のめししいは、その輝きによって更にくらまされた。赤児は大きな頭を振り立てて、その輝くものににじり寄って行った。そしてその瞬間、輝きは消え、赤児の眼の前に、闇が真っ赤に破裂した。

九

胸が離れると、あわいに空気が触れてひいやりとした。仰向けになった乳房の圧しつぶされていた部分が、そこだけ薄桃色に充血して、周囲の静脈を沈めた蒼白さに際立っている。

細めに開けた障子の外で、品川の海がトツプリ暮れていた。

「なにを考えている？」

体をずらして女の顔をのぞき込んだ男は、女の異様な表情に胸を衝かれて、たずねた。

女は、あごをのけぞらした姿のまま、瞳を大きく見開いて、宙の一点を凝視しているのだ。あれ程自分から求め、喜悦にのたうち呻き、果てはあられもない泣き声をあげていた女が、その小さな死の果てに本当の死に見舞われたかのように、凝固しているのである。

広い額、薄く半月を描いた眉、とがった鼻梁、そげた頬、乾いて力なく開いた唇。それらのものの上に浮いたあぶら汗が冷たく輝いて、おどろに乱れ張りついた髪の毛の黒い縁取りの中に、じっと虚空を見据えている。ただ弓なりに見せている細いのだぶえのあたりが、かすかな動きを見せているのが、唯一の生きている証拠であった。

「後悔しているんじゃないだろうな」

男は、自分の心の中をあわただしくまさぐって触れた弱味をかくすために、それを相手に投げ返した。

女の白いのが、ゴクリと音をたてて動いた。それから頭がゆっくりと左右に動いた。そのけだるげな動きの中に、かえってふてぶてしい腰の据えようがうかがえる動作であった。だが、眼は乾いた光をたたえたまま一点

を凝視することを止めてはいない。

男はそんな女の不気味でさえある態度から顔をそらすと、俯伏せに枕を胸の下に掻い込んで、たばこ盆を引き寄せた。

「すっかり暮れたな」

たばこの煙が海から忍び込む微風に流れるのに眼を細めながら、男も遠くに思いをはせる表情になる。

「へへ、今頃は娘とも知らず、つるんでやがるか。それとも、それとして親娘ともどもわめいていやがるか」

女が身じろぎした。顔の色とは打って交わって、まだ懐火のほてっている肌が生々しく艶っぽい。

男は、もう一服つけながら傍の女を盗み見る。行灯の薄明りの中に、蒼く沈んだ横顔がまるで冷たい炎をチロチロ燃やしているように見える。

「へッ、鬼だなんどとこわがられていても、どめくらは所詮どめくらよ。自分の娘も他の女も区別がつかねえんだからな」

ともすればおびえそうになる心を絞りあげるように、男は荒々しい口をきく。

「もう、やめて……」

女が、のどに痰のからんだような声で制止

した。

「どうしてだい。このたくらみにゃ、お前だつてずいぶん乗り気だったじゃないか。それによ、この宿に入ってから、ばかに燃えやがつてよ。あれもこれも、みんなあの親父と娘のことが頭にあったからじゃなかったのかい、え？」

男が威丈高に乗り出しても、女はさっきからの表情をピクリとも動かさず、瞳さえ男の方に向けようとはしない。

「そうじゃないの。そうじゃないけど、とにかく今は口をつぐんでいておくれ。お互いに頭の中で思っているだけで十分じゃないか。そんな口に出して確かめたけりゃ、こんなにして逃げ出したりなんぞせずに、最後まで踏みとどまって、ふたりの泣き叫ぶさまを見て笑えばよかったのよ」

女は舌で乾いた舌をしめしながら、憑かれたもののように能弁になった。

「お前さんには、このあたしの気持の十が一にもついていけやしないことは判っていますよ。あたしがあの鬼のことを思い浮かべる時は、あの男の指がわたしの肌身に触れている感じで思い浮かべる。思い浮かべるたびに、わたしはあの男に犯されているの。それより

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

ほかにあの男を感じようがなくなってしまう。だから今だって、親父と娘のことを想像するにしても、あたしが娘になっているようにしか想像できないのさ。だから、うれしいのか、つらいのか、自分で自分がわかりやしない」

女はへどを吐き終えたように、フツと言葉を切った。

「そんなものかね」

男は処置なしといった顔で、再び枕を抱え込む。

「でもさ」

男は灰吹きにきせるを鳴らしながら、言葉の継ぎ穂を見つけた。

「塗箆でガタガタやっているさいちゅうに娘から奪った鍵で小簞笥をあけて、中の銭やら証文やらを、あらいだらい、盗み出しただろう。あの時、お前がおれの背中に体をこうねじるように寄せて来たのは、どういう仕掛けだったんだい」

男は口元をゆがめて眼の端で女を見る。

「さあね。あたしにもよくわからない。とにかく、あの時あの場で、むしろにお前さんに抱かれたくなったのさ」

「へッ、都合のいいように出来てやがる」

男はきせるを捨てると、そろそろ夜気に冷えた始めた肩に布団をかぶり、女の方に手を伸ばした。

「でもよ、びっくりしたな。あの時、何を思ったか爺いの野郎、ふらふら入って来ようろう」

女の口元がかすかにゆがんで、はじめて生きた表情になった。と同時に、うつろだった瞳が、めらめらと燃え上った。

「からの簞笥に鍵をかけておいたからよかったものの、そうでなければ、女より金の爺いだからな、どうなっていたかわかったもんじやなかったぜ。それに」

男は女の様子が軟化したのに勇氣を得たように、手を胸のふくらみに移した。

「こちらも前はだけ、爺いは素っ裸のザンバラ髪。その三人が互いに息をひそめあってすすくみみたいに立っていた図なんぞ、今思い出しても、笑うに笑えねえよ」

フフ、と女がのどで笑った。

「あの時あたしが置き忘れた腰紐、あれであの爺い、娘のどこをどう縛ったものかねえ、フフフ」

のどの奥の笑いが次第に全身にみなぎり渡って女は全身を波のようになくならせながら

とめどなく笑いこけた。そしてその笑いがヒタと止んだと思うと、おそろしい程の力をこめて、男にすがりついて来た。

「ああ、今夜はとても眠れそうにもない。ね清次、も一度、抱いておくれ。爺いがどんなように娘を抱いたか、もう一度この体で確かめて見たいんだからさ」

「お妙、お前という女は……」

声が途中でとぎれたのは、吸いついて来たお妙の唇のためであった。

いつしか障子の間から、細かな霧の粒が舞い込んで、たぎりたつふたりのからだを、ぼっと、にじませ始めている。

+

「どうだ、お絹。もうわめき散らしたり噛みまくったりする元氣はなからう。こうされた以上は、おとなしく可愛がられる方が利口というもんだからな」

権造は、額に浮いた汗の玉を腕でぬぐいながら、女から猿轡を取りにかかっている。

「動かせるようになった口で、今度は精いっぱい、いい声を出して、充分に聞かせてもらいたいもんだて」

——(終)——

—— 雑 感 三 題 ——

「白い蝶のサンバ」

山 口 広



あなたに抱かれて 私は蝶になる
あなたの胸 妖しい蜘蛛の糸
……

森山加代子の、いく分舌たらずの感じの、甘い声が、サンバのリズムにのって、ヒットしている。この文が記事になった頃には忘れられているかも知れないが。

恋にとらわれた私は、美しくか弱い蝶が蜘蛛の巣にかかり、がんじがらめに縛り上げられ、もだえながら餌じきにされて死んでいくように、若く美しい私はあなたの胸に抱かれて、恋にもだえ死にたい。という歌である。

この歌を、聞くともなく聞いたとき、はじめの、「私は蝶」「あなたは蜘蛛」、途中の「恋は心も 命も縛り」などの文句は、私の気持をこの上なく刺激した。

この「白い蝶のサンバ」から連想されることが、幾つかある。

その一つは「蝶」と「蜘蛛」にたとえられたことから、十数年前の「奇ク」に連載された「蜘蛛と蝶々」をはじめとする名作が再び新しい感じで、読めることが望まれるのである。

第二は、蜘蛛と蝶のように、昆虫の世界で獲物を捕え、餌食にするいろいろの方法が、

(彼等自身は本能に従いながらやっているのであるが) 私のSM願望をこの上なく刺激すること。

終わりに、このようなSMを刺激する歌がもっと盛んに歌われるようになれば、この世の中も平和になるのではないか、との妄想が湧いてくるのである。

一、奇クナツメロの復活を

花から花へ、蜜をもとめて、ひらひらときらびやかな翅を誇るかのように、とびかう蝶は、まさに昆虫界の美女にたとえられよう。

これに配するに、ねばねばした強い糸で巣をかけ、獲物は大小、強弱をとわず、がんじがらめに縛り上げて餌食にしてしまう、あのグロテスクな八本足の(昆虫ではない)蜘蛛は、まさに暴力団にたとえられる。

このような連想からすぐに「白い蝶のサンバ」を聞いたとき、私は、本誌の第一期全盛期の初期に、読者を魅了した力作「蜘蛛と蝶々」を思い出したのだった。

著者の名前も失念したが、「蜘蛛と蝶々」は現在八年も連載され、好評をかくしている「花と蛇」に酷似したストーリーである。といっても登場人物も少なく、ペンのタッチも

異なるが、力作であった。あら筋は今でも、はっきり思い出せるが、次のようなものであった。

○

ニューフェイス（新星）の女優、御川里枝は主演第一作の大成功によって将来を約束され、第二作にとりかかろうとするとき、言葉たくみに（であったと思う）恐らくは暴力団につながる、エログループの手に落ちた。

美しい服も下着も剥ぎとられ、全裸の里枝の首に犬の首輪がはめられ、牝犬にされる。首輪につながれた鎖をベッドに固定され、羞恥の極みを味あわされ、その姿態をあますところなく撮影される。美しい牝犬として飼育される恥態を撮られたフィルムで脅されて、里枝は残酷ショーにも引き出される。

ついに自分の浅ましい姿を撮られたフィルムをストープに投げ入れ、里枝は業火の中ではかなく、悲しい生涯を閉じた。

○

思い出すシーンを抜き出そう。

首輪につけられた鎖を引っばられながら、里枝は牝犬として、四つん這いで生活するように強制される。スリッパや靴下を口にくわえて部屋の隅から隅まで運ばされる。

排泄も砂を入れた箱に、片足をあげてするように強いられる。

首輪の鎖をベッドにつながれた里枝は、必死に逃がれようと努力する。手足は自由であったが両手にはめられたボクシングのグローブのような革袋のため、指先がきかない。両手の革袋の紐を噛み解こうと、はかない努力を続ける里枝の姿は、かくし窓から、こくめに撮られてしまう。

背にねじ上げられた両手をすっぽりと包む革のグローブでまとめられた里枝は、マスクをつけられてステージに引き出される。両膝の後ろに棒があてがわれ、一杯に足を開いてしぼりつけられる。その棒と後手につながる綱が滑車でぎりぎり巻き上げられると、しやがんだ姿勢のまま、ステージの上方に吊り上げられてしまう。輝くほどの白い里枝の肌が、スポットライトに照らし出される。涸れ果てた筈の涙が頬を濡らす。

美しいタッチの挿画と共に、いまだに「蜘蛛と蝶々」は私の記憶に生きている。ストーリーは「花と蛇」に似ているが、花と蛇のような、ねばっこい描写も、浣腸シーンも見かけられなかった。（と記憶している）

「蜘蛛と蝶々」のほかにも多くの創作がちよ

うど、ナツメロのように、私の記憶の中に生きています。

このような「奇クのナツメロ」を、今一度読み直すことはできないものであろうか。幸いにも、沼正三氏の「家畜人ヤプー」は未完のまま、単行本として堂々と発行された。数年前の「奇ク」がすでに定価の数倍の値がついており、全巻揃いであれば、その値段は天文学的であるとも聞く。入手は極めて困難である。処分したのが悔まれてならない。

このときにあたって希望したい。通巻二百六十五号を数える文献誌の十年以上も前の、「名作」のリバイバルに、誌面の一割をさいて頂けないものであろうか、と。

「蜘蛛と蝶々」のほかにも、「甘美なるアリスの降服」、「夜光島」、「淫火」、「半公刑」のシリーズもの、「宇宙のどこかで」、「潰滅の前夜」……名作のリバイバルには何とかかぬ「奇譚クラブ」であると思う。

同じ風俗誌である「F誌」に嶽牧一氏の旧作が載せられていた。題名こそちがうが、これは同氏の名で十数年前に「奇ク」に連載されたものと全く同じである。私はこれを二重投稿とか、転載とかという問題とは別に、むしろ、十数年たって読み返してみても、良い

作品はそれなりに価値を持つものであることを感じた。

「白い蝶のサンバ」からの連想がとんでもない所へ転じたが、是非とも、誌面の一割が、「奇クサロン」の前に「名作りバイバル」あるいは「奇クナツメロ」として編集されるように。

六月号の左京和男氏の提案が、生かされるように。

一、虫の世界のSM

蜘蛛が蝶を捕える。これはちょうど「蜘蛛と蝶々」のように、暴力団が弱い美女を捕え、裸に剥いで、ぎりぎり縛り上げるものを思わせる。

ねばねばした糸で、獲物をぐるぐる巻きに縛り上げる蜘蛛の生態は、初夏から秋にかけて、都会でも家の軒先や、庭の植え込みの間で見られる。目につきやすいだけに、楽しく飛びまわっていた美しい蝶が、突然、わなにかかり、現われたグロテスクな蜘蛛に、襲いかかられ、身動きもできないように縛り上げられたうえで、血を吸われ、肉を喰いつくされるということに、つい私はマゾを感じ、或は、サドの血を燃やすことになる。それだけ

に、「蜘蛛と蝶々」は歌にもなり、小説にもなる。

地球上で、最も種類の多い生物であると云われる昆虫の世界には、もっとSMを感じさせるものがある。狩りをする蟻の種類は、他の種の蟻の巣をおそい、幼虫もろとも働き蟻を奴隷にする。抵抗するものと女王だけは殺される。これは人間の社会でも中世まで続いたことであった。

もっと残酷な、SMを感じさせるものは、じが蜂の類である。じが蜂やとっくり蜂は、すずめ蜂、蜜蜂、足長蜂などのように社会を作らず、尻の針も人間を刺さない。この種の蜂はそれぞれ特有の獲物だけを狙う。

じが蜂は落ち葉の腐った堆土の中へもぐり込んで、いも虫を探す。ぶよぶよと肥った白いも虫（こがね虫の幼虫）を見つけると、真暗なトンネルの中で、じが蜂は翅をふるわせて襲いかかる。危険を感じ、身を守る本能から、腹を内に巻いて丸くなったいも虫の円盤に、じが蜂は飛びかかる。一瞬、尻の針が円盤にさし込まれる。たちまち、いも虫は完全に麻酔されてだらりと伸びる。

じが蜂の麻酔は強力で、一と刺しで腹の上部の神経節に注射するので、いも虫は微動も

せずに横たわる。じが蜂は、いも虫の横腹に産みつける。卵が孵化すると、じが蜂の幼虫は、いも虫の横腹に喰いつき、眠り続けるいも虫の体を喰いはじめる。

じが蜂の幼虫が、いも虫のどの器官から喰うのか、はっきりしないが、一週間以上もかかって、内部を全部喰い尽すまで、いも虫の肉は新鮮で、腐ってこないことからみて、じが蜂の幼虫は、生命を保つにに必要な器官を一番、最後に残すように喰い尽すのである。

じが蜂が、いも虫を殺さないで、麻酔だけして卵を産みつけるのは、孵化したばかりの弱い自分の幼虫が、いも虫に潰されないようにするためと、いも虫が痛がって体をよじったりして体力を消耗し、早く死んで腐ったりしないようにするためである。

じが蜂の幼虫は、丁度一匹のいも虫を喰い尽すと、完全に成育し、蛹になって成虫になる。極めて巧妙な自然の摂理で、これ以上の巧妙さは他に見られない、と、ファーブルは「昆虫記」に述べている。

もし、じが蜂の幼虫が、いも虫を喰い進んでいるとき何かの障害にあって喰う順序を混乱されれば、幼虫は先にいも虫の生命を保つ器官を喰べて、いも虫を殺し腐肉を喰べて自

分も死ぬという実験も、ファールブルは行なっている。

じが蜂の類の蜂は、それぞれに特有の獲物を持ち、同じような育児法をとるそうなのである。「じが蜂といも虫」は「蜘蛛と蝶々」のように人目につかない、またねばねばした糸で獲物を縛り上げるという派手さもないが考えてみれば、これほど残酷なことはない。

人間にたとえてみれば、卵からかえったうじ虫が横腹に喰いついて頭をつつ込む。そして死なないうような器官、たとえば皮下脂肪、筋肉などから喰いはじめ、胃腸、肝臓などが餌になっていく。麻酔されて痛みは感じないが、みるみるうちに骨と皮だけにされていく自分の体を、意識だけは、はっきりしている体で体験させられる、というのはこの上なく残酷であろう。

骨と皮だけにされていく自分の体にひきかえ、はじめは小さかったうじ虫が、たちまちのうちにぶよぶよと肥っていく。これを見せつけられる苦しみは、「蜘蛛と蝶々」の比ではなからう。

一年ばかり前に、じが蜂にヒントをえて、「地底の国」を書いたが、描写が中途半端でものたりなかった。改めて書ければよいが。

「じが蜂といも虫」は、甘い言葉で麻酔をかけ、美しい女性をとりこにして、血も肉もしゃぶりつくす「ヒモと女」にたとえることもできよう。しかしこれでは「蜘蛛と蝶々」にくらべれば、SとMの程度は劣るようだ。

「じが蜂といも虫」は最高のSMではあろうが、蜘蛛にくらべれば、じが蜂はスマートであり、その姿態からは残酷さを感じさせないようだ。蝶から感ずるか弱い美女にくらべると、いも虫は土の中にうごめくぶくぶく肥ったグロテスクな姿からの連想で、せいぜいピヤ樽のような腹をもてあます五十ぐらいの初老の醜い女をしか想わせない。

こんなことでも「蜘蛛と蝶々」は詩にもなり、小説にもなるSMの題材であり「じが蜂といも虫」は歌にもならないのであろう。しかしながら、この最高のSMが埋もれたままであるのは残念なことである。

三、SMソング

「白い蝶のサンバ」の一節に、

恋は 心も 命も縛り

とある。……シーバリー……この文句だけでも、聞く価値は十分にある気がする。

縛る、という言葉が出てくる歌はおそらく

これが始めてではなからうか。甘ったるい声でも、シーバリーと云われると、ぎくつとする。しかも内容がサジスチックである。このような傾向は、私の最も歓迎するところである。

この歌だけでなく、他にも私を感心させる歌が唄われている。

「恋の奴隷」

恋に縛られ、戒具をつけられた美女が奴隷となつて、跪き、責められるシーンが連想されはしないか。

「あなた好みの女になりたい」

マゾヒストである女が、或は飼育された美しい女が、高手小手に、海老縛りに、あるいは股間縛りにされ、むち打たれ、浣腸責めにされ、或は剃毛され、あなた好みの女になりたいと願う、というように私は想像をたくましくしてしまうのだ。

こうして歌謡曲の世界にも、SMがひろまったとすると、遂には「カメラハントの歌」とか「花と蛇」ができるのではないか。

乏しい詩才を動員して、作詩してみよう。

○

縛と答

わたしはこわいの あなたの縄が

わたしはほしいの あなたの答が
お手手をせなに ねじ上げられて
まきつくあなたの 縄がこわいの

△

わたしはこわいの あなたの縄が
真白の肌に 埋もれる縄が
せなの両手が 血の気をなくし
さいなみ 責める 縄がこわいの

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

| | | |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊 | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊 | 一〇五〇円(送共) |
| 半年分 | 6冊 | 二一〇〇円(送共) |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共) |
| | | 郵便番号 558 |

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用はお断り) 振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

△

わたしはほしいの あなたの答が
身動きもできぬ わたしの肌に
はじける答は 火花を散らす
痛みはいつか 夢のかたへ

△

わたしはほしいの あなたの縄が
豊かな乳房の 上下を締める
裸身を縦に 締め裂くような
縄がほしいわ あなたの縄が

△

わたしはほしいの あなたの答が
海老に責められ ころがる美肌に
三つ四つ五つ 真紅の跡を
いついつまでも 残せるような

○

こんな歌謡曲がはやって、甘ったるい園まりのような声で、……エービニセメラレー……などと、ラジオから流れ、或はテレビに映されるなどのシーンを想像するのは、好事家にとってこの上なく楽しいことではないか。「花と蛇」の美しい詩が作られ、ふさわしい曲がつけられたら、きっと流行るのではなからうか。

—(終)—

△カット・あらい・かず



五月号で、東京YY氏の△屋外プレイ▽を読んで、世の中には、私と同じ好みの人もあるものだと思います、大いに安心もし意も強くなりました。

私も妻も、苦痛を伴う『ローソク責め』とか『ムチ打ち』は余り好みません。SMプレイ

懸賞「告白」手記「体験」入選作品発表

我が夫婦プレイの告白

— 神 戸 M Y —

イの中では、やはり羞恥責めが最高で、いささか変質的な傾向を自認する私には、嗜虐的な羞恥責め以外には満足することは出来ないのです。

最近では、専ら△剃毛▽△浣腸▽△写真撮影▽に主力を注いでいました。

そして先日、とうとう、妻が他の男性とセックスプレイを演ずるところまでエスカレートして私のSM的嗜好は最高の異常

な興奮に煮えたぎり、この間、言うに言われぬ喜びを見出しました。

それと共に一旦反省してみますと、果たして自分はこれでもまともな社会人だろうか、そして、まともな夫婦なのだろうかと考えさせられるのです。

日中、仕事をしているときは、そんなことは夢にも考えたことがないのに、一度仕事を終わり退社の時間になると私はこのいまわし

い想念につきまといわれ、むくむくと湧き上がってくる異常性に包まれて、自分ながら空恐ろしくさえなります。

私達夫婦は結婚して、今年で丁度十年になります。所謂十年選手で、すべての点で互いに油ののりきった頃というわけですが、この十年間、妻は平凡な主婦として過ごしてきたわけで、果たして私好みの女に飼育出来たかどうか疑問でした。

実際私も自信があったわけではありませんが、一応、今までに行なった一通りのプレイについて考えてみても私が命じれば嫌といったことがないことを思えば、飼育のしように依っては、可成りの線までゆけるのではないかと楽しみにしております。勿論、自分から進んで積極的にやるところまでは行っておりません。

最近、私は特に写真撮影にこり出し、始めは妻のヌードから次第に縛り姿になり、だんだん、それだけでは満足出来なくなって、今では剃毛した部分を中心に、あらゆる恥辱的な姿態をとらせては写すことに喜びを感じ、それがいつの間にか溜り、現在では約二百枚にも達しました。

先日、四月の上旬のこと、六甲山へ登って

初めて屋外で撮影しました。丁度花見頃で可成りの人出でしたから、それらの人々を意識しながらの撮影強行には相当苦勞しましたがそれが又スリルを増して、私達を刺戟したのも事実です。

ケーブルで山頂に着くと、すぐ山頂駅の便所で妻に全裸になるよう命じ、その上にレインコートだけは身につけさせましたが、そんな姿で約二時間、いろいろのプレイの姿を撮影しました。

レインコートを脱ぐと全裸なので、木蔭に入って人の気配をうかがいながら可成りきわどいポーズも写しました。排泄の場面を写すために持って行った浣腸器やロープ等を入れた提鞵を山の売店に置き忘れてきたのは、かえすがえすも残念でした。

さて、始めに書いた妻と私以外の男性とのプレイ、といってもセックスですが、このことについて、私はここ二、三カ月の間、いつも妻が他の男性とプレイ、或はセックスをしている所を空想していました。

まことに、異常な空想、というより妄想に近いのですが、私はむやみに惹かれる想いでなんとか実現出来ないものかと、そればかり考えておりました。

或る夜、私は思いきって妻に、絶対文句を言わないから、否文句を言うどころか、それに対して私は異常なまでの心理的興奮を覚え且つ喜びを味わうのだから一度でいいからやってみて呉れないだろうか、と頼んでみました。それに対して妻は、他の男性と浮気することスリルめいた興味はあるが、いざとなると、とてもそんな勇氣はありませんと答えました。

この返事を聞いて、私は、これなら脈はあるなど感じ、はやり立つ気持を押さえながら、氣長にチャンスを待っていたところ、偶然、よい相手がみつかったのです。

丁度『よど号』乗っ取り事件のあった日のことです。私のマタイトコで、ジャパンライの外国航路の貨客船に乗組んでいる早川というのが居りますが、突然会社に電話してきて、上陸したので今晚泊めてくれと言ってきたのです。

早川は、今までも私の家に五回ばかり訪ねてきたことがあるので、妻ともよく面識があります。

いつも風のように突然訪れてきては、飄然と出てゆくので、内心で妻のプレイ相手を物色していた私も、彼のことは意中になかった

のですが、彼なら最適任者です。私が早川に対してOKの返事をしたのは勿論です。

かねがね妻が「早川さんって男らしい方だわ」と言っていたので、この話は妻にとって万更ではないだろうと思いつくと、私の胸はもう矢も楯もたまらなくなり、会社にいる時から、わくわくしていました。

退社時刻になるのを待ちかねて飛んで帰り妻に、

「今晚早川が泊めてくれと電話してきたよ。」

七時頃くると言っていたから夕食の仕度を頼むよ。飯の前にビールを飲むがね」

そう言ってから、耳に口を寄せて

「どうだね、今晚早川と浮気してみないか」

と囁いたら、妻は年甲斐もなく、ぽっと頬を赤く染めて

「早川さんが、私みたいな女と浮気するもんですか、美人の奥さんがいるのに——」

と口では全然乗ってこない風なのですが、態度は早川さえ「うん」といえば脈がありそうな気配なのです。

「馬鹿いえ、早川だって男さ、お前の誘い方次第では、その場のムードでどうなるか判るもんか。それともお前、早川が嫌いか」と、そそのかしてやりました。

「別に嫌いじゃないけど、今の今まで、そんなこと考えたことないわ。第一、恥かしくて、私が早川さんを誘惑するなんて——」

とかなんとか言っていました。私にしてはかねて空想していた人妻と他の男性のセックスプレイを目撃することVの絶好のチャンスが訪れてきたのですから、必死になってプランを考えました。

七時まで余り時間がありません。そこで私は尻込みする妻に一案を授け、

「出来ても出来なくても良いから、その気で早川と二人きりで話してみないか。私はこれから二時間ほどパチンコをしてくるからな。」

早川には、主人から電話があつて残業で九時頃帰るといつてきたと言えよ

妻がトイレに行っている間に、私は妻の裸の縛り写真や私とのプレイ写真を、五枚ばかりアルバムに挟んで彼が何気なく見る様に机の上に置きました。

「じゃあ、これからパチンコへ行ってくるから。お前もうまくやれよ。ビールを忘れずに出すんだよ」

トイレから出てきた妻にそう言い残して私は表へ出ました。勿論目的があつてのプランですから、前もって裏口の木戸の掛金はわざ

とはずしておきました。

私の家は駅から歩いて十分ばかりですが、川に沿って一本道なので、早川も当然この道を通るのです。私は途中の書店へ寄つて立ち読みする風をして表を伺つておりますと、家を出てから丁度二十分位して、早川が急ぎ足に通り過ぎました。

私は、わくわくする気持を押さえながら、駅までぶらぶら歩いて時間を潰してから、家へ戻りました。勝手知った裏口から、そっと庭へ入り、部屋の中の様子を伺いながら土間にしゃがんでいましたが、一向にそれらしい気配がありません。

いつまでも土間にしゃがんでいるわけにもいかないし、そうかといって中の様子がわからないだけに、私はいらいらしてきました。

彼はアルバムを見なかったのか、それとも見ても行動に出なかったのか。或はあれだけ言っておいたのに、妻はやはりなんの積極的な態度にも出なかったのか。そんなことを考えると自分の独り芝居が馬鹿らしくなつてきて、中腰の膝を伸ばしかけたとき、突然、妻の悲鳴のような声が聞こえました。

早川と妻が何か言い争っている様な声がしています。言葉の意味は全然聞きとれませ

ンと声が聞こえなくなりました。

途端に、私の胸はどきどきと早鐘を打つ様に高鳴ってきて、カッカと体中が火照る思いで、思わず耳をそば立てました。

縁に腹這う様にして障子に耳を寄せて懸命に中の気配を窺ってみましたが、それから声はせず、しばらくして何か服を脱ぐ様な音が断続的に聞こえてきます。

「とうとうやったか」

そう感じた途端、なんだか佻しい様な、嬉しい様な妙な気持で、急に身体中の力が抜けてしまつて、思わず縁にがっくりと坐り込んでしまいました。

それから、どの位の時間が経つたでしょう、妻の声でもなく、呻き声でもない妙な音

△読後感の募集について△編集部

○六月号の読後感△は文字通り殺到するという文字にふさわしい寄稿の多さには、今更ながら本誌の読者の層の厚さに驚きを感じました。早速約束の緊縛フォトは全部の方に贈呈しましたが誌上掲載は今月号に間に合わないものが多く次号に発表いたします。

○今月号(七月号)の読後感も引続いて募集いたします。応募されました方全員に編集部作成の緊縛フォトをその内容長短に応じて、三枚乃至二十枚の範囲で贈呈いたします。誌上に掲載しました分には勿論稿料はお支払いします。

につられて私は庭へ回り、次の部屋へ忍び込んで襖のすき間から中を覗いた途端、私の足はぶるぶるとふるえ出しました。

すき間が狭いので中の様子がはっきりとは見えないのですが、妻はすでに全裸になっていのか、見えている部分には衣服がつけられていません。その前には早川の着ていた背広の上衣やズボンが脱ぎ捨てられています。

剃毛した妻の体を見て、早川も相当エキサイトしたのでしょうか。妻も私以外の男性と初めてプレイするので大分興奮しているらしく、相当動きが激しい様です。

ふだんは至って大人しい平凡な妻なのですが、いざとなると、この様な面もあるのだな——と恐ろしくさえます。反面、この様な妻を期待していたのも事実なのです。

息づまる様な緊張のひととき。

私は全身を耳にして隣室の気配を感じとっていました。

汗腺という汗腺から、分泌物がにじみ出てべったりと汗ばんでくる、長い時間が続いて私は、くたくたになつてしまった。

すべては終わった。

それを見届けて私は用心深く、そっと庭をん。物のすれ合う様な気配がして、急にプツ

通って裏口から街路へ出て、駅前の酒屋で冷えたビールを一本空けました。

その時の私の気持を、一体どう表現していかかわりませんが少なくとも悲しみというものはありませんでした。それどころか、妻のあの娼婦の様な狂態をじかに自分の目で見、これこそ自分が常日頃空想でしか描くことが出来なかったマゾとしての喜びを満たしてくれるものだと思いました。

早川は、やはり落着けないうまく、その夜一晩だけ泊つて、翌朝、船が待っているからと言って、早々に帰ってゆきました。

私はもう一度、誰か他の男と妻がプレイして呉れることを望んでいる自分を発見して、自分ながらあきれることがあります。これこそ異常心理でなくてなんだろうか——。

同封の写真は今年の一月に写した時の一部ですが、なにしろ私の写す写真はすべて露出的なものばかりですので、これでも一番大人しいものを選んだつもりです。掲載出来る様でしたら適当にカットして下さい。(終)

△編集部註△神戸MY氏から送られてきた写真はカットしても掲載出来ないものが多かった。編集部にてMY氏夫人をモデルにした撮影を依頼していたのですが時間的に余裕がなかった。なので間に合いませんでした。

ある偏執者の手記

獨

白

《アンジェリストに

開示されたるもの》

武 内 隆

私が飼育する 畸形のオンナ

異形に振れた下肢と 骨ばかりの上肢

深更の檻の中で それら異形の肢体が

充満する兎唇をかたちづくり

無音の叫喚をみなぎらせる

○ その叫喚が 巨大な一個の兎唇を
いやが上にも拡大し 虐げる檻を消滅する

○ 空中に浮遊して 不気味に輪郭を震わせる
その兎唇そのものの幻像が

○ 粘液にまみれる私の裸形に
執拗にまつわり 外皮を剥ぎ取ってしまう

○ 爛れた内臓と てらてら光る青白い性器
それが露き出された私の内部だった



室井亜砂路画

どろどろと溶ける 異形の兎唇と

次第に形を失ってゆく 露形の内臓

○

夜毎に繰り返す この陰虐の幻戯が

飼育する女と私の関係なのだ

(筆者作「畸形と檻」)

×

×

その出生時、血腥く粘液に爛れ、蜿々と続く産道を、△此岸▽へと腕きながら這い出る時、血みどろの胎児は考える。

今迄、何の妨げもなく、永遠に続くかと思われた暗黒の中、肉壁の密室で、△母▽の力強い脈動を子守歌に唯ひたすら貪り続けた安逸の眠りは、迫り来る肉壁の圧迫により、今その終焉を遂げようとしている。

△何故だ、それは一体何なのか▽

胎児のその断末魔の叫びにも似た問いかけは、空しく産道の壁面に訝し、急激な△母▽の排出作用は、胎児のその赤裸の肢体にとげとげしい外気が触れ、胎児の柔肌に△此岸▽の最初の傷痕が刻印される瞬間まで執拗に継続される。

△彼岸▽から△此岸▽への一瞬の交点に閃めく△死▽の絶叫、それが胎児のあげる産ぶ声である。

そして、ここに生を享けた胎児は、その索漠たる生存の内に、失われた胎内での永遠の逸楽を回想し、再度の現出を夢見る。

「マゾヒズムは、出産の疼痛(叩かれる空想)の快適な感覚への転換である。これはマゾヒズム的空想の他の典型的な要素からも理解できる。たとえばよくみられる緊縛の空想は、子宮内における運動不能な快楽状態の部分的な再現である」
—オットー・ランク

さて、次に述べる手記は、以上の様な志向をその無意識的内的契機とした、或るサディストの偏執狂的^{マニエック}な独白、乃至は呼びかけである。そのグロテスク趣味と病的な女体玩弄癖は、一読して明らかだろう。その病的さ故に価値を持つのではなからうか。

生活に何かりアルなものが欠けているという、それこそ唯一の実感が、私の存在を根元の方で急き立てている様に思われます。幻想の壁に甘美に覆われた過去を、幼児期を密室の中で一人陶然と想い浮かべることが、私を益々退行させることになったとしても、それはそれなりに理由のある生き方ではあります

が、その様な地点から空漠たる現実の一瞬の裂け目に於いて△生▽の原像を把えること、それが今の私の生命の第一義的要請だと感じています。

そのことが私の一瞬々々の生の実感であり私の存在を根拠付けけるもののなのです。

しかし、その為には、私は常に醒めていなければならぬ。そして私は、見ていなければならぬのです。女性を責める時、その女の苦痛と屈辱に歪んだ顔が、一個のオブジェと化し去るまでも……。

「サディズムの本質は、その肉体的加虐にはなく、むしろその冷酷非情なまでの心理的側面に露呈しており、サディズムの本質はあくまで、その徹底した心理的残酷さにある」と喝破したのは三島由紀夫ですが、倒錯が人間に於いてのみ在ることを考える時、それは真理を衝いたものだと思われまふ。

そして、そのことは、動物の性欲と人間のエロチスムをその精神性の存否によって截然と分かったG・バタイユの思想とも繋がって来るのですが、そのことは後で述べることになると思います。

ところで、M・ボス著「性的倒錯」(みすず書房)は、倒錯理に現存在分析を導入し

た点に於いて画期的な著作であり、精神分析史上に新しい地平を切り拓いたものとして興味あると思うのですが、そのことを別にしても、本書の半分以上を占めている様々な倒錯症例の分析はそれだけでも充分読みごたえのある内容を持っています。その中で、サド・マゾヒストの例としてレポートされているものに、患者の自己告白の部分なのですが、次の様な一節があります。

「私の快感は首をしめたり、しばらくつけたり窒息させるときの不安と、深い関係があります。(略)私が女達の首をしめても、女達に首をしめられても、それはどちらでもいいのです。(略)要するに問題は首をしめるといふ、事実にあります」(傍点は筆者)

そうなのです。ともかくも私にとっては誰でもよい、男が女の、若しくは女が男の「首をしめて」いればいいのです。エロチスムに於ける想像力という第一義的要因がここに露わになります。

この地点で、エロチスムは芸術に近接し得るのです。G・バタイユがその著『エロチスム』(ダヴィッド社)の序文の中で、「エロチスムは考察を進める人間が考察される対象となる場合にのみ考察されうるのである」

と述べ、又、H・マルクーゼが『エロスの文明』(紀伊国屋書店)の中で、「快樂原則の名で、実行原則に反抗することによって、倒錯は、『現実のテストをまぬがれ、快樂原則にだけ服従した』心的活動として、幻想と深い関係がある。幻想は、性欲の倒錯的なあらわれのなかで、もっとも実質的な役割を演ずる。それはまた、芸術的な想像として、倒錯を完全な自由と満足のイメージにつなぐ」と述べることによって、「倒錯」と「幻想」と「芸術」の根底的連関構造を洞察していることの出発点が、全て先の傍点の部分に集約されている様に思われます。

そして又、この「倒錯」と「幻想」と「芸術」の三位一体を成すサークルから、この小論のモチーフである「グロテスク風」の本質が透視されて来るのですが、それを説明してゆく前に、右の三位一体のサークルが、奇巧的作品の中にどの様に表現されているかを、具体的に見ておきたいと思ひます。

次に私があげようと思う作品は、倒錯に於けるノスタルジアの芸術的表現であると同時に、グロテスクなものの本質を云わば比喩的に開示しています。

私が、この文章を書こうと思ひたった直接

的な契機となったのは、本誌二月号掲載の、室井亜砂路氏の文章「僕の憎まれぐち」なのですが、その室井氏のイメージ画の中で、私の内なるノスタルジアの琴線に触れたものがあります。それは、S・44・5月号の奇クサロンに掲載された「想い出」という作品なのですが、そこには私のノスタルジアの全き表現があるので。

その作品に描かれている、学生服を着た人物の凝固した表情は、幼年期の「私」の、永久に静止し続ける、原像といえると思うのです。その夢想的に膨らんだ胸部と、恥らひを見せてひっそりと息づく女の子の拡大されたふくよかな臀部は、卑俗な現実を超えた非現実の童画的表現です。

その背景を成す開かれたガラス戸の外の庭には、やつでの数葉の葉っぱと伏せられた植木鉢の外は何もありません。ある筈がないのです。この作品世界は、それ自体が「非在」なのですから……。

庭の上空には、大型旅客機の影が張りつきその非在の空間を云わば逆説的に表現しています。その飛行機は幼ない日々の「想い出」を一身に背負って、非在の空間に張りついた筈、永遠という非時間的な時の中を、いつま

でも飛び続けるのです。

そして、最終的にこの作品を決定的なものにしているのが、壁の陰から差し覗いている日本髪の女の人の顔です。他人の目で見られることによって、この作品世界内の情景は動かし得ぬ永遠のものと化するのです。

覗いている女の人は、男の子（僕）の実際のお姉さんかも知れません。その時、「僕」と「お姉さん」の間にある目には見えぬ逆らい難い絆が、この情景を益々「見られた」決定的に動かし得ないものにします。この作品全体の静謐な永遠に凝固したかの様な沈黙の裡に、エロチスムの中核を成す「死」のテーマを見るのは私の一人勝手な妄想なのでしょう。

さて、エロチスムの本質はその非日常性にあるという意味のことを室井亜砂路氏は書いておられますが、そのことは直ちに次のミケランジェロ・アントニオーニの言葉に繋がるでしょう。

「女の肌が一番美しく見えるのは、緑の草の上でも、豪華なベッドの上でもない。暗いスタジオの中である」

外部世界とは全く絶縁した所に設定された密室、それがスタジオであり、その中で剥き

出された女体は、執拗にカメラの目によってなめ廻され、徹底的に凌辱されるのです。その密室とは、マイホームの中の寝室などではなくて本質的に日常世界とは切り離されており、その外部に於いては否応なしに日常世界と連続したものである女体が、その密室Ⅱ非日常空間（虚構空間）の中に連れ込まれることによって、云わば非日常性そのものとして剥き出され、そこで極限まで外皮を剥がれることによって、エロチスムの本質的な裂け目、云わば深淵を現出するのです。ここに人間存在の根源的な連続性が開示されるのですが、ここから、「暗いスタジオ」Ⅱ虚構空間とⅢ赤裸の女体Ⅳとの密契による本質的に芸術性（虚構性）を帯びたサド・マゾヒズムⅡグロテスク風の形而上学が導き出されるのではないのでしょうか。

エロティシズムは、禁じられ隠されることによってその魅惑を保ち続けるものなのですが、日常世界に於いては、あくまで抑圧されなければ人間は生を継ぐことは出来ません。昼の世界、つまり日常世界に於いて、我々は偶々こうしたエロチスムの本来的な非日常性の深淵を目にすることがあります。

例えば、これは卑近な例ですが、電車に乗

っていて、前に坐った女の腿を目にする時、極端に云えば、我々はその時、生きる為に働くという云わば食欲を原則とした生産機構から全く逸脱し、一瞬の内に生起する、エロチスムのテーマの一つであるⅢ永遠Ⅳの中に吸い込まれて行きます。しかし、衆人の非難の視線にも拘らず、目前のⅢ誘惑Ⅳに尚も、のめり込もうとする時、我々に与えられるものは、Ⅲ社会Ⅳからの脱落、即ちⅢ死Ⅳがあるのみなのです。

こうした本来的なエロチスムの深淵が開示される処を一種の場として把えるならば、これを、生産機構、即ちそれに支配された日常生活から逸脱しているという点に於て、Ⅲ疎外されたものⅣとして規定することが出来ましょう。「暗いスタジオ」も同様に、自ら疎外された空間に外なりません。

そのⅢ疎外された空間Ⅳに於いて現出するものとは、云うならば至高のもの、至純のもの、至美のもの、至聖のものであり、又、その同じレベルに於いて、対極にⅢグロテスクなものⅣが生起するのです。

そして、このⅢグロテスクなものⅡグロテスク風Ⅳとしてのエロチスムを、日常性のぬるま湯にどっぷりと漬け、豚の様に惰眠を貪

っている人達を「倒錯」と呼び、又「変態」と呼ぶ訳でしょう。

この「グロテスクなもの」変態が、「聖なるもの」と共に同じく疎外されたものであり、又その「疎外された空間」を「虚構空間」「芸術空間」として把えるならば、「サド・マゾヒズム」「変態」に於ける「異常美」ということは、正当なものとして表現し得るのではないのでしょうか。

人間の牝である女が、その「スタイル」に於いても動物性を強調される「妊婦腹」然り又古式に則り、正装した姿態に於いて一挙に「グロテスクなもの」が奔出する「切腹」に於ける「悲愴美」然りです。

さて、サド・マゾヒズムに於いて現象的にグロテスクな表われを前面に押し出しているものはと云えば、先ず「鼻責め」をその嚆矢とするでしょう。

これは、心理的加虐としても、その対象の抱く屈辱感、被虐感の点から云って極めて効果のあるものの一つです。

「鼻責め」と云えば、直ぐに増田夫妻を思い浮かべる程、私は夫妻の鼻責めプレイに魅了されているのですが、現在、手元にある数少ない奇ク誌の中に、「連縛無残像」と題した

SMカメラ・ハント「増田みゆき・木村洋子の巻」が掲載されているものがあります。

(S・43・7月号)

この中で展開されている数々の責めは、全て私の嗜好と一致したものと云えます。緊縛拘束機、鼻孔開拡器、革製全身拘束帯、股木付十字架、鼻孔吊上具、首枷、足枷等の責めによる責めと、それに加えて、妻以外の女性と第三者を交えたSMプレイが次々に展開され、プレイは遂に緊縛女体を前にした最後の行為にまで及ぶのですから、この上、何を云わんや、です。

刑具に固定され、微塵も動けぬ剥き出しの女体、そのイメージは私の希求して止まぬものなのです。冷酷な外科医の様な視線が女体を侵犯する時、その無防備の女体は、全ての人間性を剥奪された一個のオブジェと化します。それは生きた女体標本であり、エロチックな物体(「物質」という極めて逆説的な、奇妙でいて魅惑的なもの)に変貌するのです。そこに展開する光景——艶やかな純白の柔肌に包まれてあるべき女体の裏側が、箆口具を装着されることによって、云わば「四次元」的軌跡を描きながら、さかしまに世界を包み込むようにする光景は、限りなくグロテスクで

す。しかし、その軌跡が描かれ尽した時「グロテスク」という言葉は最早不用のものとなります。その時こそ、「グロテスクなもの」をその表徴とした「世界」が、一挙に「聖なるもの」に変貌する瞬間なのです。その「聖なるもの」とは、「聖別された生」の謂に外なりません。

その至高の瞬間に全き自己同一性を獲得する、この「グロテスク演戯」は、より宏くより深い極限値を持つ為に、より大きな振幅を持つ過程を演じなくてはなりません。「日常世界」と疎外されたものとしての「非日常空間」の間隙にある深淵、それをより巨大化せしめることが、即ちその深淵の真只中に現出する「聖なるもの」を、より熾烈に純化することになるのですが、さしあたっては、その具体的な方法について次に書きたいと思えます。

上述の如く、刑具や拘束具は私にとって欠かすことの出来ない「彼岸」へのかけ橋なのですが、その際は是非とも考慮すべきは、女体の置かれるべき場です。最早生きている物質に他ならない女体は、あくまでも疎外されたグロテスクなものとして強調されなければならないからです。

単に物質化の方向を端的に追求するという直線的なサディズムを望むなら、例えば物置の様な、日常生活とは余り縁のない、云わば非人間的な所に放り込んで置き、自分は離れた所にいて、非情な無関心を装うことによって、女体への加虐を苛酷なものにすることが出来るでしょう。

しかし、ここにもう一つ方向があり得ます。それが、先述した日常性と非日常性の間に開ける裂け目を巨大化するという方向なのです。比喩的に或る情量を想定するなら、それは、こうなります。

一種の靴フェティシズムに属すると思われるが、必ず相手の女性にハイヒールを履かせなければ没入できないという性向の持主がいます。これを説明するのにそれはフェティシズムの変型だと云っても何も説明されたことにはならないので、この例などは、女体に対するサディズムの視覚的要素が比較的静謐に追求された一例だと思われるのです。つまり、衣服を剥がす、という一点にサディズムが集中されている訳で、その正に剥がされているという状態を強調する為に、唯一つハイヒールだけが残されているのです。

全裸というのは、それだけでは要するに生

まれた俤の姿というだけで、天真爛漫なセックスを追求するならともかく、もっと歪曲したデフォルメされたエロティシズム（グロテスク風変態）を演劇する為には、出来る丈珍奇な修飾音符の伴奏を必要とする訳なのですから。

全裸という非日常とハイヒールという日常とのコントラスト、この演出技法が剥き出された女体をより赤裸に印象づける方法の一つなのです。ハイヒールをつけた裸形の女体、この正に歪な不協和者の全体が、ワグナー風の無限旋律の螺旋線の上昇につれて増々巨大に膨れがあり、世界の全体を覆う時、仮構された「密房」の中でのデカダンスの暗い情念が真紅に開花するのです。

さて、話をもっと現実的に具体的に進めていきましよう。

「緊縛拘束機」によって固定され、強制的に極限まで開かれた女体の場合、既に女体それ自体が「非日常」そのもののものですから、次はこれを日常性の真只中に置いてやれば、いやが上にも両者のコントラストは鮮明になる筈です。例えば、以前奇クにも掲載されたことのあるアイデア、応接間の置き物にして、それを眺めながら同好の士と欲談するという

のも、他者の目の介在によって、△禁示▽はより彼方へと乗り超えられ、△恐怖▽は一層募るでしょう。

この「拘束機」による女体鑑賞の場合、その人の嗜好にもよりましようが、女体の物質化を強調するためには、鼻腔の吊り上げ等の鼻責めを併用するより、山本章氏の様に聴覚以外の感覚は全く絆創膏等を遮断して、女体の物性を強める方が、私には効果的だと思います。

こうした責めを実行しようすれば、矢張、「奴隷妻」の様な存在が望まれますが、そういえば、以前「奴隷妻」の飼育ぶりを発表された山本武男氏の、その後の進展振りは如何でしょうか。温泉旅行先の宿屋で女中さんが来ても、妻を奴隷姿の偽、床柱に繋いでおいた話（S42・7月号）や、郊外の松の木に奴隷妻を全裸で猪吊りにした話（S43・6月号）は、私を狂喜させてくれましたが……。

少々話が横道に外れる様ですが、この様な「奴隷妻」を飼育するというケースは、大変貴重なものだと思えます。日々の務めの中で僅か許りの余暇を惜しんで為される「日常生活安穩」の標語の下での、いわばカッコ付きの夫婦プレイよりも、その徹底性、熾烈さに

於いて「奴隷妻」の方に私は注目したいと思うのです。サディズムの窮極が死であるとしても、いわば自然死にまで延長された一寸刻みのサディズムこそ、その苛酷さに於いて私の望みたいところなのです。生かさず殺さずの状態に置かれた「奴隷妻」の上で交錯するサディズムの冷酷さと残酷な優しさ！このパラドキシカルな心理的側面がサド・マゾヒズムの真髄なのでしょう。

さて、山本氏の飼育になる奴隷妻の全身鎖のユニフォームは、正に△グロテスク風△の外、何ものでもない表徴でありましょうが、その表徴を次には肉体にまで刻印したらどうなるでしょうか。例えば、抜歯なども、その一例でしょうが、奴隷の食生活を完全に支配することが可能となり、その時から私には、奴隷妻がブドウ糖注射や滋養浣腸によって生きながらえる、女体モルモットに変貌するところが想像されてくるのです。

想像が少し許り過激になった様ですが、事を△グロテスク風△の肉体的表徴に限れば、先の増田みゆきさんの場合ですが、S40・7月号掲載のフォトと、S43・7月号に載っていたフォトを比較してみて、私の気がつくところがありました。

それは、鼻、即ち鼻腔と鼻翼の大きさの相違であり、又鼻の柔軟性の相違です。両者の間には、まる三年の月日が介在している訳ですが、その間、殆ど連日に於いて実施されたであろう鼻責めは、みゆき夫人の鼻孔をいやが上にも拡大させ、人差指の一押しでぽっくりと洞穴を覗かせる程になったと察せられます。異様に開いた鼻腔の中に、一本の鼻毛も余さず除去されているらしいのを見ると、私の暗い血が妖しく騒ぎ立てるのを覚えます。そして、もっともっと鼻孔を拡大して欲しいと思ってしまうのです。一目で異常さが分かる程に……それが哀しくも飼育されたマゾ女Ⅱ牝畜の表徴と、私には映るのですから。その巨大な鼻翼は、みゆき夫人の妊娠によって膨満した、今にも垂れ落ちんばかりの乳房と相俟って、ホモ・グロテスクのよき完成を見る思いがしてしかたがないのです。

×

×

この様に△グロテスク風△とは、変態（変則的様態^{スタイル}）と同義なのですが、同時に映画評論家、種村季弘氏の表現（「肉体について」——「怪物のユートピア」所収・三一書房）を借りれば『蝶に変身する前の芋虫』という比喻に於いても表現することが出来ます。

そうです。つかの間の生を唯々生殖の為だけに費す、つまり、エロスの存在としてのみ生きることを許された天使の如くに優雅な蝶は、様々な刑具で拘束されて芋虫の様に醜く歪んだ女体が、その果てに至りつく、至聖の瞬間を表徴する、こよないシンボルといえるでしょう。

ここに△グロテスク風△と△聖なるもの△という、共に日常世界から疎外された実存が一瞬の内に交差する至美の地点が明らかとなります。

標題の「アンジェリスト」なる言葉は、この蝶を天使に置き換えた言葉のつもりには他なりません。この世のものではない、いわば向う側、つまり彼岸の存在であるエンジェルは胃袋Ⅱ消化器を持たず、必然的にこの世に於いては束の間の生をのみ、許される蝶として表現されると思います。

華麗な文様を翻えして、可憐な面影で虚空に舞う蝶の形姿は、生を讃歌するかの様な優美な外見の向こうに不吉な死の影を透視させます。常に死と隣り合わせに在る、このことが、蝶のあの短くも華麗な生の根底に、作用しているのです。

熾烈に燃え上がる情念の一瞬の燃焼に、エ

ロスとタナトスの窮極的止場を夢見るような蝶こそ、生命維持↓労働↓生産機構の下での抑圧体制から逸脱した△倒錯⇨変態▽の論理を十全に体现するものではないでしょうか。

「緊縛女体」に象徴される△倒錯▽に死が透視されるのは△拘束↓固定化↓物体化↓物負化↓死▽という公式に於いてなのだと思うのですか、畢竟「緊縛女体」の持つグロテスクさは人を恐怖の奈落に突き落とす△死▽そのものが持つグロテスクさに他ならないと言えるでしょう。

現代美術に於いてもグロテスクなものに進出は、シュールレアリズムをその先峰として甚だ過激な様相を呈しているようです。特にグロテスクなものは△死とエロス▽という主題の下で表現されることが多いのですが、例えば裸体の少女と凶々しい骸骨という組み合わせは、古今を通じてエロティシズムの深奥を幻視した芸術家の、好んで描く画材だと言えましょう。

この場合、骸骨の持つグロテスクさは、少女の裸身の併置によって際立つ訳ですが、それ以上に、両者の組み合わせそのものが異様にグロテスクさを表現しています。そのグロテスクさは、ハンス・ベルメールの描く「死

と少女」——巨大な骸骨が裸体の少女を抱き上げ、肉感的な肉付きを見せる少女の内股に噛付いている——に於いて決定的です。不吉なまでに陰惨で過激な表現を見せるこの芸術家は、人体解剖への狂執と同時に人形制作の偏執に於いても知られています。ベルメールの一見極めてグロテスクに見えながら、その実エロティックそのものの人形はピュグマリオニスムの衝動的な芸術的表現だということが出来るでしょう。人体解剖とピュグマリオニスム、そこに拘束女体の物質化のイメージが重なって来ます。

そういえば、室井亜砂路氏の描く少女像、(S44・11月号、二百十八頁等)の背景に、凝然と広がる沈黙の空間は、虚無そのものにも見え、沈黙↓虚無↓死のアナロジイに於いて囲まれた少女像は「エロティシズムに於ける死」のテーマを一身に表現しており、氏に於けるアンファンティスム↓ロリータ趣味は△死▽というモチーフを持つことによって氏の内に隠されたピュグマリオニスムを露呈するものである、という私の見解は、偏執狂的に歪曲された、偏見に過ぎないのでしょうか。

ともあれ、サド・マゾヒズムに於いてシュ

ールレアリスト、アンドレ・ブルトンの「地上の全ての矛盾が止揚される至高の一点」という言葉を透視する私の、迷路にも似たそれこそグロテスク風のエッセイは、これで一先ず終わることにしましょう。

終わりに私の愛読する種村季弘氏の、映画評論集「怪物のユートピア」から一節を抜き書きさせていただき、全てのグロテスク風の道を邁進される諸兄姉にあてた。この拙い、「グロテスク宣言」の末尾を飾らせてもらいたいと思います。

——「勤勉なる労働者諸君に呪いあれ！
同じくカッコイイ床上手の男女諸君に呪いあれ！

もうおわかりだろう。今日、肉体について語るとすれば、週刊誌小説のベッドシーンには金輪際登場することのない、畸型やかたわものや変質者、要するに怪物について語るほかないということが。彼らの肉体こそは天使的情熱の純一無垢の外観なのである。たとえそれが蝶に変身する前の青虫のようにみにくくみえたにしても——

——(終)——



異常と正常の間

東田 堯 児

現代はまことに異常な事件が連続して起きている。

『よど号乗っ取り事件』が世の耳目を驚かしたかと思うと、十日も経たずに大阪の地下鉄工事でガス爆発を起して七十数名の死者を出している。カンボジアの政変から端を発してメコン河には両手を後手に縛られた男女数十の屍体が流れついたなど、まさに異常な事件の連続である。

この文章のペンを走らせている間にも、万国博の太陽の塔に赤軍派と称する男が登り「万国博を中止しない限り下りない」と叫んでいるとニュースが流れてきたが、こんな突飛な行動をやらかす人間はこれからも、どんどん出てくるような気がする。無関係な人間を

人質に取って無鉄砲な要求を通して通そうという凶悪犯が次々と出て来ないという保証は少しもない。

こうした一連の事件を願ってみて興味のある事象が起こりつつあることに気がつく。

今までであったら、こういった異常な事件が発生すると必ずといってよい位、社会環境の責任だとか果てはピンク映画、エロ雑誌の罪だとかテレビのお色気番組の影響だとか言われたものだが、最近では流石の連中も言わなくなった。

赤軍派の『よど号』乗っ取り事件では「こんな悪い奴を生んだのは親の罪だ」と犯人の親を攻撃する者までが出てくる始末である。金婚老の寸又峽事件から『よど号』乗っ取り事件を見るとSM的

にも大いに興味がある。猟銃や日本刀を振り廻したからといって彼等をサディストだという者は少ないだろうが、人質になった人達はその時の言動を願ってみると多分にマゾ的な臭気がぶんぶんする。石田機長が東京へ帰って来てから記者会見で犯人達のことを「あの野郎達、殴り殺してやりたい気持だった」と語っているが、平常だったら歯牙にもかけない犯人共に、只、相手が武器を持っているというだけで、言いなり放題にならざるを得なかったのである。

寸又峽事件でも犯人の金と握手をしている人質のことが記事になっていたが、今回のハイジャック事件でも、金浦空港でよど号から降りる人質が犯人達と握手している写真が載っていた。少なくとも飛行機を利用する位の乗客だからエリート達に違いないのだが、武器で嚇されるとその多くはマゾになっってしまうのである。

逆に人質を監禁する犯人にとっでは武器を持っているということだけで生殺与奪の権を握りサド的気分を満喫することが出来るのであるから、今後、模倣するといふこの種犯罪の傾向から考えてみ

ても続発する可能性が多い。警察部長を呼べと言っても飛んでくるし、陳謝せよと言えば謝りもする。社会党の代議士を首実検に寄せせよと言えば、わざわざ東京から馳せ参じてくる。普通だったら、こんなことが一体出来るだろうか。飛行機の中でも全く彼等の言いなり放題である。犯人にとっでこれ以上のサド気分はないであろう。私はSMの面から考えて、人質になった被害者と武器を持つ犯人との心理面の葛藤に多大の興味を持つ者である。

普通だったらとても対等に話をする事が出来ない相手が、どんな無理難題にもべこべこと言いなりになるということは、犯人の男にとっでは、ぞくぞくするようなサド的快感であろうし、丸腰の被害者にとっでは生命の危険を感じているだけに、最大のマゾ的経験であろうと思われる。

もし仮りに犯人の脅迫者が若い美人であったとしたら、被害者である男性は一体どんな反応を示すだろうか。異常な事件の連続発生のおかげ、私は異常と正常の間にどのような隔壁を設けたらよいのか大いに疑問を抱くと共に、SM的な観点から大いに興味を持った。

『緊縛モデルの素顔』について

塚

本 鉄

三



になる。本誌に華麗なタッチの画を描いていた四馬孝氏と二人で悪童ぶりを発揮して、若い女性を縛っては私は写真を撮り彼はそれを画にした。

先日、辻村隆氏と逢った時「あんたは余っ程関谷さんが好きなんだね、四月号の八見果てぬ夢の物語Vなんか読んでみると、つくづく、そう感じるよ」と彼は言っていた。反対する理由もないので

「ああ大好きだよ」と答えておいたが、勿論関谷富

佐子さんは好きで好きで仕方がないから熱をいれて写真を撮ったのは事実である。しかし以前『緊縛モデルの素顔』で書いたように、私の撮った緊縛モデルの数は相当

五月号に載った『片えくぼのマリア』は日曜日の夕方、三時間ばかりで書いて、あと二十枚位は濃厚なところを筆にしようと思っていた矢先、悪友が誘いにきて、あいう程度で終ってしまった。

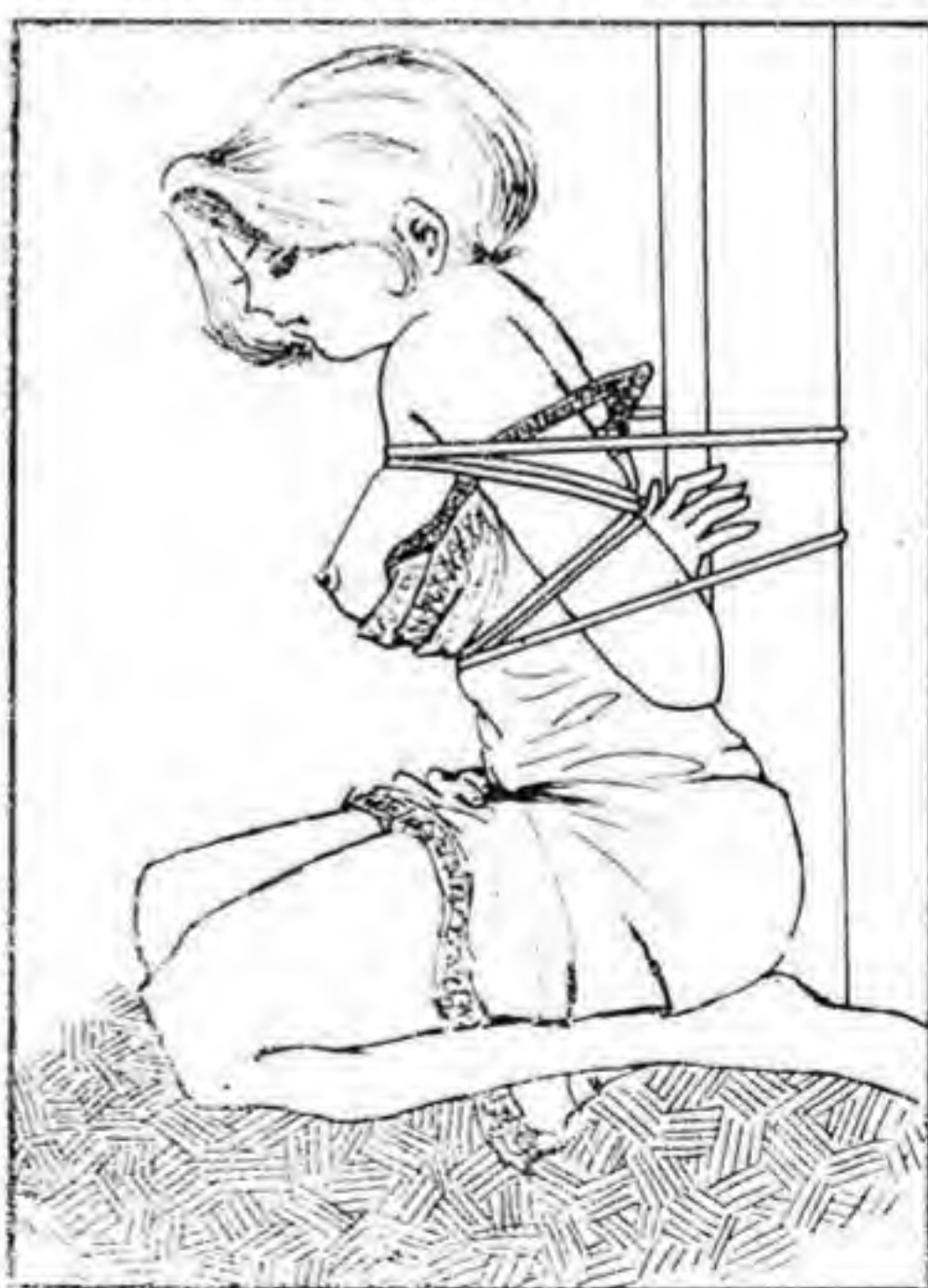
編集部から書け書けと言われながら、今月号ではとうとう書けなかったが私の撮った写真のネガが何千枚とあるので、暇を見ては興の赴くままペンを走らせることにしよう。

(写真は豊満なポインを誇る愛川悦子嬢)

イメージ画二題



『新しいドレス』 志羽 利也



『柱に咲く可憐花』 神戸狂四郎



— 第七十三回 —

辻 村 隆

お目にかけたい女性がいるから
会食しがてら、春宵一刻、酒を汲
みかわさないかとの箕田氏の電話
に、根が好き者の私、山積する仕
事もおっぼり出しておいて、指名
の料亭Hに駆けつける。

約束の午後七時におくれること
一時間——。

恐縮しながら部屋に通ると既に
箕田氏と差し向かいで若い、見る
からに理知的な女性が、既に頬を
薔薇色に染めて、しきりに愉しそ
うに喋っていた。私には一向、未
知の女性である。紹介されて、件
の女性が、五月号から告白長篇小
説『被虐の旅』を書き出した由利
美千子さんであることをはじめて
知った。

正直いって、私には意外であっ

た。

あの告白、小説の内容の、しっ
かりした書きつ振り、手馴れた文
章の運びからして、てっきり女性
名を名乗る男性の書いたものと感
じとって、そう思っていたからで
ある。

女性に年令をお聞きするのは失
礼に当たるので遠慮したが、私の
推測では三十才にはなっていない
様に思われ、すらりとした長身
で黒髪が長い、一見タレント風の
方である。

この料亭名物の岩風呂でゆあみ
して、丹前をきておられたが、衣
桁にかけられた爽やかなブルーの
ハイネックのセーターと、漆黒の
パンタロンが、彼女の妖しさを秘
めた正体を物語っているようであ

った。

彼女は数年来の奇クのファンで
あった。私という人間が、経営者
箕田京二の薩武者か、或いは塚本
鉄三と同一人物だと思っていたら
しい。

私の素顔はカメラ・ハントやテ
レビ画面でも既に晒け出してはい
るが、箕田氏や塚本さんの顔はつ
いぞ一度も見たことがない故、或
いは辻村隆イコール箕田京二、更
に塚本鉄三と三重にダブらせて皮
相な観察をしていたらしかったの
である。

それを確かめるべく自から箕田
氏に連絡し、私を引っ張り出した
というのがこの夜の真相らしかつ
た。

この一件でも分かる通り、非常
にハキハキした、行動的なお嬢さ
みである。いや、お嬢さんという
のは当を得た言葉ではないかもしれ
ない。

SM談義たけなわになり彼女は
自分のM性をはっきり披露するに
及んで、Mの遍歴にともなう、男
性との交渉を淡々と語ったのであ
った。

結婚というこの古いしきたりに
とらわれぬ、自由な男女の交渉を
つづけ、その中に、只管に由利さ

ん自身のM性を醗酵させていたの
である。

機会があればSMプレイ的一幕
を持ちたいと、私の嗜好を挑発す
るような口吻で、その癖キラキラ
光る黒耀石のような眸の奥にハイ
ソサエティの断片がきらめいて、
内心フト手強さを感じさせる女性
であった。シナリオもルポライタ
ーも飽きがきたから、鬱積した想
念をあらわにざらにぶちまけて、こ
れからドンドン書きまくるそうで
ある。

彼女にいわせると、私のカメラ
ハントが田舎くさく、何とはなく
野暮ったいそうである。云い換え
れば若々しいエネルギーな現
代のセンスに些か乏しいと、ズケ
ズケ仰有るのであった。

会ってみて意外に思ったのは、
書いているハントとは感じの違う
方だと、しげしげと私をみつめ、
惚れてみてはいけないかしら、な
どと、気を惹くような妖しいアル
カイックな口調に、私は終始ふり
廻されていた。

テレビ関係の某女史——それ以
上は、もう彼女のプライベートの
侵害になりそうでいえぬが、とも
角、素晴らしい女性が登場したも
のである。



— イメージ画 —

『カカシ』伊藤祥子

この料亭自慢の庭園に出て、甘い夜風が頬を撫でる夜桜の下をそぞろ歩きしながら、なまめかしいボンボリにはてった顔を見合せて、彼女と私は堅く再会を約したのであった。

由利美千子——。この女の名は当分、私の脳裡からは消えそうにもない。

万国博見物のために台湾から来日した、彼のファンだという社長をつれて、何のまえぶれもなく、団鬼六氏がヒョッコリと私宅を訪問される。

日頃は御無沙汰勝ちなのに、この欄で娘の結婚を知ると、早速結婚祝に、伊勢丹の座布団を送って来てくれる彼である。

東映の仕事といい、鬼六さんにはいろいろとお世話になりづめである。

突然で何の欲待も出来ないが、ホテルを予約してある二人に安心して、夜の更けるまで、愉しいSM談義に、思わず時の経つのを忘れてしまった。

台湾の社長さんにもこやかに是非、鬼六氏と一緒にいらっしゃいと、しきりにすすめてくれるが、独りの愉しみの姑娘相手のプレイなら、或いは許されても、国是の違いは到底、発表は許されないだろう。ただ単なるSMのプレイが人種風俗の違いから、国辱的な誤解をされないとも限らない——。

そんなことを社長さんに話すと、彼は当然あり得るという風に大きくうなずくのであった。

ことがことだけに、やはり日本の女性を対象にプレイしている方が無難な様である。

翌日、ご一緒に来阪の、団氏夫妻と二人のお子さんをのせて、奥さんの希望で奈良へと向かい、古き社寺巡りにつき合ったが、パンタロンがピッタリ身についた、すんなりとした教養溢れる奥様の麗姿に、『花と蛇』の静子夫人のイメージがダブリ、私は眩しい思いで夫人の一举一動をみつめていたのであった。

『家畜人ヤプー』の評判が遂にテレビに登場する。

四月二十四日の午下り、仕事をしながら見るともなくかけていた『三時のあなたに』の番組中にいきなりドキッとする家畜人ヤプーの、Sの女、Mの男の群像がうつる。これで都内をデモンストレーションしたらしい。

司会者は栗原玲児と山口淑子の両氏で、しばらくの間はM談義である。

この本を今回発刊した、都市出版社の矢牧氏も登場して、幻の原作者、沼正三氏について語り合いやがて、アメリカ、スエーデンにも、翻訳して出版するのだと意気

当てるべからざる勢いである。

沼正三氏の真の正体を知っている者は、始めて『家畜人ヤプー』を掲載した箕田氏と、沼氏の代理と称する二人ぐらいのものではなからうか。沼氏が、書店の『家畜人ヤプー』と同じ書棚に、自分の著書が並んでいて、或る種の感慨にうたれたと仰有っておられるそうだが、正体を現わすことはどうやら身の破滅でもあるらしい様子である。

しかしそれにしても、平凡パンチ別冊『オー』で、このテーマをとり上げ、K誌がそれを機に廃刊されたなど書いていたが、余りにも非道い不見識である。

もっとよく眼を見開いて、今も市場に罷り通る『奇ク』の、二十数年来生き残った姿をみよ——といいたい。

世の中はSM時代到来といっても、わが奇クは、昔も変わらぬ姿で、時代に阿諛迎合せず堅実に生きていたのである。

今頃になってバタバタと騒ぎ立て、それをスクープする『オー』誌のK誌廃刊云々の文句が気に喰わない。書くなら書くで、もっと事実をよく研究してからのことにするべきではなからうか。

読後感、彩ある縛り

長田二郎

奇ク誌を愛読する様になって、何年になるだろう。その間、辻村氏、山本氏等のカメラ・ルポに幾多の女性の縛りフォトを、楽しませて頂いた。目を閉じれば走馬灯の如く、数多くの女性の姿が、浮かんで消えるのだが、筆者の脳裏に深く刻みつけられた女性は、梨花悠紀子嬢である。現在まで可能な限り彼女のフォトを手に入れた。ともあれ、最近新進塚本氏のカメラ・ルポが連載され始めたが、こういった変化に富んだカメラ・ルポの連載を喜ぶのは、筆者のみに限るまい。

しかし奇ク誌六月号に寄せられた塚本氏の「カメラ・ルポ」金髪碧眼の美女を縛るは最近のヒットではなからうか。万博のため来日した外人女性を、たくみに誘導して、縛りフォトの撮影に成功された塚本氏の、プレイへの執念には唯々敬服の外はない。これがカラーフォトであるならば、さぞかし見事なものであったろうと、塚本氏に羨望の念止みがたく、又編集者に、今後は誌の巻頭にカラ

ーフォトを一枚でもいいから、掲載されることをお願いしたい。

だが、掲載されたフォトはモノクロでも、塚本氏の名文は十分にカラフルである。碧眼というにふさわしいサファイアのように澄んだつばらなひとみ、ブロードの毛髪と同じ色の毛が霞のようにもやわっている、ライトを当ててみると白く輝いているといった白さ、黒味を帯びた畳の上に、そこだけがホワイトの絵具で刷いたような彼女の裸身の白さ等の表現は、まことに見事であり読者に十分に色彩豊かなイメージを与えてくれる。

又塚本氏の視覚的及び触覚的な文章表現に、筆者は度々思わず唸らざるを得なかった。彼女の前の毛が、黒髪と違って、遮蔽度が低い、悪くいえば何かぶよぶよとしているようで、縄が喰い込むというより、むしろ陥没してしまふのではないか、ライトを逆光で当ててみると、金色に輝くうぶ毛が浮き上って見事である、陶器のように冷たい感じがする

S・コレン
クシヨ

『遺伝?』

豪城二

くらいシミ一つない白肌でこんなうぶ毛がある、顔面は勿論のこと、後手に縛った手指、それにぐっと反った足の指、緊張した太股、臀部、私は嗅ぐように鼻を近づけて、トゲトゲの麻縄は真白い肌にとって横暴なばかりに強いアクセント、シャッターを切り終えると私は太股の白さを確かめる様に掌でさすってみた、等々、カメラ・ルポライターならではの文章であろう。

お互いに言葉たらずのためプレイするものと、されるものとの間の心理的葛藤、例えば不安、動揺諦念、プレイへの急速な傾斜とい

った一連の動きについては、被縛女性の表情、瞳、動作を確かとみて塚本氏はプレイされているが、可成り困惑された様であり、それが先月号、先々月号の川路叢子夫人、関谷富佐子夫人の場合のカメラ・ルポに比較して、やや精彩を欠いている恨みがあるのは残念であるが、相手が外人女性であってみれば、これも亦已むを得ない次第であろう。

とに角、異国の女性に対して、これだけ執拗にカメラの眼と達文でプレイを敢行し、寄稿された塚本氏に、喝采を送ると共に、今後の一層の活躍を期待しよう。

M女性を求むの弁

牧 田 静 夫

最近、女性の方の呼びかけが多いようで、四月号においては、二人の方が写真入りで呼びかけておられ、その勇気に驚いている次第です。

私もその方たちや、それから誌上に載せないまでもパートナーを求めておられる方に、M女性を求めている男性の一人として筆をとりました。

以前にプレイの経験は有りましたが、その時の相手の方は、SMよりも、それに伴う愛撫を求めま

す。どうも私の感覚からすると、単なる男と女の関係に陥る事を恐れましたので、それっきりになっ

てしまいました。そんな訳で伊藤圭子さんとならうまくゆく様な気がするのですが、なにしろ遠距離なので困っております。

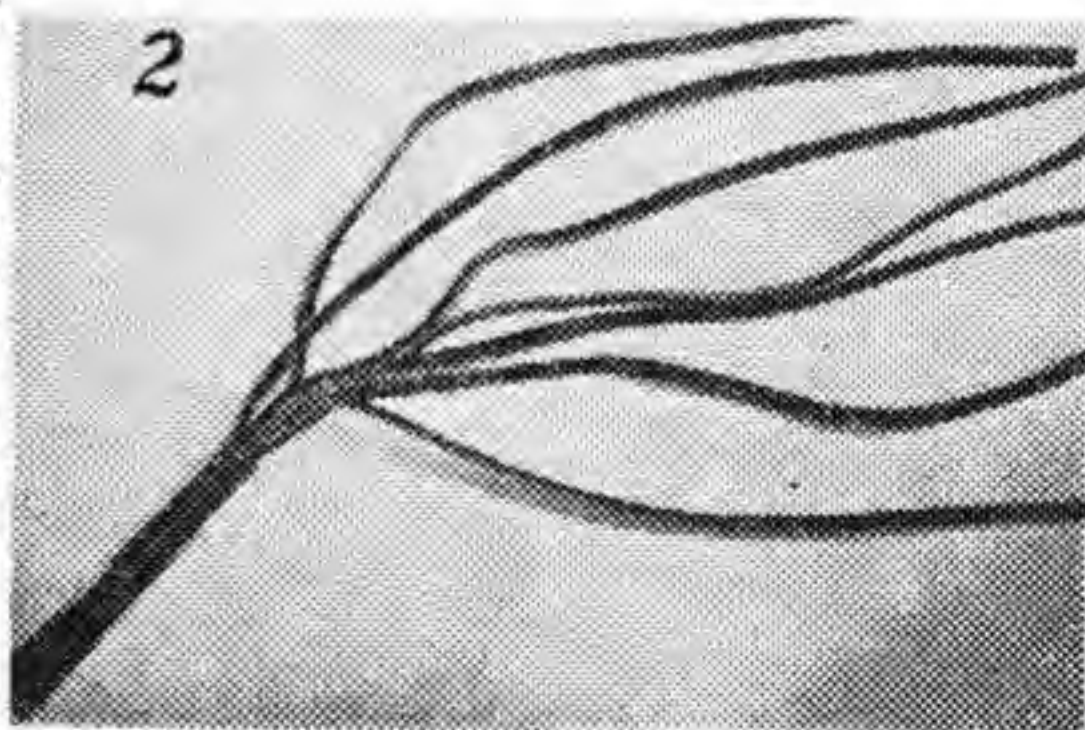
でも自由業の気安さもあって、月一回は一泊以上の旅行に出掛けますので、少なくとも月に一回はプレイ出来ると思います。

さて私の趣向はと言いますと、

縛り、鞭、浣腸を初め、あらゆる事をしてみたいという欲望は有りますが、相手の方の好みを尊重するのは、勿論の事です。以前のプレイでは

縛りと、それに伴う浣腸が主でした。

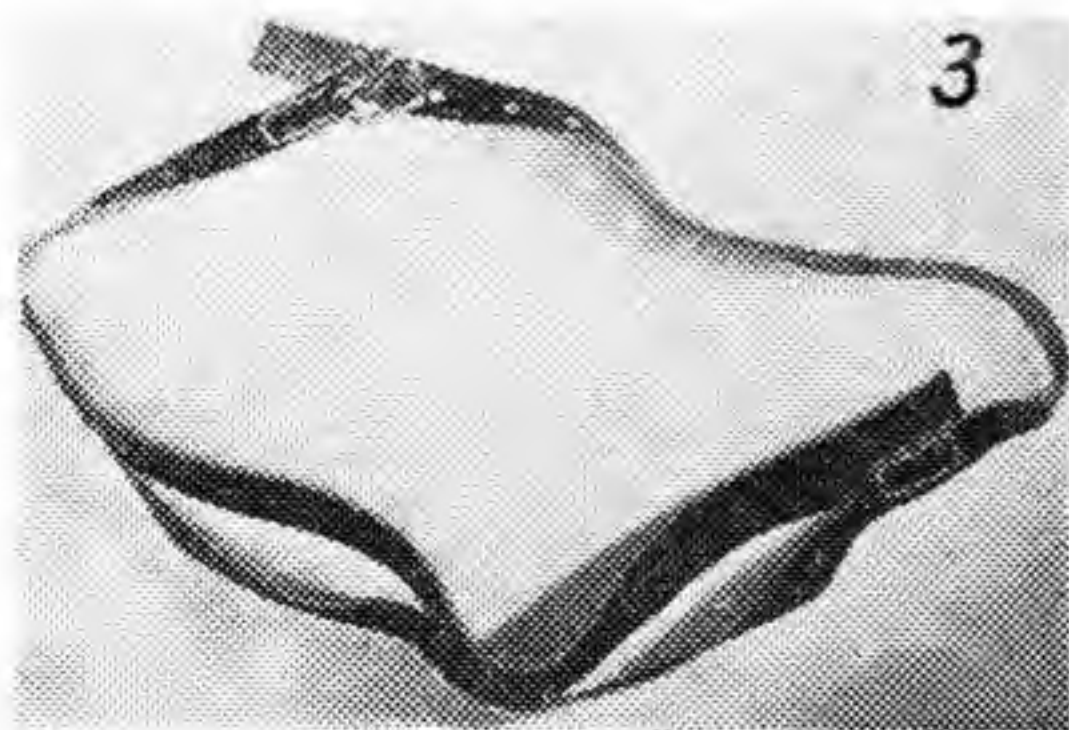
現在は、なめし皮を購入し、いろいろな責具を作り、独りで楽しんでおります。



寸法を合わせてわざわざ作ったものですが、もしサイズが合ったら差し上げます。

②鞭——ごらんのように先が7本に分かれており、打った場合には苦痛が分散して、長時間に亘って使用出来ますし、あとが残らないものです。(実験済)

③ブラジャー——乳房部分に切り込みがあり、挟みつけることが出来ます。パストの豊かな人ほど有効です。以上、いずれも革製。



写真説明

①貞操帯——ウエスト64センチ、以前、プレイしていた人の為に、

余り自慢出来るものはありませんが、一番苦労して作った貞操帯が満足している一つです。

また写真が好きですので、もし希望が実現出来れば、プレイの様子は詳細記録したいと思っております。以前の方とのプレイ記録として撮影した分は、全て彼女に持ち去られ、今、説得して返してもらう様努力してありますので、もし返してもらいましたら発表したいと思っております。

下半身ファッション・ショー

中 田 繁 雄

先日、新宿のスナック「ジェスパ」で同店の宣伝をかねて、フンドシファンの若い者だけが集まりハレンチ・ムードの「下半身ファッション・ショー」なるものが開かれました。

これまで、下半身というと、おい隠すものとされていましたが、その陰湿で閉鎖的な観念に対抗してか、おふざけにしろ、陽気に飾りたてる」というのが、そのネライなんです。

私は、二メートル三〇センチの六尺フンドシをキリリとしまして、男性的緊揮美の魅力を發揮して堂々入場。



あとに、男と女のヌードモデルたちが、アダムとイブ式に木の葉を貼りつけたり、交通標識板を二枚ずつ前後にブラ下げたり、ロープを裸体に巻きつけたりしての登場です。

なるほど、ショーの性格上、いずれもが、下半身をオーバーに強調した恰好ばかりです。

ここに同封した写真は、どうですか？ 私の水平思考の世界から生まれたこのファッション。いや、おどろきましたネ、女流フンドシデザイナーたちは……。そりゃそうでしょうよ、これじゃあデザイナー界へのボートクですよネ。文化もヘチマも

あったモンじゃない……。実は残念ながら、これはアトリエで私が自分のスナック写真に見惚れただけのもの。だが今やハ

豚妻のボリユーム

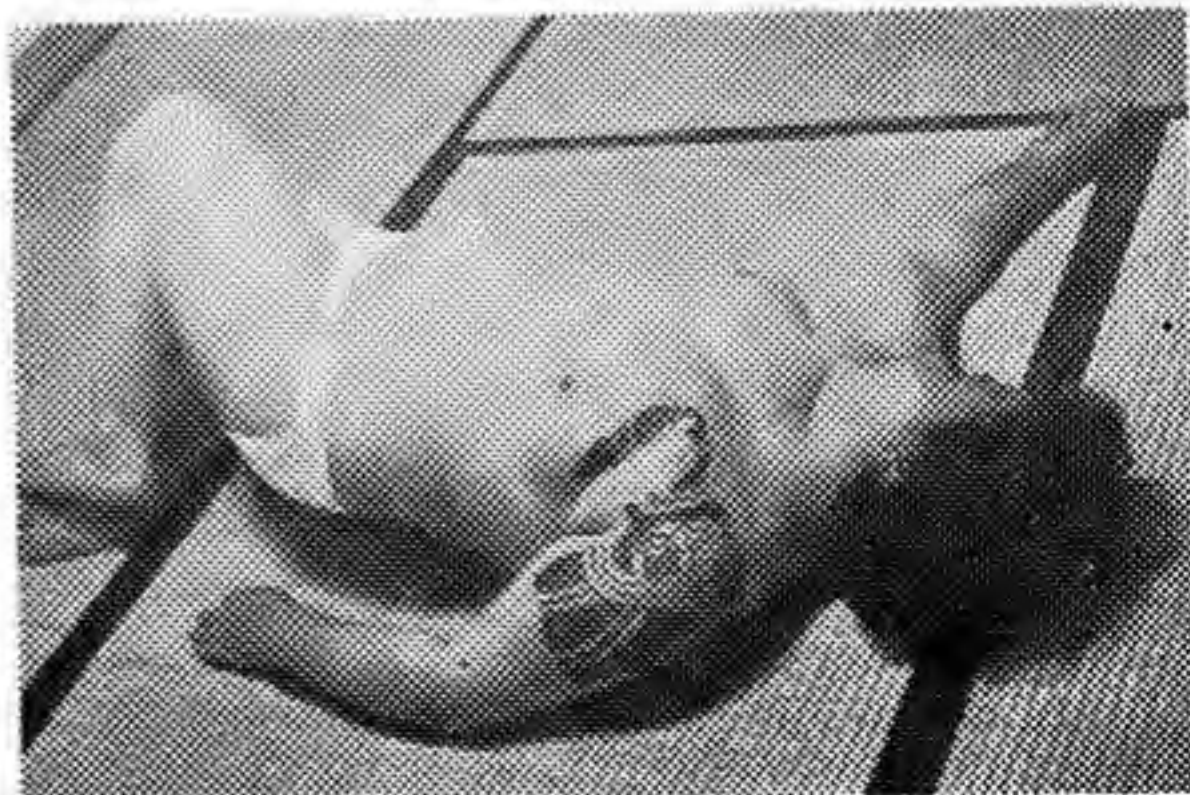
赤畑修造

春ですわね正に！ 5月号の「奇クサロン」は文字通り、大橋様、和田様、間和志様、桂木様方の若々しいご夫人の、花が咲いたような登場。もうとても、わが豚妻の老体などお見せできないなと思いつつも、昨今五十六才の新派女優のヌードが、それも、文部省芸術奨励受賞者が各誌でモテハヤサれてるのに勇をこして、マタゾロ出品？

いよいよ万国博。このチャンスに、全国各地のL女性を大量撮影とハリキッている次第です。

ハレンチ・ショーがデザイナー誕生の最短距離になっているのが現実らしいのです。そこで勇敢にも、赤線的に大衆の前に、得々としてハダカをさすものが出てくるんですナア。

ハレンチ精神が徹底しているだけに、下着デザインの研究に知識を持たない私も、この「下半身ファッション・ショー」に出席された、女流フンドシ・デザイナーの



椎名アニカさん、浜丘ふみ子さんの作品を一覧して、たちまち変種のフンドシに魅了されてしまったのでした。

今年の夏は、この変種の水着がリゾートをカッポすることになってほしいもの。六尺フンドシ、ビキニ型フンドシ、水泳バイクなどを常用すると、壮快な気分になれるばかりでなく、第一、健康にいいと思うのですが……。

感想、五月号「カメラ・ハント」

T・O・生

五月号所載の辻村隆氏の「深夜の舞踏会」は、まさに出色。

なによりも良かったことは、出演者である秋山夫妻の、真摯なSMマナーでした。

それは、迫真的というか、ただ単にシンプルなおポーズのみに終始するのではなく、実際のマゾヒズ

妻をM性にしたい

阪東太郎

ムのプロセスからであるだけに、夫人の云うにいわれぬ苦悶と、悦虐の喘ぎや呻きが、身近に感じられて、すっかり魅了されつくしました。

畢竟、SMプレイングも、つまり空絵事でのフィクティヴでは真実味に乏しく、したがって、人の

夫婦プレイを行っている同好の皆様、私達は結婚後五年になります。私が奇クを知ったのは十年も前ですが女を縛ったのは、これが始めてです。本格的なSMプレイに発展させようと思って妻に行ったのが、今回の写真ですが、妻は一向にその気がないようでした。夫婦プレイを行っておられる同好の皆様、M気のない妻を如何にしてMにするか、この事を知りたくて筆をとった次第です。私も妻を相手にSMプレイを存分に行いたいと思いますので、よい方法などありましたら、お教え願いたいと思います。

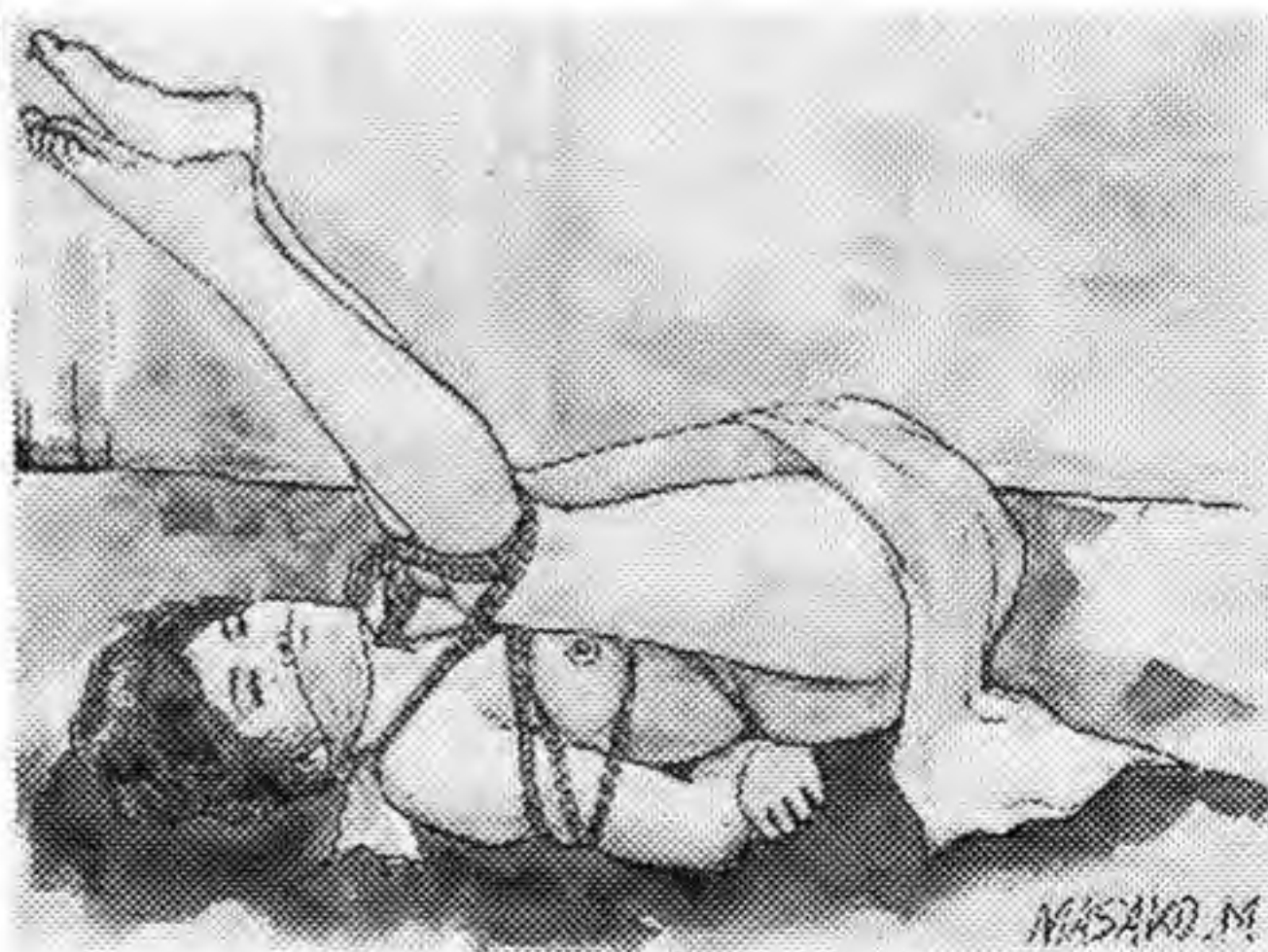
心を縛つことはできないといっそう強く感じた次第です。

すなわち、帰するところは、アクチュアルな真実の迫力だともおもいます。秋山夫妻のばあい決して一方的な嗜虐ではなく、夫婦ともどもサド・マゾプレイに徹するSMエスプリ性が、私の心を打ったのでしよう。

こうしたコンセンサスがあればこそ、衝動的なフォートができたのだとおもうのです。

それにしても、秋山夫人の妖艶をきわめるセンジュアルな、かすかずのポーズは、稀にみる妖美を描いて、すばらしいの一語につき

ました。両足を縄で緊縛され、あられもなくおもいっきり開股した大胆な



イメージ画 『屈折運動』 宮城昌子

諸ポーズは、疼くような嗜虐と痴情のかぎりをつくし、悦楽に呻吟する表情が、かぎらないエクスタシーに陶醉しきっており、私の胸奥の、S・Mへの衝動と愉悦を、こよなく駆りたててくれ、堪能した読物でした。

そして、それは倦くなく憧憬探究の極限でもありました。

〔自由詩〕 長井真暴

私の可愛いペット



エミ子、エミ子。

お前は可愛い私のペットだ。

裸になれと言っても素直に私の

言う通り従ってくれる。

後手に縛っても羞かしい顔を紅に染めながらじっと辛抱している
いじらしさ。

くねくねした腕はよく曲って後

いれずみ奴隷妻

和泉五郎

先日オレが、奴隷妻の弥栄の刺青
シャシンと告白を送ったら、折
返し編集部から連絡があって、あ
の刺青はホンモノだろうかとかたず
ねて来た。オレにとってこれ以上
の侮辱はない。あえていうが、こ
のオレがおんみずからコツコツと
彫り込んだケツ作なんだ。シャシ
ンで分かなければ、いつでも弥栄
をお目にかけてやろう。成程、編
集部の言うとおり、シャシンだけ

では、オレが絵に器用なものだか
ら、描いた？と疑われても仕方
がない。又、映画や芝居では、手
軽にイレズミぐらいつくるから、
オレがどの様に説明しても分かっ
て、もらえぬかも知れん。

近頃はこんな模様を、顔や、腕
や、足や、胸にベタベタ貼るのが
はやっているそうで、サイケ調の
おなごが、どぎつい色でよくくっ
つけていやがる。その点オレの女

手が上ると感心して捻じあげたと
き、頬を涙で濡らしながらも、解
いてくれと言わなかったエミ子。
写真をとるといったら

「でも、でも」と泣き声であとは
言葉にならなかったエミ子。

エミ子、エミ子。

お前は可愛い私のペットだ。

私はいついづまでも、お前を放

しはしない。

私にエミ子というマスコットが

ついてるので、私には幸運の女

神がいつも微笑んでいてくれる。

私はいつもブレイメイトには不

自由しない。

エミ子、お前のおかげだ。

房のは正真正銘の一生、消えない
シロモノなんだ。

オレがムチウチ症にさえならな
かったら、こんな発表をする気にな
れなかっただろう。というの
今のオレは働くことが出来ない。
大分快くなってきたが、ブラブラ
しているだけで、まともな仕事に
はつけないのだ。仕方がないから
弥栄が働いていて、オレを養って
くれているが、後遺症が出たらしく、
もう一つオレは、ハカバカし
くない。今のオレは奴隷女房に頭
が上らなくなっているのだ。それ

編集部だより

○由利美千子さんの『被虐の旅』
は幸いにして好評である。好評だ
ったら続けて書くということだっ
たので当分書いて呉れる筈。由利
美千子さんといえは本当の女性な
のかという読者の疑問もあるので
一タ辻村隆氏と話し合う機会を作
った。辻村氏は早速カメラを振り
回そうとしたが、彼女の希望によ
ってそれは次の機会にした。正真
正銘の女性なので、いづれ誌上に
麗姿を現わすかもしれない。

○幾度となく依頼していた関谷富
佐子さんの告白がやっと届いた。

御本人は八告白の文章Vを書くこ
とに非常な羞らひを見せておられ
るのだが、なんとか引続いて書い
て貰いたいものだと思う。

○連載にて迫力のあるサドシー
ンの文章とイラストを寄せられる千
葉青鬼氏は五月から向う三カ月の
予定でヨーロッパからアメリカへ
の旅行をされる。連載小説の方は
三月分まとめて頂戴したので掲載
には支障はない。外国土産の奇譚
を楽しみに待つとしよう。

○団鬼六氏と御家族が万国博見学



でも頭だけはシャンとしていて、ぼんやり寝込んでいると、オレの頭に浮かぶのは、弥栄を奴隷にして楽しく過ごした頃の思い出ばかりだ。体の自由のきかないオレに代わって誰か弥栄を苛めてくれる人間がおればいいのだがと、そんな気持ちで書く気になってみた。

オレに真底から惚れ込んでいる弥栄は、オレのこの提案を、快く承知してくれた。オレさえ構わなければいいというのだ。弥栄が誰かに苛められている傍で、亭主のオレがみていると苛めにくいかも知れぬが、それがオレにとっての今の生甲斐の様にすら感じられるのだ。弥栄は、そんなうまきは滅多にゆかないという。そうかも知れない。オレの考えは少し虫が好すぎると思うからだ。

弥栄はもう余り若くない。苦勞させたし、長年の間、苛めつくしてきたので、体もトシ以上にくたびれて世帯じみているようだ。

しかしオレは長年かかって、ここまで弥栄を飼育し、果ては一生消えぬ刺青を、女の急所といわれる乳房に彫りこんでやったのだ。近頃はサドやマゾのことを自由にしゃべれる時代になった。こんな奴隷妻もいるということをもみんなに知ってもらいたかった。

話にきけば、モデル志望を募集しているときいていたので、こんな女でもモデルになれるのなら、一度、使ってみないかということだ。ただし条件としてオレというコブつきで

塚本鉄三というカメラマンでもいいし、カメラハントを書いている辻村隆でもいい。若

い、八重桜を乳房に彫りこんだオレの女房に、いくらかでも興味をもてば、百聞は一見にしかず、是非シャシンを撮って、イレズミの真偽をたしかめてくれ。これがオレの願いだ。

こんな体のオレに、弥栄は貞節に、忠実につくしてくれ。オレがモデルのことをいい出した時にも、オレさえよかったらと、イヤな顔一つ、しなかったし、反対もしなかった。

シャシンをとったり、モデルにすることは今にも急ということはない。いつでもいいのだ。唯、こんな変わった夫婦もいて、早くからサド・マゾの生活をつづけていたということを知ってもらい、文のヘタなオレに代わって、数奇なオレ達の過去を、思い出のために書いてほしいのだ。それでオレ自身もなぐさめられると思うからなのだ。

イレズミの動機や方法、苛め方の種々、サド・マゾ生活の実態など、しゃべれば、事実は小説よりも奇なりである。きっと何か得るところがある。

同好者諸君！ムチウチ症のオレに、なぐさめの便りを送ってくださいませ。

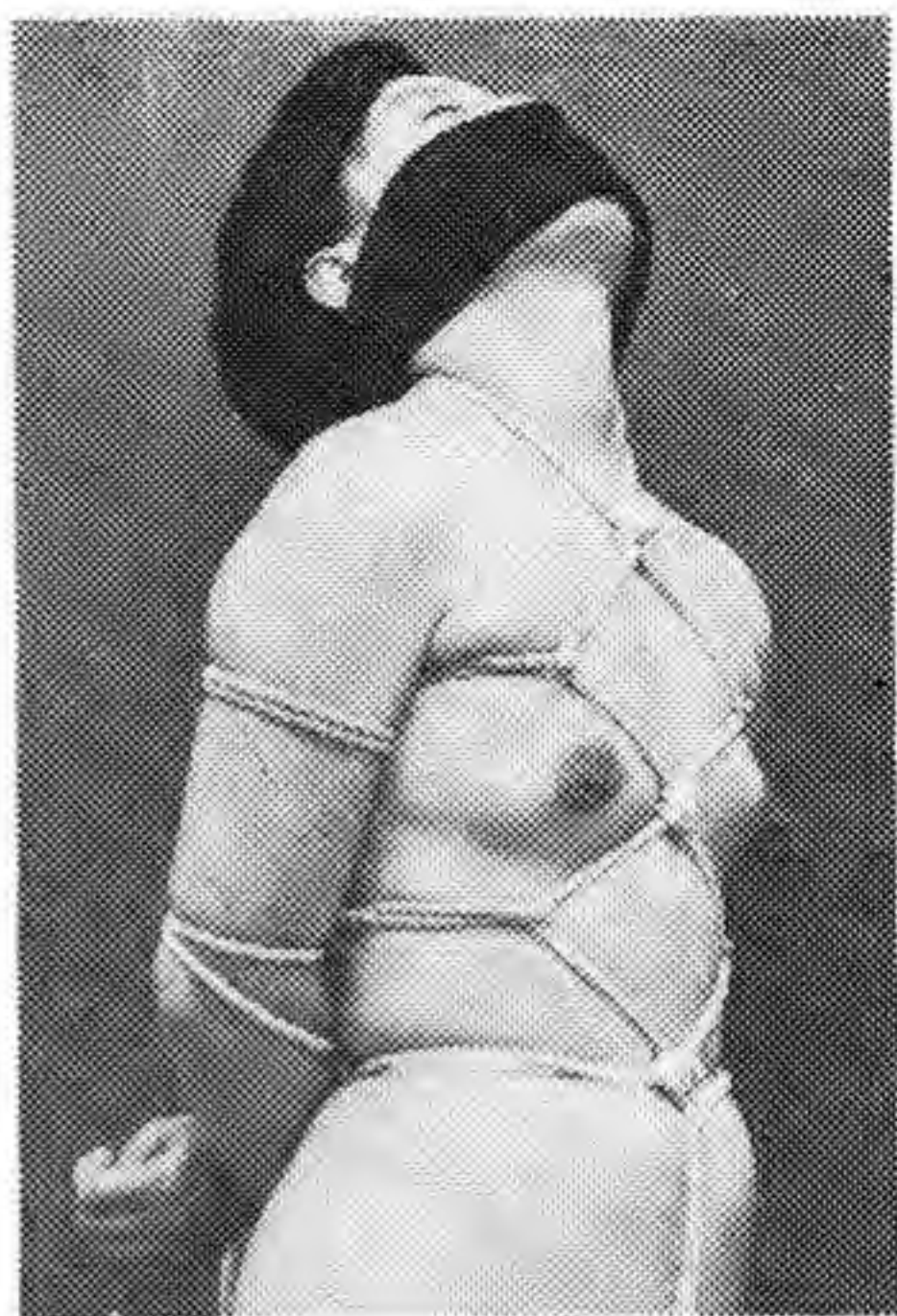
のため来阪された。「花と蛇」執筆の苦心談なんか承ったが、今後一回の分量も多くしたいと語っておられたので大いに期待したい。

○弓削達人先生のSCR（性問題相談室）は先生のお仕事が繁忙なため中絶のような形になって誠に申し訳なく思っている。直接回答の方も当分応じられない由なので悪しからず御諒承をお願いする。

○八家畜人ヤプーVの著者沼正三氏より再度の私信を貰う。手紙の内容からすると最近週刊誌なんかに出ていた想像の記事とは全然違うのだが、一応PR作戦の成功とみて御同慶至極とお祝いしておこう。当編集部に沼正三のMプレイフォトが保存されているといったら週刊誌の記者が涎を垂らしてお百度を踏むかもしれない。

○夫婦プレイのモデルになりたいという希望が最近殊に多い。大歓迎なので奮って登場してほしいものである。写真の投稿が増えたのも嬉しい。原稿の横書きが相変わらず多いのは困りものだ。

○読者の女性の方で編集部宛通信を寄せられる向きが相当数に達した。何とか、読者に呼び掛けさせたいと努力しているので、ぼつぼつ誌上を飾ることになる。



『菱紋様』 大橋美代子

暗室の猛獣『D・P・E』

喜久

扇

乳黄色のセーフライトに包まれた闇の中にフィルム現像用タンクがある。

露光量が小さかったために、未現像のまま取残されたハロゲン化銀が、チオ硫酸アンモンを主薬として調合された定着液によって、いま急速に溶解されているところである。

定着ムラの生じないように時折り攪拌を行ないながら、夜光時計

が刻む残り少ない時間を読みとってゆく。

一寸した取扱い上のミスのために、現出すべき影像を全く止められなかった過去の苦い記憶が、ふと脳裡をよぎる。

鉄筋アパート三階の、二DKの一劃が、私達夫婦子供四名の城である。必然的にこれら秘かな作業は二〇時以後になって開始されねばならない。

暗室専用時計の長針は、所要時間を満たしたことを示している。定着液に代わって水道水がタンク内を駆けめぐっている。五〇分後のそれは、やや軟調ながら期待どおりの陰画を確かに宿していた。

○ ○ ○

ついさきほどまで、主役を演じていたフィルム現像用器材の多くは、すでに姿を消し、いま、ダイニング・テーブル上には、アーム摺動式S引伸機とそれぞれの溶液を湛えたパットが数枚、それに、少乱暴な処理によって乾燥させられたあのフィルムが、待機し、カッター、二種類の印画紙、両面乾燥器なども、スタンバイの態勢にある。

ハーフサイズ四三コマのネガには、去る夜のサディスティック・シーンが記録されている。フラッシュランプ（二五〇ワット二灯）のやわらかな光が、一個の女体を浮き彫りにし、その屈折は直接視覚で捕えることのできなかった造形の美を生み出している。十年も前からなじんでいる妻の肢体が、こゝろも新鮮な感覚を私に与えるのはなぜなのだろう。

ネガキャリアにはさんでイーゼルを拡げ、一コマずつ投影して眺

める数刻は、獲物を前にして舌なめずりする猛獣にも似て、印画紙の上での料理へのファイトを、いやが上にもかき立たされていくのだ。

ためし焼の結果は、適正な露光時間を教示してくれた。たまにかやらないDPEだから、薬品はぜいたくに使うことにしている。今までの経験では、補充剤によって薬効を維持する方法をとるよりも、新たに開缶して使用した方が私にとっては、利点が多いためである。

○ ○ ○

ハ一と二枚目V撮影を開始したときの情景がありありと思い出される。別にいやがっていた様子ではなかったのだが、現われた印画紙上の肢体に拒否の姿勢が読みとれるのは、やはり恥じていたのだろうか。

ハ五と八枚目V結構時間をかけて凝りに凝って緊縛したつもりでロープが、この乱れはどうしたことか。乳房を押し上げて引き緊つたものと、腕をしめつけているはずのもう一本のロープが弛緩していて、せつかくの構図も気抜けしてみえる。

ハ二〇と二一枚目Vプレイ半ばで



最近の縛り

シーンから

嵯峨美也子



大映の「女極悪帖」とか「生体解剖」とか、題名はすごいが最近はこちらといった縛り映画は見られない。ポスターで、ドキリとさせられたのは「肉のしたたり」で、全裸にむかされた真胡道代が、局部の前

飛下り自殺をする。真胡道代の、この「生き晒し」にあう表情はよかった。「女犯刑罰史」の時にみせた逆さ吊りのよ

背景に手を加え開股縛りをやったものであるが、奇巧所載のM夫人に似た「かたち」があつて、カットされる以前の再現と胸おどる。△二七枚目▽全裸でカメラの前に晒されている妻。突然に挙げた子供の泣き声にハッとして、隣室の

気配をさぐる様子がまざまざと再現されているが、その表情にうつとりした恍惚感が明らかに同居。△三五〇枚目▽大柄で色白の肢体にロープがうねり、ふっくらとした腰・大腿部がゆがんでいるライトを受けて陰影の濃い部分が

に紙をはられ、立木に縛られ、生きさらしにされている。その紙には「警察に知らしたらこの女の——岡崎興業の許嫁——の写真をばらまくぞ……」と書いてある。

画面にはこの場面があった。彼女との結婚を邪魔するために、ドライブ中の男女を襲い彼女だけをおかし、そしてこの「生き晒しの刑」にあわす。結婚の話になると、男の眼前にこのはずかしいシーンが浮かび出す。ついに女は会社の屋上から

画面一杯に奇抜な息づきを表現。△四三枚目▽ペンが進まない。プレイの終わりを告げる一枚であることは確かだ。

○ ○ ○
仮設暗室での数時間。今眼の前には、一〇〇枚を超える私だけの

うなスサマジサはなかったが「しゅうち刑」の味を示していた。「女子寮情痴図」では、辰巳典子が、女子大生のアルバイトで、バリのホステスになり、好色な会社部長、冬木京三のために全裸にされ、あぐら縛りにされたり、責められたり、サジステイックなベツドシーンで、金をかせぐというシーンがイタダけた。

「性欲の野獣」で、白河和子が、十六万円の金をかせぐために、野獣のエジキになり、肉のロー人形にされようとする。セリフでは、色々な責め

コレクションが流水と戯れて仕上を待っている。白々と明けそめた気配に、身体の不ふしがけだるい。現像液も能力を失ったらしく黄色に変色。水洗の完了したもののから「へろかけ」しても、まだ多くの時間が必要だ。

を行ない、最後は、生きたまま肉のロー人形にするなど、いつていたが、全裸で吊り下げられてムチ打たれるシーンだけで、あつてなかつた。ロングシーンのようなバックで、吊られている女の姿などもあるにはあったが、不鮮明でボヤけていた。

小森白監督や、鬼プロ作品の奮起を望む次第である。



大映「おんな極悪帖」 安田道代

責めとしてのA感覚

浅田 守



五月号の「深夜の舞踏会」相変わらずカメラハントの素晴らしさに酔いました。特に全裸の夫人を椅子に仰向開脚縛りにした上パイプとローソクで責めたてた激しさ。白線が入っているとはいえ夫人の苦しげな顔のアップが小原真澄のアップと重なり、秋山夫人に心から拍手を送ります。

奈津子も最近は大分従順になりデイトの度にカメラ持参でも嫌な顔をしなくなりました。しかし、ともすればカメラとセックス（責めも含めて）を共に没頭する事は難しく忙しい思いをしなくてはなりません。これからはセックスに目覚めた奈津子をうまくセックスに責めという様に教えてゆきたい

と思います。

「花と蛇」を教科書として、ある時は静子、京子、小夜子の様に。「花と蛇」といえば京子の責めの如く、小生も初めてアヌス責めを試みました。失敗を恐れ縛りあげた上で実行した所、痛みと同時にMVと違った彼女の反応を見て内心、驚きました。彼女自身も反応に驚いた様です。

見る所、団氏もA責めには深い関心のある様子。今後「花と蛇」に義雄と小夜子、吉沢と美津子、珠江と鬼源、美沙江と川田の組合せ、そして訓練された静子には、あの巨大な捨太郎を配してA責めの極致を描いて下さい。熱望しています。

「奇ク」三つの特徴

川 西 英 雄

様々な、興味本位のハレンチ番組や、ハレンチ雑誌の多い昨今。それらの中にあつて、「本誌自粛の徹底」なる文章を巻頭に置き、種々の困難にめげず、黙々とまじめな出版を続けておられる奇ク編集部や、辻村隆氏に代表される作家？の皆様に敬意を表します。

さて、奇クには、他誌と比較した場合、大きく見て、三つの特徴があると思います。第一は、何と言つても、奇ク誌側の立場の人々の作品、SMカメラハント。カメラ・ルポ等、プロ？の人の体験記事。これは奇ク誌のトップスターであると思います。

第二は、最新の六月号で言えば「妻と共に」「私のプレイ」等の読者の立場の人々の体験告白の存在。何のてらいもない真実の叫びが感じられて、奇ク誌にはなくてはならぬ物。

第三の特徴。これは、奇ク誌が世間一般では、日陰の存在である事。これも大きな特徴です。世間の評価（私に言わせれば、非常に不適當な評価）のために、本屋で

買う時、一寸赤くならなくてはなりませんから。ところが、一たび外界から離れて奇クの世界に飛び込んだ。そこには何か暖い心、編集部と読者、読者同志といった心の通い合いがあるのでないでしょうか。見知らぬ人が、「私は奇クのファンです」と言った時、何かその人に話しかけたく感じるのは、私一人ではないと思います。他にこのような雑誌があるでしょうか。その根底に、日陰者という評価を打破してあまりある心の交流を持つ事。これは世間の人々にとって日陰者という評価を下す事の重大さに対する我々愛読者の、愛読者にとつての、第三の特徴ではないでしょうか。

主観的に、色々な事を書きましたが、これは私が奇クのファンであるという理由によります。毎月々々発売日頃、足しげく本屋に通うくせに、何か奇クが現在の形で固定されてしまひそうなのが心配なのです。今のままの奇クでは、行きづまってしまひそうです。私が特に望むのは、グラビアのカム



イメージ画 『期待の羞恥』 出門 順

我が主観 (一)

縛りの美学 (一)

ロマン派生

縛られた女には美がある。それはとりたてて美などとは云わなくても、奇巧の読者ならば、誰でもその人なりの美をくみとって居るに違いない。しかし、この美感は一般的な美とは違って、幾分か特

殊な美感なのかも知れない。その上、この美は、それを受け止める側の個人的な好みに大きな差異があるのが一つの特徴である。したがって縛りの美学の一般論などは無意味かも知れない。そこで私は私の主観的な縛りの美学を述べ、読者から、その中に共感出来る部分と、反撥される部分とを抽出して頂き、御意見をおきかせ願えれば幸いである。

1 素材

素材となる女、一言で云えば全身からマゾヒズムの香りを発散させている女がよい。

髪は、なるべく長くしなやかで素直なのが好ましい。

顔は細面でか、瓜実型までが良いが、髪が長ければ、髪具合で丸顔でも、かなりカバー出来る。

まつ毛はもちろん長い方がよいが、目はいわゆる、うるんだ瞳で悲し気な細いまゆと泣きぼくろがあるが良い。

口は小さくて、唇も薄い方がよい。唇の色は天然にしる人工にしろ。ピンク系に限る。

細くて長い首はマゾ女にふさわしい。

胸は、両手を上に挙げて縛った時、多少、肋骨が浮き出る位がよ

バックです。その他には、六月号で左京氏のいわれるような「誌上座談会」や……云々。

こういう意見も編集部には、かなり届いているのではないでしようか。奇巧にはさらに飛躍する可

いが、乳房だけは不釣合に大きくなるべく胸の高い位置についていて欲しい。その上、仰臥しても形が崩れず、しかも出来るだけ柔らかい乳房という、矛盾した要求がある。

胸は短か目で、腰のくびれが、はつきりしているものがよいが、あまり堂々とした感じでは困る。

尻は大き目で多少硬くてもよいが尻えくぼがあれば尚、結構。

上肢は細くて柔らかく、手は小さ目で、細い指がよい。

上腿は幾分太目で、上下腿とも揃えて縛ると、ピッタリ密着する必要がある。下腿は細長いが柔らかくてきれいな小さな足に続いて欲しい。

肌色はもちろん白く、青い静脈が透けて見えるのが良い。体毛は無い方がよい。

体格は小柄で骨は細い感じが好ましい。

要するに小柄で弱々しく、頼り

能性も権利もあります。自粛のため自粛になってはならないと思います。思い切った冒険も必要です。編集部の皆様の、御一考を期待します。

ないやるせない感じで、竹久夢二式の美人に近い感じである。しかし、私の理想とする素材は、夢二式に加えて、軟らかさとしなやかさ、更に幾分か動物的な生臭さが欲しい。その上あまりにバランスがとれすぎず、どこかにアンバランスがあつて、多少とも崩れた所があるとよい。

あまりにも端整で高貴な感じは素材として不適当であるが、あまり下品なのは更によくない。内気で控え目でデリカシーのある、いわば古風な性格が容姿に現われているような素材が最高である。

素材が生まれつき精神的にM性を多量に持っている場合は、前にのべたような条件が、何等かの形で表面に出て来ていて、一目、顔を見ただけで電流が私の胸に流れ込んで来てジーンとしびれてしまふ。しびれてしまえば、あばたもえくぼ、わが美学も大巾に修整されてしまふ恐れも強いのである。

『縛り』の好きな私 佐野みさ子



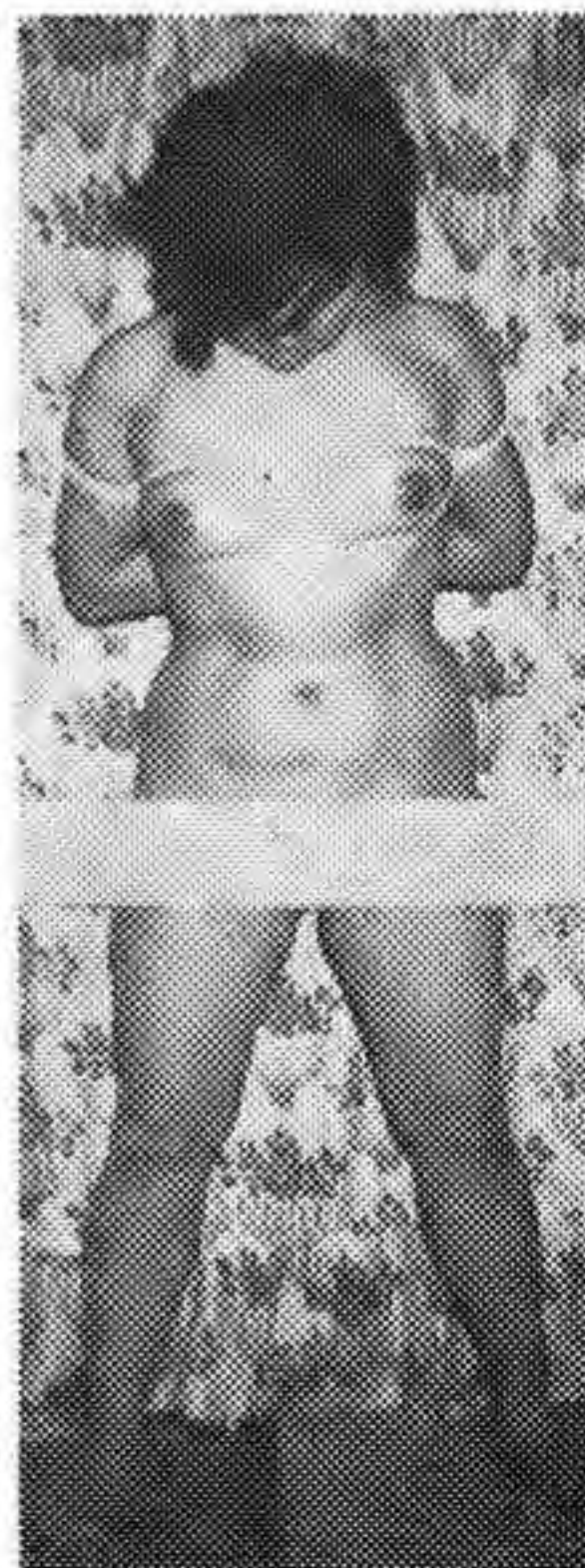
私は人妻の身でありながら、SMプレイの快感が忘れられず、主人にかくれて中年のS的男性と、もうすでに何回もプレイを行ないました。夫以外の男性の前で全裸を晒すだけで私の全身は快感にふるえるのです。

私には自分の肉体を縛られて、そのあられもない姿を数多くの男性に見てもらいたいという気持が特に強く、それがハ奇クサロンVへの写真投稿という思いついた行動をさせる

のです。

特定の男性ばかりでなく時には別のS男性ともプレイをしてみたいと思っております。三人の奇クファンの方から読者通信を通じて「是非プレイをやりたい」という便りを頂きました。いずれ近日常に何らかの方法でお会いした上でプレイの日時についてお話ししたいと思っております。

私は自分の肉体から若さがなくならない中に、SMプレイを大い



にやってセックス以上に素晴らしいその快感をたっぷり味わっておきたいのです。ムチ打ち、浣腸責めバイブ責め等は私の一番好むものです。

五月号のカメラ・ハントで、モデルをつとめられた秋山夫人のように椅子を使った開股ポーズのプレイも、好きなものの一つです。私をSMプレイの最高の状態に置いて下さる方の出現を心より待っております。

私の緊縛画

須坂

旭

奇ク愛読十年。思えばグラビア華やかなりし頃、奇クや類似誌の影を求めて東京の街をさまよい歩いたあの頃から、私の緊縛画が併行して私と共に今日まで歩き続けて来ているのですが、何故今日まで黙って居たのか自分でも訳が分

かりません。毎月新刊を見るにつけ、読むより先にパラパラとページをめくって、写真と、イメージ画やカットの内容を追ってしまいます、それからやっと一頁から読み始める訳ですが、やはり気に入った写真や

絵の無い月は淋しく「何だ！これなら私にだって描けるじゃないか」と意気まいて、ゴソゴソと自分で描き貯めた絵をひっぱり出しては見て居ます。そう、もう何枚あるか自分にも分からないくらいです。スケッチブックに描き込んだ画集も3冊になり他にも思いつくまま描いたも

のが乱雑に放り込んであります。私は専らS画オンリーで、他の物には興味がなく、とりわけ全裸の吊り責め、両手吊り、古式拷問の石抱き、海老責め、三角木馬などに特に興味を惹かれるのです。そんな訳で、私の画集も凡て全裸のしかも強烈な物ばかりです。両手足を大の字型に引き伸ばされ



〔実写写真〕

生体轢断

撮影・日夏高視

二月中旬、ドリマーレフ、ネオパンSS、絞8、 $\frac{1}{100}$ 肌を刺す寒風も、切られるようなレールの冷たさも、もう彼には感じない。生きながら列車に轢断されるというマゾの最高の歓喜に彼の五官は戦き、一瞬轟音と共に通過する列車に断ち割られた腹部からとび出した腸管が、彼の脳裡をピヨコンピヨコンと躍りまわっている。

△回顧△風の強い日だったが、モデルは強度のマゾなので、寒さの点は心配がなかったが附近には田畑や人家があつて落着かなかった幸い寒さが厳しくて人影もなく単線の鉄路なので、どちらから電車がくるのかわからず、モデルを線路から取り除くまで、連続してスリルを味わった。向こうから迫ってくる列車を入れたら一層、迫力があつたと思うのだがそこまで行なう勇氣はなかった。



て、股間に廻された縄を棒でこじり上げているもの。三角木馬の上で、両足に分銅をブラ下げられて絶叫しているもの。こうして今、見なおしてみても強烈なものばかりですが、先輩諸氏の様に、私も奇クに発表してもらおうと、今夜も遅いのに頑張っています。これを機会に、せいぜい皆さんの仲間入りをさせていたきたいと思っています。今じゃ地方に引きこもって、更に妻や子供まで居

ては若い頃の様には描けませんけれど、ふと古き良き時代、写真も絵も堂々と頁数をしめていた頃を思い出して、せいぜい奇クも許す限り我々の期待に応えてくれる様切望して待つて居ます。最後に、最近掲載のイメージ画の感想をひとこと。さすが常連の諸氏、豪、五屋、宮城、辻各氏などいつも感心しています。特に豪画伯は憎いほど素晴らしい。今後もどんどん見せてもらいたい。

〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よひ V

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よせ V

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よゆ V

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よめ V

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よす V

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よも V

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よき V

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△よさ V

女囚拷問 木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もと V

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もへ V

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もに V

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もち V

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もほ V

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もぬ V

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もり V

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号△もは V

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号△なの V

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号△なむ V

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 二〇〇円

大塚・東浦・木村 略号△きあ V

くすくす責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円

大塚・東浦 略号△きす V

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円

大塚・東浦 略号△きせ V

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円

大塚・東浦 略号△きそ V

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円

大塚・東浦 略号△きて V

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円

大塚・東浦 略号△きと V

鼻責め 悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚・東浦 略号△きな V

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△めあ V

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△めく V

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△めゆ V

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△めや V

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△めえ V

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号△あひ V

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号△あは V

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号△あふ V

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円

木村 洋子 略号△むこ V

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円

一宮百合子 略号△るね V

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円

一宮百合子 略号△るえ V

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円

一宮百合子 略号△るそ V

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△はね V

鼻責め 万華鏡

大手札八枚一組 二〇〇円

山原清子外一名 略号△はた V

乳房責め 五態

大手札五枚一組 六〇〇円

山原 清子 略号△てら V

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円

山原 清子 略号△いね V

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号△いつ V

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△いこ V

可憐島田雷全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△いみ V

黒フンドシ高小手縛り

大手札八枚一組 二〇〇円

山原 清子 略号△ひろ V

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△ほか V

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号△ほき V

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態

大手札型印画紙(9×13寸) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚

五〇〇円

十組十枚

一〇〇〇円

二十組二十枚

一八〇〇円

五十組五十枚

四〇〇〇円

百組百枚

七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蜷涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒緋ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの搾り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむぎき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

「優秀緊縛写真特選集」

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

- 大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円
- 大塚 啓子
- 足挙げ開股責め
- 大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円
- 梨花悠紀子
- 猪 吊り三態
- 大手札三枚一組 略号(いの) 四〇〇円
- 梨花悠紀子
- 責め衣縛り
- 大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円
- 大塚 啓子
- 強烈エビ責め
- 大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円
- 玉田美佐子
- 後手首の高縛り
- 大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円
- 玉田美佐子
- 椅子またぎの責め
- 大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円
- 玉田美佐子
- 全裸脚挙げ縛り
- 大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円
- 長野 良子
- 全裸アグラ縛り
- 大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円
- 長野 良子
- 全裸屈伸縛り
- 大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円
- 長野 良子
- 強烈エビ責め
- 大手札三枚一組 略号(まど) 四〇〇円
- 松本アサ子

吊り打ち

- 大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円
- 関谷富佐子

股間縛り法悦境

- 大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円
- 絹川 文子

踊り子緊縛

- 大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円
- 絹川 文子

月経帯のまま縛り

- 大手札三枚一組 略号(ゆす) 四〇〇円
- 遠藤百合子

縄目に悶える夫人

- 大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円
- 関谷富佐子

髪を引き回される夫人

- 大手札三枚一組 略号(ほむ) 四〇〇円
- 関谷富佐子

膨満正面縛り

- 大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円
- 長野 良子

マニヤ全裸緊縛フット

- 大手札三枚一組 略号(いな) 四〇〇円
- 栗本ミチ子

強烈エビ縛り

- 大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円
- 関谷富佐子

乳房責めの苦悶

- 大手札二枚一組 略号(もろ) 三〇〇円
- 関谷富佐子

全裸ムチ打ち

- 大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円
- 関谷富佐子

強打に泣く裸身

- 大手札四枚一組 略号(むち) 五〇〇円
- 関谷富佐子

裸身の晒し

- 大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円
- 関谷富佐子

全裸股間縛

- 大手札四枚一組 略号(せら) 五〇〇円
- 関谷富佐子

双胸の強調縛り

- 大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円
- 長野 良子

動感海老責地獄

- 大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円
- 大塚 啓子

色縛の開股縛り

- 大手札三枚一組 略号(いふ) 四〇〇円
- 長野 良子

鼻責めのアップ

- 大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円
- 大塚 啓子

乳房しばり

- 大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円
- 長野 良子

鼻責めと緊縛

- 大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円
- 大塚 啓子

木馬責三態

- 大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円
- 大塚 啓子

椅子責めの果て

- 大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円
- 大塚 啓子

檻に入れられた女

- 大手札三枚一組 略号(もの) 四〇〇円
- 山原 清子

浴室の全裸刺青

- 大手札五枚一組 略号(よな) 六〇〇円
- 山原 清子

鼻いじめ三態

- 大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円
- 山原 清子

鼻責め万華鏡

- 大手札八枚一組 略号(はた) 一二〇〇円
- 山原 鈴木

碧玉裸身緊縛

- 大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円
- 刑部 典子

くすぐり責め地獄

- 大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円
- 大塚 東浦

灼熱の蠟燭責め

- 大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円
- 大塚 東浦

豊満な乳房を責める

- 大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円
- 大塚 東浦

女奴隷を飼育する

- 大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円
- 大塚 東浦

凌辱されるマゾ女

- 大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円
- 大塚 東浦

鼻責め悦楽

- 大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円
- 大塚 東浦

全裸強烈羞恥縛り

- 大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円
- 東浦 ひかる

猿ぐつわにあえぐ裸女

- 大手札三枚一組 略号(なむ) 四〇〇円
- 東浦 ひかる

全裸の緊縛姿態開陳

- 大手札四枚一組 略号(ゆり) 五〇〇円
- 遠藤百合子

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(一三〇〇円)
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(一二〇〇円)
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(七〇〇円)
大塚 啓子 略号(けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号(一五〇〇円)
山原・東浦 略号(かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(七〇〇円)
大塚 啓子 略号(けま)

浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むる)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(七〇〇円)
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りブレイ

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ると)



奇ク6月号を読み、思いついた事を書いてみる事に。全体として6月号は写真が多く楽しい号であった。今後出来るだけ多く写真をのせる様、御願したい。「カメラハント」は見にくい白い線もなく写真も多く、非常に良かったと思う。特に一三四、一三五、一四一、一四四、一四九ページの写真がよかった。一四九ページの写真などはモデルの表情もわかりベリイ・グッド。「金髪碧眼の美女を縛る」はモデルが外人故か、フレッシュな感じがした。ライティングに非常に気を配っておられ

るように思う。印刷ではなしに生の写真を見たいものだ。いや、実際にこんな外人の美女とプレイしたいと熱望する。今後の塚本氏の御活躍を大いに期待する。「花と蛇」何だかマンネリという感じ。特集号を読んだ事があるが、何かしら同じ事(責め)を登場人物を変えただけで繰り返している様な気がしてならない。もう少し目新しい責めを考えていただきたい。読者の期待だけに何とか考えてほしいと願うのは、私だけではあるまい。他に良かったと思うのは、「私のプレイ」(佐野みさ子)の写真二四二ページの「短信往来」の写真など。尚、シナリオ形式は僕には少々読みにくい様に思う。

(大阪府・美原粹人)

もし、こんな私で良ければモデルにと思ってペンを取りました。私は二十才、身長一五七、体重四七、バスト八三、ウエスト五八、ヒップ八七、自分では少し体に自信をもっているつもりですが、いかがでしょうか。昨年の夏、プールサイドで写した写真一枚同封しておきます。SMは二度ほど経験があります。初めの際はイヤガル私を無理やり細ひもで縛り剃毛も

されたのです。その時は、恥かしくて……。それくらい自分で剃毛しております。時々自分で縛り鏡に写していますが、同性のそんなあらわな緊縛姿、全裸での大の字姿が見たくてたまりません。でも見るきかいがなく、又写真も手にはいらない、もし写真同封してくだされば幸せかと思えます。私って悪い女でしょうか。報酬は別にありませんが、自分の写真いただければ結構です。採用してくださいければ私も大阪に二年ほどいたことがありますが、場所指定くだされば、すぐまいります。こちらからですと、近鉄特急で二時間余りです。(三重県志摩郡・橘京子)

最近の貴誌の充実振りには驚きました。私はどちらかと云えばソフトムードのS小説が好みにあいます。五月号から六月号にかけては特に力をこめて書いた小説、読物やルポが集中的に採録されていて楽しみです。ごたごたとしたごった煮の編集の中に、時々ハッとするような珠玉の作品が点綴するなど小憎くらしいばかりの編集ぶりです。六月号でのカメラ・ルポ「金髪碧眼の美女を縛る」は近來にない出色の記事でした。貴誌も

これで愈々意欲的な発展を遂げるべきしを見せたのではないでしょう。今後共更に一層充実を企むための努力を続けて下さるようお願いいたします。(東京都・鳩十郎)

私は貴誌を愛読しはじめて十五年になります。長い長いトンネルの暗黒の時代から雪国ならぬ自由の時代になって、引続いてずっと貴誌を愛読していた甲斐があったと喜んでいます。四月十三日の11PMでは沼正三氏の代理という人が出演、沼正三氏の家畜人やプーの事が話題になっていました。又瞬間的でしたが女がすわって小便している画面が出ました。もうテレビでも、このようにエスカレートしてきているのかと、驚いた位です。お茶の間に顔を出すテレビに對して、このように寛大なのにマニア向の雑誌に對して世間は何故片手落ちの考えを持っているのでしょうか。何の楽しみもなく真面目に働いている私達のような無産者にとって唯一の慰安である貴誌が、もっともっとエスカレートしてSMが徒らに一部の特権階級だけの娯楽に墮さないようにして欲しいものです。

(北九州市・星新二)

○ 奇ク愛読のM女性の方にお願ひ致します。小生、奇クを手許に置く様になつて十二年目になります。当年二十七才の気の小さな青年です。二、三年前迄は奇クを読むだけで満足でしたが、最近ではプレイを実施したく色々と身辺を探しましたが思うにまかせません。そこで勝手な願ひながら奇クを通じて良き友を得たいと思います。近県若しくは同じ京都の空の下の方、宜しく。何分にも気の小さな男故満足な事は出来ませんが、仕事の関係上、縛りの方は毎日、手がけております。

(京都府船井郡・八木烈士)

○ 貴誌、楽しく拝読しておりますが、私の愛読おくあたわらないオムツカバーマニヤの記事が少なく、又、十年前の貴誌にのっていたよ

〓 御送金についてのお願ひ〓
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されております。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さいます。従来、便宜上受付けておりましたが、都合により「切手代用」はお断り致します。

うなオムツをあてがわれている絵等のついで、何となく物足りなく思ひます。ただ読者通信のオムツマニヤからの短信とカバーの販売などの情報が救いです。つくり話でも結構ですから、もっとオムツの記事を書いて楽しませて下さい。それから古い貴誌は、よく古本屋さんで見かけますが、ビニールで封をしていて内容がわからず、どの年号の本にオムツマニヤの記事や絵画が記載されているのか教えて下さい。又、オムツ特集やオムツカバーをされた女学生等といった絵画集、写真ブック等あればお知らせ下さい。それとよくピンクとか赤のオムツカバーの事がのっています。そんなのは何処で入手出来るのでしょうか。オムツカバーの販売等もして頂ければ幸いと思ひます。

(静岡県・永井和夫)

○ 私は、御誌を昭和26年7月号の「女天下時代特集号」より愛読している者です。私は皆様と違って女性の美しい足に異常なまでに惹かれ憧れている者です。女性の美しい足を思うとき私の心は躍動しい切ない程の胸の昂まりを覚え、果ては私を情痴の虜にしてしまいま

す。近頃は女性の美しい足の記事が少ないようですが、私は女性と親しくする時にも、いつも彼女の足に注意が向き、セックスの時も足を愛撫してはじめて満足を得る始末です。こんなことは私だけのことでしょうか。同好の方があれば、お便り下されば幸いです。私は職業柄、女友達に不自由することはありませんが、やはりガールフレンドとしては足が美しくてその上、足に羞らゐを持つような女性を好みます。若し同好の方があれば一々、語りあいたいと思ひます。

(大阪・美木多盛男)

○ 神戸の小杉千恵様他、奇ク読者の女性の皆さん、お元気ですか。私は長野県大町市に住む30才の公務員です。奇クを読み始めて10年になり昭和35年10月号から現在に至るまで毎号欠かさず読み書庫にぎっしり詰っております。私の好きなプレイは浣腸、縛りその他色々です。今まで一度も女性の方とプレイをした事はありませんが、今度女性の方と素晴らしいプレイを行いたいと思ひます。紳士的に行かないプレイバシーをききつけるような事は絶対、致しません。秘密は固く守ります。尚、承知して下

さった方には黒部ダムに案内の上、奇ク36年発行(古本屋さんでは、一冊千円している)を差し上げます。小杉千恵様、その他、女性読者の皆様、ぜひお友達になつて下さい。

(長野県大町市中原町・清水友一)

○ 佐野みさ子様、あなたの呼びかけ、初恋の人にあつた様な気持ちで読みました。あなたのような人待ちに待つていたのです。幸い、あなたは横浜近辺にお住いのようにお見受けします。近所ですので是非一度、プレイをしましょう。二六才のSです。あなたを緊縛と羞恥責めの極限にまで、つき落としたいと思ひます。

(川崎市・山田 剛)

○ 何度も何度もためらいながらもペンを執りました。気候が暖かくなつてまいりますと、私の身体の中に巣くつていました悪魔の虫がむずむずして、とうとう、こんなお便りを書かしてしまいました。と申しまして私は何一つ体験とてございませんで、ごく軽い気持のプレイから、はじめて追々ご指導いただければと虫のよいことを考えております。若し私のよう

な者でもおよろしければ、Sの男性の方、プレイをしていただかせんでしようか。年令は二十九才事務員をしております。若くありませんので写真にうつされるような自信はございませんが、プレイだけでしたら相当のところまでおつきあいが出来るのではないかと思います。責めのプレイだけでなく人間のにも私を温く指導して下さる抱擁力のある方の出現を私は心から待ち望んでおります。日中は勤めに出ていますが、マンションの一人住居ですので、退勤後は時間的に自由ですし休暇もとれますから、少しぐらい遠くても参れます。奇クは三年ばかり前から読んでおりますが、十年も十五年も前の奇クを読みたいと思いつつも入手出来ず、心残りに思っています。もし見せていただける方があれば、うれしいのですけれど。

(西宮市・左海敏江)

○ 奇ク四月号は大学受験地、東京で入手した。その中で最も印象に残ったのがM派女性、佐野みさ子さんの冒険記である。S派男性にとってM派女性を見つけることは並大抵のことではないであろうから、このようなケースは喜ぶべき

事である。プレイが一回きり、終りになるのでは、いわゆる「飼育する楽しみ」がないと批難される方もおられるであろうが、ぼくは「単発プレイ万才」である。M派女性の出現を待つ。

(栃木県小山市・野州健児)

○ この頃は、なぜか憑かれたように奇クにひかれる自分を、どうすることも出来ない。これほど自分の趣味にマッチした雑誌を私は知らない。目次を繰っただけで、私はもうワクワクとした気持を押さえきれない。これは何故だろう。余り厚くもないこの奇クという本が、千数百頁の辞書の様な重さで私の手に迫ってくる。塚本鉄三氏の「片えくぼのマリア」は五月号での庄巻である。二月号で辻村隆氏がカメラハントで川路むら子さんを取扱っているの、併せ読むと一層、興味深い。私は何度も、くりかえし読む。普通の雑誌ではないことである。えくぼの可愛いマリアのこれからの活躍を、大いに期待したいところである。益々油ののりきった辻村節のカメラハントは秋山夫妻を取扱って、水を得た魚のように、いきいきと色彩を放っている。五月号は近來、充

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印面紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち 略号 八しうV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片足首引きつけ縛り 略号 八したV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿 略号 八しちV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ 略号 八しつV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち 略号 八してV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち 略号 八しとV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

痛打にもかく美女体 略号 八しやV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責 略号 八しゆV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身 略号 八しよV

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛り狭くつわの表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

実した本誌の中でも、殊に重味があつたように思う。連載している「大噴火」のイラストはよい。特に38頁のものはSMの感じがよく出ている。中河恵子さんの写真を思わせるところがあって私にとつては好ましい。読物としては「助教授夫人凌辱譜」が先月号に続いて面白かった。風流氏はやはり、シナリオよりこうした文章の方がよいのではないか。三条剛氏の、「わがカメラハン」のような読者の投稿は大歓迎である。

(大阪・林田しげる)

私は学生時代からの奇クの愛読者です。当時のものは白表紙で出ており、移転の際下宿に置いてきたのが残念ですが、むさぼるように読み耽ったその頃が懐しくもあります。結婚以来、今年で丁度七年になりますが、最近特に夫婦プレイの記事をいつも楽しみにしております。夫婦生活も七年も経ちますとマンネリ化するのでしょうか、なんとなく倦怠気味であり足らず、いろいろと工夫しておりますが、余り変りばえしないようです。最近になって妻に夫婦交換プレイをやってみたらと相談しましたところ、初めはお互いにプ

ライバシーに関する点で心配なので、と尻込みしていましたが、熱心な私のすすめで、やっと承諾してくれました。妻の気持の交らない中にとつて投稿しましたわけですが、私達としましても余程、信頼の出来る人でないと、不安です。お互いに秘密を守ることが、一番大事だと思っています。私は34才妻は32才です。どちらかといえど私達はムード派のようで、余りきつい責めは好みません。写真はたくさん写しております。御主人が40才位までの御夫婦の方と交際したいと思っています。県内近県の同好の方、よろしければ親戚以上の気持で交際したいと思っています。

(山口県萩市・田尻長州)

奇クファンの皆様初めまして。小生、家庭とは離れた小さなプレイ室を作り、SMプレイ、女装プレイ、または妻と共に夫婦プレイと少し欲ばっています。時々厳しい社会からの逃避と明日の仕事への糧として大らかに楽しんでおります。私達のプレイ室には柔らかないジュータンを敷きつめ、専用ベッドと少々のSM器具、写真撮影設備等、備えておりますが、マニアの方々から見ればおハズカシ

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめV

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえV

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひV

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあV

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆもV

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆにV

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほV

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみV

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆるV

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへV

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわV

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよV

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬV

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆるV

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそV

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よのV

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よやV

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よいV

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふV

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえV

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬV

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあV

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よたV

イものです。それでも世間の雑音だけは聞こえませんか。全国の夫婦プレイの皆様、またSMプレイ、女装ファンの皆様、私達の小さなシャングリラへお越し下さい。遠方の方はお泊り下さい。誠実な独身の方もお使い下さい。また様々なプレイのアイデア、写真撮影など奇巧誌発展と共に私達のプレイにも豊かさが増すよう祈りつつペンをおきます。

(埼玉県鳩ヶ谷市・村井三生)

永年、奇クを愛読している者ですが、いまだプレイの機会にもめぐまれず独り奇クにより自分のM性を満たしている四十一才の男です。Sの女性の方で小生の女王様として君臨して下さる方は、おいでにならないでしょうか。今まで経験したことは一度もありませんが女性の方に無理矢理、全裸にされて手足をくさりでつながら、汚れ物の洗濯や掃除をさせられたり縛られてムチでなぐられたり、また浣腸を受けたり、果ては人間便器としてネクターや固体を授受したりゴムパンティか貞操帯をはめられ、女王様の穿き古した汚れたパンティで猿ぐつわをされて羞恥責めにしていただきたいと思います

ます。どなたかお気に召しましたら、お呼びかけ下さい。そして、思いのまま、いたぶって下さい。

(名古屋市中・服部M一郎)

先日は春川さと子様よりM男への贈物、ワクワクしながら受取りました。有難うございます。女子大生の春川様の面影を想像しながら大切にしまっています。春川様の写真、一度、本誌にのせて下さい。最近、又々M願望、強烈に湧き上る自分です。先日、古本屋で求めた四十三年三月号の読者通信に、自分と同じように女学生からの責めを望んでおられる(大阪・三木生)さんの便りを拝見しました。同志を得た気持です。全く実現不可能な事ですが、どうか春川ナミオのM画で女学生がM男をいじめているのも出して下さい。

(東京・坂井勇)

春川ナミオ氏のさし画のトリコになって今日この頃です。今後とも一層のご活躍を期待しております。本誌の愛読者の中に、誰かM男を求めていられる方がおられませんか。ボクは立派な体格のS女性に使ってもらいたいと願うものです。美しい女の人

大手札印画紙焼付 「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号AもえV 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号AもゆV 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号AもよV 四〇〇円

平吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号AもすV 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号AもせV 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号AもれV 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号AもるV 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号AもてV 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号AもなV 四〇〇円

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 略号AもねV 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号AもむV 四〇〇円

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 略号AもうV 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号AもきV 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号AもこV 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号AもみV 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号AはゆV 四〇〇円

投げたす白い緊縛裸身

大手札三枚一組 略号AはよV 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿

大手札三枚一組 略号AはてV 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号AはおV 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札三枚一組 略号AはのV 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号AはひV 四〇〇円

が男を遊びの道具として楽しんだ
り仕事を与えて自分の手足のよう
に使っている姿は、とてもステキ
です。やはり大勢の女性の中には
男の人を完全に征服し、意のまま
に振舞おうとする高慢な女性が実
在しても良いのではないでしょう
か。たとえば、春川ナミオ氏の画
に見るようなことを、実際に男に
強要し、それを行ない、女性の強
さを誇示しては、どうでしょうか
その方が女性自身にとっても良い
のではないのでしょうか。もちろん
言う通りにしない男に対しては、
あくまでもきびしく扱い、力をも
ってでも征服すべきでしょう。そ
れでこそ、女性上位時代らしいと
思います。ボク自身は女性に反抗
的な部類に属すると自認しますが
美しい人、ごう慢な人、征服欲の
強い人は好きです。世の女性方
は、ご立腹なさるかもしれません
が、ボクは女の人の言いなりには
ならぬつもりです。女性上位には
大反対と言うわけです。だが、お
ぼれてしまうと、とことんまで、
おぼれてしまうタチです。どなた
か、こういうボクの女の人に対す
る反抗的で生意気な態度を徹底的
に打ちのめし、完全に足元に跪か
せ、そして、あなた好みの男に飼

育しようとする強い、恐ろしい女
の人はおられないでしょうか。

(東京新宿区・大津 勇)

伊藤圭子様。本誌の貴女の記事
を読み、大変、貴女を気の毒に思
っている一人です。そして、あの
記事を読み、全然知らない貴女で
すが、いとおしくてなりません。
しかし、貴女としても少し軽卒で
はなかったでしょうか。プレイに
入る前に、もう少しお互いの心境
を語り合い、相互に理解を深めて
こそ、その行為を許すべきだと思
います。S性の中にも秘められた
る理解と寛容力のある男性こそ、
貴女をこの世界に陶醉せしめ、且
二人の秘めごととして、又の機会
をこよなく待ち遠しいものにさせ
ることでしょう。因みに本誌SM
カメラハントの辻村隆先生の記事
は、小生が常に最も興味をもって
読ませて頂いておりますが、小生
独自の思考として述べさせてもら
うなら、氏のプレイの中には不断
にM女性の心理を理解し、そのム
ードづくりの巧みさは心憎いばか
りであり、内容を一見してもプレ
イの中に、思いやり、親しみとい
ったものが感じられます。貴女は
きつと、こういったアトモスフィ

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほV

悦庵に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあV

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はうV

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめV

悶える狼番の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせV

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつV

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はてV

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はとV

アに憧憬し、矢も楯もたまらずとび込んでいったのではないでしょう。要は、つばを心得たS男性を発見せられたら、貴女の今回の傷心等、一気に吹きとんでしまいたい。これからはバラ色の人生を得られることでしょう。

(豊中・ムードマン)

美柳輪生さん。M七〇さん。そして佐々木耳輪生さん。最近、諸兄の御投稿を拝見しますが、如何お過ごしでしょうか。私は時折醜悪な裸身を収めたMフォトで、貴重な奇クの一頁を汚させて頂いております。私のフォトを御覧になったか否か存じませんが、前から私はMの必須条件の一つとして鼻孔に穴を開けなければならぬと考えておりましたが、この際、思いきって実行に移したいと思ひますが、鼻孔の開眼ならぬ開孔にかけては大先輩の諸兄にその方法をぜひ、お教えねがいたいと思ひます。穿孔の器具、穴明けの方法事後の処置(消毒など)の心得など、ぜひお教えねがいたいと思ひます。

(犬畜生)

毎月、奇クが発売されるのを楽しみにして待っています。買って

くると直ぐに読者通信らんに目を通します。そのときに何ともいえない興奮を覚えます。今月号は又どんな御夫婦の方のフォトが載っているのかと思うと、胸が高なっています。豊満、かつ、美人の奥様がたが、ご主人のS性を理解し縛りや責めにも、進んで協力なさっている様子で、うらやましく思っています。夫婦プレイをしておられるご主人は、一度、六尺褌を奥様に締めてあげてはどうでしょうか。私も機会があれば、グラマ—な中年の女性に六尺褌を締めさせてみたいと思っています。褌マニヤと夫婦プレイのご夫婦の方、お便り下さい。

(岸屋盛男)

渡辺好美様。私の呼びかけに御返事をいただき、大変うれしく思いました。喜んで友達にならせていただきます。決して、ひやかしや面白半分の気持はありません。真面目にマニアとして、おつきあいしたく思います。お互いに理解し合い、夢を実現するようにしましょう。

(東京・大橋)

貴誌を読み出してから、もう十年近くになります。手に入らなかったときもありましたが、近頃は

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦 啓子 略号八てる

真紅の腰巻着用品

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦 啓子 略号八うて

真紅の腰巻着用品

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた蹄観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八るよ

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八るに

毎月、何とか手に入るようになり
ました。ペンをとるのは今回が初
めてです。六月号のカメラハント
に登場した伊藤さんの気持に共鳴
しました。今の時代は、社会生活
に於いても、また仕事についても
余りにも大きな変化が短期間にお
こりつつあると思います。この変
化のバスに乗ることを拒否した人
々は一生、孤独を感じ続けるので
はないでしょうか。その孤独から
逃れる方法として、一時的享楽に
時間をつぶす人々や、一方、人間
の根底にあるSMの世界に踏み込
む人々が出てくるのではないでし
ょうか。貴誌は、そのための道案
内の役目を果たしつつあり、これ
からも果たさねばならないと思
います。多くの書物が入り乱れて
いる出版界で、貴誌は非常に大き
な存在です。ぼくの場合、SMの経
験はありませんので想像するだけ
です。適確さを欠くと思われるま
すが、カメラハントの伊藤さん
を見て、ある程度は正しかったと
分に言いかけせています。伊藤さ
んの場合、他の人の手引にもより
ますが、孤独から一歩一歩、自分
の足で出てくる姿が写真の上にも
表われています。また一人の女性
が、限らない世界へと解放された

ことは大きな喜びであり、ぼくと
しても心からの拍手を送りたいと
思います。そして幸福な生活を送
られることを祈ります。SMの世
界にある人々は、多かれ少なかれ
ある程度の孤独感を持っているの
ではないでしょうか。その仲間の
間の輝ける橋としての貴誌の更に
大きな発展を祈ります。そして我
々の孤独感を取り去る風としての
役を果たさんことを。

(東京・今世独人)

藤田春枝さま。ぼくも貴女と同
じ趣味の者です。貴女のおたより
からは同好の者なら震えが起きそ
うになるほどの浣腸のすばらしさ
が表現されていると思います。仰
臥両肢開股屈曲位を好まれるとの
ことです。女の方なら四つん這
いのポーズの方が感覚的に面白い
と思います。高圧浣腸では、でき
るだけ太いガラス管を挿入される
ことを、おすすめします。液体は
なるべく、お湯または薄い石けん
水で、ゆっくりたのしみたいと思
います。その意味では大容器を
吊り下げておいてのイルリガート
ル方式も良いものです。お酒を注
入されたこともあるとのことだ
が、しみたりしませんか。そんな

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。

お酒が飲みたいなあ、と思いまし
た。(大阪・大川 剛)

○ 六月号においての最高の読み物
は何と申しても塚本鉄三氏のカメ
ラルポで、本誌において初めての
外人による日本式縛りは、どの写
真を見ても珍しい資料です。特に
乳房を中心とした縛りは何ともい
えない美しさがあります。ただ残
念なことは、写真と文章が合わぬ
ことで、読者としては文章を読み
ながら写真に合わせて見るのが最
高の読み方ですので、それができ
なかったことが淋しいかぎりでし
た。また伊藤圭子さんはM性の強
い人です。それ故に貴重な人材で
すので辻村氏の飼育によって、ま
すますM性を発揮するでしょう。
将来がたのしみです。私は辻村氏
の縄さばきが好きです。圭子さん
の乳房は大きいとはいえませんが
一三ページの写真を見ますと、縛ら
れた乳房の美しさは、この上もあ
りません。辻村氏が、もっともっ
と乳房を中心とした緊縛写真を誌
上にかざってくださいをおね
がいします。告白(乳房の刺青)
の和泉五郎氏は、奥さんの弥栄さ
んを、ぜひ誌上に、とのことであ
るで、本誌のカメラマンの皆様、

この弥栄さんの乳房の刺青を誌上
に飾られるよう、おねがいいたし
ます。(埼玉・阪東太郎)

○ 被虐への願望やみがたくSMカ
メラハントに登場した伊藤圭子に
私は、いささか失望を感じた。お
世辞にも美人とはいいがたい、白
粉気もなさそうな、野暮ったい女
性故だろうか。いや、それはそれ
でよいではないか。私はかえって
素朴で清潔めいた孤独を愛する彼
女に、何かしら人をひきつける不
思議なムードを感じるのである。
しからば何故に失望を感じたので
あろうか。24枚の緊縛フォトのう
ち、猿ぐつわフォトが6枚にすぎ
ない、ということである。それ以
外の緊縛フォトにしても、緊縛と
はいいがたい申しわけ程度にすぎ
ないマネ事の縛りの域を脱してい
ない。それは初めての緊縛に、不
安と期待で精神的な動揺をきたし
ている彼女に対し、辻村氏も情容
赦なく緊縛することは差し控えぬ
わけには、いかなかったからであ
ろう。私は緊縛、責めには猿ぐつ
わは欠かすことのできぬ必須条件
ではないかと思う。猿ぐつわを嵌
められ悦びにもだえ、被虐の快感
に酔いしれる姿は、S・Mを問わ

編集部特写緊縛女体資料

| | | | |
|-------------|---------|-----|------|
| 逆さ吊りの臨月妊婦 | 大手札三枚一組 | 略号 | 五〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さめ | 〇〇円 |
| 両手吊りの臨月妊婦 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さめ | 〇〇円 |
| 若妻初妊娠の哀歎 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 妊婦の全裸縛り全身 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 妊婦腹の緊縛側面 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 強烈縛り妊婦責め | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 若妻の緊縛妊孕美 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 膨満の妊婦乳房責め | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 臨月腹の全裸晒し | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 躍動する妊婦の裸像 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 妊娠という異常美の女体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 見てほしい臨月腹 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 妊婦全裸の全身肢体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 金原奈加子 | 略号 | 八さい | 〇〇円 |
| 全裸正面の縄掛け | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池美喜 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 柔肌の高手小手縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池美喜 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 後手首を縛られた少女 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池美喜 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 飼育された美少女縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池美喜 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 縛られた美女二人 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池・松山二嬢 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 全裸の美女を連縛する | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 小池・松山二嬢 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 白肌に喰い込む縄目 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 松山真樹子 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 一糸まとわぬ柔肌縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 松山真樹子 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 開陳した華麗縛り肢体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 松山真樹子 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |
| 縄に喘ぐ諦観の相 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 松山真樹子 | 略号 | 八れろ | 〇〇円 |

ず、プレイの醍醐味を満喫させてくれる。さて、圭子の6枚の猿ぐつわフオトのうち2枚は長い白い布で猿ぐつわをし、その布が更に股をくぐり、両手を後手に縛り、体をぐるぐる巻きに縛った、極く簡単なもの。あとの4枚は斑ら縄縛りで、白布を歯と歯の間に咬ませたものである。被虐への願望に身を投じたマゾヒスト圭子にとっては、いささか軽きにすぎる猿ぐつわである。足むれした異臭のする靴下を口中に押し込まれ、黄色く汚れたパンツで猿ぐつわされるのもよいだろう。刑務所で使用するゴムの防声具式猿ぐつわ、ビニール猿ぐつわ、パンソウコウ猿ぐつわ、ブラジャー猿ぐつわ、鎖を歯と歯にかます猿ぐつわ、脱脂綿を鼻孔に詰め、歯と歯の間に布をかます鼻責め猿ぐつわなど、色々あると思う。マゾヒスト圭子よ、本格的猿ぐつわを甘受して、被虐の快楽に陶醉されることを期待する。

(東京・佐山英二)

私は最近、離婚した二十五才になる女性です。同封しました写真は、まだ未婚の頃、勤め先の鉄工所のタンクの前で、写したものです。その頃、男の人達からモデル

になってくれと頼まれて、昼休みの時、よく写真をとってもらったものです。今度、離婚した前の主人も、よく写してくれ、好き合つて職場結婚したのですが、一年もたたないうち、破鏡を見てしまいました。原因というのは私にあるべき所にあるべきものがないというので、主人が嫌ったからです。私はそんなことについて無智という以上に関心がなく、なんとも思っていないかったのに、主人がどうしても嫌だというので仕方なく、別れてしまいました。結婚しているお友達にきいたところ、お友達の御主人が奇巧の愛読者とかで、わざわざ剃る人も多いのに、そんなこと気にすることないわよと言うのです。内緒だけど私も主人に時々剃られるのよ、とそのお友達は私をばげましてくれます。そんなことってあるのでしょうか。私は薄いついていうより殆どない位で、わざわざ剃る必要はない位です。こんな私でも、可愛がつて下さる方っておられるでしょうか。奇巧もお友達に初めて見せられた程で、何も知識はありません。どうか、よろしくご指導下さるようお願い致します。写真同封しておきましたので、若しモデルに使っ

| | | | |
|-------------|---------|-----|------|
| SとMの甘い一瞬 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 松山・小池二嬢 | 略号 | 八とさ | 四〇〇円 |
| 縄に通う愛情の焰 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号 | 八とけ | 四〇〇円 |
| 相愛の極致を描く二女 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号 | 八とな | 四〇〇円 |
| 鞭に狂う悦虐表情 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号 | 八らて | 四〇〇円 |
| 鞭打ちにうねる肢体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号 | 八らあ | 四〇〇円 |
| 足吊りの被虐肢体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号 | 八らえ | 四〇〇円 |
| 美しきマゾの境地 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号 | 八らせ | 四〇〇円 |
| 裸後手柔肌縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こよ | 四〇〇円 |
| 乳房強烈膨隆責め | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こわ | 四〇〇円 |
| 海老責めに苦悶する | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こお | 四〇〇円 |
| 全裸の緊縛全身晒し | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こる | 四〇〇円 |
| 煙草責めに喘ぐ女 | 大手札二枚一組 | 略号 | 三〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こぬ | 四〇〇円 |
| 抱擁する美女二人 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| ミキとマキ | 略号 | 八とや | 四〇〇円 |
| 柔肌と柔肌のレズ狂態 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| ミキとマキ | 略号 | 八とよ | 四〇〇円 |
| 緊縛麗姿に映えるライト | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こほ | 四〇〇円 |
| 臀部強調後手縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こる | 四〇〇円 |
| 羞恥に悶える全裸緊縛 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こに | 四〇〇円 |
| ホステスの緊縛姿態 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こち | 四〇〇円 |
| 二つ折りで責める女体 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号 | 八こへ | 四〇〇円 |
| 脈打つ全裸の臨月腹 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号 | 八こふ | 四〇〇円 |
| 臨月腹の革紐股間縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号 | 八こや | 四〇〇円 |
| 猿轡の臨月妊婦腹縛り | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 卓上の股間縛り狂態 | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 羞恥の足挙げ責め | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子 | 略号 | 八こそ | 四〇〇円 |
| 羞恥の足挙げ責め | 大手札三枚一組 | 略号 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子 | 略号 | 八これ | 四〇〇円 |

次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします

て頂けるようでしたら、御返事下さい。実家へ帰ることが出来ずアパートで一人暮らしをしております故、いつでも出かけることが出来ます。

(大阪市・清水民子)

拝啓 安井喜久子様。この所久しく誌面でお見受け致しませんが、お二方共益々御壮健の事と存じます。私は奇クを愛読するようになって五年になりますが、貴女に初めてお手紙差し上げました。私は28才で広告媒介の仕事をしていてプレー歴は約3年になります。ところが、この春二月になって私の最愛のパートナーを交通事故で失ってしまいました。私共は、貴女のお便り等で夫婦プレーの近況を知るたびに、行く行くは貴女夫婦のような仲の良いカップルになろうと心に決めていたものです。彼女が死んで間もないので、想い出が非常に生々しく甦って来ます。

私共のプレーは、簡単な緊縛からお灸、ムチ打ち等で、羞恥責めとしては、ボルジャ家の姫君の様に全裸の上に鎖のT字帯を付け上に短めのレインコートを着ただけで

街へ出る等々色々二人で考えて秘密の楽しさで充実していました。

私は一般の人から見れば、変態と言われるかも知れませんが、社会的には全く正常そのもので他人に迷惑はかけない、只、余暇の過ごし方が少し変わっているだけの事だと思っております。なにか、うわごとのような手紙になってごめんなさい。私は今のところ新しいパートナーもないので、プレーも出来ませんが、出来れば安井さん御夫婦と文通したく思います。先輩として色々御指導なり新しい工夫なりを交換し合えれば今の私にとってこれ以上、心強いことはありません。

(東京・林順次)

この六月号は、久しぶりに内容が充実していた。その中で私の目を引いた作品にふれてみたい。始めは、SMカメラハントということになってしまふ。いつ見ても、我々読者の夢を満たしてくれる楽しい作品である。文面からは辻村氏の女性に対する思いやりが溢れんばかり。「有難う。でもSMのプレイなんて……」一寸した会

話の中にも、長い経験から割り出された辻村論が脈打ち、その点でも他の作品をリードする一因となっているのではないだろうか。今回は、辻村氏のSMに対する考えが多く出ていて、なかなか良い。次はカメラルポ。外人女性、しかも美人の登場。奇クの新しいイメージを開いたことになる。塚本氏は、最近では関谷夫人との熱情溢れんばかりの激しいプレイに見られるように、強烈な作品が多かった。氏としてもM性のあるかないか不明の外人女性とのプレイにはいつものような強烈さを出すのは不可能のようで、今回は毛色が違う感じである。と言って、作品が低調であるということではない。相手が相手だけにやむを得ないであらうし、今回のようなルポも、SMの一方向を示すものなのではないだろうか。三番目はカテゴリー。これは異色作であって大変、貴重である。医師以外には全く知る機会のない臨床報告。こういう事例を知ることのできるのは楽しいことである。最後に、SMP雑考。氏の主張には胸を打たれる。我々には奇クを読む権利があるが反面SMプレイを通じて、社会に迷惑をかけないという義務があ

る。我々はその点を忘れがちである。我々奇クファンは、彼の文章をもう一度、読み返す必要があるのではないだろうか。最後に、奇クの他誌にない長所は、小説も立派だが、それにもまして、体験告白やSMプレイ及び臨床報告の掲載にあると思う。そのよさを型に固定しようと思わず、大きく発展させていってほしいと思う。

(所沢市・未来S男)

愛読者の皆様、同好の方々、益々御隆盛のことと存じます。私の家の近くに以前、わきがの娘さんがおられて一緒に映画を見に行きその美香に酔ったのですが、その後、娘さんは遠くへ嫁に行ってしまった、四、五年、その香りから遠退いていましたが、先日、電車の中で二十才ぐらいの美人で強度のわきがの方と隣り合わせになり、以前のことがなつかしくなりまして。そして目的の駅を乗り越し、その娘さんが降りるまで私も坐っていました。若い女性の方で、わきがの方がいらっしゃったら、その美香をガ―ゼにでも泌ませて下さらないでしょうか。理解ある、すてきな女性の出現を夢みています。

(岐阜・座頭孝司)

○ゴムマニヤの皆様、お元気でし
ようか。五月号でオムツカバーと
夜尿症のことが書かれていました
が、小生はそれに似たようなこと
を経験しております。以前から痔
を患っていた小生は、メンスパン
ドやオムツカバーを使用していま
した。がムレますので、最近ではア
ンネパットを当てて、ゴムパンテ
イを着用しています。必要にせま
られて着用しはじめたバンドが、
そのままマニヤとなり、ゴム製下
着等に愛着を覚え、今では病的な
ほどのマニヤになりました。しか

し、これから薄着になると、ゴム
カバーの跡がくっきりズボンに写
るのではと、少々心配です。マニ
ヤの皆様の中で、痔バンドの完全
なのを知っておられたら、紹介し
て下さい。(尼崎・藤田公一)

○座頭孝司さま、吉井幸男さま、
山本隆さま、瞳耀太郎さま、富田
登さま、辻奥太郎さま、西野正一
さま、谷中治さま、その他、すべ
て私の夢の中の方々、お元気でい
らっしゃいますか。私も、お蔭さ
まで元気にSMを愛し続けており
ます。六月号で北摂の石田さまの

お便りを読み、まるで現実に責め
て頂いているような羞かしさをお
ぼえました。女性のために代表し
て申しますなら、Aだけは止めて
ほしいのです。と言いますと、あ
の甘い陰微な責めは、女としての
誇りもナルシズムも、みな取り除
いてしまい、生々しい羞恥と屈辱
だけに虐げられるからです。何度
もイルリで洗滌しておいて湯沸か
しに使用されるなんて、ひどいで
すわ。おまけに鶏になって卵を産
めだなんて無茶ですわ。花と蛇の
静子夫人だって、何度浣腸されて
も「それだけは許して」と、今で

も一番、嫌がっているほど、A責
めは屈辱と、羞恥の大きいもので
す。仮に捨太郎ショーのように衆
人環視に曝しても、それには女の
誇りと喜び、そして相手の存在が
女の救いとなるものです。独りで
卵の感触にうなじを反らすのを見
てもらおう雌鳥のショーは私にはお
ぞましすぎます。でも石田様って
とても素敵なお方ですね。辻村先
生、小池美喜さんがとても良かつ
たですわ。小池さんのレスを、ま
た相手を変えてお願いします。私
の大好きな団先生、頑張ってください。
(神戸市・小杉千恵)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通
り在庫しておりますが、40年に発
行のものについては在庫の僅少な
ものもありますから、お早い目に
御注文願います。
○従来、雑誌の送料は当社にて負
担しておりますが、今後は三カ
月以上予約御注文以外(既刊号は
含まず)は一部につき送料二〇円
の御負担を願います。多数一括し
てお求めの際は八小包Vにて発送
申し上げます。

| | |
|-----------|----------|
| 昭和40年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和40年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和40年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和40年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和40年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和40年12月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年1月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年2月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年3月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年4月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年5月号 | (送共三二〇円) |

| | |
|-----------|----------|
| 昭和41年6月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和41年12月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年1月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年2月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年3月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年4月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年5月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年6月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和42年12月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年1月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年2月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年3月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年4月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年5月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年6月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和43年12月号 | (送共三二〇円) |

| | |
|-----------|----------|
| 昭和43年12月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年1月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年2月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年3月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年4月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年5月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年6月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和44年12月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年1月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年2月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年3月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年4月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年5月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年6月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年7月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年8月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年9月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年10月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年11月号 | (送共三二〇円) |
| 昭和45年12月号 | (送共三二〇円) |

編集後記

○千草忠夫氏が、いつもながらの練筆で人間の持つ一面を浮き彫りにした『盲』を寄せられました。一読後、題材も設定も大違いに拘らず乱歩の「盲獣」を想起したのは編集子だけかも知れませんが、触覚に頼る暗黒界に、いい知れぬSM的雰囲気と奇妙な粘着状況を覚える人は少なくないようです。一種の憧れに似たものと共に……。ナラ潰してやろうか？いえいえケッコウ。遠近共に多少はカスンでも、見えるのはやはり幸福です、ハイ。

○全力を集中しての激突力斗だから、連続では体を痛めるといふ深慮からでしょうか、と組ませては休ませ、足かけ五年で二十一回の慎重試合だった『花の女斗美たち』へ奮斗

士好太も、めでたく千秋楽を迎えたようです。まことに長期に亘るシゴキを耐え抜いた娘力士の玉のハダ、さぞや健康美溢るる美しさでしょうナ。これからは奮斗士氏も結婚式場廻りでお忙しいことでしょう、オニの大松さんの様に……。オレも一人欲しい？さあねえ。彼女たちのお好きなのはフンドシで、ロープの方は……。マ、誤いときます。

○セトヨシヤ氏のチクチク刺しまわるのは、先祖がアブだったからかどうかは知りませんが、『無題を二題』並べたスルメの味は捨て難いと思いませんか。擲論じみた毒舌を駄洒落に紛らわすところに、噛みしめる甘さと気の弱さ加減が覗けるんだワサ。可愛い者を苛めなくなる三才児的心理、てなことはチートも思わないが……。余白なし、ドウスツカナ。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故

悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

予約に限り
一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

七月号 (第二十四巻第七号)
(通刊第二百六十七号)

昭和四十五年六月二十日 印刷
昭和四十五年七月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 吉田稔
印刷人 北村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社
(振替口座大阪四二七八三番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)

郵便番号558
国鉄大塚特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。本誌は成人として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願